

吹屋伊勢森遺跡

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書第1集

2006

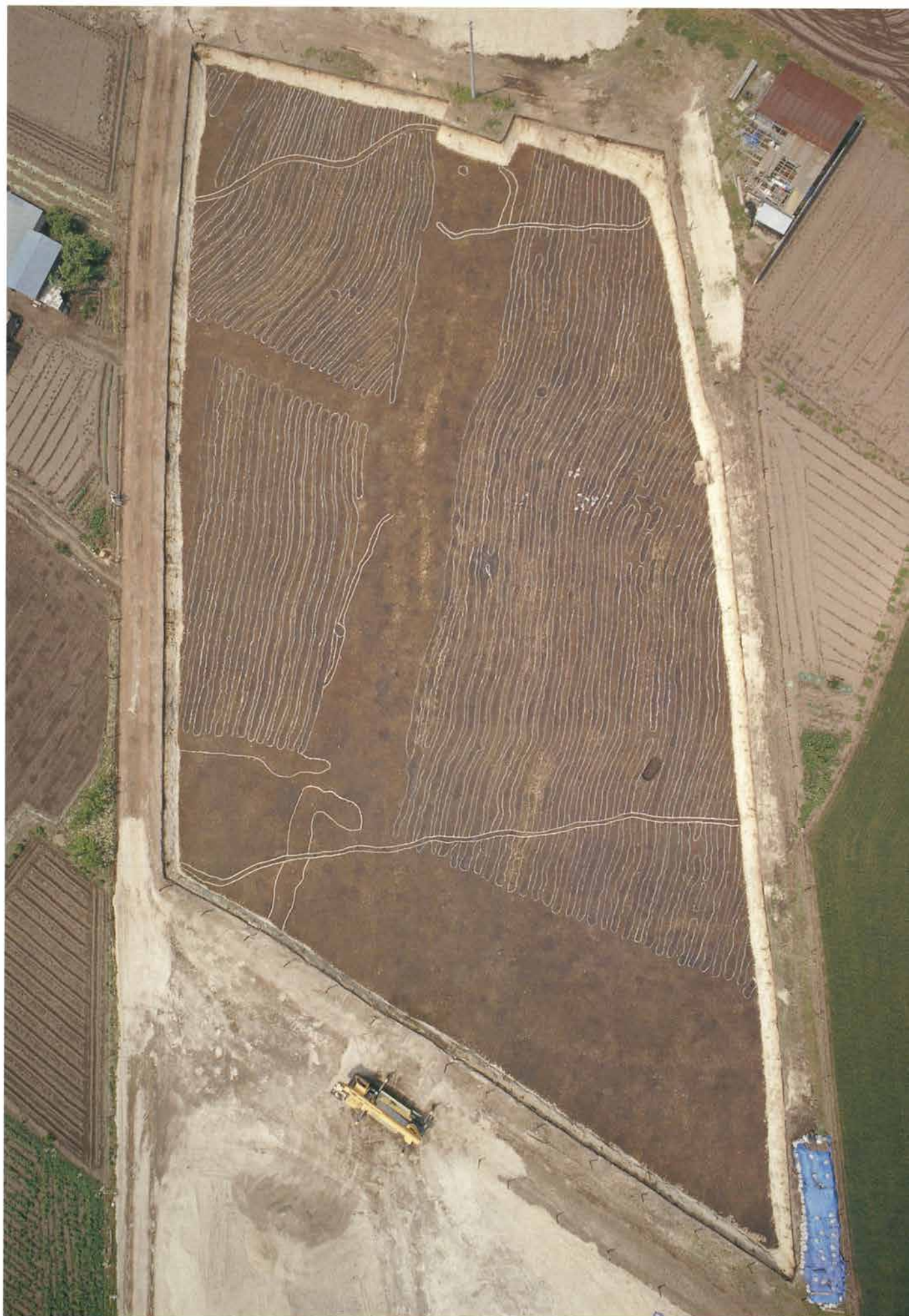
国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

ふ き や い せ の も り
吹屋伊勢森遺跡

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書第1集

2006

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



Ⅲ区FP下面畠跡(6世紀中葉の地表面。畠の上を道が横切っている。)



榛名伊香保テフラ(Hr-FP)
6世紀中葉

← 榛名渋川テフラ(Hr-FA)
6世紀初頭

← 浅間白糸軽石(As-Sr)
約1.8万年前

基本土層



Ⅲ区3号畠検出状況(畠面にウマの足跡が残ることから、FP降下時にはすでに放置されていた。)



Ⅲ区1号畠断面(畝の盛り上がりが高い。断面中程に白く見えるのがFA。)



Ⅲ区3号畠断面(1号畠と比較すると畝が低く、畝下にも溝状の落ち込みがある。)



Ⅲ区FA上面検出状況(1号畠は畝間下に、3号畠では畝下と畝間下に溝が検出された。)



I区縄文時代前期集落(林の部分は高さ20mの段丘崖となっている。)



I区5号住居内ピット2黒曜石出土状況



I区5号住居ピット2出土の黒曜石



II区縄文包含層出土の神子柴型石斧

序

一般国道17号は、関東と北陸を結ぶ大動脈であり、本県においては県北部と平野部を結ぶ地域の主要道路であります。この国道は渋川市と旧子持村（平成18年2月渋川市と合併）の市街地を通過すること、国道353号と接続する地理的条件などから、渋滞が恒常的なものとなっており、その解消のため全長5.5kmの鯉沢バイパスが計画されました。平成8年10月には渋川市東町から国道353号バイパスとの交差点までの2.3kmが開通し、さらに終点の旧子持村上白井までの3.2kmについて事業が進められております。

国道353号バイパス交差点から終点までの埋蔵文化財調査は、一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その2）として、平成14年8月に当時の建設省関東地方整備局長・群馬県教育委員会教育長・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者で協定書を締結し、調査の運びとなりました。整理事業は平成17年度から開始し、本報告書は一連の発掘調査に伴う最初の報告書として、吹屋伊勢森遺跡の成果をまとめたものであります。

吹屋伊勢森遺跡では、縄文時代前期の集落や古墳時代の畠跡などが調査されました。特に榛名山の噴火に伴う軽石で埋もれた畠跡は、鯉沢バイパス関連の遺跡群では唯一の調査例であり、地域の歴史を考える上で重要な資料となりました。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、旧子持村教育委員会、地元関係者の皆様には、格別の御尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げます。本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成18年3月








財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

- 1 本書は一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う、吹屋伊勢森遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡所在地 群馬県北群馬郡子持村大字吹屋(現渋川市吹屋、平成18年2月市町村合併)
- 3 事業主体 国土交通省 関東地方整備局
- 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成14年9月1日～平成16年3月31日、平成16年11月1日～平成16年12月3日
- 6 整理期間 平成17年4月1日～平成17年12月31日
- 7 発掘調査・整理組織
事務担当 高橋勇夫、小野宇三郎
木村祐紀、住谷永市、吉田 豊、津金沢吉茂、神保侑史、矢崎俊夫、萩原利通、中東耕志、西田健彦、右島和夫、関 晴彦、国定 均、宮前結城雄、丸岡道雄、植原恒夫、石井 清、竹内 宏、高橋房雄、小山建夫、須田朋子、吉田有光、今泉大作、清水秀紀、栗原幸代、佐藤聖行、森下弘美、田中賢一、阿久沢玄洋、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典、松下次男、吉田 茂
調査担当 平成14年度 齊藤利昭、須田正久、増田眞次、水田福夫、井原陽一、唐沢友之、松原孝志、小林 正
平成15年度 齊藤利昭、水田福夫
平成16年度 齊藤利昭、渡辺弘幸、水田福夫
整理担当 井上昌美
整理補助 高橋とし子、小菅優子、猪野熊洋子、大塚京子、山本千晶、大塚己公子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、土橋まり子、小材浩一、津久井桂一、森田智子
器械実測 伊東博子、岸 弘子、田所順子
- 8 本文執筆 第1章第1節 齊藤利昭 第7章 本文中に記載 石器観察表 桜井美枝
上記以外及び編集 井上昌美
- 9 報告書の作成に際して、以下の方々に分析を依頼した。
石器の石材同定 飯島静男氏 黒曜石の産地同定 建石 徹氏、二宮修治氏、菅頭明日香氏
土壌微細形態分析 宮路淳子氏 土壌理化学分析 須永薫子氏
植物珪酸体分析、炭化材・炭化種子同定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 10 本遺跡の出土遺物及び図面・写真等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
石井克己 大工原豊 飯島静男 建石 徹 二宮修治 菅頭明日香 宮路淳子 須永薫子(敬称略)

凡 例

- 1 調査区域には、国家座標に基づいて5m間隔のグリッドを設定した。調査時には複数の原点を用いていたが、報告者作成にあたり原点を統合した。本報告書で用いる原点1A-1は、日本平面直角座標系第Ⅸ系のX=57,900m、Y=-72,500mである。また、調査時の原点は以下の通りである。
 - ①1A-1、X=58,000m、Y=-72,500m。報告書1A-21に対応。
 - ②1A-①、X=57,955m、Y=-72,500m。報告書1A-12に対応。
 - ③1A-(1)、X=57,910m、Y=-72,500m。報告書1A-3に対応。
- 2 発掘調査時に吹屋伊勢森遺跡V区・Ⅵ区・Ⅶ区とした地点は、吹屋遺跡に編入し本報告書の対象からは除外した。
- 3 本文中で使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「鯉沢」、「渋川」、「金井」、「伊香保」、20万分の1地勢図「宇都宮」、「長野」である。付図は子持村都市計画図(1/2,500)を資料とした。
- 4 本書では榛名山の噴出物である、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)をFAと表記し、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)をFPと表記した。
- 5 遺構及び遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。また、挿図中の「L=〇〇m」は、断面図の水糸標高を示す。
- 6 畠遺構の記載にあたっては、FPで埋没した地表面で高まりとなる部分を「畝」、低い部分を「畝間」とした。畠遺構の下部構造の調査で検出した、耕作に伴う溝には特に名称は付けていない。
- 7 挿図中の網掛け部分等は次のことを意味する。

遺構平面図・断面図		焼土		FA		FA主体の層		地山		攪乱
石器実測図		摩耗		敲打						

- 8 遺構図中の●印は土器の出土地点を示し、▲印は石器の出土地点を示す。
- 9 遺構の面積については、デジタルプランイメーターで3回計測した平均値を採用した。
- 10 土層断面の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に従った。
- 11 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壤物理研究会による基準に従い、細砂粒(<0.5mm)、粗砂粒(0.5~2.0mm)、細礫(2.0~5.0mm)、中礫(5.0mm<)とした。
 - (2) 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に従った。

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例
抄 録

第1章 調査の経緯

- 第1節 調査の経緯 2
- 第2節 調査の方法 5

第2章 地理的・歴史的環境

- 第1節 遺跡の位置と周辺の地形 8
- 第2節 周辺の遺跡 9
- 第3節 基本土層 12

第3章 4面・5面の調査

- 第1節 調査の概要 14
- 第2節 住居 16
- 第3節 土坑・ピット・集石 43
- 第4節 包含層 59

第4章 3面の調査(Hr-FA層下面)

- 第1節 調査の概要 76
- 第2節 遺構 78

第5章 2面の調査(Hr-FP層下面)

- 第1節 調査の概要 84
- 第2節 畠 85
- 第3節 放牧地 99

第6章 1面の調査(Hr-FP層上面)

- 第1節 調査の概要 130
- 第2節 溝・井戸・土坑 134
- 第3節 耕作坑 136
- 第4節 道跡 142

第7章 自然科学分析

- 吹屋伊勢森遺跡5号住居内2号ピット
出土黒曜石の原産地 144
- 吹屋伊勢森遺跡の自然科学分析 147
- 吹屋伊勢森遺跡から検出された古耕作土の
土壌微細形態について 159
- 畠遺構における土壌化学性に関して 163

第8章 まとめ 167

写真図版

- 付図1 FP下面全体図 1/1,000
- 付図2 Ⅲ区FP下面全体図 1/200
- 付図3 Ⅲ区FA上面全体図 1/200

遺構一覧表

区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真
0	1号畦	2	100	36	I	1号耕	1			I	3号畦	2	104	37	II	37号耕	1			II	41号P	3		
0	2 "	2	100	35	I	2 "	1			I	4 "	2	104	37	II	38 "	1			II	42 "	3		
0	1号倒	2			I	3 "	1			I	5 "	2	106	38	II	39 "	1			II	43 "	3		
I	1号住	4	16	1	I	4 "	1	136	46	I	1号道	2	102	36	II	40 "	1			II	44 "	3		
I	2 "	4	21	3	I	5 "	1			I	2 "	2	102	37	II	41 "	1			II	45 "	3		
I	3 "		欠番		I	6 "	1			I	3 "	2	106		II	42 "	1			II	46 "	3		
I	4 "	4	24	4	I	7 "	1	136	46	I	1号窪	2	106	38	II	43 "	1			II	47 "	3		
I	5 "	4	34	8	I	8 "	1			I	2 "	2			II	44 "	1			II	48 "	3		
I	6 "	4	40	10	I	9 "	1			I	1号立	2			II	45 "	1			II	49 "	3		
I	1号集	4	58	19	I	10 "	1	136	46	I	2 "	2	102		II	46 "	1			II	50 "	3		
I	1号土	1	135	45	I	11 "	1			I	3 "	2			II	47 "	1	137	48	II	51 "	3		
I	2 "	1	135	46	I	12 "	1			I	4 "		欠番		II	48 "	1			II	52 "	3		
I	3 "	1			I	13 "	1			I	5 "	2	102		II	49 "	1			II	53 "	3		
I	4 "	1			I	14 "	1			I	1号倒	2	102	36	II	50 "	1			II	54 "	3		
I	5 "	1	135	46	I	15 "	1			I	2 "	2	102	36	II	51 "	1			II	55 "	3		
I	6 "	1	135	46	I	16 "	1			II	1号溝	1	134	45	II	52 "	1			II	56 "	3		
I	7 "	1			I	17 "	1			II	2 "		欠番		II	53 "	1			II	57 "	3		
I	8 "	1	136		I	1号P		欠番		II	1号集		欠番		II	54 "	1			II	58 "	3		
I	9 "	1			I	2 "		欠番		II	2 "	4	58	19	II	55 "	1			II	59 "	3		
I	10 "	1			I	3 "	4			II	1号井	1	135	45	II	1号P	3			II	60 "	3		
I	11 "		欠番		I	4 "	4			II	1号耕	1			II	2 "	3			II	61 "	3		
I	12 "	4	43	11	I	5 "	4			II	2 "	1			II	3 "	3			II	62 "	3		
I	13 "	4	43	11	I	6 "		欠番		II	3 "	1			II	4 "	3			II	63 "	3		
I	14 "	4	43	11	I	7 "	4			II	4 "	1			II	5 "	3			II	64 "	3		
I	15 "	4	45	16	I	8 "		欠番		II	5 "	1			II	6 "	3			II	65 "	3		
I	16 "	4	45	11	I	9 "	4			II	6 "	1			II	7 "	3			II	66 "	3		
I	17 "	4	47	12	I	10 "		欠番		II	7 "	1			II	8 "	3			II	67 "	3		
I	18 "	4			I	11 "		欠番		II	8 "	1			II	9 "	3			II	68 "	3		
I	19 "	4			I	12 "	4			II	9 "	1			II	10 "	3			II	69 "	3		
I	20 "	4			I	13 "		欠番		II	10 "	1			II	11 "	3			II	70 "	3		
I	21 "	4			I	14 "	4			II	11 "	1			II	12 "	3			II	1号畦	2	108	39
I	22 "	4			I	15 "		欠番		II	12 "	1			II	13 "	3			II	2 "	2	108	39
I	23 "	4			I	16 "		欠番		II	13 "	1			II	14 "	3			II	3 "	2	110	39
I	24 "	4			I	17 "		欠番		II	14 "	1			II	15 "	3			II	4 "	2	112	40
I	25 "	4			I	18 "		欠番		II	15 "	1			II	16 "	3			II	5 "	2		
I	26 "	4			I	19 "	4			II	16 "	1			II	17 "	3			II	6 "	2	116	40
I	27 "	4	48	12	I	20 "	4			II	17 "	1			II	18 "	3			II	1号道	2	110	39
I	28 "	4			I	21 "		欠番		II	18 "	1			II	19 "	3			II	1号倒	4		
I	29 "	4			I	22 "	4			II	19 "	1			II	20 "	3			II	2 "	4		
I	30 "	4			I	23 "		欠番		II	20 "	1			II	21 "	3			II	3 "		欠番	
I	31 "	4			I	24 "	4			II	21 "	1			II	22 "	3			II	4 "	4		
I	32 "	4	48	12	I	25 "	4			II	22 "	1			II	23 "	3			II	5 "	4		
I	33 "	4	48	12	I	26 "		欠番		II	23 "	1			II	24 "	3			III	1号掘	3	78	25
I	34 "	4			I	27 "		欠番		II	24 "	1			II	25 "	3			III	1号土	1	136	46
I	35 "	4			I	28 "		欠番		II	25 "	1			II	26 "	3			III	2 "	3	79	25
I	36 "	4			I	29 "		欠番		II	26 "	1			II	27 "	3			III	3 "	3	79	25
I	37 "	4			I	30 "	4			II	27 "	1			II	28 "	3			III	4 "	4	55	17
I	38 "	4			I	31 "	4			II	28 "	1			II	29 "	3			III	5 "	4	55	17
I	39 "	4	49	13	I	32 "	4			II	29 (a)	1			II	30 "	3			III	6 "	4	55	18
I	40 "	4	49	13	I	33 "	4				〃				II	31 "	3			III	1号不	3	79	26
I	41 "	4	49	13	I	34 "	4			II	29 (b)	1			II	32 "	3			III	1号耕	1	137	47
I	42 "	4	49	13	I	35 "		欠番			〃				II	33 "	3			III	2 "	1		
I	43 "	4	52	14	I	36 "		欠番		II	30 "	1			II	34 "	3			III	3 "	1		
I	44 "	4	53	14	I	37 "	4			II	31 "	1			II	35 "	3			III	4 "	1		
I	45 "	4	53	14	I	38 "	4			II	32 "	1			II	36 "	3			III	5 "	1		
I	46 "	4	53	14	I	39 "	4			II	33 "	1			II	37 "	3			III	6 "	1		
I	47 "	4	53	14	I	40 "	4			II	34 "	1			II	38 "	3			III	7 "	1		
I	48 "	4	54	15	I	1号畦	2	102	36	II	35 "	1			II	39 "	3			III	8 "	1		
I	49 "	4	54	15	I	2 "	2	102	36	II	36 "	1			II	40 "	3			III	9 "	1		

区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真	区	遺構名	面	本文	写真
Ⅲ	10号耕	1			Ⅲ	60号耕	1			Ⅲ	2号畠	2	86	28	Ⅳ	27号耕	1			Ⅳ	32号P	3		
Ⅲ	11	1			Ⅲ	61	1			Ⅲ	3	2	87	28	Ⅳ	28	1			Ⅳ	33	3		
Ⅲ	12	1			Ⅲ	62	1			Ⅲ	4	2	87	35	Ⅳ	29	1			Ⅳ	34	3		
Ⅲ	13	1			Ⅲ	63	1			Ⅲ	1号畦	2	89	41	Ⅳ	30	1			Ⅳ	35	3		
Ⅲ	14	1			Ⅲ	64	1	138	47	Ⅲ	2	2	118	41	Ⅳ	31	1			Ⅳ	36	3		
Ⅲ	15	1			Ⅲ	65	1	138	47	Ⅲ	1号道	2	93	35	Ⅳ	32		欠番		Ⅳ	37	3		
Ⅲ	16	1			Ⅲ	66	1			Ⅲ	2	2	118	41	Ⅳ	33	1	139	48	Ⅳ	38	3		
Ⅲ	17	1			Ⅲ	67	1	138	47	Ⅲ	3	2			Ⅳ	34	1			Ⅳ	39	3		
Ⅲ	18	1			Ⅲ	68	1	138	47	Ⅲ	4	2			Ⅳ	35	1			Ⅳ	40	3		
Ⅲ	19	1			Ⅲ	69		欠番		Ⅲ	1号窪	2	91	33	Ⅳ	36	1			Ⅳ	41	3		
Ⅲ	20	1			Ⅲ	70	1			Ⅲ	2	2	91	33	Ⅳ	37	1	139	48	Ⅳ	42	3		
Ⅲ	21	1			Ⅲ	71	1			Ⅲ	1号倒	4			Ⅳ	38	1			Ⅳ	43	3		
Ⅲ	22	1			Ⅲ	72	1			Ⅲ	2	4			Ⅳ	39	1			Ⅳ	44	3		
Ⅲ	23	1			Ⅲ	73	1			Ⅳ	1号溝	1	134		Ⅳ	40	1	139	48	Ⅳ	45	3		
Ⅲ	24	1	137		Ⅲ	74	1			Ⅳ	1号土	4	56		Ⅳ	41	1			Ⅳ	46	3	82	
Ⅲ	25	1			Ⅲ	75	1	138	47	Ⅳ	2	4	56		Ⅳ	42	1			Ⅳ	47	3		
Ⅲ	26	1	137	47	Ⅲ	76	1	138	47	Ⅳ	3	4	56	18	Ⅳ	43	1			Ⅳ	48	3		
Ⅲ	27	1			Ⅲ	77	1			Ⅳ	4		欠番		Ⅳ	44	1			Ⅳ	49	3		
Ⅲ	28	1			Ⅲ	78	1			Ⅳ	5	4	56	18	Ⅳ	45	1			Ⅳ	50	3		
Ⅲ	29	1			Ⅲ	79	1			Ⅳ	6	4	57		Ⅳ	1号P	3			Ⅳ	51	3		
Ⅲ	30	1			Ⅲ	80	1			Ⅳ	7	4	57		Ⅳ	2	3			Ⅳ	52	3		
Ⅲ	31	1	137	47	Ⅲ	81	1			Ⅳ	1号不	3	79	26	Ⅳ	3	3			Ⅳ	53	3		
Ⅲ	32	1			Ⅲ	82	1			Ⅳ	2	3	80	26	Ⅳ	4	3			Ⅳ	54	3		
Ⅲ	33	1			Ⅲ	83	1			Ⅳ	3	3	80	26	Ⅳ	5	3			Ⅳ	55	3		
Ⅲ	34	1			Ⅲ	84	1			Ⅳ	1号耕	1			Ⅳ	6	3			Ⅳ	56	3		
Ⅲ	35	1			Ⅲ	85	1			Ⅳ	2	1			Ⅳ	7	3			Ⅳ	57	3		
Ⅲ	36	1			Ⅲ	86	1			Ⅳ	3	1			Ⅳ	8	3			Ⅳ	58	3		
Ⅲ	37	1			Ⅲ	87	1			Ⅳ	4	1			Ⅳ	9	3			Ⅳ	59	3	82	
Ⅲ	38	1			Ⅲ	88	1			Ⅳ	5	1	139	48	Ⅳ	10	3	81	27	Ⅳ	60	3		
Ⅲ	39	1			Ⅲ	89	1			Ⅳ	6	1			Ⅳ	11	3			Ⅳ	61	3		
Ⅲ	40	1			Ⅲ	1号P	3			Ⅳ	7	1			Ⅳ	12	3			Ⅳ	62	3		
Ⅲ	41	1			Ⅲ	2	3			Ⅳ	8	1			Ⅳ	13	3			Ⅳ	63	3		
Ⅲ	42	1			Ⅲ	3	3			Ⅳ	9	1			Ⅳ	14	3			Ⅳ	64	3		
Ⅲ	43	1			Ⅲ	4	3			Ⅳ	10	1			Ⅳ	15	3			Ⅳ	65	3		
Ⅲ	44	1			Ⅲ	5	3	81		Ⅳ	11	1			Ⅳ	16	3	81	27	Ⅳ	66	3		
Ⅲ	45	1			Ⅲ	6	3			Ⅳ	12	1			Ⅳ	17	3			Ⅳ	67	3		
Ⅲ	46	1			Ⅲ	7	3			Ⅳ	13	1			Ⅳ	18	3			Ⅳ	1号畦	2	122	42
Ⅲ	47	1	138	47	Ⅲ	8	3			Ⅳ	14	1			Ⅳ	19	3			Ⅳ	2	2	120	43
Ⅲ	48	1			Ⅲ	9	3	81	27	Ⅳ	15	1			Ⅳ	20	3			Ⅳ	3	2	124	43
Ⅲ	49	1			Ⅲ	10	3			Ⅳ	16	1			Ⅳ	21	3	81	27	Ⅳ	4	2	127	44
Ⅲ	50	1			Ⅲ	11	3			Ⅳ	17	1			Ⅳ	22	3			Ⅳ	5	2	127	44
Ⅲ	51	1			Ⅲ	12	3			Ⅳ	18	1			Ⅳ	23	3			Ⅳ	6	2	127	44
Ⅲ	52	1			Ⅲ	13	3			Ⅳ	19	1			Ⅳ	24	3			Ⅳ	1号道	2	126	44
Ⅲ	53	1			Ⅲ	14	3			Ⅳ	20	1			Ⅳ	25	3			Ⅳ	1号立	2	124	44
Ⅲ	54	1			Ⅲ	15	3	81	27	Ⅳ	21	1			Ⅳ	26	3			Ⅳ	2	2	124	44
Ⅲ	55	1			Ⅲ	16	3			Ⅳ	22	1			Ⅳ	27	3			Ⅳ	3	4		
Ⅲ	56	1			Ⅲ	17	3			Ⅳ	23	1			Ⅳ	28	3	81		Ⅳ	1号倒	4		
Ⅲ	57	1			Ⅲ	18	3			Ⅳ	24		欠番		Ⅳ	29	3			Ⅳ	2	4		
Ⅲ	58	1			Ⅲ	19	3			Ⅳ	25	1			Ⅳ	30	3			Ⅳ	3	4		
Ⅲ	59	1			Ⅲ	1号畠	2	86	28	Ⅳ	26	1			Ⅳ	31	3							

表中の遺構名略号は以下の通り

住居-住 集石-集 土坑-土 耕作坑-耕 ビット-P 井戸-井 用途不明土坑-不

畦状遺構-畦 窪み-窪 倒木-倒 立木-立

掲載頁が空欄の遺構は、全体図と計測値のみ記載。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	ふきやいせのもりいせき
書名	吹屋伊勢森遺跡
副書名	一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書
巻次	1
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	373
編集者名	井上昌美
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2006年3月24日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	ふきやいせのもりいせき
遺跡名	吹屋伊勢森遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんきたぐんまぐんこもちむらおおあざふきや
遺跡所在地	群馬県北群馬郡子持村大字吹屋
市町村コード	10341
遺跡番号	01034
北緯(日本測地系)	36° 31' 17"
東経(日本測地系)	139° 01' 20"
北緯(世界測地系)	36° 31' 29"
東経(世界測地系)	139° 01' 08"
調査期間	2002年09月01日 - 2004年03月31日 / 2004年11月01日 - 2004年12月03日
調査面積	22,286㎡
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	縄文/古墳/近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居5+土坑47+集石2-縄文土器+石器 田畑-古墳-畠4+放牧地1-土師器 その他-縄文-包蔵地-縄文土器+石器 その他-近世-土坑11+溝2+耕作坑203-磁器
特記事項	縄文時代前期諸磯b式新段階の集落及び古墳時代6世紀中葉の火山災害で埋もれた畠と放牧地の調査。縄文包含層から神子柴型石斧出土。

第1章

調査の経緯



遺跡遠景（利根川の河岸段丘がよく発達している。左奥が子持山。中央手前のL字の交差点までが鯉沢バイパス開通部分、今回の調査対象地がS字を描くように延びている。中央やや下の崖よりが吹屋伊勢森遺跡。）

第1節 調査の経緯

一般国道17号は、東京を起点として関東と北陸を結ぶ大動脈である。この国道は渋川市及び子持村の市街地を通過し、子持村鯉沢では長野・草津方面に向かう国道353号と接続する地理的条件も含め、休日等において観光交通による渋滞が恒常的なものとなっている。この渋滞解消のため、渋川市東町で現在の国道17号と分岐し、市街地を迂回しながら子持村上白井で国道17号と再び合流する4車線、約5.5kmの一般国道17号(鯉沢バイパス)道路改築工事が計画された。

本事業は、事業地を大きく2分割する計画で進められ、渋川市東町から子持村白井の、同事業と並行して進められた国道353号バイパスの接続部分までが、平成8年に供用を開始された。その後、子持村白井から同村上白井の終点までの間については、国土交通省高崎工事事務所(現:国土交通省高崎河川国道事務所)から、平成13年10月に一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)として群馬県教育委員会文化財保護課(現:群馬県教育委員会文化課)に事業照会があった。同課は、6世紀代に2度噴火した榛名山の火山灰・軽石に埋もれた遺跡が存在する旨を回答した。その後、事業者である高崎工事事務所と協議を進め、発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなった。

平成14年8月30日付けで、国土交通省関東地方整備局長並びに群馬県教育委員会教育長、(財)群馬

県埋蔵文化財調査事業団理事長は、一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)に関する協定書を締結した。また、国土交通省関東地方整備局長と(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成14年度の埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約を締結し、発掘調査を進めることとなった。8遺跡、約115,000㎡に及ぶ発掘調査は平成17年7月まで実施し、整理事業は平成17年4月から開始した。

吹屋伊勢森遺跡は、平成14年9月から平成16年12月にかけて調査を実施した。調査区は地区番号9のうち土地番号49～51、54、55及び無番号を0区、地区番号9の0区以外をI区、地区番号10をII区、地区番号11をIII区、地区番号12・13・14をIV区とし、調査対象面積は合計22,874㎡である。このうち0区の急斜面地を除いた22,286㎡で本調査を行った。

当初0区は一部に大字白井字十二の地番があること、斜面部に位置することなどから、吹屋伊勢森遺跡に含めるかどうか不明確であった。また用地買収の関係もあり、I区とは別に調査を行った結果、最終的に0区の名称を用いて吹屋伊勢森遺跡の調査区とした。また調査当初は地区番号15から20は、吹屋伊勢森遺跡のV区・VI区・VII区として記録を取っていたが、調査途中で吹屋遺跡のV区・VI区・VII区にそれぞれ変更することとした。

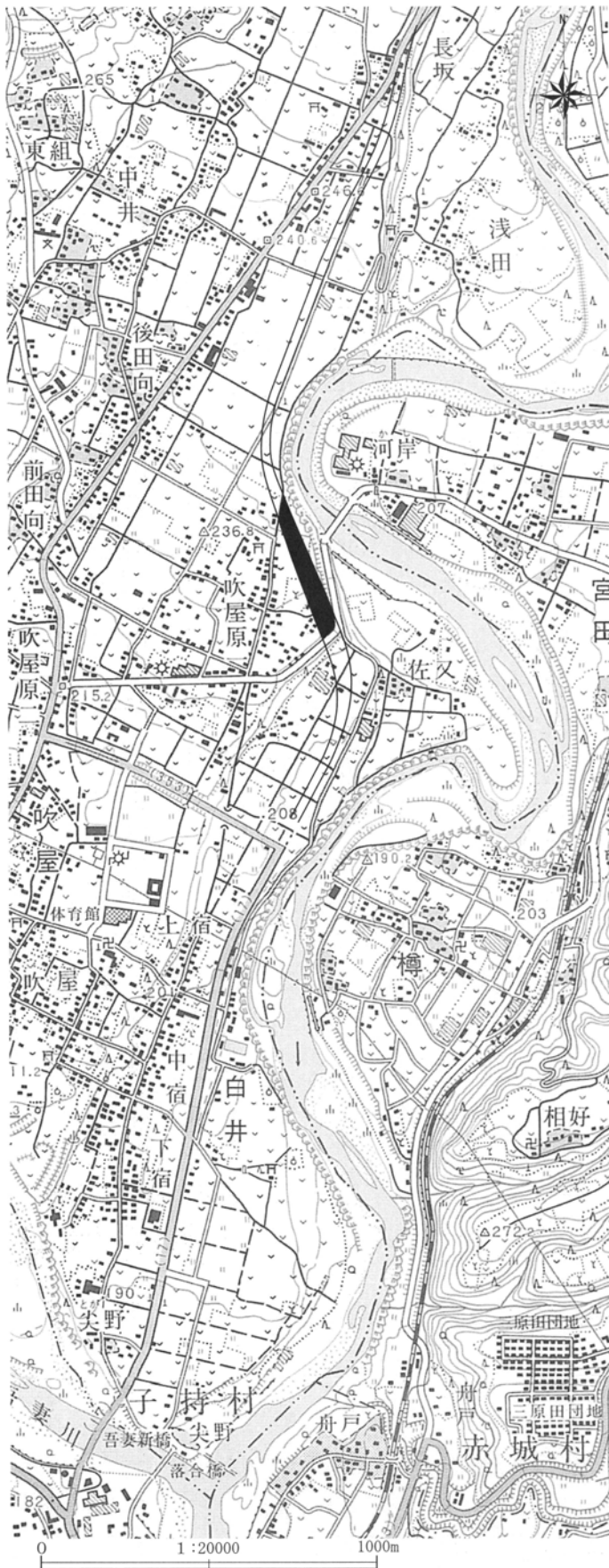
吹屋伊勢森遺跡の整理事業は、一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)における最初の整理事業として、平成17年度に実施した。



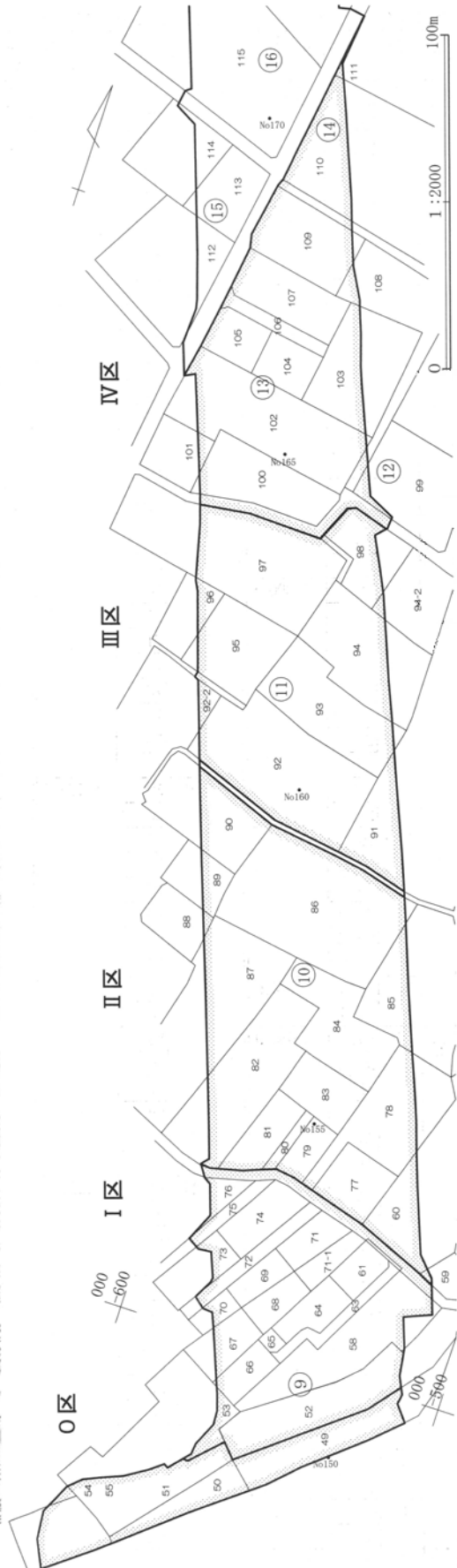
IV区1面 調査風景



III区2面 調査風景



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区配置図

第1章 調査の経緯

鯉沢バイパス（その2）面積一覧表 総面積 115,401㎡

遺跡	地区	土地 番号	地区面積 ㎡	遺跡	地区	土地 番号	地区面積 ㎡	遺跡	地区	土地 番号	地区面積 ㎡	遺跡	地区	土地 番号	地区面積 ㎡	遺跡	地区	土地 番号	地区面積 ㎡				
白井北中道	1	1	3,461.3	吹屋伊勢森	9	50		吹屋伊勢森	13	105		吹屋	26	165	230.7	中郷	32	218					
		2				106				167				219									
		3				107				169				220									
		4				108				172				221									
		5				109				174				222									
	2	6	4,751.3			55			493.8	14			110	687.5	27		166	3,574.7		223			
		7				111							168				224						
		8				無番号							170				225						
		9				56				15			112		3,075.6		中郷			28	175	1,182.5	226
		10				56-2							113								176		227
		11			57	114		177				228											
		12			58	117		177-2				229											
		13			59	118		178				230											
	3	13	5,958.2		61	27.3		17	119	3,926.9		30	178	4,338.3	231								
		13-2			62				120				180		232								
		14			63				121				184		233								
		15			64				122				186		234								
		16			65				123				189		235								
		17			66				124				191		236								
		18			67				125				196		239								
		19			68				126				199		240								
		20			69				127				201		241								
		21			70				128				201-1		242								
	4-1	20	7,390.5		71	27.3		18	129	3,976.0		31	179	3,068.5	243								
		21			72				130				184		244								
		22			73				131				186		244-2								
		23			74				132				189		245								
		24			75				133				191		246								
		25			76				134				196		247								
		26			77				135				199		248								
		27			78				136				201		249								
		28			79				137				205		250								
		29			80				138				206		251								
	4-2	29-1	2,545.1		81	3,976.0		19	139	1,698.7		32	210	4,940.8	252								
		29-2			82				140				211		253								
		29-3			83				141				212		254								
		29-4			84				142				213		255								
		29-6			85				143				215		256								
		29-8			86				144				216		257								
		29-5			87				145				216-2		258								
		29-7			88				146				217		259								
	5	29-5	48.5		89	39.9		20	147	2,570.2		32	210	4,940.8	253								
		29-7			90				148				211		254								
	白井十二	6	8,080.9		91	5,289.6		21	149	2,164.4		32	211	4,940.8	255								
					30				92				150		212	256							
30-1				93	151		213		257														
31				94	152		215		258														
32				94-2	153		216		259														
33				95	154		217		705.5														
34				96	155																		
35				97	156																		
36				98	157																		
37				99	158																		
7		43	153.8	100	3,914.9	22	159	544.7	32	210	4,940.8	253											
		44		101			160			211		254											
8		47	2,764.8	102		23	161		32	210	4,940.8	255											
		48		103			162			211		256											
※1		9	49	6,337.4	104		24	163	1,473.2	32	210	4,940.8	35-1	253	2,233.5								

※1 - 吹屋伊勢森 ※2 - 上白井長坂

第2節 調査の方法

吹屋伊勢森遺跡は、国道17号鯉沢バイパス2期工事分の発掘調査の中で最初に調査が始まった遺跡である。平成14年9月から平成16年12月にかけて途中中断を挟み合計20ヶ月調査が行われた。

調査区域には、国家座標に基づいて5m間隔のグリッドを設定した(第3図参照)。東西をアラビア数字とアルファベット、南北をアラビア数字で呼称し、南東隅のグリッド杭の名称をグリッドの名称とした。吹屋伊勢森遺跡では調査時に3箇所のグリッド原点が設定されていたため、報告書作成時に1箇所にて定め直した。本報告書で用いる原点1A-1は、日本平面直角座標系第IX系のX = 57,900m、Y = -72,500m(世界測地系対応)である。また、調査時の原点は以下の通りである。①1A-1、X = 58,000m、Y = -72,500m、報告書1A-21に対応。②1A-①、X = 57,955m、Y = -72,500m、報告書1A-12に対応。③1A-(1)、X = 57,910m、Y = -72,500m、報告書1A-3に対応。

本遺跡周辺では、古墳時代における榛名山の二度の噴火に伴う火山灰(FA)と軽石(FP)の層が堆積し

ており、調査はこれらの層の上面・下面および縄文時代の包含層中、ローム層上面と5面(注：FA層は残存が部分的であるため上面、下面及び下層を合わせて1面と数えた。)にわたり、さらに旧石器時代の試掘調査を行った。

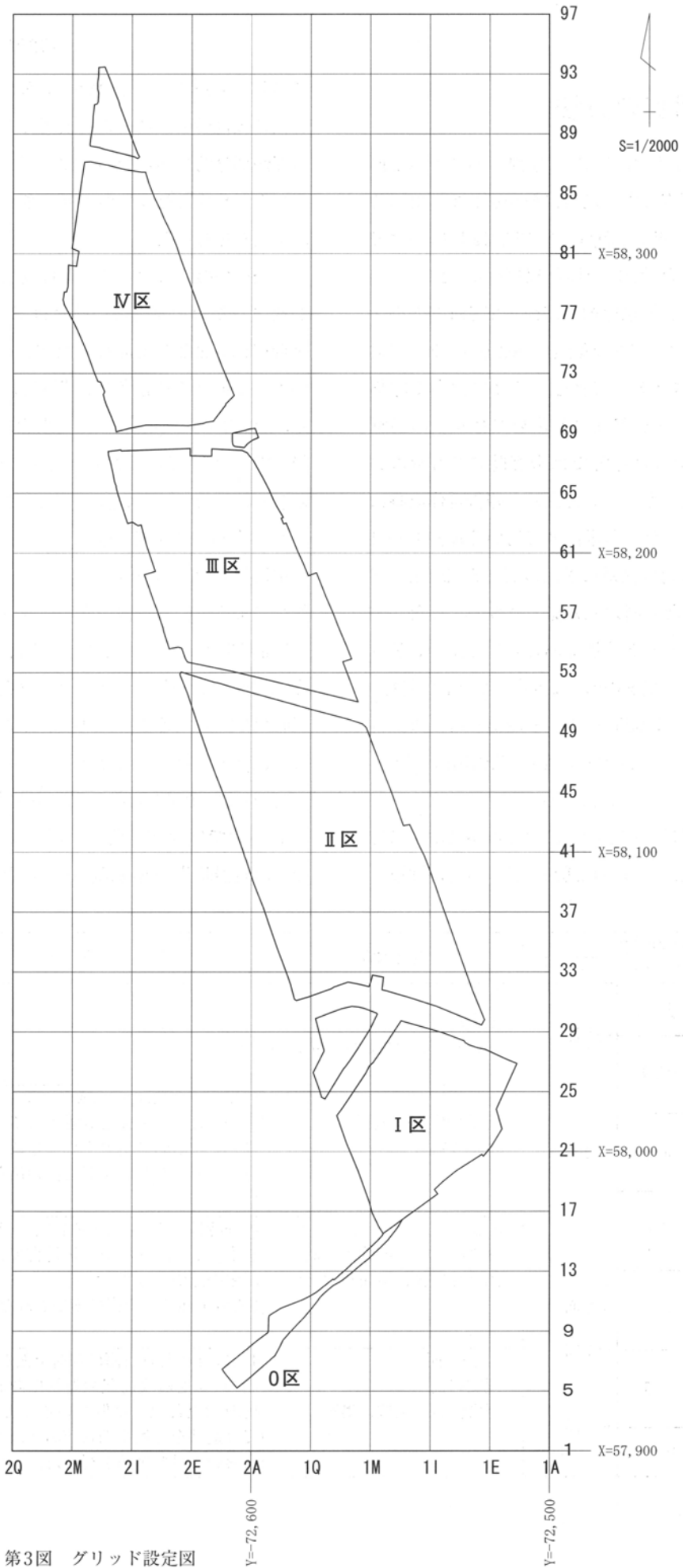
調査面の扱いについて、発掘調査時と報告書で一部変更した箇所がある。それはFA上面の調査で、発掘時は3面として記録したが、FA上面での調査が主に2面の畠遺構等の下部構造に関するものであり、2面の調査内容と密接に関連することから、報告書では第5章2面の調査で扱うこととした。

調査にあたっては、表土層とFP軽石層の除去及び基本土層V層の除去の一部については、大型掘削重機(バックホー)を用い、その他は基本的に手作業による遺構・遺物の検出を行った。

1面(FP上面)では主に近世以降の耕作に関連する土坑群(耕作坑)を検出した。2面(FP下面)は古墳時代6世紀中葉の地表面が軽石により保存されており、畠・放牧地の調査を行った。3面(FA下面及び下層)では掘立柱建物、用途不明土坑等を検出し、4面・5面では縄文時代の集落及び包含層を調査した。旧石器時代の遺物は検出されなかった。

調査面模式表

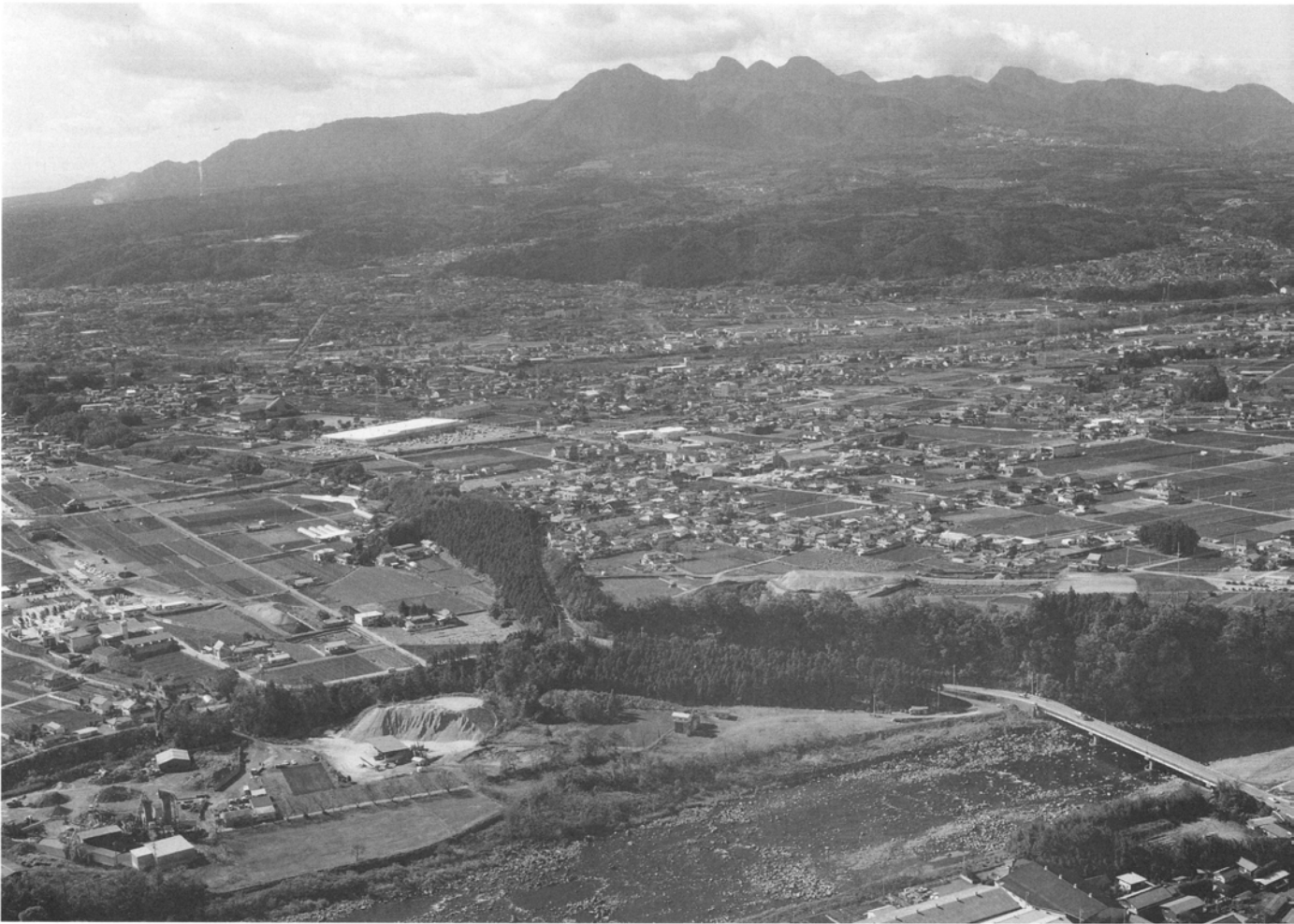
調査面の呼称			主な内容	備考
調査時	基本土層	報告書		
1面→	I(表土)	←1面	1面 近世以降 溝、井戸、土坑、耕作坑、遺跡	
2面→	II(FP)	} 2面		
	III		2面 古墳時代(6世紀中葉) 畠、放牧地	FP直下の地表面の調査。 調査時はFA上面を3面として記録したが、その内容が2面の畠の下部構造に関するものが主体であり、報告書では2面の畠と一括して記載する。
3面→	IV(FA)	} 3面	3面 縄文時代～古墳時代前期 掘立柱建物、用途不明土坑	調査時は、FA上面・FA下面・V層中の遺構を3面として扱ったが、報告書ではFA下面とV層中の遺構を3面とする。 FA直下面では遺構は検出されなかった。
4面→	V			
5面→	VI～VIII	←4面	4面・5面 縄文時代 竪穴住居、土坑、集石	4面はVI層上面、5面はIX層上面を検出面とする。当初4面を縄文時代の遺構確認面としたが、遺構埋没土と地山が似ていることから、4面のみでは遺構を見逃す恐れがあり、5面(ローム上面)において最終確認を行った。
	IX	←5面		



第3図 グリッド設定図

第2章

地理的・歴史的環境



遺跡遠景（手前に利根川が流れる。崖の上が吹屋伊勢森遺跡。奥に見えるのが榛名山で、現在の二ツ岳付近で古墳時代に大規模な噴火を起こした。この地域では軽石や火山灰で埋もれた遺跡が数多く調査されている。）

第1節 遺跡の位置と周辺の地形

吹屋伊勢森遺跡は、子持村大字吹屋（現渋川市吹屋、平成18年2月市町村合併）に所在しており、群馬県の中央部やや北よりにあたる。子持村は新潟へ向かう国道17号と長野方面に向かう国道353号の分岐点にあたり、交通の要衝となっている。

この地域の主な産業は、こんにゃくの生産と軽量ブロックの製造であるが、これらは古墳時代の榛名山の噴火による軽石層の存在によるものである。吹屋伊勢森遺跡の西1.5kmの所には、この軽石層に埋もれた古墳時代のムラ、黒井峯遺跡(国指定史跡)がある。

子持村は東に赤城山、西に榛名山、北に子持山・小野子山と三方を山に囲まれ、関東平野の北端部に位置している。また北から利根川、北西から吾妻川が流下し、村の南端部でそれらが合流する。

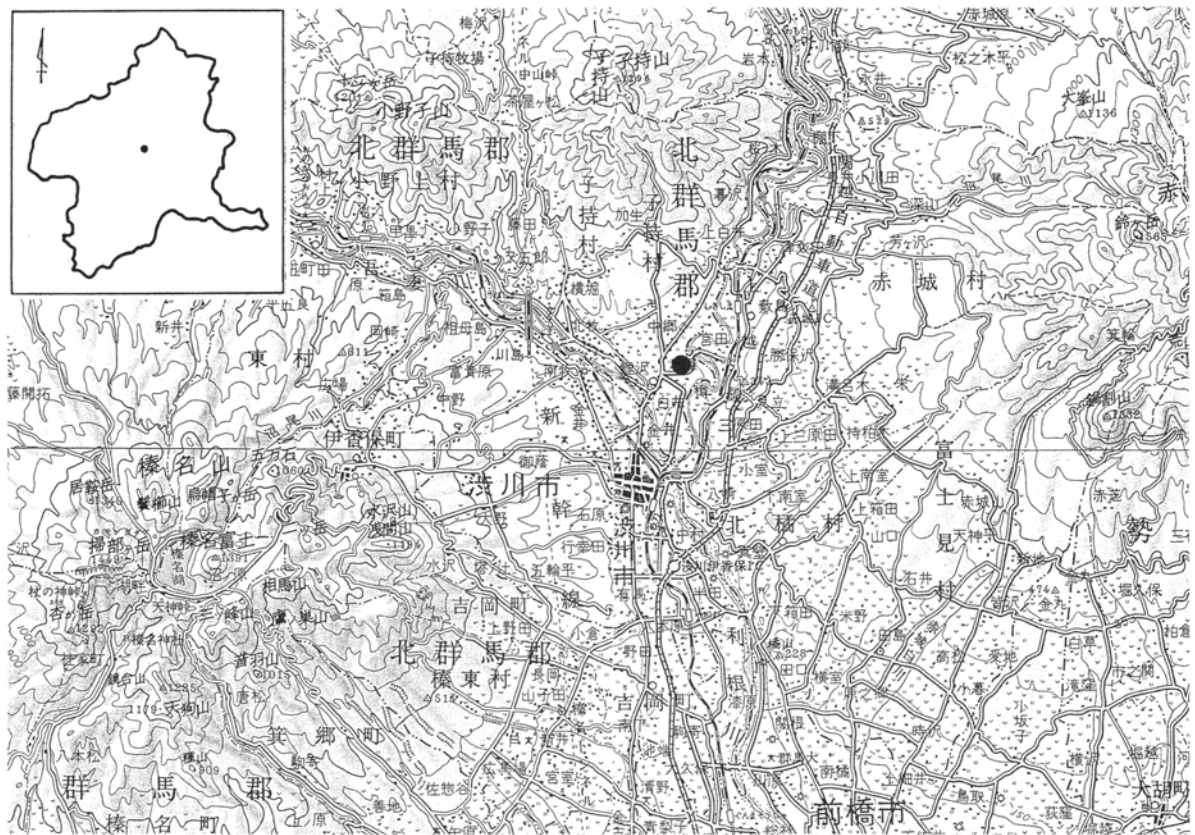
山地から平野部への変換点にあたる村の南部では、利根川と吾妻川により形成された河岸段丘が発

達している。これらの段丘面は形成年代の古い順に、雙林寺面、長坂面、西伊熊面、白井面、浅田面と呼ばれている。吹屋伊勢森遺跡は、長坂面に立地している。

吹屋伊勢森遺跡付近は標高234～239mで、遺跡の東側では利根川が蛇行し下位の段丘面を浸食していることから、河原までが比高差40mの段丘崖となっている。南に隣接する下位段丘の白井面との比高差は20mである。吹屋伊勢森遺跡付近の長坂面は、概ね平坦であるが南から北へ向かって徐々に標高が高くなる。

長坂面の形成された年代は、これまでの研究から約6～7万年前頃と考えられている。吹屋伊勢森遺跡の調査では、トレンチで約2万数千年前とされる前橋泥流の堆積を確認した。

この地域は、古墳時代に2度の大きな火山災害に見舞われたことが特筆される。いずれも榛名山の噴火によるもので、6世紀初頭の噴火に伴う堆積物は榛名洪川テフラ(Hr-FA)と呼ばれ、6世紀中葉



第4図 遺跡位置図(S = 1 : 20万)

の噴火に伴う堆積物は榛名伊香保テフラ (Hr-FP) と呼ばれている。FPは東北地方南部まで分布が確認されている。

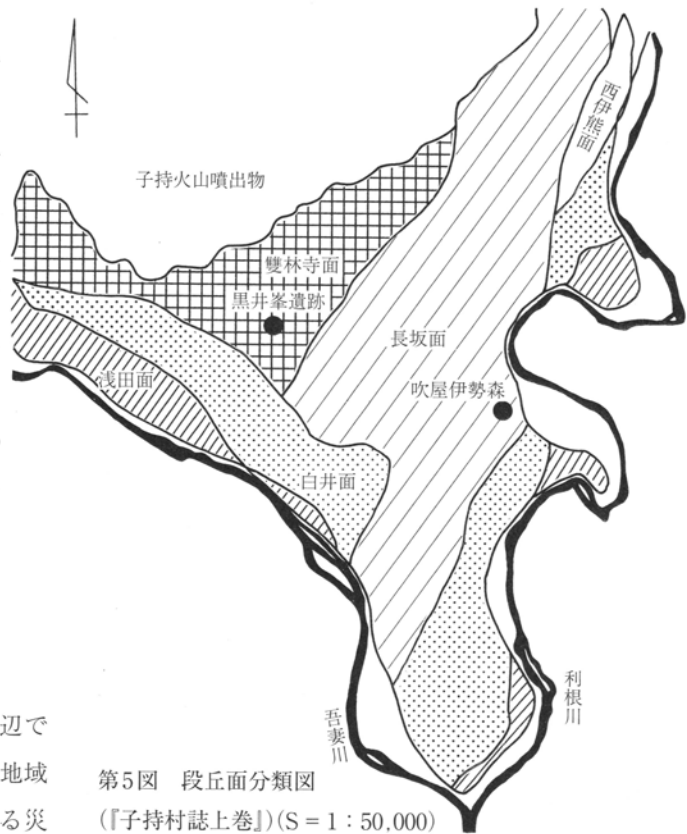
FAは主に火山灰と火砕流堆積物で、吹屋伊勢森遺跡付近では厚さ5cm程度であるが、南に行くほど厚くなり、約2.5km南の白井二位屋遺跡では約40cm堆積している。FPは主に軽石で吹屋伊勢森遺跡付近で厚さ110～120cmが残存している。子持村はFPの降下した範囲の中心軸上に位置しており、黒井峯遺跡では最大200cmに及ぶ堆積が認められる。なお、吹屋伊勢森遺跡は噴火口から東北東へ約10kmの位置に所在している。

第2節 周辺の遺跡

吹屋伊勢森遺跡が所在する子持村とその周辺では、数多くの遺跡が発掘調査されている。この地域は前節で述べた、古墳時代の榛名山の噴火による災害で埋もれた遺跡の調査が特に注目されるが、旧石器時代から近世に至るまで各時代を通して多くの遺跡がある。

旧石器時代の遺跡は、吹屋犬子塚遺跡(14)で浅間白糸降下軽石(As-Sr)下、浅間板鼻褐色軽石(As-BP)下の石器群を、吹屋中原遺跡(15)で浅間板鼻黄色軽石(As-YP)下の石器群を確認している。国道17号鯉沢バイパス関連でも吹屋遺跡(2)でAs-YP下、中郷遺跡(3)でAs-BP下、上白井西伊熊遺跡(4)でAs-SrからAs-BPにかけての石器群が検出された。

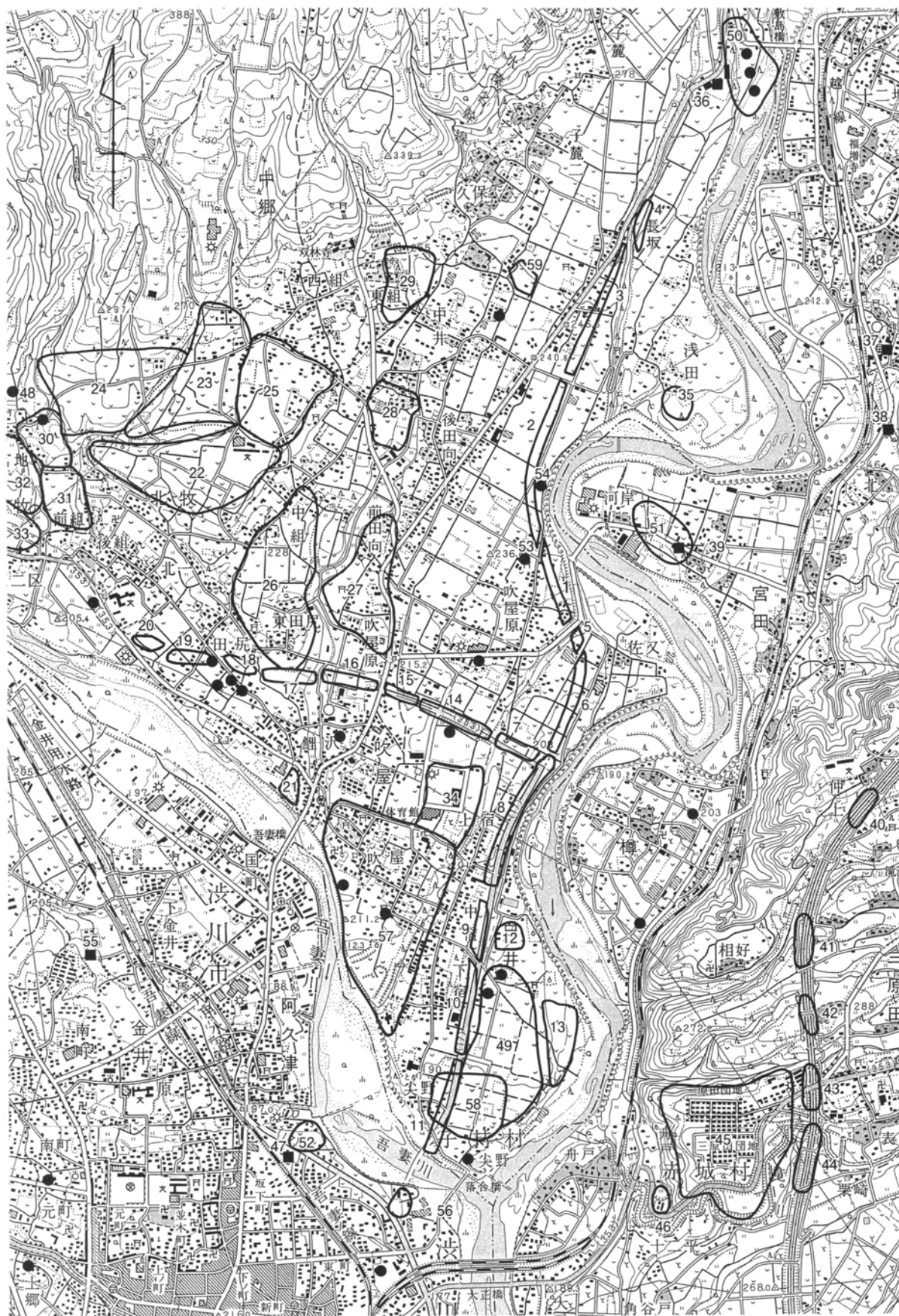
縄文時代の遺跡は、白井北中道遺跡(8)、白井十二遺跡(5)で草創期の調査がなされている。前期の遺跡は、この地域では多数の調査例があり、吹屋犬子塚遺跡(14)、吹屋中原遺跡(15)、吹屋遺跡(2)、中郷遺跡(3)、上白井西伊熊遺跡(4)、白井十二遺跡(5)、白井北中道Ⅲ遺跡(6)、黒井峯遺跡(22)、押出遺跡(24)などで集落の調査が行われている。また利根川の対岸の赤城村でも見立溜井遺跡(40)、諏訪西遺跡(41)、中畦遺跡(42)、三原田城遺跡(43)などの



第5図 段丘面分類図
 (『子持村誌上巻』)(S=1:50,000)

集落遺跡がある。中期では中郷遺跡(3)で集落が検出され、利根川の対岸には三原田遺跡(45)や房谷戸遺跡(44)などがある。

古墳時代前期の遺跡は、吹屋糍屋遺跡(19)、中郷田尻遺跡(18)、白井北中道Ⅲ遺跡(6)などで集落が検出されている。FA直下(6世紀初頭)の遺跡では北牧相ノ田遺跡(31)、北牧大境遺跡(20)、吹屋瓜田遺跡(21)などで水田が調査された。FP直下(6世紀中葉)の遺跡では黒井峯遺跡(22)、西組遺跡(23)、押出遺跡(24)、田尻遺跡(26)などで、集落・墳墓・水田・畠が検出され、当時の集落構造の解明に貴重な資料となっている。FA直下で水田が検出された前述の各遺跡ではFP直下でも水田が確認されている。さらにFP直下では白井地区、吹屋地区などで馬の放牧地が広範囲に確認されている。FP下の古墳では、中ノ峯古墳(48)、浅田遺跡(35)、伊熊・有瀬古墳群(50)などが調査されている。FP降下以降になると群集墳が数多く作られている。吹屋伊勢森遺跡に近い大塚(稲荷塚)(53)、笄塚(54)は古墳でない可能性もある。



第6図 周辺遺跡図(S = 1 : 25,000) (丸印は古墳)

第2節 周辺の遺跡

周辺遺跡一覧表

遺跡名	概要	文献	遺跡名	概要	文献
1 吹屋伊勢森遺跡	縄文前期集落、FP下畠・放牧地	本書	29 池田沢東遺跡	FP下道・畠	1
2 吹屋遺跡	縄文前期集落、FP下放牧地	15,16	30 丸子山遺跡	FP下・FP上古墳	4
3 中郷遺跡	縄文前・中期集落、FP下放牧地	15,16	31 北牧相ノ田遺跡	FA下水田、FP下水田	32
4 上白井西伊熊遺跡	縄文前期集落、FP下放牧地	15,16	32 畑中遺跡	FA下水田、FP下水田	4
5 白井十二遺跡	縄文草創期・前期、FP下放牧地	15,16	33 後田遺跡	FP下水田	24
6 白井北中道Ⅲ遺跡	縄文前期、古墳前期集落、FP下放牧地	14,15	34 源空寺裏遺跡	FP下放牧地	3
7 白井北中道Ⅱ遺跡	FP下畠・放牧地	17	35 浅田遺跡	FP下古墳	9,10
8 白井北中道遺跡	縄文草創期遺物、FP下放牧地	18,19	36 白郷井中学校校庭遺跡	古墳時代集落	33
9 白井九岩遺跡	FP下放牧地	18,19	37 猫持久保遺跡	FP下道・畠	34
10 白井南中道遺跡	FP下放牧地、奈良平安集落	19,21	38 宮田諏訪原遺跡	FA下祭祀、FP下道・畠	34
11 白井二位屋遺跡	FP下放牧地、奈良平安集落	20,22	39 宮田畦畔遺跡	FP下水田	31
12 白井大宮遺跡	FP下放牧地	23	40 見立溜井遺跡	旧石器、縄文前・中期集落	35
13 渡屋遺跡	古墳前期集落	24	41 諏訪西遺跡	旧石器、縄文前・中期集落	36
14 吹屋大子塚遺跡	縄文前期集落、FA下水田、FP下放牧地	17	42 中畦遺跡	旧石器、縄文前期集落	36
15 吹屋中原遺跡	縄文前・中期集落、FP下畠・放牧地	17	43 三原田城遺跡	縄文前期集落	37
16 中郷恵久保遺跡	4c~5c集落、FA・FP下水田・畠	11~13	44 房谷戸遺跡	旧石器、縄文中期集落	38
17 吹屋三角遺跡	FA下水田、FP下水田	11	45 三原田遺跡	縄文前期~後期集落	39
18 中郷田尻遺跡	古墳5c集落、FA・FP下水田他	16	46 樽遺跡	弥生時代集落	40
19 吹屋純屋遺跡	古墳5c集落、FA・FP下水田他	13	47 坂之下遺跡	FA下水田	41
20 北牧大境遺跡	FA・FP下水田、平安集落	25	48 中ノ峯古墳	FP下古墳	42
21 吹屋瓜田・鯉沢瓜田遺跡	FA下水田、FP下水田	26,27	49 白井古墳群	FP上古墳	43
22 黒井峯遺跡	縄文集落、FP下集落・古墳・水田他	28	50 伊熊・有瀬古墳群	FP下古墳	43
23 西組遺跡	FP下集落・水田・畠	29	51 河岸古墳群	FP上古墳	44
24 押出遺跡	縄文集落、FP下集落・畠	30	52 坂下町古墳群	FA下古墳	45
25 館野遺跡	FP下畠	31	53 大塚(稲荷塚)	FP上古墳?、長尾村14号	44
26 田尻遺跡	縄文集落、FP下集落・古墳・畠	3~15	54 斧塚	古墳?、長尾村15号	44
27 八幡神社遺跡	FP下集落・畠	3	55 金井製鉄遺跡	平安製鉄跡	46
28 中組遺跡	FP下道・畠	2	56 東町関下遺跡	中~近世水田	47
			57 白井城跡	中・近世城跡	43,48
			58 仁位屋城跡	中世城跡	48
			59 白井上城跡	中世城跡	48

文献

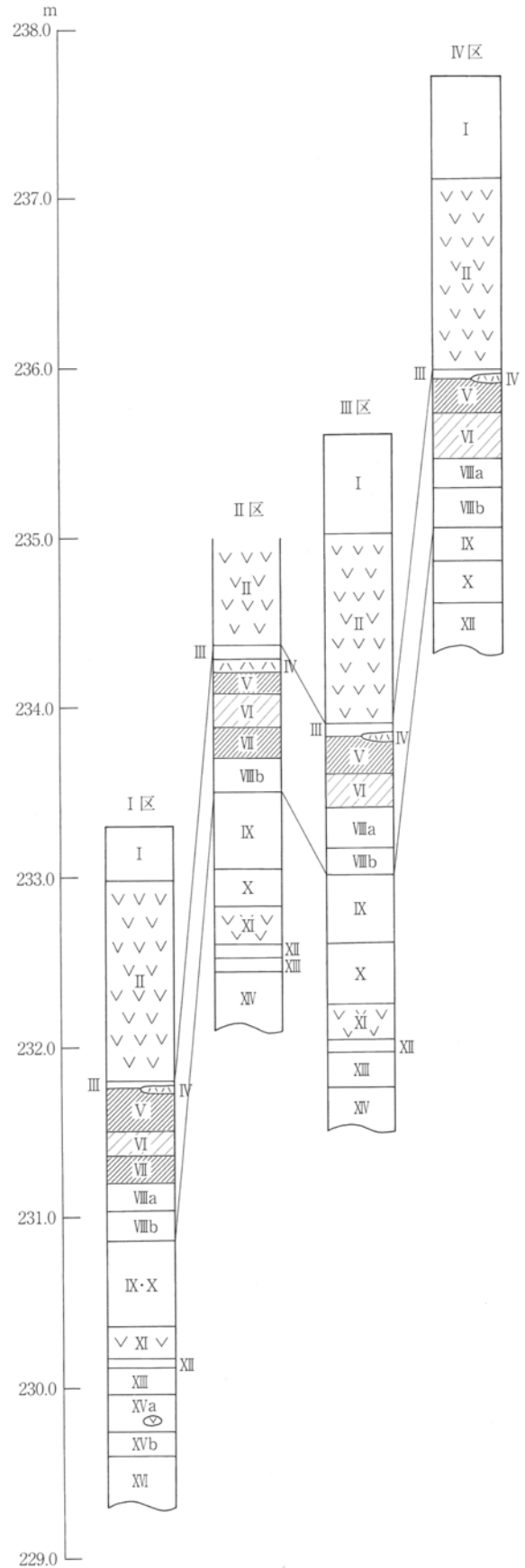
- 『年報7』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 『年報8』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 『年報11』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 『年報12』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 『年報13』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 『年報14』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 『年報15』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 『年報16』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 『年報17』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 『年報18』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 『年報19』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
- 『年報20』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 『年報21』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
- 『年報22』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
- 『年報23』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004
- 『年報24』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005
- 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋大子塚遺跡・吹屋中原遺跡』 第1冊、第2冊 群埋文 1996、1998
- 『白井遺跡群-縄文時代編-』 群埋文 1998
- 『白井遺跡群-古墳時代編-』 群埋文 1997
- 『白井遺跡群-集落編Ⅰ-』 群埋文 1994
- 『白井遺跡群-集落編Ⅱ-』 群埋文 1996
- 『白井遺跡群-中世編-』 群埋文 1993
- 『白井大宮遺跡』、『白井大宮遺跡Ⅱ』 群埋文 1993、2002
- 子持村教育委員会石井克己氏のご教示による。
- 『北牧大境遺跡』 群埋文 2004
- 『吹屋瓜田遺跡』 群埋文 1996
- 『鯉沢瓜田遺跡』 子持村教育委員会 2000
- 『黒井峯遺跡発掘調査報告書』 子持村教育委員会 1991
- 『西組遺跡発掘調査報告書』 子持村教育委員会 1985
- 『押出遺跡発掘調査概報』 子持村教育委員会 1987
- 『群馬県史 資料編2』 群馬県史編さん委員会 1986
- 『北牧相ノ田遺跡』 子持村教育委員会 2000
- 『群馬県遺跡台帳Ⅰ 東毛編』 群馬県教育委員会 1971
- 『宮田諏訪原遺跡Ⅲ・猫持久保遺跡』 赤城村教育委員会 2004
- 『見立溜井遺跡』 赤城村教育委員会 1985
- 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』 群埋文 1986
- 『三原田城遺跡』 群埋文 1987
- 『房谷戸遺跡Ⅰ』、『房谷戸遺跡Ⅱ』 群埋文 1989、1992
- 『三原田遺跡』第1~3巻 群馬県企業局 1980~1992
- 杉原荘介「上野樽遺跡調査概報」『考古学』第10巻第10号 1939
- 『坂之下遺跡』 渋川市教育委員会 1988
- 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』 子持村教育委員会 1980
- 『子持村誌 上巻』 子持村誌編さん室 1987
- 『上毛古墳総覧』 群馬県 1938
- 『北群馬・渋川の歴史』 北群馬・渋川の歴史編さん委員会 1971
- 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』 渋川市教育委員会 1988
- 『東町関下遺跡』 群埋文 1998
- 山崎一『群馬県古城址の研究』 1972

第3節 基本土層

吹屋伊勢森遺跡では、浅間山の山体崩壊に由来する前橋泥流堆積物までを確認し、その上位にローム層、黒ボク土が堆積し、さらに榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)と榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が堆積している。(口絵写真参照)

Ⅲ層は Hr-FA と Hr-FP の間という限られた時間内に形成された土壤層である。Ⅴ層は白色及び黄色軽石を含むが、それらは榛名有馬テフラ、浅間C軽石、詳細が不明な縄文時代の浅間起源の軽石などと考えられている。Ⅴ層～Ⅷ層は縄文時代の遺物包含層である。

- I層：表土。黒褐色土。Hr-FPを含む。
- II層：榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、6世紀中葉)。層厚110～120cm。
- III層：褐色土。
- IV層：榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)。
- V層：黒色土。白色軽石、黄色軽石(径1～3mm)を含む。
- VI層：褐色～にぶい黄褐色土。淡色黒ボク土。僅かに軽石を含む。
- VII層：黒色～黒褐色土。
- VIIIa層：褐色土。僅かに軽石を含む。
- VIIIb層：にぶい黄褐色土。ローム漸移層。
- IX層：明黄褐色土。ローム層。硬く締まる。浅間板鼻黄色軽石(As-YP、約1.3～1.4万年前)を含む。
- X層：明黄褐色土。ローム層。As-Srを含む。
- XI層：浅間白糸降下軽石(As-Sr、約1.8万年前)。
- XII層：黄白色シルト質土。
- XIII層：褐色～黄褐色ローム。粘性あり。
- XIV層：オリーブ色砂質土。礫混じり。
- XVa層：黄白色砂質土。板鼻褐色軽石(As-BP、約2.0～2.4万年前)ブロック含む。
- XVb層：黄白色砂質土。XVa層よりBP少なくやや粘質。
- XVI層：前橋泥流層。



第7図 基本土層柱状図

第3章

4面・5面の調査



I区-4号住居 調査風景 (吹屋伊勢森遺跡で調査された中で最大の住居。)

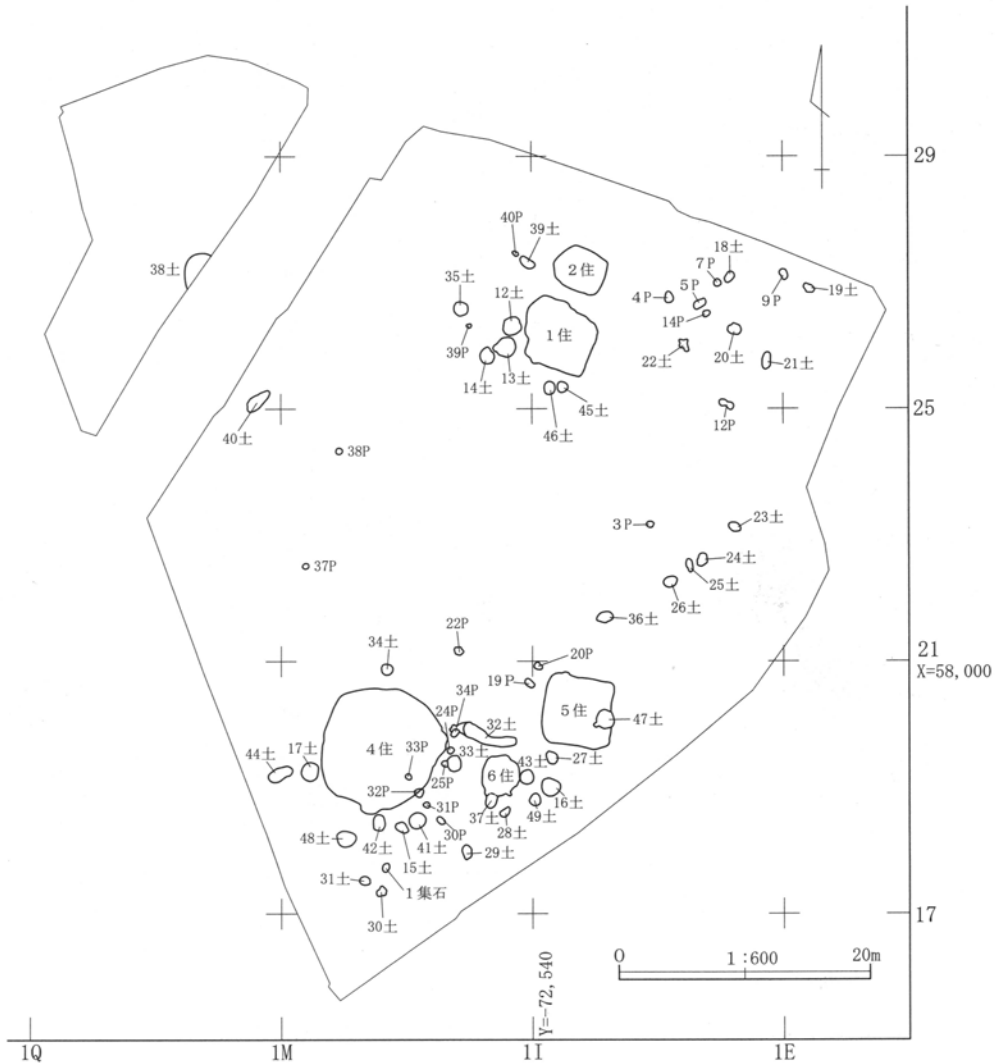
第1節 調査の概要

吹屋伊勢森遺跡では、基本土層V層の下面を4面、基本土層IX層の上面(ローム上面)を5面として調査を行った。いずれも縄文時代の遺構・遺物が調査対象である。4面の調査は調査区全域で行い、5面は4面で捉えきれなかった遺構を確認するために、遺構密度の高いI区は全域で、それ以外は一辺4mのトレンチを市松模様に組んで調査を行った。旧石器トレンチは、この縄文のトレンチの内側に2m四方のトレンチを設定し、基本土層VII層(前橋泥流層)上まで調査を行ったが遺物は検出できなかった。

縄文時代の遺構はI区で集中的に検出され、段丘面の先端部に集落が作られていた。竪穴住居は5棟

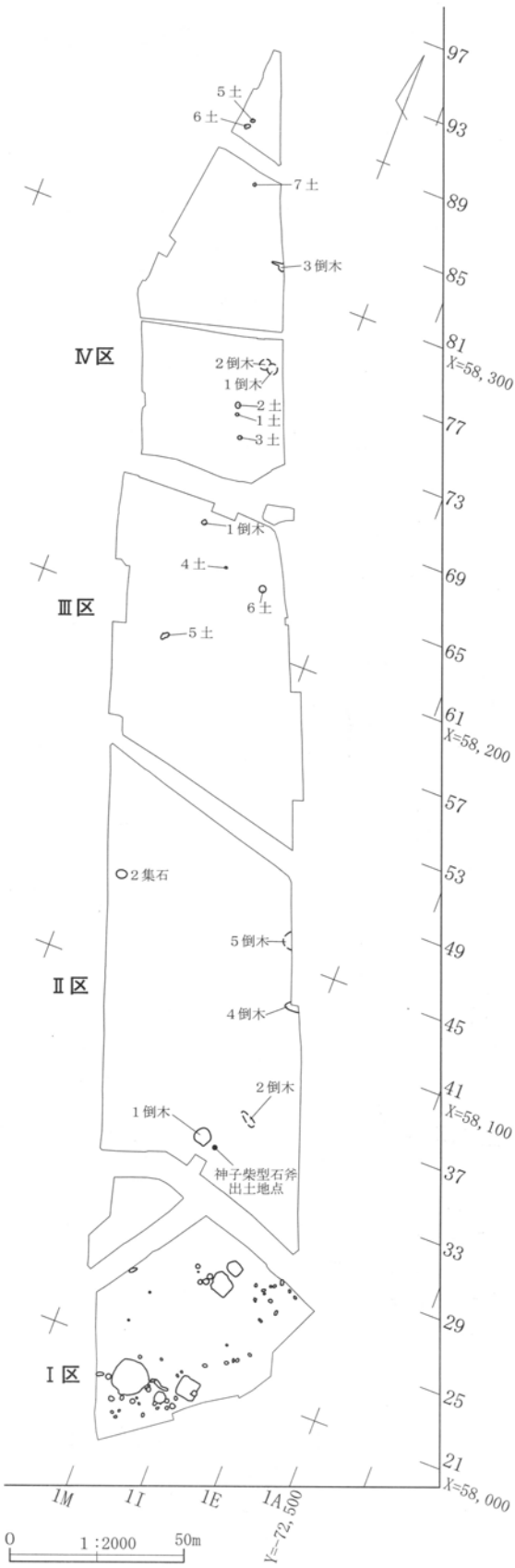
確認され、段丘面のやや内側に1号住居と2号住居の2棟が隣接して位置し、残りの3棟は段丘の先端近くにまとまって位置する。1号・2号・5号住居は方形の住居で、4号・6号住居は円形の住居である。このうち4号住居が最も大きく、長軸は9.6mに及ぶ。5号住居からは黒曜石の原石や石核が8点まとまって出土している。黒曜石製の石鏃や石錐、加工時に出る細片の出土もあり、黒曜石の流通や消費を考える上で重要な資料である。5棟の住居はどれも諸磯b式新段階の時期と考えられる。

包含層の調査では、II区で神子柴型石斧が検出された。

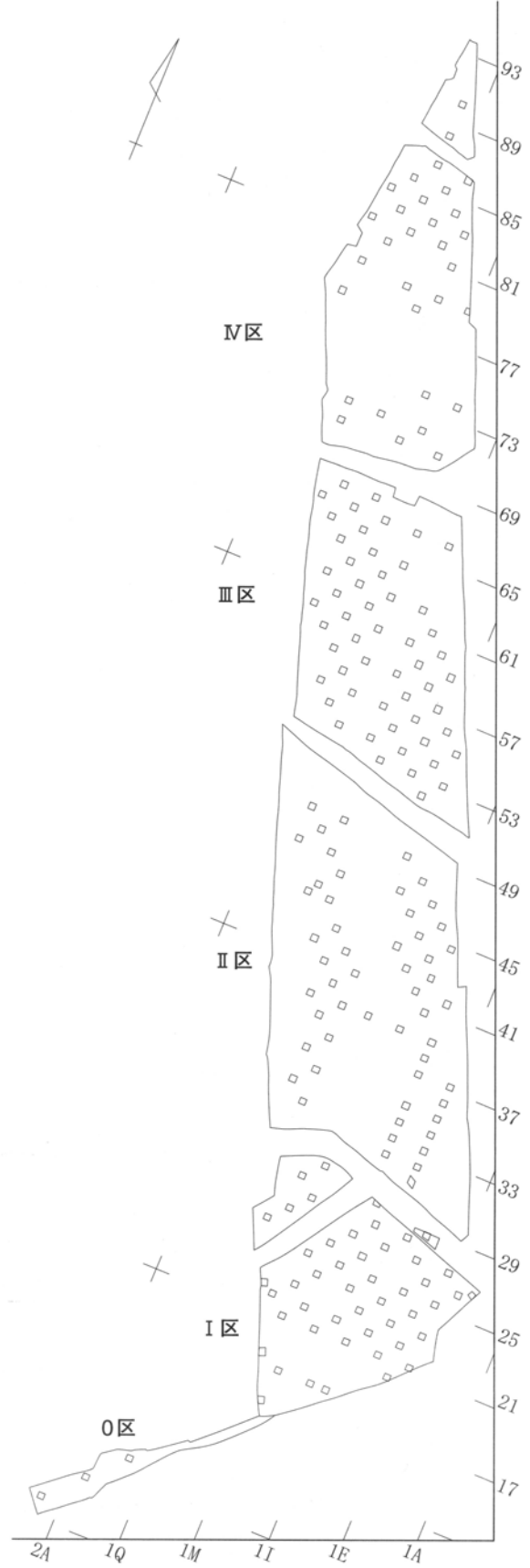


第8図 I区4面 遺構配置図

第1節 調査の概要



第9図 I～IV区4面 遺構配置図



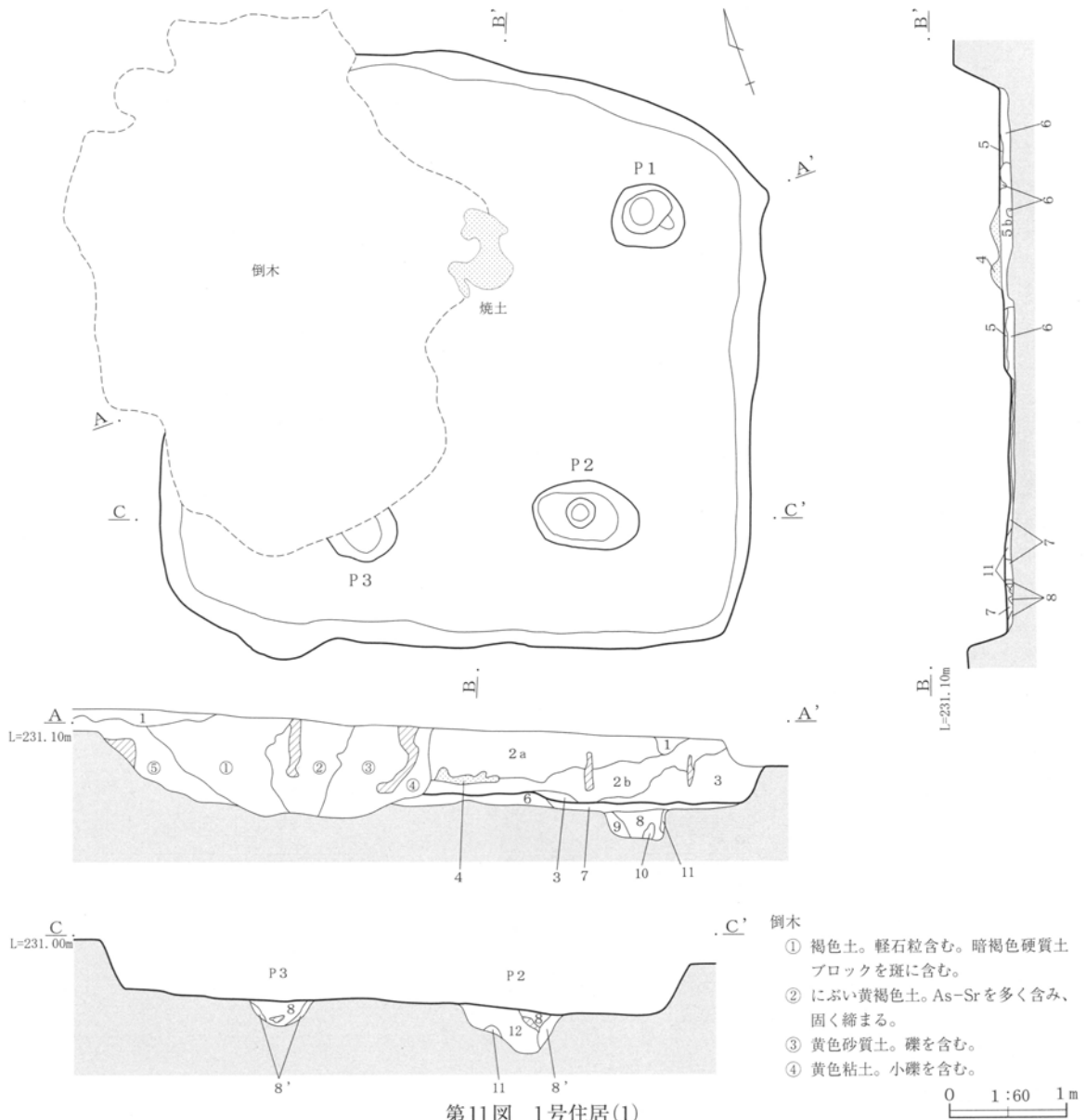
第10図 旧石器トレンチ配置図

第2節 住居

I区-1号住居 位置 1H-26 形状・規模 正方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ5.1×4.9×0.55mである。住居中央より北西側が倒木で壊されている。面積 23.6㎡。方位 N-25°-E。埋没土 褐色土～にぶい黄褐色土が主体。全体的に締まっている。自然埋没土と考えられる。柱穴 ピットを3箇所で確認した。それらの配置から4本柱であったと考えられ、残りの1本は倒木により壊されている。炉 住居中央部の北寄りで検出。0.7×0.5m

の範囲に焼土が分布するが、倒木により持ち上げられ、原位置を保っていない。埋設土器 なし。

- 1 暗褐色土。締まり弱い。
- 2a 褐色土。黄色軽石を含む。
- 2b 褐色土。2a層ににぶい黄褐色ブロック(径3cm)を斑に含む。やや硬質。
- 3 にぶい黄褐色土。軽石を多く含み、締まり強い。
- 4 明赤褐色土。ロームが弱く焼土化。
- 5 にぶい黄褐色土。
- 5b にぶい黄褐色土。硬質ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土。As-Srをブロック状に含む。やや粘性あり。
- 7 にぶい黄褐色土。3層に似る。締まりあり。
- 8 褐色土。As-Srを多く含む。灰白色粘質土小塊含む。
- 8' 黄褐色土。軽石粒含む。
- 9 灰白色土。灰白色シルトにAs-Srブロック含む。
- 10 黄褐色土。As-Srブロック含む。
- 11 As-Srブロック。
- 12 にぶい黄褐色土。軽石を含み、粘性あり。

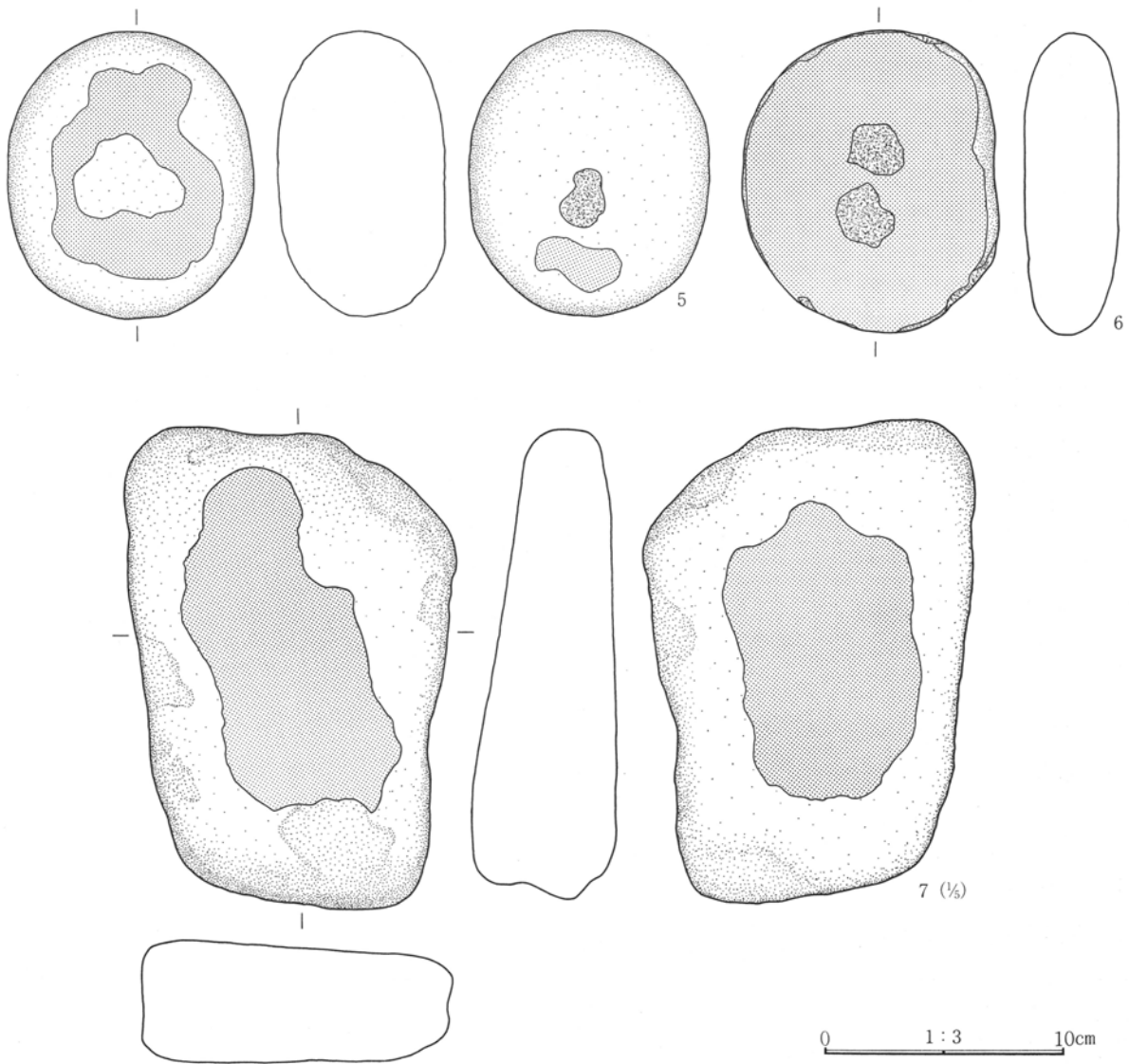




第12図 1号住居(2) 遺物出土状況及び掘方



第13図 1号住居 出土遺物(1)



第14図 1号住居 出土遺物(2)

遺物 埋没土上層で深鉢(1)がまとまって出土。遺物の殆どが諸磯b式土器であるが、大木式土器の破片が僅かに共伴する。また、隣接する2号住居の埋設土器(1)の胴部破片が埋没土中位で出土している。
重複 なし。 **所見** 倒木と重複すること、埋没土と地山が類似していることなどから、床面の判定が困難であった。縄文前期後半。

第3章 4面・5面の調査

1号住居 土器

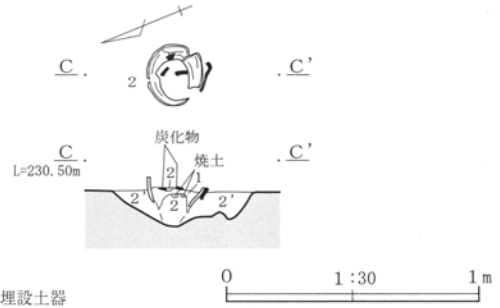
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	床上 40～48cm	口縁部～ 胴部	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口径(29.2)cm。口縁部は外反し波状。地文は単節LR斜行縄文。 半截竹管(巾3mm)で横位沈線及び胴部に弧線で文様帯施文。	諸磯b(新) 式
2	深鉢	床上 14～50cm	口縁部 破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、中礫少	口唇部に刻みを施す。平縁。径9mmの円孔を有する。単節LRの 斜行縄文。	諸磯b(新) 式
3	深鉢	床上 34cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多、中礫少	波状口縁か。単節LRの斜行縄文。	諸磯b(新) 式
4	深鉢	床上 34cm	口縁部 破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。ゆるい波状を呈する。半截竹管を 用いた集合沈線を横位、縦位、弧線状に施文。	諸磯b(新) 式
5	深鉢	床上 48cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。ゆるい波状を呈する。半截竹管を 用いた集合沈線を横位及び弧線状に施文。	諸磯b(新) 式
6	深鉢	床上 28cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	「く」の字状に屈曲する口縁の一部。半截竹管を用いた集合沈線を 施文。	諸磯b(新) 式
7	深鉢	床上 13cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	靴先状口縁の一部。櫛歯状工具で沈線施文。	諸磯b(新) 式
8	深鉢	床上 6cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	靴先状口縁の一部。地文に単節LRの斜行縄文。半截竹管(巾3mm) で渦巻状の文様。渦巻文上部に貼付文の剥落痕跡あり。	諸磯b(新) 式
9	深鉢	床上 22cm	口縁部 破片	①普通 ②灰黄褐色 ③粗砂粒多	「く」の字状に屈曲する口縁の一部。半截竹管による集合沈線を横 位、斜位に施す。	諸磯b(新) 式
10	深鉢	床上 38cm	胴部破片	①良好 ②黄褐色 ③粗砂粒多	半截竹管の集合沈線を横位及び弧線状に施文。	諸磯b(新) 式
11	深鉢	床上 30cm	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	半截竹管の集合沈線を横位に施文。	諸磯b(新) 式
12	深鉢	床上 6～24cm	胴部下位 ～底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	底径(9.5)cm。半截竹管(巾5mm)の集合沈線を横位及び斜位に施 文。	諸磯b(新) 式
13	深鉢	床上 14～34cm	底部	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多、赤色粒有	底径(11.0)cm。地文に単節LRの斜行縄文。半截竹管により数 本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
14	深鉢	床上 38～48cm	底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	底径(9.6)cm。地文に単節LRの斜行縄文。半截竹管(巾4mm) により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
15	深鉢	床上 8～52cm	胴部下位 ～底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	底径(6.0)cm。半截竹管(巾2.5mm)により数本単位で横位に間隔 を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
16	深鉢	床上 48cm	底部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多	半截竹管による平行沈線を数本単位で横位に施文。	諸磯b(新) 式
17	深鉢	覆土	胴部破片	①良好 ②橙色 ③粗砂粒多	地文に単節RL・LRの羽状縄文。細い粘土紐を鋸歯状に貼付。	大木式

1号住居 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	石匙	床上 15cm	完形	長 2.9 幅 5.7 厚 0.7 重 6.0	横型の石匙。剥片を素材とし、表裏周辺に調整加え整形。右側が 長く突出する。	黒色安山岩
2	スクレイパー	床上 16cm	2/3	長 3.9 幅 6.6 厚 1.0 重 21.1	横長の剥片素材。素材の打面側両面に平坦な剥離加え刃部を作出。 端部両面にも調整加えている。左側欠損。	黒色頁岩
3	スクレイパー	床上 4cm	1/2	長 4.7 幅 5.3 厚 0.9 重 19.8	背面に自然面もつやや横長の剥片を素材とし。端部腹面に調整加 え刃部作出。右半欠損。	黒色頁岩
4	打製石斧	床上 14cm	完形	長 9.4 幅 5.0 厚 1.6 重 77.3	先端がわずかに開く撥形。表面に自然面持つ横長剥片素材とし、 表裏周辺に調整加える。刃部の摩耗はほとんど見られない。	黒色頁岩
5	磨石	床上 10cm	完形	長 11.9 幅 10.3 厚 7.0 重 1282.1	盤状の円礫素材。表裏に磨り面。表面は中央部の摩耗が弱く、周 辺部が強い。裏面中央に敲打痕。	溶結凝灰岩
6	磨石	床上 10cm	完形	長 12.5 幅 10.6 厚 3.9 重 879.2	薄い盤状の円礫素材。表面に広い磨り面。上端と下端に敲打痕。 表面にも弱い敲打痕あり。	粗粒輝石 安山岩
7	台石	床上 26cm	完形	長 32.6 幅 22.9 厚 9.9 重 12.7kg	薄い平坦な円礫を素材とする。表裏の中央に平坦な磨り面。表側 がより強い。	粗粒輝石 安山岩

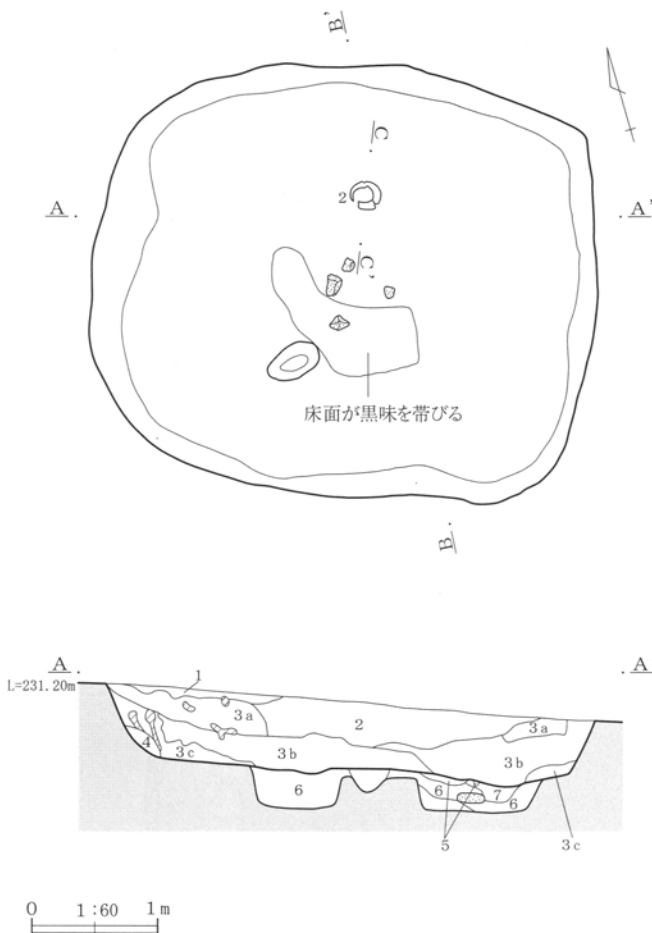
I区-2号住居 位置 1H-27 形状・規模 隅丸方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.9×3.4×0.53mである。面積 11.9㎡。方位 N-22°-E。埋没土 住居中央部のレンズ状の範囲に黒褐色土が堆積し、固く締まっている。その下位は褐色土が堆積し、いずれも自然埋没土と考えられる。柱穴 なし。炉 検出できなかった。埋設土器 住居中央やや北寄りで深鉢(2)を検出。胴部のみで残存高は10cm程度である。しかしこれに接合する土器片が覆土中および、1号住居覆土中から出土した。埋設土器の内側には、少量ではあるが焼土や炭化物粒が見られる。遺物 床下土坑から出土した深鉢(1)は主に口縁部～胴部上半を2号住居で、胴部～底部を12号土坑で検出した。深鉢(11)も12号土坑出土の破片と接合した。またこの住居では黒曜石の原石や細片が合計106g出土した。重複なし。所見 縄文前期後半。

部～底部を12号土坑で検出した。深鉢(11)も12号土坑出土の破片と接合した。またこの住居では黒曜石の原石や細片が合計106g出土した。重複なし。所見 縄文前期後半。



2号住居 埋設土器

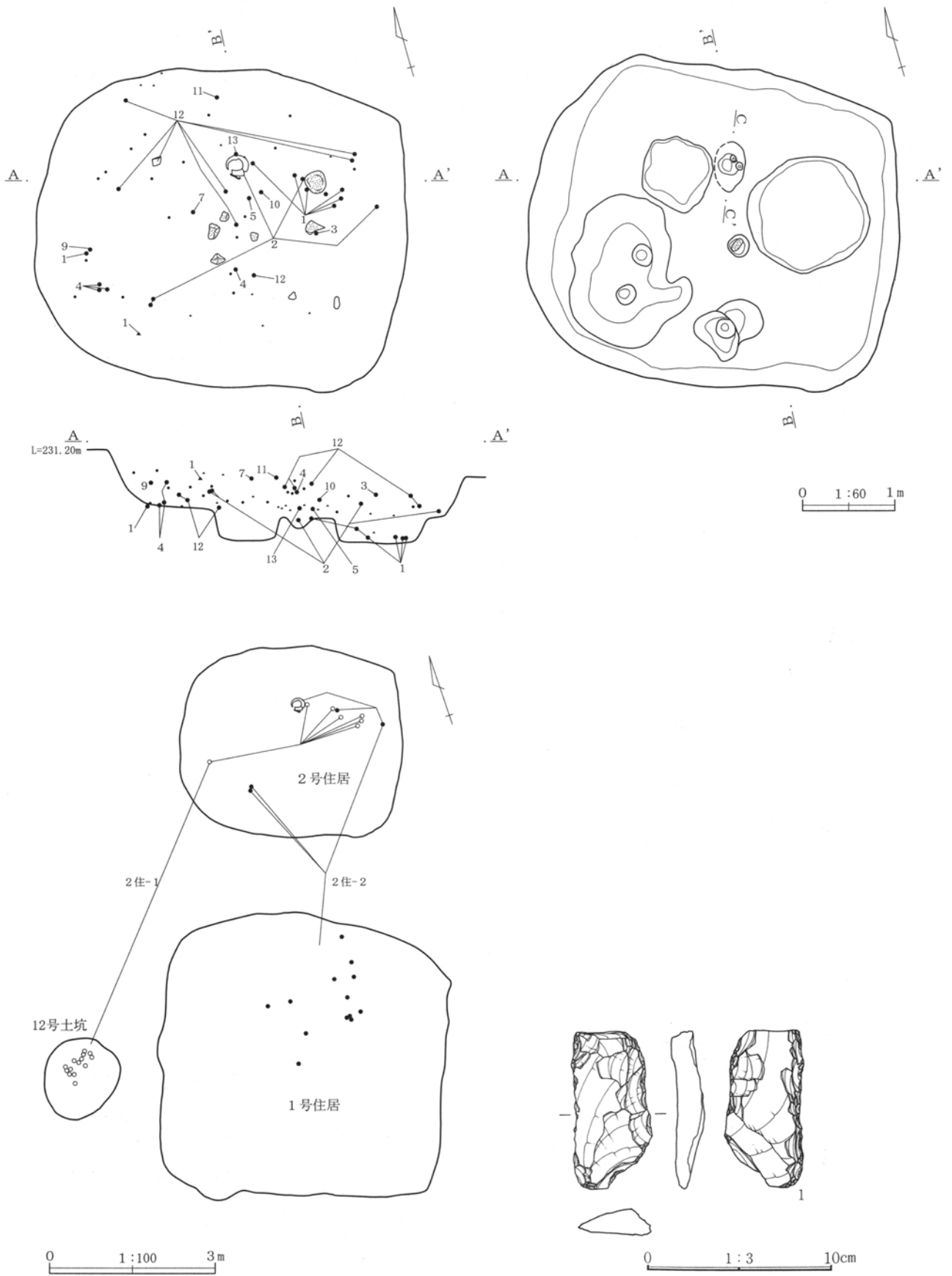
- 1 暗褐色土。
- 2 にぶい黄褐色土。1層と地山の淡黄色シルトの混土。やや粘性あり。
- 2' 2層よりも淡黄色シルト少なく、粘性も少ない。



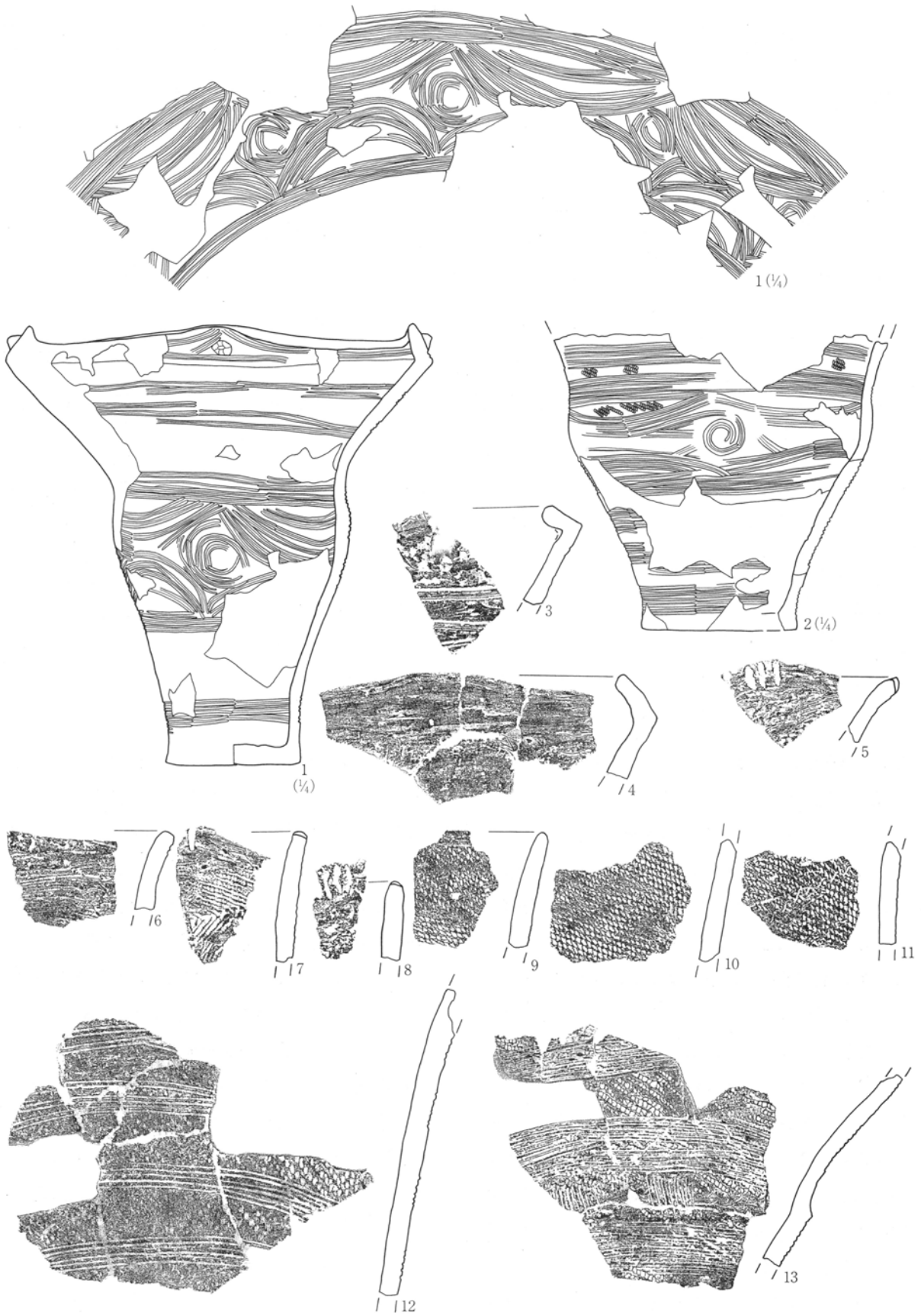
- 1 暗褐色土。締まり弱い。
- 2 黒褐色土。締まり強く硬質。
- 3a 褐色土。黄色軽石含み、にぶい黄褐色土小ブロック僅かに含む。
- 3b 褐色土。3a層よりにぶい黄褐色土ブロック多く含む。
- 3c 褐色土。ロームを多く含む黄色味強い。
- 4 にぶい黄褐色土。壁崩落土。
- 5 黒色土。粘性あり。黄色土、褐色土が層状に混じる。貼床。
- 6 褐色土。3c層と似る。
- 7 にぶい黄褐色土。ロームブロック混土。
- 8 黄褐色土。軽石はほとんど含まない。

第15図 2号住居

第3章 4面・5面の調査



第16図 2号住居遺物出土状況・掘方及び出土遺物



第17図 2号住居 出土遺物

第3章 4面・5面の調査

2号住居 土器

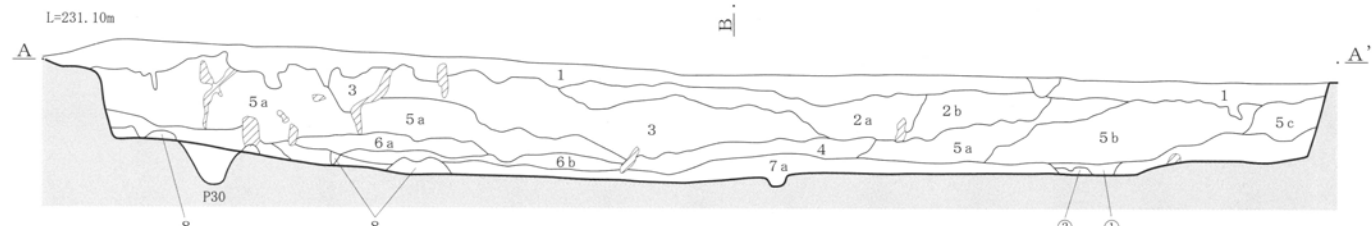
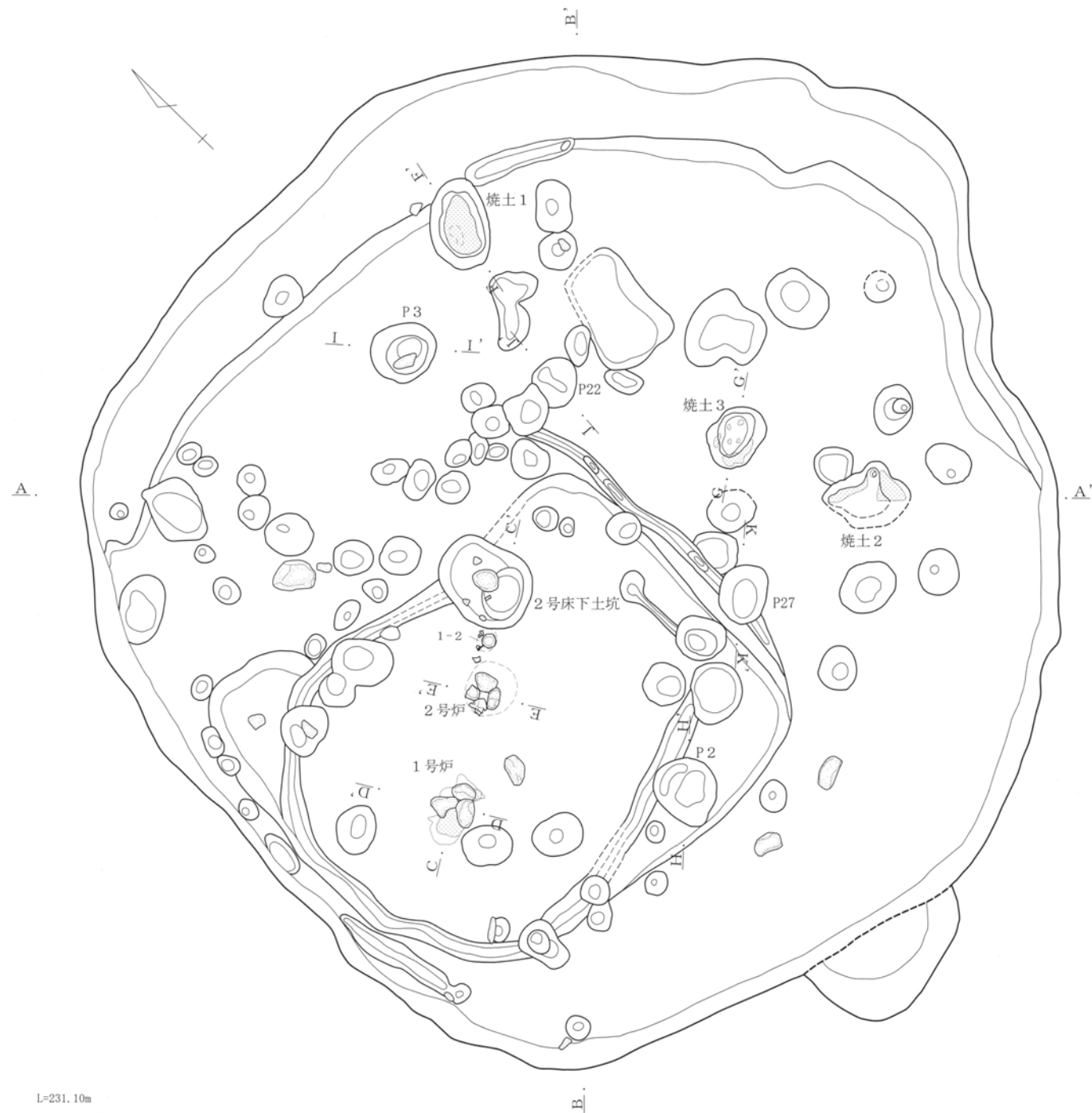
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	床下土坑	口縁部～ 底部3/4	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多、細礫少	口径(26.6)、底径9.3、器高30.3cm。口縁「く」の字、貼付文有り。半載竹管で施文。胴部に弧線と渦巻で4単位の文様を施す。	諸磯b(新)式
2	深鉢	床上 10～18cm	胴部～ 底部3/4	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫少	底径(10.8)cm。胴部に膨らみを持つ。器面磨滅激しい。地文単節RL?斜行縄文。半載竹管で横位沈線、弧線、渦巻を施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	床下土坑	口縁部 破片	①普通 ②褐灰色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。半載竹管による平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
4	深鉢	床直～ 床上40cm	口縁部 破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部「く」の字状に屈曲する。ゆるい波状口縁。無文。	諸磯b(新)式
5	深鉢	床上 2cm	口縁部 破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	口縁部外反。口唇部に刻みを持つ。器面は磨滅している。	諸磯b(新)式
6	深鉢	覆土	口縁部 破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	波状口縁。半載竹管による集合沈線を横位に施文。	諸磯b(新)式
7	深鉢	床上 34cm	口縁部 破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒少、細礫少	波状口縁。口唇部に刻みを持つ。単節RLとLRの結束縄文。	諸磯b(新)式
8	深鉢	覆土	口縁部 破片	①普通 ②橙色 ③粗砂粒多	口唇部に刻みを持つ。器面は磨滅している。	諸磯b(新)式
9	深鉢	床上 25cm	口縁部 破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	口縁部僅かに外反。単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
10	深鉢	床下土坑	胴部破片	①良好 ②黒褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
11	深鉢	床上 35cm	胴部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。結節部の施文あり。	諸磯b(新)式
12	深鉢	床上 2～30cm	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細・中礫少	胴部やや外反する。地文に単節RLの斜行縄文。半載竹管(巾3.5mm)により3本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
13	深鉢	床上 36cm	胴部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒少、細礫少	胴部に屈曲とくびれを持つ。地文は単節RLの斜行縄文。半載竹管(巾3mm)により数本単位で横位、くびれ部は縦位に施文。	諸磯b(新)式

2号住居 石器

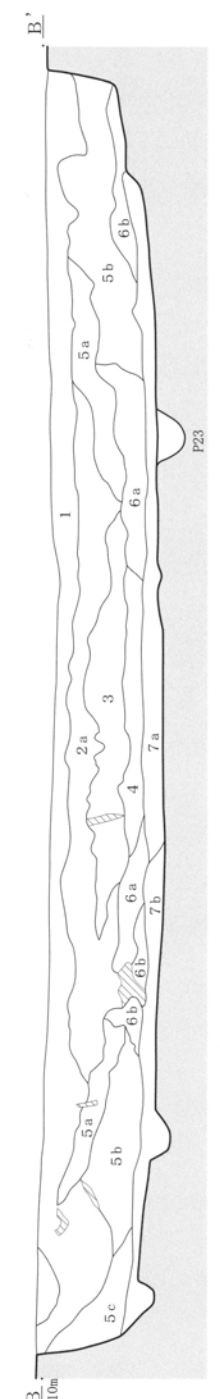
番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	打製石斧	床上 32cm	完形	長 8.4 幅 4.2 厚 1.5 重 51.8	横長の剥片素材とし、表面右側と裏面両側に調整加える。先端部は素材の形状をそのまま残す。刃部の摩耗はごく弱い。	珪質頁岩

I区-4号住居 位置 1K-19 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ9.6×9.4×0.85mである。住居中央部の5.0×3.7mの範囲がやや深くなり、この範囲を囲むように小さなピットが検出された。南壁には倒木が重複している。面積 72.6㎡。埋没土 住居中央部のレンズ状の範囲に黒褐色土が堆積し、壁際にはにぶい黄褐色土が堆積する。いずれも自然埋没土と考えられる。その下位には粘性のある褐色土～暗褐色土が堆積する。柱穴 住居内にピットは多数検出したが、柱穴として組み合わせを確認できるものはない。炉 中央やや西寄りで2箇所確認。両方の炉とも自然石をコの字状に3石配置する。1号炉はコの字状の石組みの内部から西側にかけて焼土が分布し、特にポイントCから30cm辺りが強く焼けている。2号炉はコの字状の石組みに浅鉢片(44)を加え、四角形の炉を形成する。1号炉に比べ焼土化は弱い。また、この他に

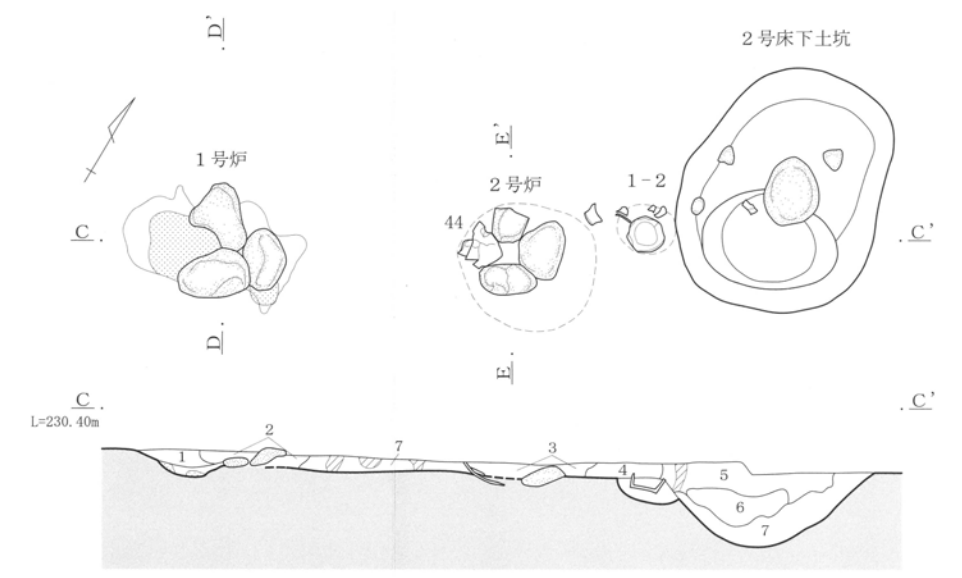
3箇所焼土粒の集中する場所を検出した。埋設土器 2号炉の北東25cmのところを確認。深鉢の底部から胴部にかけて高さ8cmが埋設されていた(1-2)。遺物 深鉢(1-1)と(1-2)は直接接点はないが同一個体と思われる。遺物が大半は諸磯b式であるが、諸磯c式、興津式、十三菩提式の破片も出土。石器も様々な器種が出土しており、黒曜石の細片も多く検出した。重複 33号ピット。33号ピットが新しい。所見 住居中央部がやや深くなり、この範囲を囲むように小さなピットがあることから、古い段階の住居範囲の可能性はある。しかし床面や土層の切り合いは不明瞭で、住居内ピットのセット関係も定かでないことから、拡張や重複と断定できる証拠は得られなかった。縄文前期後半。



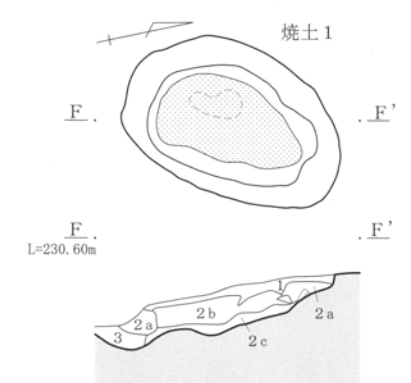
- 1 褐色土。黄色軽石含む。締まり弱い。
- 2a 黒褐色土。黄色軽石含む。にぶい黄褐色土ブロックが斑に入る。
- 2b 2a層よりやや黄色味がかかる。
- 3 黒色土。黄色軽石含む。粘性あり。
- 4 暗褐色土。黄色軽石含む。粘性強い。
- 5a 褐色土。黄色軽石含む。締まりの強い黒褐色土に褐色土円形ブロックが斑に入る。
- 5b 褐色土。円形(径3~5cm)の褐色土、黒褐色土が斑に入る。
- 5c 褐色土。黄色軽石含む。5b層に壁崩落の黄色硬質ロームブロック含む。
- 6a 暗褐色土。黄色軽石含む。黒褐色土、にぶい黄褐色土の混土。粘性あり。
- 6b 暗褐色土。褐色土円形ブロック混土。やや粘性あり。
- 7a 褐色土。軽石多く含む、粘性あり。黒色土を含む。
- 7b 褐色土。軽石多く含む。
- 8 黄褐色土。As-Sr小ブロックを含み、やや砂質。
- ① 黄褐色土。締まり弱い。
- ② 黄色硬質ローム。



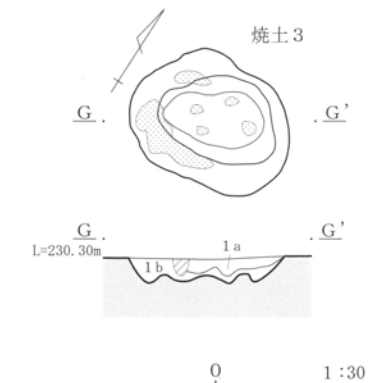
0 1:60 1m



- 1号・2号炉、床下土坑
- 1 にぶい黄褐色土。焼土化している。焼土、炭化物粒含む。
 - 2 褐色土。ロームブロック、焼土ブロック混土。
 - 3 褐色土。炭化物粒、焼土粒含む。
 - 4 褐色土。As-Srを多量に含む、やや固く締まる。貼床?
 - 5 褐色土。炭化物粒、焼土粒僅かに含む、ローム小ブロック含む。
 - 6 にぶい黄褐色土。褐色土とロームブロックの混土。
 - 7 黄色土。淡黄色シルト含む。

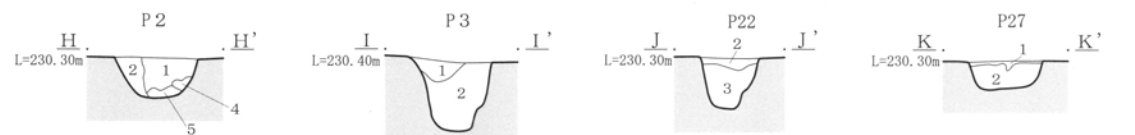


- 1号焼土
- 1 にぶい黄褐色土。僅かに焼土ブロック含む。軽石僅かに含む。
 - 2a 褐色土。やや赤味を帯びる。焼土小ブロック、褐色土ブロック混土。
 - 2b 暗赤褐色土。焼土小ブロックとローム小ブロックの混土。
 - 2c 黄褐色土。やや焼土化する。焼土小ブロック含む。
 - 3 にぶい黄褐色土。As-Srを多く含む。ローム、褐色土混土。



- 3号焼土
- 1a にぶい黄褐色土。焼土小ブロック、灰層僅かに含む。軽石含む。
 - 1b にぶい黄褐色土。軽石含む。締まり弱い。

0 1:30 1m

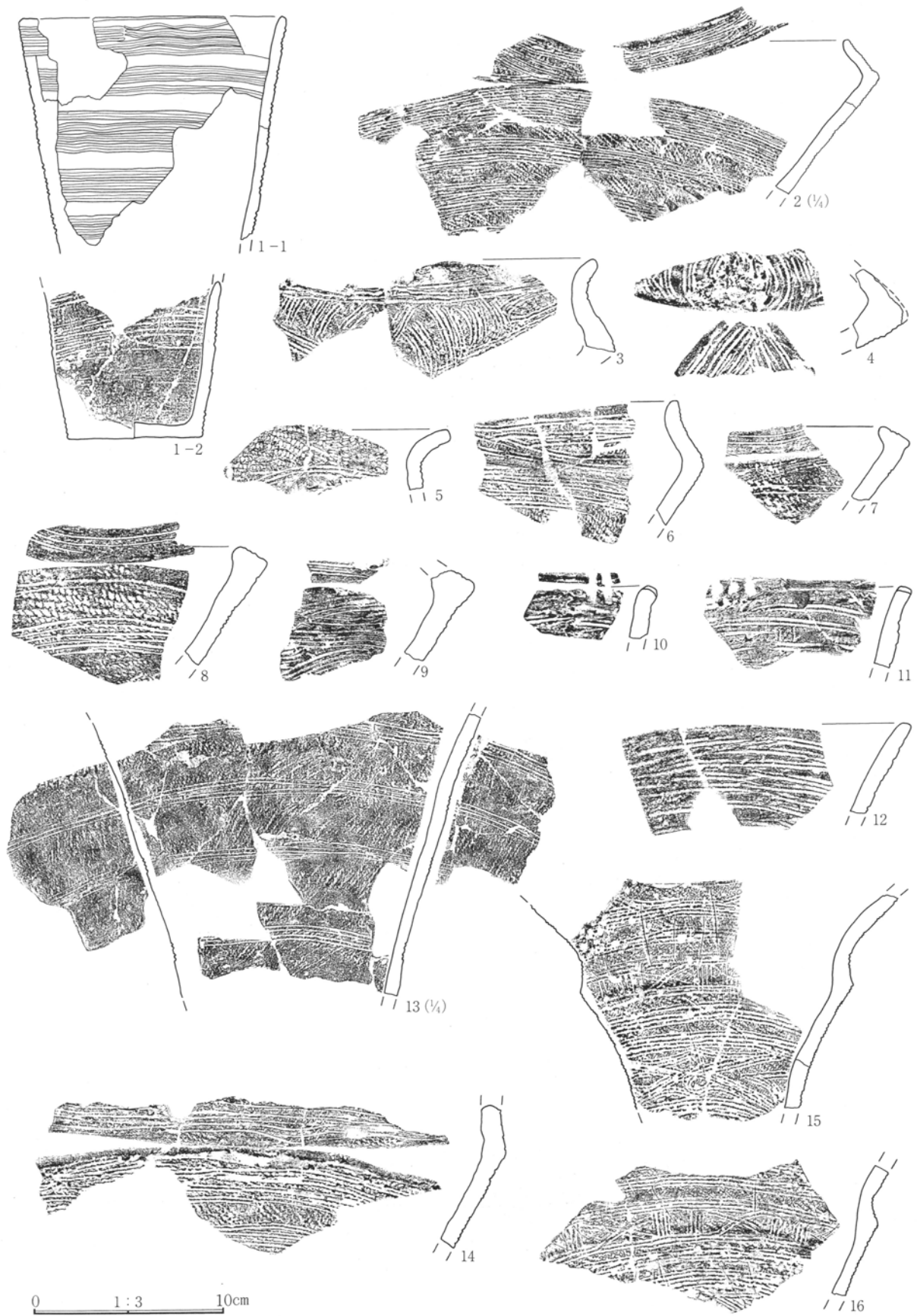


- ピット(共通)
- 1 暗褐色土。As-Srを含む。
 - 2 にぶい黄褐色土。As-Srを含む。
 - 3 褐色土。As-Sr、ローム小ブロックを含む。
 - 4 淡黄色土。シルト質。
 - 5 暗褐色土。軽石は含まない。

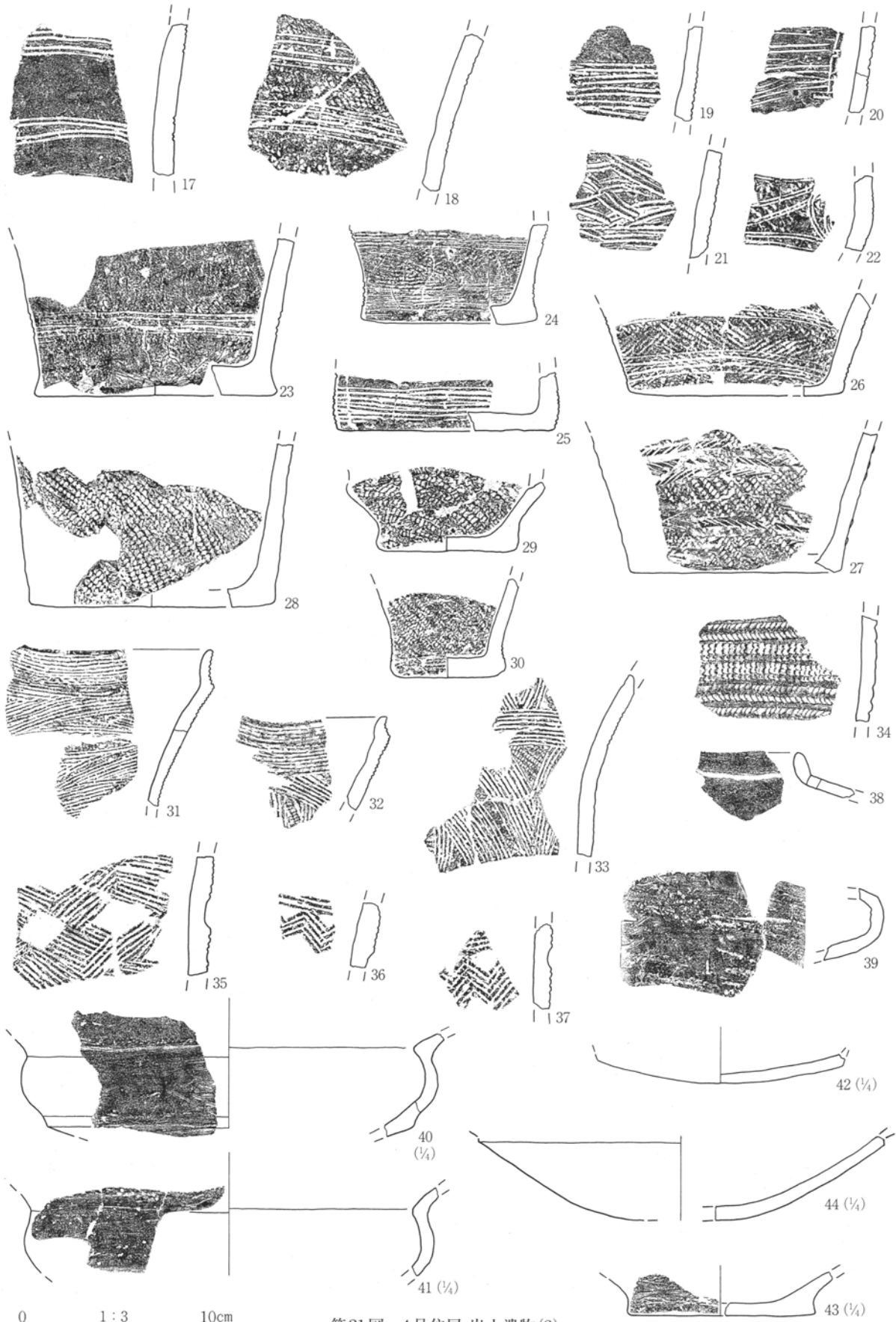
第18図 4号住居(1)



第19图 4号住居(2)



第20図 4号住居 出土遺物(1)

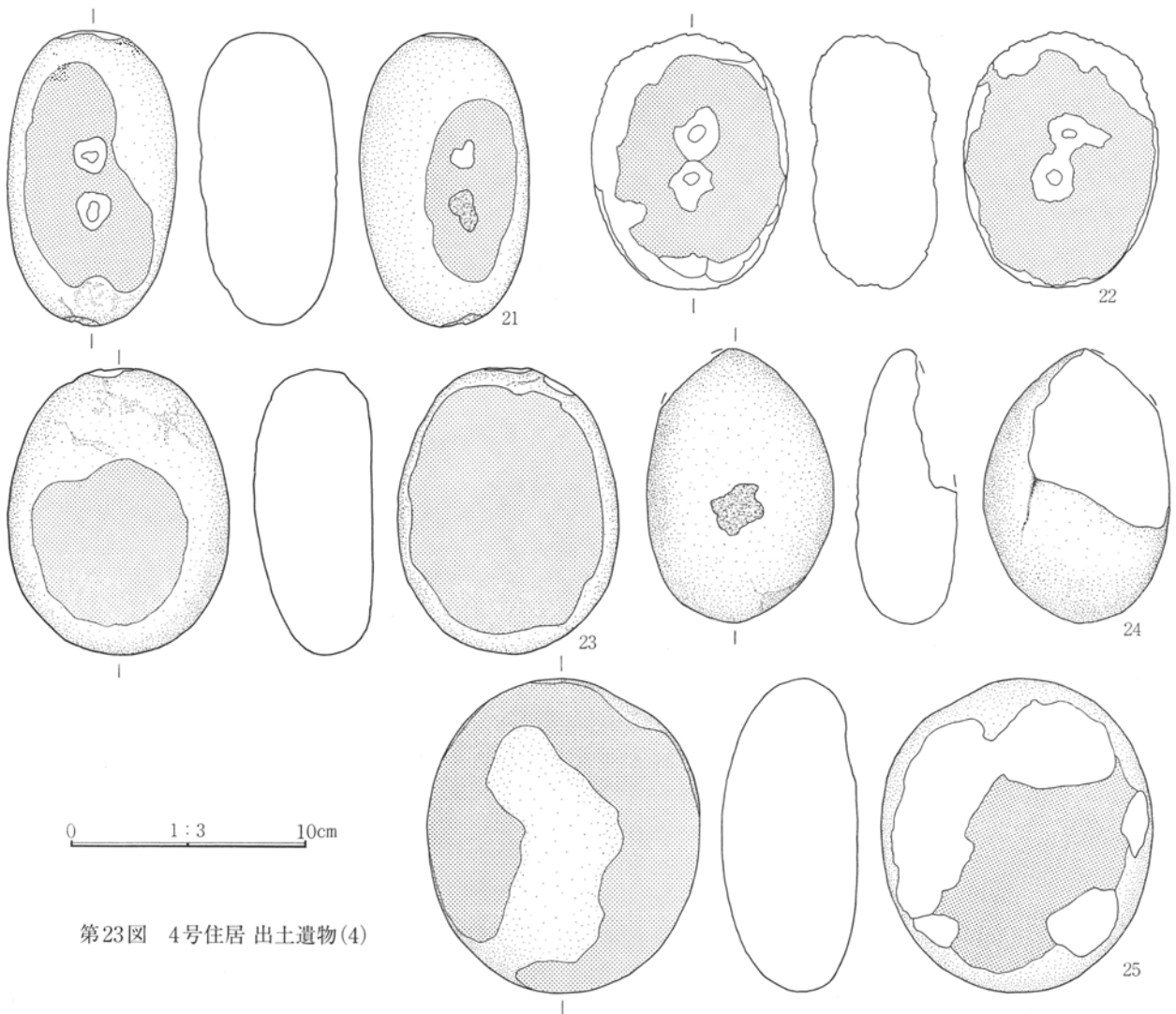


第21图 4号住居 出土遺物(2)

第3章 4面・5面の調査



第22図 4号住居 出土遺物(3)



第23図 4号住居 出土遺物(4)

4号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1-1	深鉢	床上 54cm	口縁部～ 胴部	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	口径14.0cm。口縁部直線的に立ち、平縁。半截竹管(巾3.5mm)により3～4本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
1-2	深鉢	埋設土器	胴部下位 ～底部	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	底径6.8cm。接点はないが1-1と同一個体と考えられる。半截竹管により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。器面磨減。	諸磯b(新) 式
2	深鉢	床上 13～20cm	口縁部 破片	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	口縁「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)の集合沈線を横位に間隔を持って施文。	諸磯b(新) 式
3	深鉢	床上 62cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	靴先状口縁の一部。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で平行沈線、弧線状の文様を施文。	諸磯b(新) 式
4	深鉢	床上 23cm	口縁部 破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	靴先状口縁の一部。半截竹管により平行沈線、弧線を施文。	諸磯b(新) 式
5	深鉢	覆土	口縁部 破片	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)で平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式
6	深鉢	覆土	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂多、細礫やや多	口縁部「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)で集合沈線を横位に施文。	諸磯b(新) 式
7	深鉢	覆土	口縁部 破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)で平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式
8	深鉢	床上 70cm	口縁部 破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新) 式
9	深鉢	床上 32cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。半截竹管(巾3mm)により集合化した平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式
10	深鉢	覆土	口縁部 破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒多	口唇部に刻みを持つ。半截竹管(巾4mm)で横位平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式

第3章 4面・5面の調査

4号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
11	深鉢	覆土	口縁部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	口縁部直線的に立ち、平縁。口唇部に刻みを持つ。半截竹管(巾4mm)で横位平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
12	深鉢	ピット29	口縁部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部やや外反する。平縁。半截竹管(巾4mm)で横位平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
13	深鉢	床上 20~40cm	胴部1/3	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	胴部は口縁部に向けて開く。地文は無節Lの斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新)式
14	深鉢	床上 32~52cm	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	胴部に屈曲を持つ。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管による横位平行沈線を施文。屈曲の上下で異なる竹管を使用。	諸磯b(新)式
15	深鉢	床上 64cm	胴部破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁に向かい外反、胴部に屈曲とくびれ。地文単節RL斜行縄文。半截竹管(巾3mm)で横位に区画、区画内に弧線等で施文。	諸磯b(新)式
16	深鉢	覆土	胴部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	胴部に屈曲とくびれ。地文単節RL斜行縄文。半截竹管(巾3mm)で横位に間隔をあげ施文。区画内に「X」字と縦線で文様。	諸磯b(新)式
17	深鉢	床上 13cm	胴部破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	半截竹管(巾4mm)により2本単位の横位沈線を間隔を持って施文。	諸磯b(新)式
18	深鉢	床上 42~47cm	胴部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。内面剥離痕あり。	諸磯b(新)式
19	深鉢	覆土	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾4mm)で集合化された平行沈線を横位に施文。	諸磯b(新)式
20	深鉢	床上 13cm	胴部破片	①普通 ②暗赤褐色 ③粗砂粒少、繊維含	繊維を含む。半截竹管(巾3.5mm)で平行沈線を横位及び縦位に施文。	黒浜式 繊維
21	深鉢	床上 39cm	胴部破片	①普通 ②褐色 ③粗砂粒 やや多	半截竹管(巾4mm)による横位と斜位の平行沈線で施文。	諸磯b(新)式
22	深鉢	覆土	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)で弧線を施文。	諸磯b(新)式
23	深鉢	床上 12~30cm	底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	底径(12.5)cm。地文は無節Lの斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)で2本単位の横位平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
24	深鉢	床上 33~49cm	底部	①良好 ②明褐色 ③粗砂粒多	底径(9.4)cm。地文は単節LR?の斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
25	深鉢	床上 30cm	底部	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒 やや多	底径(11.5)cm。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に沈線を施文。	諸磯b(新)式
26	深鉢	床上 64cm	底部	①普通 ②明黄褐色 ③粗砂粒多	底径(11.3)cm。地文は単節RL・LRの結束羽状縄文。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
27	深鉢	床上 14~39cm	底部破片	①普通 ②橙色 ③粗砂粒 やや多、細礫少	底径(11.0)cm。地文は単節RLの斜行縄文。巾3~4mmの浮線文が貼付され、刻み目が施される。	諸磯b(新)式
28	深鉢	床上 4cm	底部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
29	深鉢	床上 18~46cm	底部	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
30	深鉢	ピット29	底部	①普通 ②橙色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。最下位に半截竹管(巾3mm)で2本単位の平行沈線を横位に施文。	諸磯b(新)式
31	深鉢	覆土	口縁部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、石英粒多	口縁部僅かに「く」の字状に屈曲し、波状。地文は単節RLの斜行縄文。櫛歯状の施文具で集合沈線を器面全体に施す。	諸磯c式
32	深鉢	床上 57cm	口縁部破片	①良好 ②明黄褐色 ③粗砂粒多	口縁部僅かに「く」の字状に屈曲し、波状。地文は単節RLの斜行縄文。櫛歯状の施文具で集合沈線を器面全体に施す。	諸磯c式
33	深鉢	覆土	胴部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	口縁に向かって外反。地文は単節RLの斜行縄文。櫛歯状の施文具で集合沈線を横位及び斜位に施す。	諸磯c式
34	深鉢	床上 24cm	胴部破片	①普通 ②褐色 ③粗砂粒多	貝殻腹縁状の押しき文及び爪形状の押しき文を施す。	興津式
35	深鉢	床上 30cm	胴部破片	①良好 ②黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	櫛歯状の施文具による集合沈線で菱形を描き、沈線間には菱形の陰刻を施す。	十三菩提式
36	深鉢	床上 21cm	胴部破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒多	櫛歯状の施文具により鋸歯状及び横位の沈線を施文。沈線間に三角形の陰刻を施す。	十三菩提式
37	深鉢	覆土	胴部破片	①良好 ②黄褐色 ③粗砂粒多	櫛歯状の施文具により鋸歯状及び横位の沈線を施文。沈線間に三角形の陰刻を施す。	十三菩提式
38	浅鉢	床上 20cm	口縁部破片	①良好 ②暗灰黄色 ③粗砂粒多、白色粒多	有孔浅鉢。無文。表面を磨く。口唇部直下に径6mmの孔を有する。	諸磯b(新)式
39	浅鉢	覆土	胴部破片	①普通 ②赤褐色 ③粗砂粒多、白色粒多	無文。表面を磨く。	諸磯b(新)式
40	浅鉢	床上 6cm	口縁部~胴部	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多、白色粒多	無文。表面を磨く。	諸磯b(新)式

第2節 住居

4号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
41	浅鉢	床上 14~52cm	口縁部~ 胴部	①普通 ②褐色 ③粗砂粒多、細礫少	無文。表面を磨く。	諸磯b(新) 式
42	浅鉢	覆土	底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	無文。表面をよく磨く。	諸磯b(新) 式
43	深鉢	覆土	底部	①良好 ②明黄褐色 ③ 粗砂粒多、細礫やや多	底径(13.2)cm。無文。表面を磨く。内面に剥離痕あり。	諸磯b(新) 式
44	浅鉢	2号炉	底部破片	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、白色粒多	無文。表面を磨く。内外面に剥離痕あり。	諸磯b(新) 式

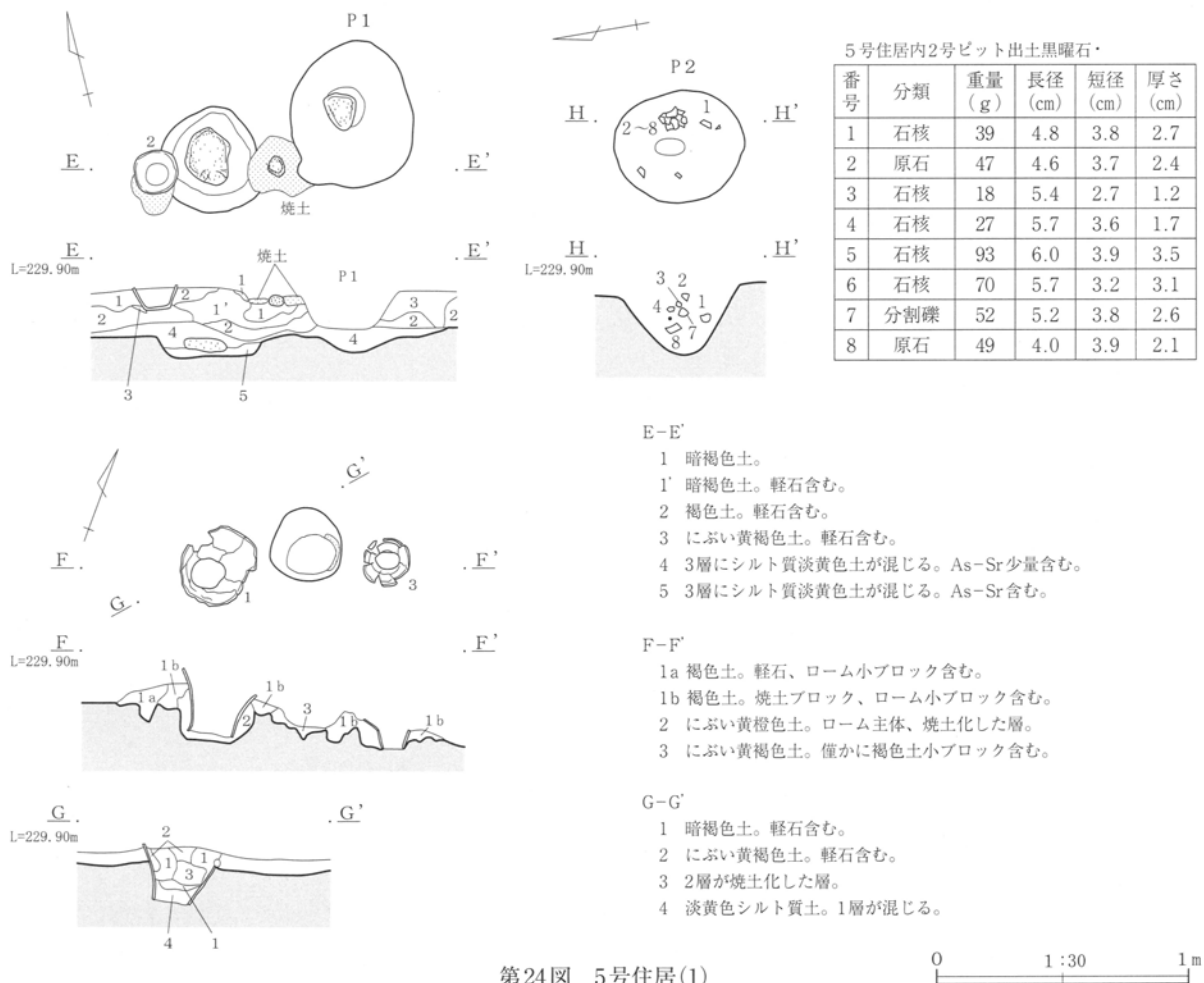
4号住居 石器

番号	器種	出土位置	残存	量法(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	覆土	完形	長 1.9 幅 1.6 厚 0.2 重 0.4	凹基無茎鏃。薄手の剥片の周辺両面に平坦な調整加え整形。表裏に素材剥片の面を残す。	黒色頁岩
2	石鏃	床上 12cm	一部 欠損	長 2.2 幅 1.6 厚 0.3 重 0.6	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。左脚欠損。	黒曜石
3	石鏃	床上 47cm	一部 欠損	長 2.4 幅 1.6 厚 0.3 重 0.5	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。脚が長く、全長の半分近くに達する。右脚部先端を僅かに欠損。	黒曜石
4	石鏃	覆土	完形	長 2.0 幅 1.4 厚 0.4 重 0.7	凹基無茎鏃。表裏のほぼ全面に調整。裏面左側には押圧剥離痕認められる。調整段階で左脚が短くなり、放棄されたものか。	黒曜石
5	石鏃	床上 66cm	完形	長 1.7 幅 1.6 厚 0.3 重 0.7	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。先端がすぼまり小さな突起状を呈する。	黒曜石
6	石鏃	床上 12cm	一部 欠損	長 2.2 幅 1.7 厚 0.5 重 1.2	凹基無茎鏃。表裏ほぼ全面に調整加え整形。調整やや粗く、測辺はしっかりした直線状にならない。先端欠損。	黒曜石
7	石鏃	床上 28cm	一部 欠損	長 2.7 幅 1.7 厚 0.5 重 1.1	凹基無茎鏃。表裏全面に調整加え整形。調整はやや粗く、測辺はきれいな直線状にならない。左脚部欠損。	黒曜石
8	石鏃	床上 10cm	一部 欠損	長 2.4 幅 1.8 厚 0.5 重 1.4	凹基無茎鏃。表裏全面に調整加え整形。調整はやや粗い。先端と右脚部欠損。	黒曜石
9	石鏃	床上 32cm	一部 欠損	長 2.8 幅 1.4 厚 0.4 重 1.0	凹基無茎鏃。表裏に押圧剥離による細かな調整加える。腹面に一部素材剥片面残す。細身。左脚部欠損。	チャート
10	石鏃	床上 24cm	ほぼ 完形	長 3.5 幅 1.4 厚 0.4 重 1.6	基部に2個の突起を持つ。凹基無茎鏃か。押圧による斜行剥離が表裏に見られる。細身。先端僅かに欠損。	黒色頁岩
11	石錐	覆土	完形	長 3.9 幅 1.0 厚 0.8 重 1.9	上端がつまみ状の形態呈するが、細身で厚手の断面形状から石錐と判断した。両測縁の稜線につぶれ見られる。	黒曜石
12	石錐	床上 32cm	完形	長 2.3 幅 0.9 厚 0.4 重 0.4	小型の剥片素材とし、先端両面の周辺に調整加え刃部作出。上端は未加工のまま残し、つまみ状を呈する。	黒曜石
13	石錐	床上 16cm	完形	長 5.9 幅 2.8 厚 0.6 重 4.7	剥片端部の両面に調整加え細く長い刃部作出。上部は未加工のまま残す。	黒色頁岩
14	石匙	床上 15cm	一部 欠損	長 3.6 幅 3.3 厚 0.8 重 6.5	横型の石匙。表裏両面の全面に調整加え整形。両側の先端部を欠損。	チャート
15	石匙	床上 12cm	完形	長 4.5 幅 7.1 厚 0.9 重 24.5	横型の石匙。表裏の周辺に調整加え整形。調整はやや粗い。	黒色頁岩
16	石匙	覆土	1/2	長 7.8 幅 4.5 厚 0.7 重 21.0	表面に自然面を持つ横長の剥片を素材とし、周辺表裏に調整加え整形。調整はやや粗い。下半欠損。	黒色頁岩
17	打製石斧	床上 43cm	完形	長 10.7 幅 4.5 厚 1.5 重 83.0	短冊形。横長剥片素材とし、両面周辺に調整加える。刃部に弱い摩耗見られる。	黒色頁岩
18	打製石斧	床上 16cm	基部 欠損	長 9.9 幅 6.8 厚 1.7 重 127.3	先端が僅かに広がった撥形か。剥片素材とし両面周辺に調整加える。刃部に摩耗見られない。基部欠損。	黒色頁岩
19	スクレイパー	ピット16	完形	長 4.2 幅 7.2 厚 0.8 重 20.5	横長の剥片を素材とし、端部の両面に調整加え刃部作出。	黒色頁岩
20	凹石	ピット19	一部 欠損	長 11.7 幅 7.9 厚 5.3 重 739.0	盤状の円礫。表面に凹み、表裏に磨り面。両側を敲打と研磨により面取り。表裏中央と下端に敲打痕。上位に被熱の痕跡あり。	かこう岩
21	凹石	ピット19	完形	長 12.3 幅 7.1 厚 5.3 重 800.2	厚みのある盤状の円礫素材。表面に凹み2個、表裏に磨り面。表面の磨り面はより発達し平滑。裏面と上下両端に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩
22	凹石	床上 8cm	一部 欠損	長 10.8 幅 8.3 厚 5.2 重 733.7	盤状の円礫素材。表裏に凹み各2個、凹みの周囲に磨り面。両側は敲打により面取り。被熱により表面の剥落激しい。	石英閃緑岩
23	敲石	床上 14cm	完形	長 12.0 幅 9.3 厚 5.0 重 855.6	盤状の円礫素材。表裏に弱い磨り面。上端に敲打痕有り。	石英閃緑岩
24	敲石	床上 17cm	一部 欠損	長 11.5 幅 7.9 厚 4.2 重 474.8	盤状の円礫素材。表面に敲打痕有り。裏面一部欠損。	溶結凝灰岩
25	磨石	床上 28cm	一部 欠損	長 13.2 幅 11.5 厚 5.7 重 1323.1	円盤状の円礫素材。表裏に磨り面。表面は周縁に沿って発達。裏面一部剥落。	粗粒輝石 安山岩

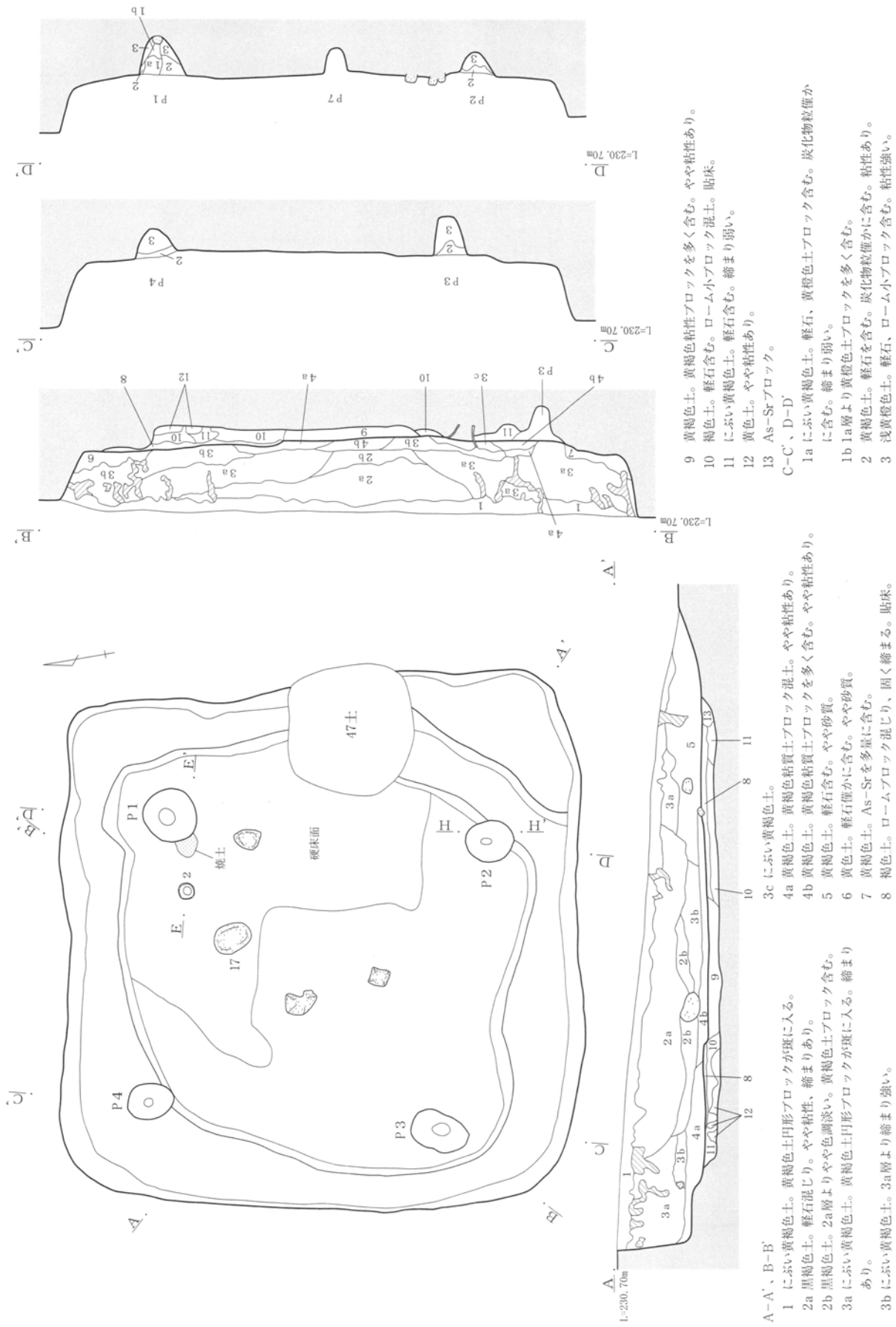
第3章 4面・5面の調査

I区-5号住居 位置 1H-20 形状・規模 正方形。住居を拡張しており、拡張前の古段階の住居は、長軸・短軸・深さが、それぞれ4.4×4.1×0.9mである。拡張後の新段階の住居は、長軸・短軸・深さが、それぞれ5.6×5.5×0.8mである。拡張前の住居の方が約10cm深く掘り下げている。面積 拡張前17.2㎡。拡張後30.0㎡。方位 N-9°-E。埋設土 住居中央部のレンズ状の範囲に黒褐色土が堆積し、その下位にはぶい黄褐色土が堆積する。いずれも自然埋設土と考えられる。拡張前の床面と拡張後の床面の間は、ロームブロックを混入した貼床で固く締まっている。柱穴 拡張前の柱穴は確定できなかった。拡張後は1~4号ピットが柱穴と考えられる。炉 拡張前の炉跡は住居中央やや西よりで検出。二つの埋設土器の中央に壁面が焼土化したピットがある。拡張後の炉跡は住居北東部で確認。埋設土器を伴う。埋設土器 拡張前には炉跡を挟

んで40cmの間隔を置き、2個体の深鉢(1・3)が埋設されていた。いずれも胴部のみである。拡張後には炉跡の30cm西よりに深鉢(2)が埋設され、この周囲にも焼土が確認された。この深鉢は底部を有する。遺物 拡張前の遺物としては埋設土器の他に深鉢底部(7)、石匙(6)などが出土。拡張後の遺物は深鉢、石皿などで、石皿(17)は埋設土器(2)から40cm離れた場所で裏返しの状態で検出した。また2号ピットの東側肩部で黒曜石の原石、石核などがまとまって8点出土し、総重量は395gである。覆土からは黒曜石の石鏃、石錐、楔形石器、および剥片類が出土し、その重量は計192gである。重複 47号土坑。5号住居が古い。所見 拡張前、拡張後の土器はいずれも諸磯b式であり、時期差は認められない。この住居で特筆されるのは、ピットから黒曜石の原石がまとまって出土したことである。縄文前期後半。



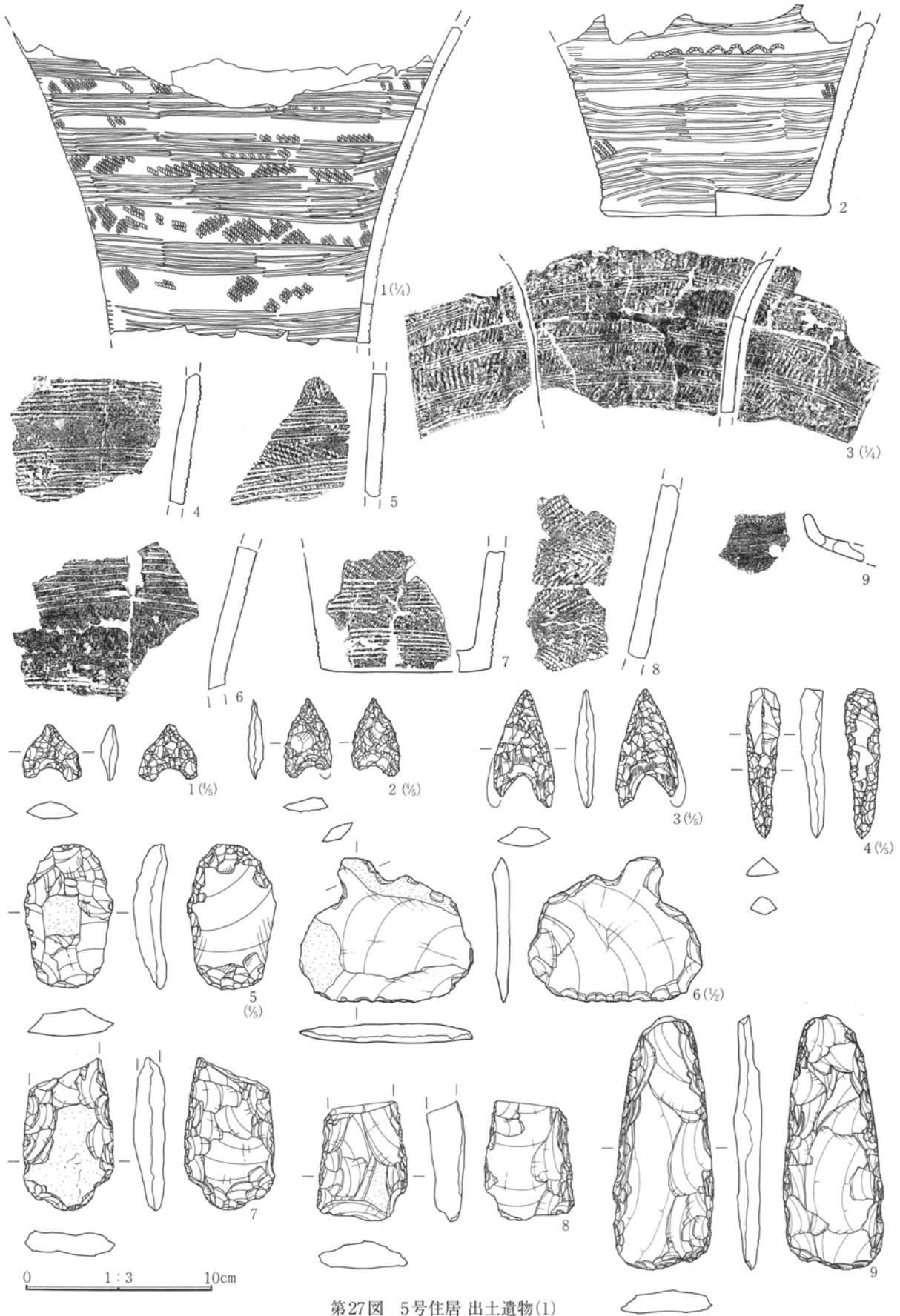
第24図 5号住居(1)



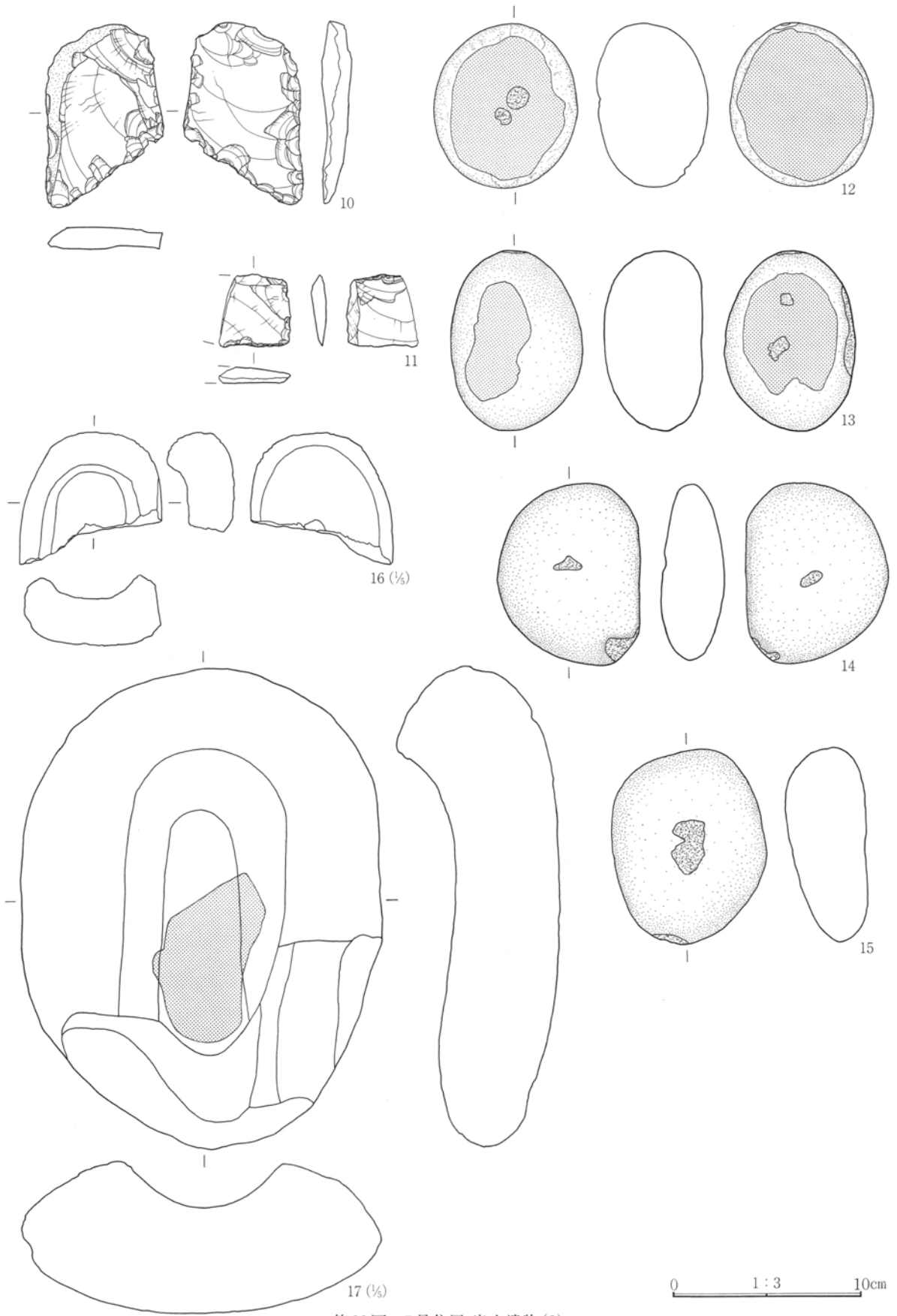
第25図 5号住居(2) 新段階



第26図 5号住居(3) 古段階及び遺物出土状況



第27图 5号住居 出土遺物(1)



第28図 5号住居 出土遺物(2)

第2節 住居

5号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	埋設土器 古段階	胴部	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁に向かって外反。地文は単節RLか無節Rの斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新) 式
2	深鉢	埋設土器	胴部～ 底部	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	底径12.2cm。地文は単節RLの斜行縄文。一部に結節部が施文される。半截竹管(巾4.5mm)により横位に間隔を持ち沈線施文。	諸磯b(新) 式
3	深鉢	埋設土器 古段階	胴部	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、褐色粒多	口縁に向かってやや外反。地文は無節Lの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
4	深鉢	床上 10～18cm	胴部破片	①普通 ②黄褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
5	深鉢	床上 18cm	胴部破片	①良好 ②黄褐色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
6	深鉢	床上 16～25cm	胴部破片	①良好 ②明褐色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
7	深鉢	古段階	底部破片	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新) 式
8	深鉢	床上 16cm	胴部破片	①普通 ②褐色 ③粗砂粒多、細礫少	単節RLとLRの結束羽状縄文を施文。	諸磯b(新) 式
9	浅鉢	古段階	口縁部 破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多	有孔浅鉢。無文。表面を磨く。口唇部直下に径7mmの孔を有する。	諸磯b(新) 式

5号住居 石器

番号	器種	出土位置	残存	量法(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	覆土	完形	長 1.3 幅 1.3 厚 0.4 重 0.3	小型の凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。両側の上位が内湾し、先端が突起状を呈する。	黒曜石
2	石鏃	床上 14cm	一部 欠損	長 1.8 幅 1.1 厚 0.4 重 0.5	小型の凹基無茎鏃。表裏ほぼ全面に調整加え整形。右脚部欠損。	黒曜石
3	石鏃	床上 68cm	一部 欠損	長 2.7 幅 1.5 厚 0.5 重 1.1	凹基無茎鏃。表裏全面に調整加え整形。表裏下半の一部に擦痕有り。右脚部一部欠損。	黒曜石
4	石鏃	覆土	完形	長 3.3 幅 0.8 厚 0.5 重 0.9	縦長の剥片の周辺に調整加え整形。刃部は表裏ほぼ全面に調整加え。刃部の稜線に使用によるつぶれ見られる。	黒曜石
5	楔形石器	床上 8cm	完形	長 3.2 幅 1.9 厚 0.6 重 3.1	背面に自然面持つ縦長の剥片素材とし、上下両端の腹面側に主に調整加える。	黒曜石
6	石匙	古段階 床上 8cm	完形	長 5.2 幅 6.3 厚 0.7 重 22.9	背面に自然面持つ素材剥片の裏面周辺に主に調整加え整形。つまみは抉り部にのみ比較的粗い調整加え他は未加工のまま残す。	黒色頁岩
7	打製石斧	床上 54cm	2/3	長 8.1 幅 4.8 厚 1.7 重 76.9	僅かに先端が広い撥形。剥片素材とし両面周辺に調整。側面に比べ刃部の調整粗い。打面再生途中で放棄されたか。基部欠損。	黒色頁岩
8	打製石斧	古段階 床面直上	1/2	長 6.4 幅 4.9 厚 1.9 重 68.9	器体上半を欠くため形状は不明。剥片素材とし両面周辺に調整。刃部には裏面から2回の剥離加えられる。刃部再生のためか。	黒色頁岩
9	打製石斧	床上 48cm	完形	長 14.0 幅 1.5 厚 5.3 重 112.9	撥形。表面全周と裏面ほぼ全面に調整加える。剥片素材。刃部にごく弱い摩耗認められる。	黒色頁岩
10	スクレイパー	床上 4cm	完形	長 9.6 幅 6.3 厚 1.6 重 93.0	剥片素材とし、両面のほぼ全周に不均質な平坦剥離加える。	黒色頁岩
11	スクレイパー	床上 18cm	1/3	長 4.0 幅 3.8 厚 0.8 重 14.8	横長剥片の表面端部に調整加え刃部作出。裏面上端にも調整加える。左側欠損。	黒色安山岩
12	磨石	古段階 床上6cm	完形	長 8.7 幅 7.6 厚 5.7 重 535.8	厚手の盤状円礫素材。表裏に磨り面。表面の一部と上端に敲打痕有り。	かこう岩
13	敲石	床面直上	完形	長 8.4 幅 6.9 厚 5.2 重 466.2	やや厚手の盤状円礫素材。表裏に弱い磨り面。裏面の一部と上端、左側面に敲打痕有り。	粗粒輝石 安山岩
14	敲石	床上 22cm	完形	長 9.5 幅 7.5 厚 3.3 重 357.3	盤状の円礫素材。表裏中央にごく小さい敲打痕。右側下端の小口部にも敲打痕有り。	粗粒輝石 安山岩
15	敲石	床上 32cm	完形	長 10.1 幅 8.0 厚 4.2 重 485.1	盤状の円礫素材。表面中央と下端左側の小口部に敲打痕有り。形状はNo.14によく似ている。	粗粒輝石 安山岩
16	石皿	床面直上	1/2	長 11.6 幅 12.3 厚 6.1 重 758.8	ほぼ全面を敲打等により整形している。右側面を面取り。裏面中央に凹みか。下半欠損。	粗粒輝石 安山岩
17	石皿	床上 6cm	完形	長 42.0 幅 31.8 厚 14.3 重 21.0kg	盤状の円礫を素材。表側を剥離と敲打によって整形。裏面は素材の面を残すが、一部に凹みと摩耗が認められる。	粗粒輝石 安山岩

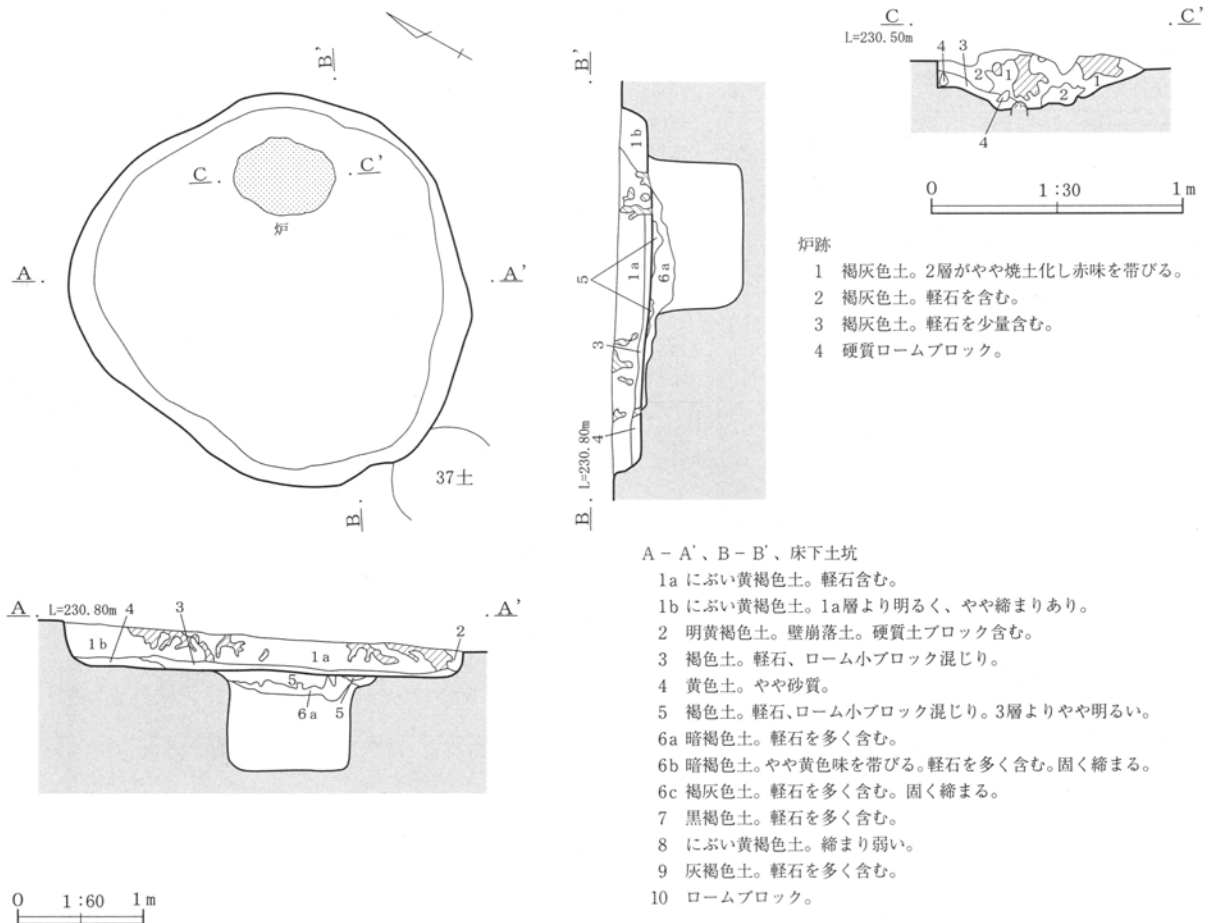
第3章 4面・5面の調査

I区-6号住居 位置 11-19 形状・規模 不整円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.2×2.9×0.25mである。炉跡下から住居中央部にかけて、円形の床下土坑を検出した。床下土坑の規模は長軸・短軸・深さ、それぞれ1.4×1.2×0.75mである。面積7.3㎡。埋没土 におい黄褐色土主体の自然埋没。柱穴 なし。炉 東壁よりの73cm×50cmの楕円形の範囲で焼土を確認。床面より15cm下位まで焼

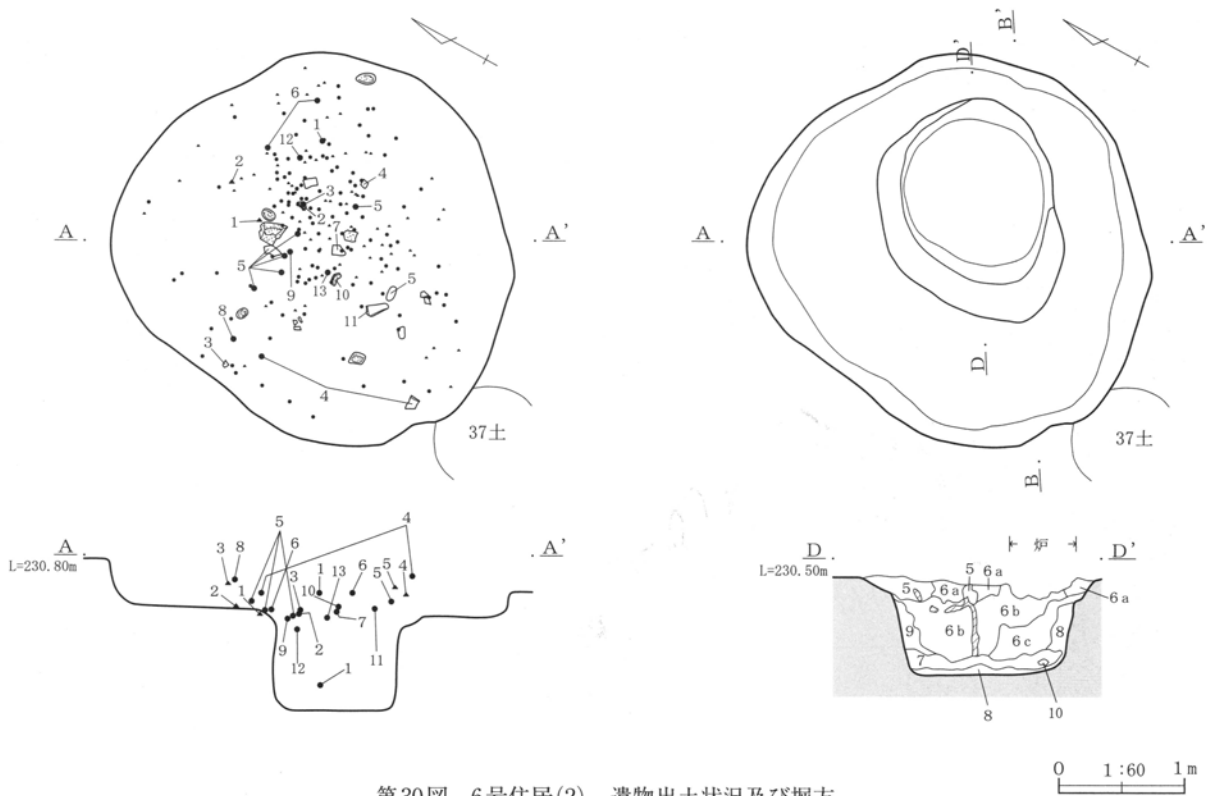
土化が及ぶ。埋設土器 なし。遺物 住居の中央部にまとまって遺物が出土。床下土坑出土の深鉢(1)は4号住居覆土出土遺物と接合。深鉢(6)は4号住居(14)と同一個体の可能性がある。また床下土坑からは小型の浅鉢片も出土している。重複 37号土坑。新旧関係不明。所見 縄文前期後半。

6号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	床下土坑	口縁部破片	①普通 ②におい橙色 ③粗砂粒多	口径(16.0)cm。平縁。半截竹管(巾3mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	床面直上	口縁部破片	①普通 ②におい橙色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状を呈する。半截竹管(巾3mm)により集合化された平行沈線を施文。器面磨滅。	諸磯b(新)式
3	深鉢	床上2cm	口縁部破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	口縁部「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状を呈する。半截竹管(巾3mm)により横位の平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
4	深鉢	床上14~30cm	口縁部破片	①普通 ②明黄褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	平縁。無文。	諸磯b(新)式
5	深鉢	床直~床上8cm	胴部破片	①普通 ②におい橙色 ③粗砂多、細礫やや多	胴部に膨らみを持つ。半截竹管(巾3.5mm)の横位平行沈線で数段に区画。膨らみ部の区画内に弧線、渦巻状の文様を施文。	諸磯b(新)式



第29図 6号住居(1)



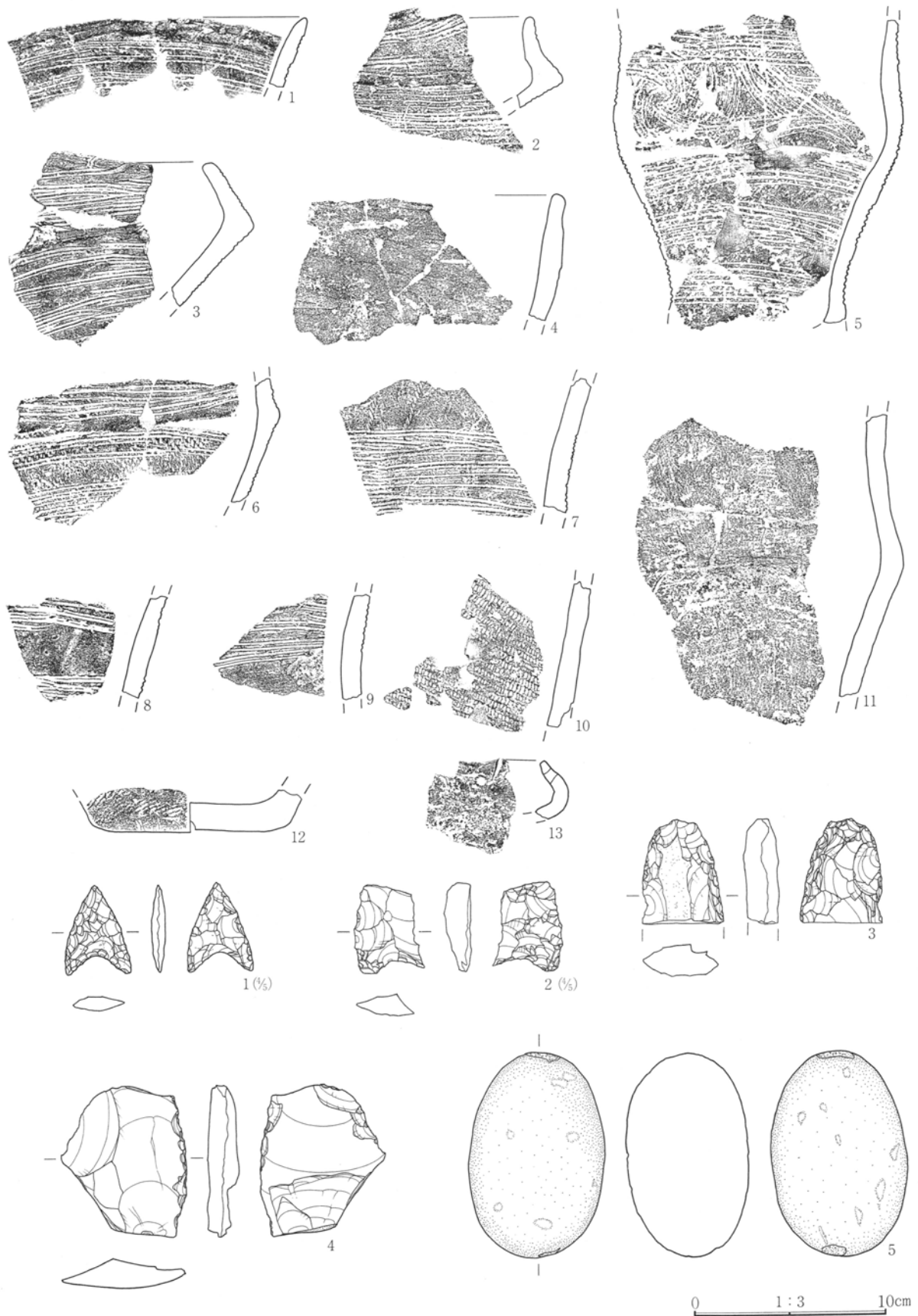
第30図 6号住居(2) 遺物出土状況及び掘方

6号住居 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
6	深鉢	床直～ 床上15cm	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	胴部に屈曲を持つ。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
7	深鉢	床上 2cm	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	地文は単節LRの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により横位集合沈線を施文。	諸磯b(新)式
8	深鉢	床上 21cm	胴部破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾2.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
9	深鉢	床下土坑	胴部破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾4mm)により横位の平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
10	深鉢	床上 5cm	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
11	深鉢	床上 6cm	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂多、細礫やや多	胴部に屈曲を持つ。無文。	諸磯b(新)式
12	深鉢	床下土坑	底部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多、細礫少	底径(10.0)cm。単節LRの斜行縄文。	諸磯b(新)式
13	浅鉢	床下土坑	口縁部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒やや多	有孔浅鉢。径4mmの孔を有する。無文。器面は磨滅激しい。	諸磯b(新)式

6号住居 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	石鎌	床下土坑	完形	長 1.9 幅 1.5 厚 0.3 重 0.6	凹基無茎鎌。表裏全面に調整加え整形。	黒色安山岩
2	加工痕のある石器	床上 2cm	完形	長 1.9 幅 1.5 厚 0.5 重 1.2	小型の剥片の表面左半と裏面ほぼ全面に調整加える。石鎌の未製品か。	黒曜石
3	打製石斧	床上 17cm	1/2	長 5.5 幅 4.3 厚 1.9 重 50.1	下半を欠くため形状不明。横長の剥片素材とし、両面周辺に調整加える。	黒色頁岩
4	スレイパー	床上 15cm	完形	長 7.9 幅 6.5 厚 1.7 重 70.0	剥片素材とし、器体右側面に調整加え刃部作出。表面に被熱による焼けはじけ有り。	黒色頁岩
5	敲石	床上 22cm	完形	長 10.6 幅 7.0 厚 6.2 重 566.5	棒状の円礫素材。上下両端に敲打痕有り。	粗粒輝石 安山岩



第31図 6号住居 出土遺物

第3節 土坑・ピット・集石

I区-12号土坑 位置 1I-26 形状・規模 不整円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.5×1.3×0.5mである。埋没土 下半分は地山のロームを主体とした層で、上半分は締まりの弱いにぶい黄褐色土である。中位に焼土を含む層がある。遺物 中位から上位にかけて諸磯b式の深鉢、打製石斧などの遺物が多数出土。隣接する2号住居の深鉢No.1と接合関係のある土器片が出土し、主に胴部～底部を12号土坑で検出した。重複 なし。

所見 縄文前期後半。

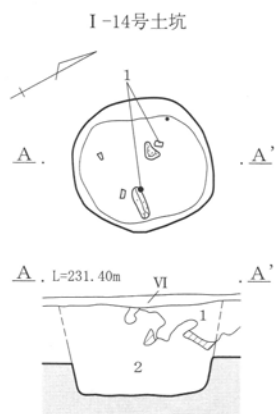
I区-13号土坑 位置 1I-26 形状・規模 不整円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.8×1.5×0.5mである。埋没土 にぶい黄褐色土主体。木の根によるものと考えられる攪乱が多く入る。

遺物 諸磯b式の深鉢片出土。13号土坑出土の土器片が12号土坑No.7と接合した。重複 なし。

所見 縄文前期後半。

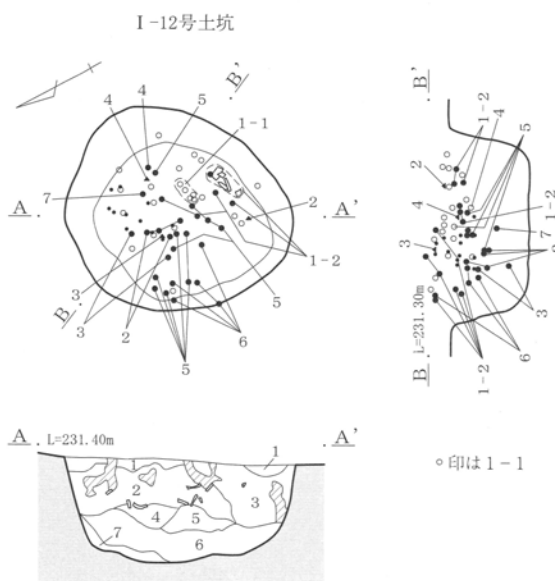
I区-14号土坑 位置 1I-25 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、1.0×0.9×0.5mである。

埋没土 締まりの弱いにぶい黄褐色土主体。埋没土が地山のローム漸移層(VIII層)に近似し、土層断面での分層が困難であった。遺物 諸磯b式の深鉢片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。



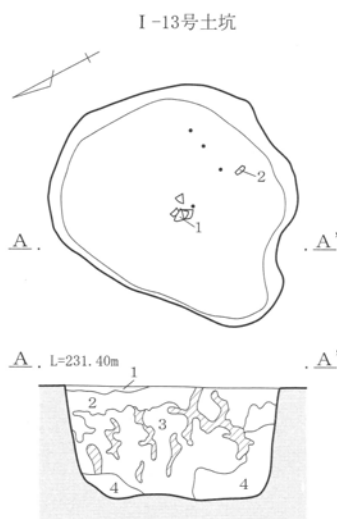
14号土坑

- 1 にぶい黄褐色土。締まり弱い。
- 2 にぶい黄褐色土。締まりやや強い。As-Sr粒含む。



12号土坑

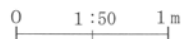
- 1 黒褐色土。白色軽石含む。
- 2 にぶい黄褐色土。締まり弱い。
- 3 黄褐色土。VIII層ブロック含み、締まり弱い。
- 4 にぶい黄褐色土。焼土を多く含む。As-Srが斑点状に入る。
- 5 にぶい黄褐色土。焼土を含む。As-Srが斑点状に入る。
- 6 にぶい黄褐色土。As-Srが斑点状に入る。
- 7 黄褐色土。やや砂質。

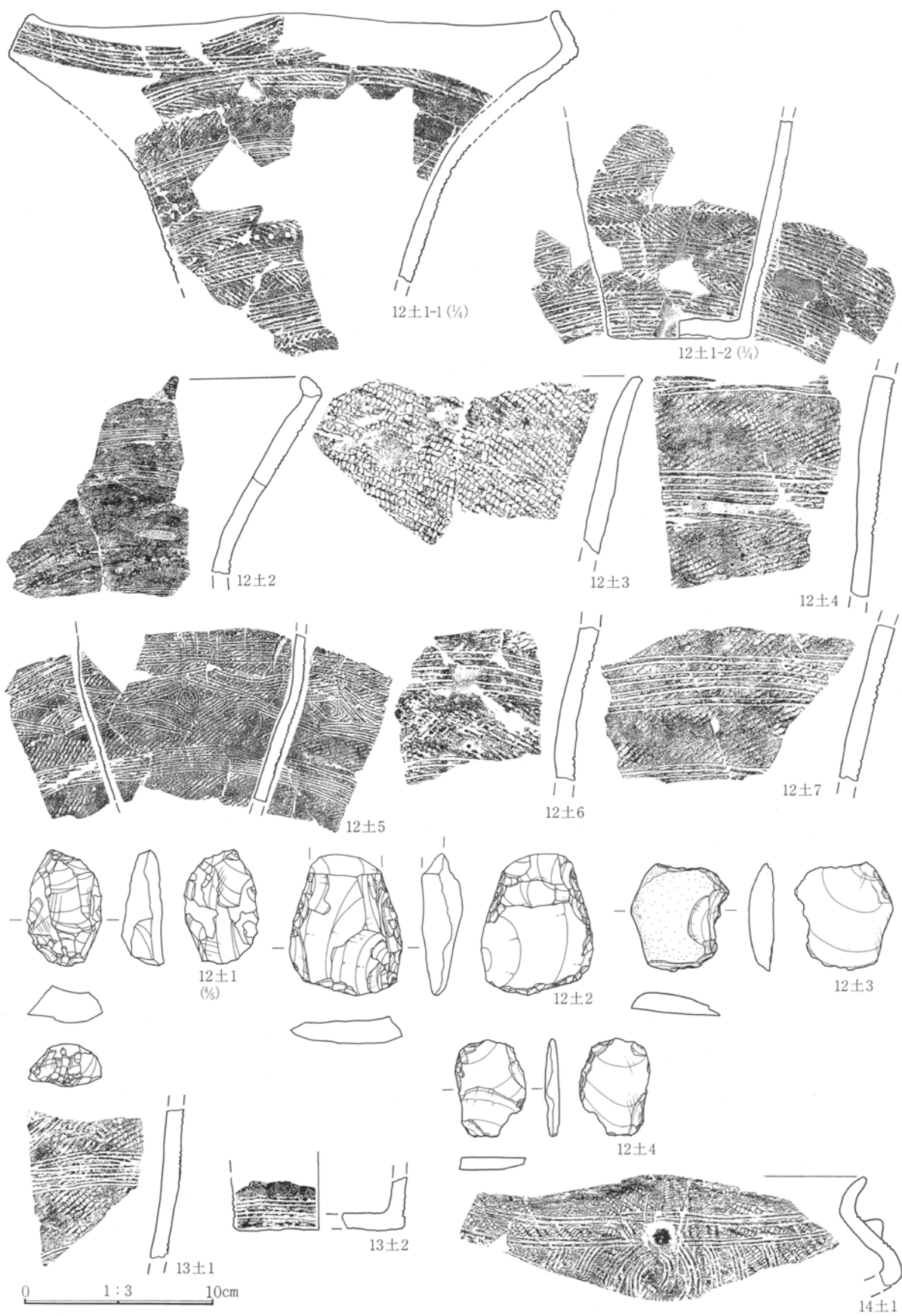


13号土坑

- 1 にぶい黄褐色土。締まり弱い。
- 2 黄褐色土。VIII層ブロック含み、締まり弱い。
- 3 褐色土。As-Srを含む。
- 4 にぶい黄褐色土。As-Srブロック含み、締まり弱い。

第32図 12～14号土坑





第33図 12～14号土坑 出土遺物

12号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1-1	深鉢	底面上 48～62cm	口縁部～ 胴部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	口径(19.0)cm。口縁屈曲し、ゆるい波状。地文単節RL・LRの結束羽状縄文。横位平行沈線施文。径4mmの円形刺突文が一列並ぶ。	諸磯b(新)式
1-2	深鉢	底面上 42cm	胴部～ 底部	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	底径(10.0)cm。地文は単節RL・LRの結束羽状縄文。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	底面上 26～42cm	口縁部 破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多	口縁に向かって外反し、口縁部「く」の字状に屈曲する。半截竹管(巾3.5mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	底面上 12～33cm	口縁部 破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	波状口縁。単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新)式
4	深鉢	底面上 38cm	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂やや多、細礫少	地文は単節LRの斜行縄文。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
5	深鉢	底面上 24～48cm	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒 やや多	胴部やや膨らみを持つ。地文は無節L。半截竹管により横位沈線を間隔をあけ施文。膨らみ部は弧線、渦巻で文様帯を形成。	諸磯b(新)式
6	深鉢	底面上 32～58cm	胴部破片	①普通 ②黒褐色 ③粗砂粒 多	地文は不明。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
7	深鉢	底面上 19cm	胴部破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒 やや多	地文は無節L?の斜行縄文。半截竹管(巾4mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式

12号土坑 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	エント スレイパー?	覆土	完形	長 2.5 幅 1.5 厚 0.9 重 3.5	厚手の剥片を素材とし、端部に急角度の調整を施して刃部作出。	黒曜石
2	打製石斧	底面上 56cm	1/2	長 7.6 幅 6.0 厚 2.1 重 103.2	撥形。剥片素材とし両面周辺に調整加える。基部は側縁方向からの加撃によって失われる。制作途中の破損か。刃部の摩耗なし。	黒色頁岩
3	加工痕のある石器	底面上 62cm	完形	長 5.7 幅 5.2 厚 1.3 重 39.6	表面に自然面持つ剥片を素材とし、上端～右側、下端にかけて調整加える。調整は粗く、大きさは不揃い。右側は鋸歯状を呈す。	黒色頁岩
4	加工痕のある石器	底面上 47cm	完形	長 5.1 幅 3.7 厚 0.8 重 16.7	剥片を素材とし、表面上半と裏面左側上半に調整加える。	黒色頁岩

13号土坑 土器

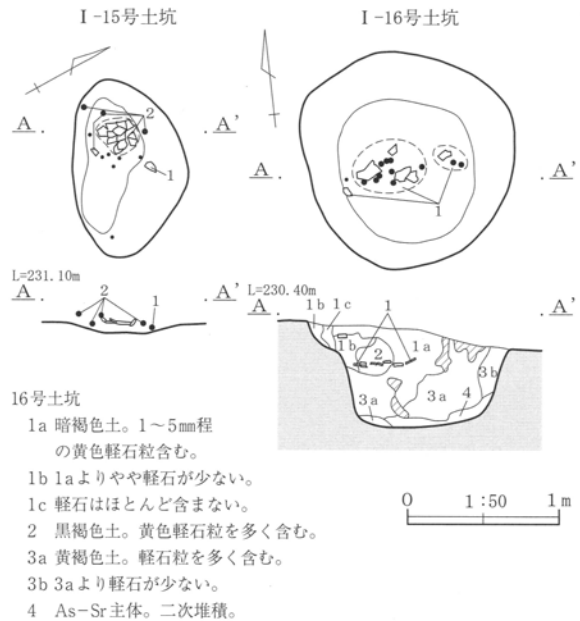
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 70cm	胴部破片	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒 やや多	地文は単節LRの斜行縄文。半截竹管(巾2.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	底面上 38cm	底部破片	①良好 ②褐色 ③粗砂粒 多	底径(8.9)cm。半截竹管(巾3.5mm)により2本単位で横位に沈線を施文。	諸磯b(新)式

14号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 27cm	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 多	靴先状口縁。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により横位、弧線、渦巻状沈線を施文。ボタン状貼付文あり。	諸磯b(新)式

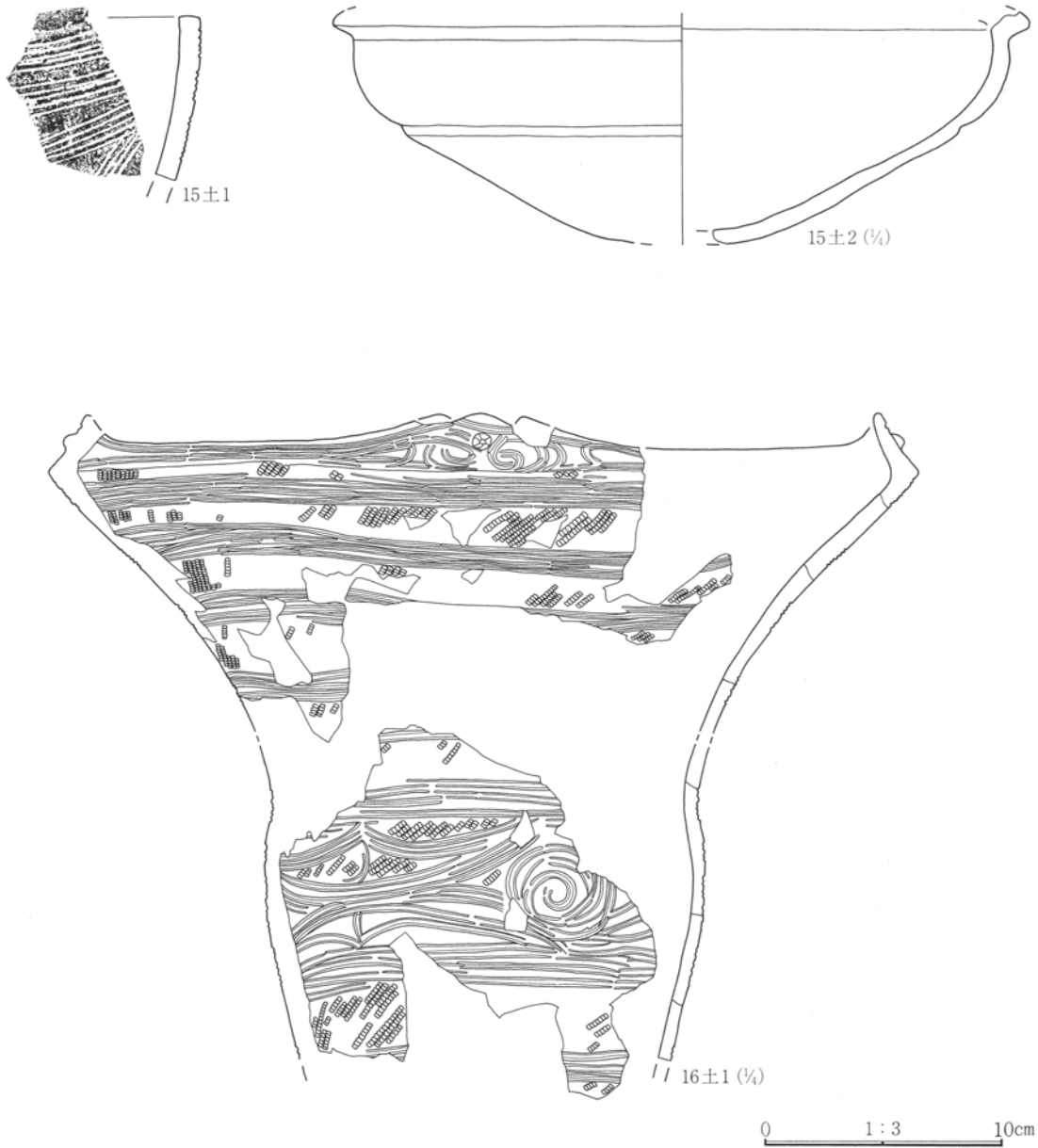
I区-15号土坑 位置 1K-18 形状・規模 楕円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.2×0.8×0.1mである。検出できた範囲が土坑底面付近のみであったため、全体的な形状は不明。遺物 諸磯b式の深鉢片、浅鉢片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。

I区-16号土坑 位置 1H-19 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.5×1.4×0.6mである。埋没土 概ね下位が黄褐色土、上位が軽石混じりの暗褐色土である。遺物 中位やや上よりでNo.1の諸磯b式深鉢がまとまって出土。No.1は口縁部～頸部は16号土坑出土であるが、胴部は隣接する43号土坑およびグリッド出土である。重複 なし。所見 縄文前期後半。



第34図 15・16号土坑

第3章 4面・5面の調査



第35図 15・16号土坑 出土遺物

15号土坑 土器

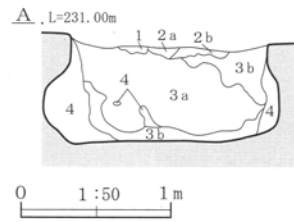
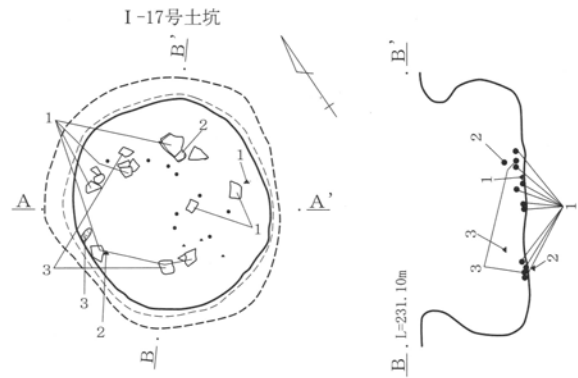
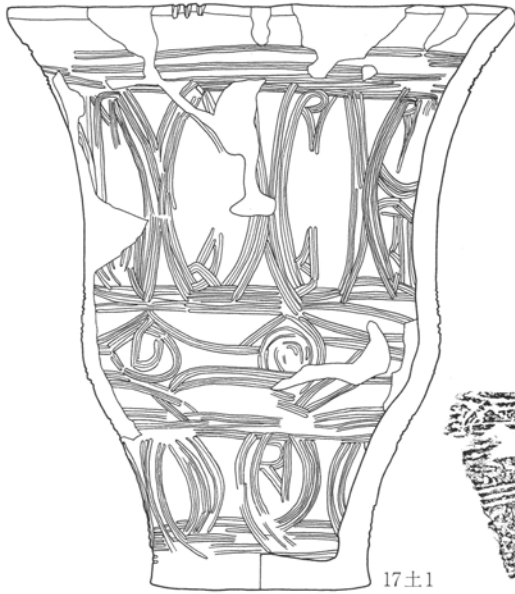
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	底面上 2cm	口縁部 破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多	波状口縁。半截竹管(巾4mm)により斜位の沈線を施文。	諸磯b(新) 式
2	浅鉢	底面上 6~14cm	口縁~ 底部1/4	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	無文。外面を磨く。	諸磯b(新) 式

16号土坑 土器

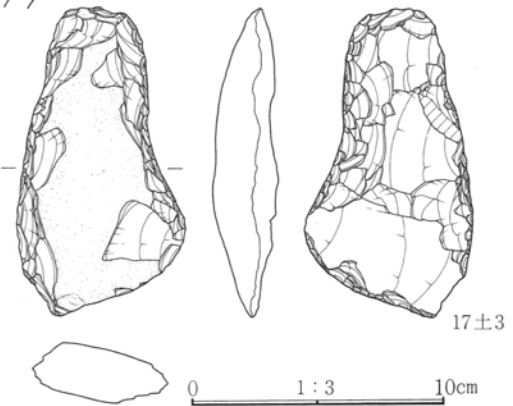
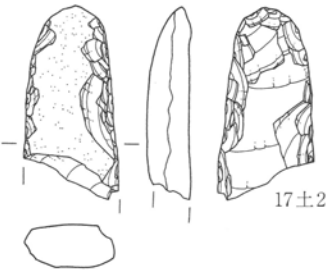
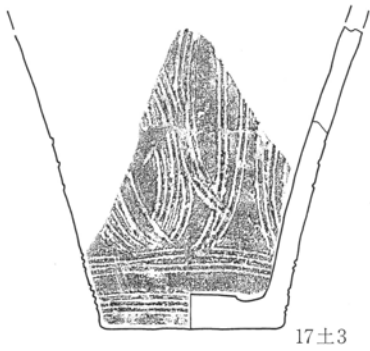
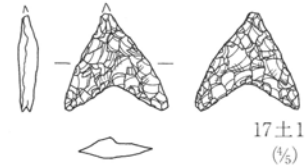
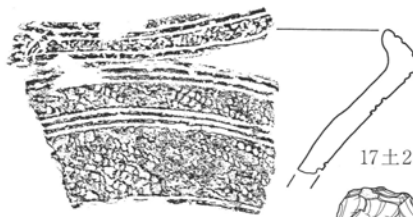
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	底面上 42~50cm	口縁部~ 胴部1/3	①普通 ②灰褐色 ③ 粗砂粒多、細礫やや多	口径(44.5)cm。口縁「く」の字、ゆるい波状。波頂部山型で貼付文有り。地文単節LR斜行縄文。半截竹管で横位弧状、渦状文様。	諸磯b(新) 式

第3節 土坑・ピット・集石

I区-17号土坑 位置 1L-19 形状・規模 円形袋状土坑。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.4×1.3×0.7m。埋没土 軽石混じりの黒褐色土が主体、壁際は地山の崩落と思われる黄褐色土が埋める。遺物 底面直上で諸磯b式の深鉢や石鏃、打製石斧が出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。



- 1 灰褐色土。
- 2a 黄褐色土。
- 2b にぶい黄褐色土。2aに3bが混じる。
- 3a 黒褐色土。1~7mm程の軽石粒を含む。
- 3b 暗褐色土。1~7mm程の軽石粒を含む。
- 4 黄褐色土。赤みを帯びる。



第36図 17号土坑及び出土遺物

17号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面直上 ~3cm	口縁部~ 底部3/4	①普通 ②暗赤褐色 ③粗砂粒多	胴部下半に膨らみ部。口縁部外反。口唇部に刻み。半截竹管による沈線で膨らみ部に横位の文様帯、その上下に縦位の文様施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	底面上 12cm	口縁部 破片	①普通 ②橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管による沈線を横位に間隔をあげ施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	底面上 1~4cm	胴部~ 底部	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	底径7.3cm。半截竹管(巾3.5mm)により下位に2本単位の横位平行沈線を2段施文し、その上位は縦位の木葉状の弧線を施文。	諸磯b(新)式

17号土坑 石器

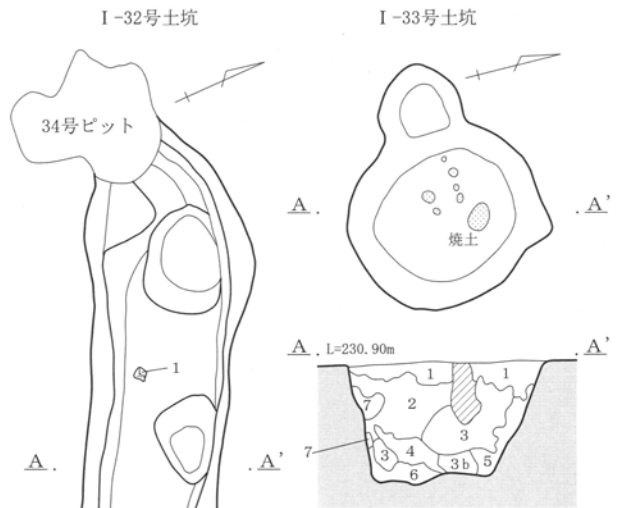
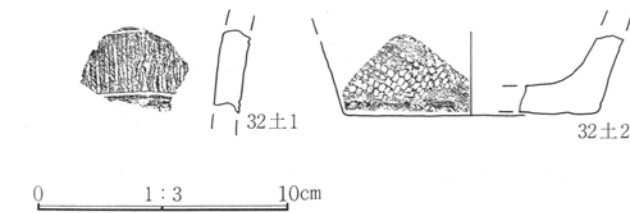
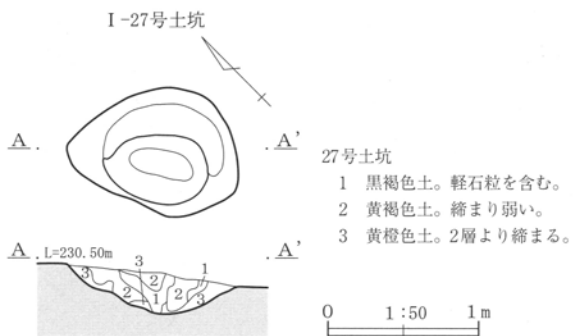
番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	石鏃	底面直上	ほぼ 完形	長 1.6 幅 1.7 厚 0.3 重 0.6	凹基無茎鏃。両側上端部が僅かに内湾し、先端が突起状を呈する。先端僅かに欠損。	チャート
2	打製石斧	底面直上	1/2	長 7.8 幅 3.9 厚 1.7 重 62.2	器体下半を欠くため形状は不明。縦長の剥片素材とし両面周辺に調整加える。両側縁は調整時の加撃によってつぶれている。	黒色頁岩
3	打製石斧	底面上 11cm	完形	長 12.2 幅 6.7 厚 2.6 重 195.2	撥形。剥片を素材とし、主に表裏両側と基部に調整加える。刃部は裏面のみに調整施す。刃部の摩耗ごく弱い。	変玄武岩

第3章 4面・5面の調査

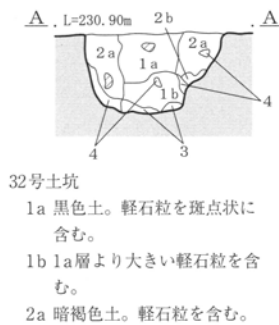
I区-27号土坑 位置 1H-19 形状・規模 不整形円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.2×0.8×0.3mである。掘り鉢状を呈する。埋没土 軽石混じりの黒褐色土と黄褐色土の混土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

I区-32号土坑 位置 1I-19 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ(4.3)×1.0×0.5mである。底面にピット状の落ち込みが2箇所ある。埋没土 軽石混じりの黒色土、暗褐色土が主体。遺物 諸磯b式の深鉢片、スクレイパーが出土。重複 34号ピット。34号ピットが新しい。所見 縄文前期後半。

I区-33号土坑 位置 1J-19 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.6×1.3×0.8mである。埋没土 軽石混じりの黒褐色土、暗褐色土が主体。底面付近に焼土ブロックあり。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

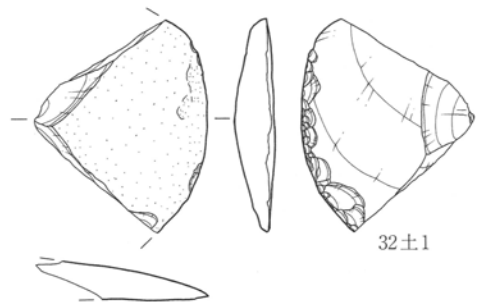


- 33号土坑
- 1 暗褐色土。
 - 2 暗褐色土。軽石を多く含み、締まりが強い。
 - 3 黒褐色土。軽石粒を含む。締まりが強い。
 - 3b 3層よりさらに固く締まっている。
 - 4 黒色土。締まり弱い。
 - 5 黄褐色土。3層が混じる。
 - 6 As-Sr主体。二次堆積。
 - 7 黄褐色土。硬質ローム (IX層) ブロックか。



- 32号土坑
- 1a 黒色土。軽石粒を斑点状に含む。
 - 1b 1a層より大きい軽石粒を含む。
 - 2a 暗褐色土。軽石粒を含む。

- 2b 2a層が固く締まる。
- 3 褐色土。硬質ローム (IX層) ブロックが混じる。
- 4 硬質ローム (IX層) ブロック。



第37図 27・32・33号土坑及び出土遺物

32号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	覆土	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	地文は無節L。半截竹管で横位平行沈線を施文。	諸磯b (新) 式
2	深鉢	底面上 28cm	底部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。	諸磯b (新) 式

32号土坑 石器

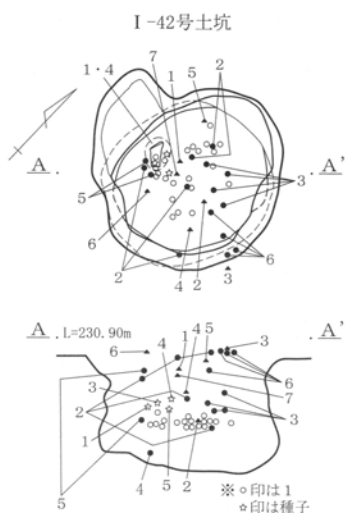
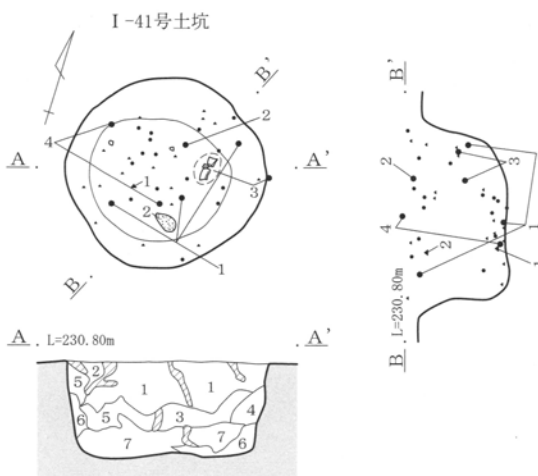
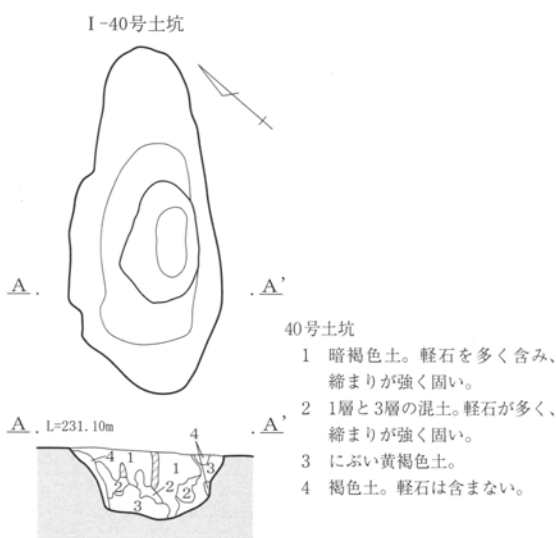
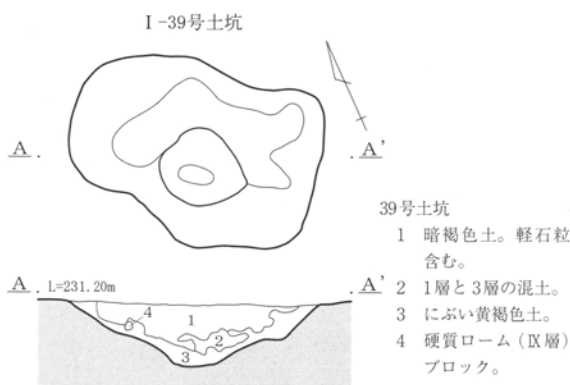
番号	器種	出土位置	残存	分量(cm・g)	特徴	石材
1	スクレイパー	底面直上	刃部破片	長 8.4 幅 6.9 厚 1.6 重 80.1	上下両端を欠くため形状は不明。剥片素材とし、裏面周辺に調整加え刃部作出。	黒色頁岩

I区-39号土坑 位置 1H-27 形状・規模 不定形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.7×1.3×0.4m。断面は掘り鉢状を呈する。埋没土 軽石混じりの暗褐色土主体、下部はにぶい黄褐色土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

I区-40号土坑 位置 1M-25 形状・規模 不整形円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.3×1.0×0.6mである。埋没土 軽石混じりの暗褐色土主体で締まり強い。下部はにぶい黄褐色土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

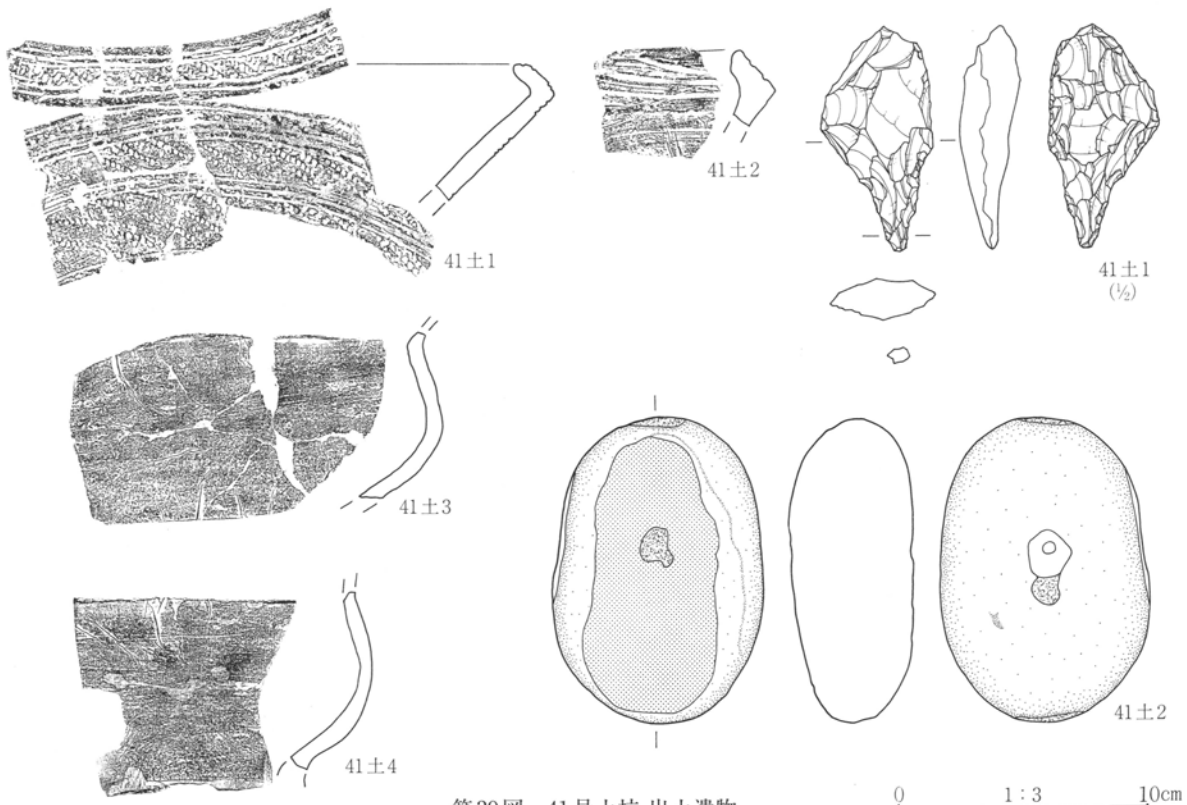
I区-41号土坑 位置 1J-18 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×1.3×0.6mである。埋没土 軽石混じりの黒褐色土が上部と下部にあり、中間をやや色調の明るい層が埋める。遺物 上部と下部に集中して遺物があり、諸磯b式の深鉢片、浅鉢片、石錐、磨石が出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。

I区-42号土坑 位置 1K-18 形状・規模 円形袋状土坑。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.5×1.3×0.7mである。埋没土 主に軽石混じりの黒褐色土が埋める。遺物 底面から30cm上でNo.1の諸磯b式深鉢が出土、他に同じく諸磯b式の深鉢、石鏃、打製石斧等が出土している。また中位では炭化したクリの種子(第7章参照)が検出された。重複 なし。所見 縄文前期後半。



第38図 39～42号土坑

0 1:50 1m



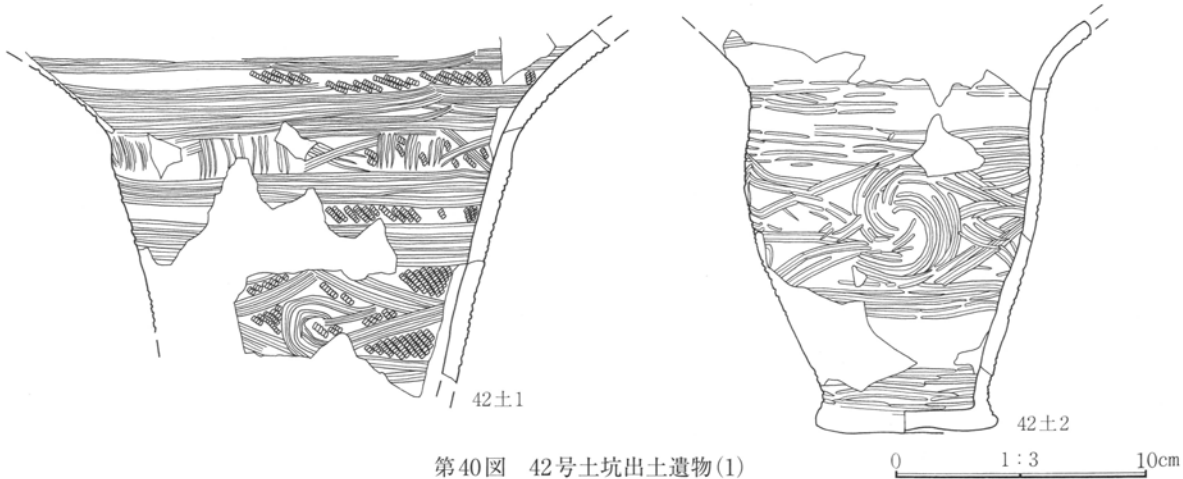
第39図 41号土坑 出土遺物

41号土坑 土器

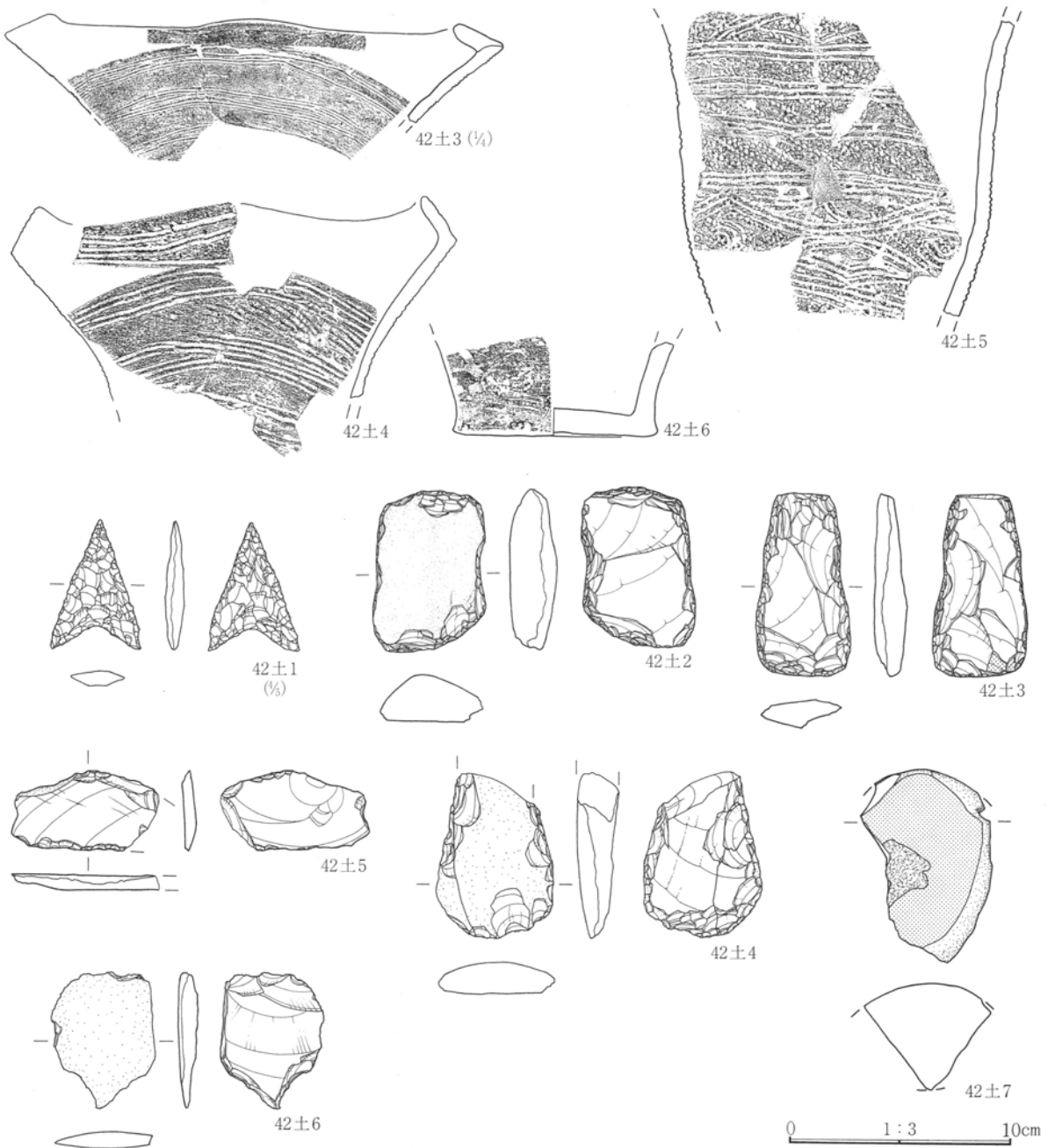
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面直上 ~58cm	口縁部 破片	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部「く」の字状に屈曲する。地文は附加条第1種、RL。半截竹管(巾4mm)により2本単位で横位に間隔をあけ沈線施文。	諸磯b(新式)
2	深鉢	底面上 59cm	口縁部 破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。半截竹管により横位沈線を施文。	諸磯b(新式)
3	浅鉢	底面上 20~25cm	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	無文。表面を磨く。内面に剥離痕あり。	諸磯b(新式)
4	浅鉢	底面上 1~65cm	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	無文。表面を磨く。剥離痕あり。	諸磯b(新式)

41号土坑 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	石錐	底面上 35cm	完形	長 3.9 幅 3.0 厚 1.5 重 17.8	剥片素材。表面下半と裏面のほぼ全面に調整加え整形。器体の下1/3程を刃部として作出。	黑色頁岩
2	凹石	底面上 51cm	完形	長 12.0 幅 8.2 厚 4.8 重 726.9	盤状の円礫素材。裏面に浅い凹み。表面に磨り面。左側面は敲打と研磨によって整形。上下両端と表裏の中央に敲打痕。	石英閃緑岩



第40図 42号土坑出土遺物(1)



第41図 42号土坑 出土遺物(2)

42号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 25~36cm	胴部	①普通 ②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁に向かって外反、胴部に僅かな屈曲とくびれ。地文単節R L斜行縄文。半截竹管で横位、弧状、X字状などの文様施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	底面上 27~78cm	胴部~ 底部	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂やや多、細礫少	底径7.2cm。胴部にやや膨らみを持ち、口縁に向けて外反。膨らみ部に半截竹管(巾3.5mm)で弧線、渦巻状の文様を施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	底面上 36~51cm	口縁部 破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口径(24.8)cm。口縁部「く」の字状に屈曲し、僅かな波状。半截竹管(巾3mm)で2~3本単位の横位平行沈線を間隔をあげ施文。	諸磯b(新)式
4	深鉢	底面上 11cm	口縁部~ 胴部破片	①普通 ②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	口径(17.4)cm。口縁「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節R Lの斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)で横位平行沈線。	諸磯b(新)式
5	深鉢	底面上 25~59cm	胴部破片	①良好 ②橙色 ③粗砂粒多	胴部にやや膨らみを持つ。地文は附加条第1種、R L。膨らみ部は半截竹管(巾4mm)による弧線、渦巻で文様帯を形成。	諸磯b(新)式
6	深鉢	底面上 66~77cm	底部	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	底径9.4cm。無文。	諸磯b(新)式

第3章 4面・5面の調査

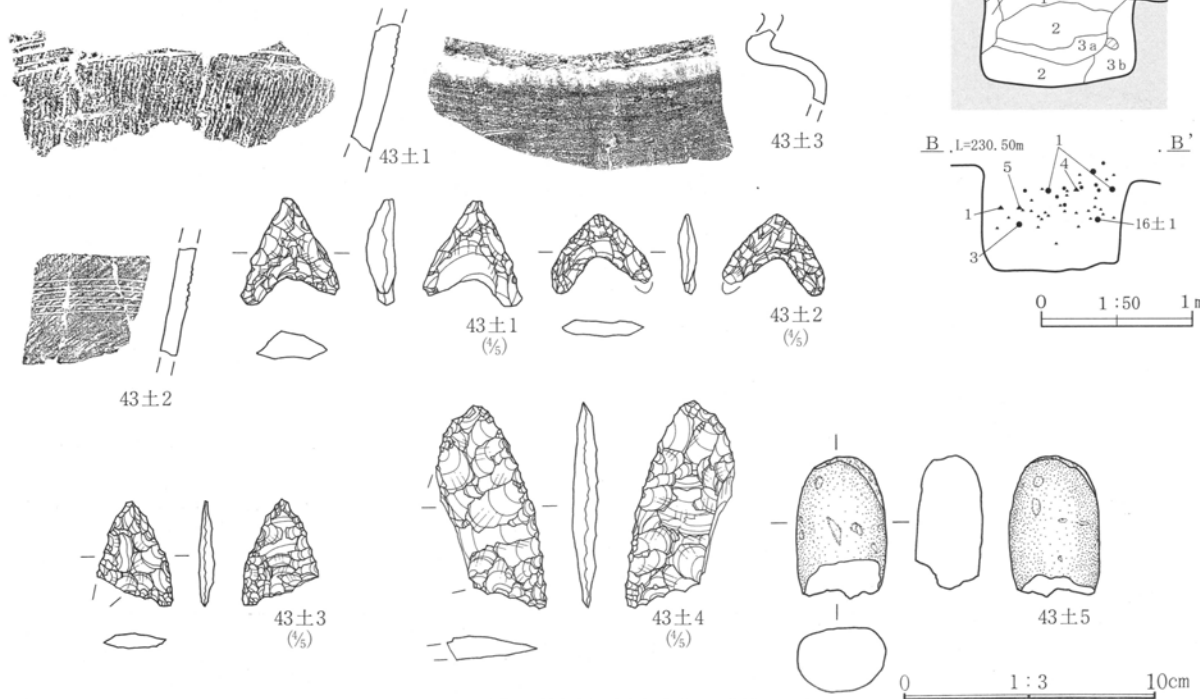
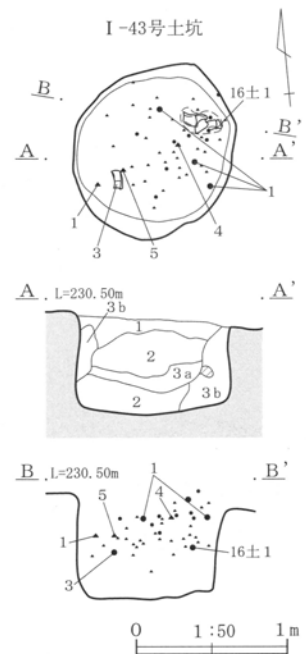
42号土坑 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	底面上 66cm	完形	長 2.4 幅 1.7 厚 0.4 重 0.7	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。先端鋭く尖る。	黒曜石
2	打製石斧	底面上 33cm	完形	長 7.2 幅 5.1 厚 2.1 重 106.0	短冊形か? 剥片素材とし表裏周辺に調整。刃部は階段状の剥離が多く見られる。刃部再生の結果寸詰まりの形状となる。	黒色頁岩
3	打製石斧	底面上 81cm	完形	長 8.2 幅 4.3 厚 1.5 重 56.3	撥形。横長剥片素材とし、表裏周辺に調整加える。裏面刃部右半に摩耗。刃部左半の剥離は摩耗より新しい。	黒色頁岩
4	打製石斧	底面上 52cm	2/3	長 7.4 幅 5.3 厚 1.9 重 84.3	撥形。縦長剥片素材とし表裏周辺に調整。刃部の調整は両側縁下部の摩耗より新しく、刃部再生が行われたことがわかる。	黒色頁岩
5	スクレパ	底面上 71cm	3/4	長 3.6 幅 6.7 厚 0.8 重 18.4	横長の剥片を素材とし、表面下端に調整加え刃部作出。上端にも一部調整施す。右側欠損。	黒色頁岩
6	加工痕のある石器	底面上 71cm	完形	長 6.1 幅 4.7 厚 0.9 重 29.1	表面に自然面持つ剥片素材とし、裏面上下に調整加える。下端には先尖部を作り出す。石鏃の未製品か。	黒色頁岩
7	磨石	底面上 72cm	破片	長 8.7 幅 5.0 厚 4.7 重 194.3	表面に磨り面、非常になめらか。中央部に敲打痕、左側面は敲打により整形。裏面は部分的に残存するのみで詳細不明。	粗粒輝石 安山岩

I区-43号土坑 位置 1I-19 形状・規模 円

形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.2×1.1×0.6mである。埋没土 軽石混じりの黒褐色土が主体。遺物 中位から上位に集中して遺物があり、諸磯b式の深鉢片、浅鉢片、石鏃、敲石が出土。16号土坑No.1の胴部片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。

- 1 にぶい黄褐色土。締まり弱い。軽石粒含む。
- 2 黒褐色土。大粒のAs-Srを多量に含む。土器片を多く含む。
- 3a 黒褐色土。ロームブロック混じる。
- 3b 3a層に比べやや硬質。



第42図 43号土坑及び出土遺物

43号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 51~59cm	胴部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	地文は無節L。半截竹管(巾4mm)により横位平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	覆土	胴部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒 やや多	地文は無節L?の斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)により3本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
3	浅鉢	底面上 29cm	口縁部~ 胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	無文。外面を磨く。	諸磯b(新)式

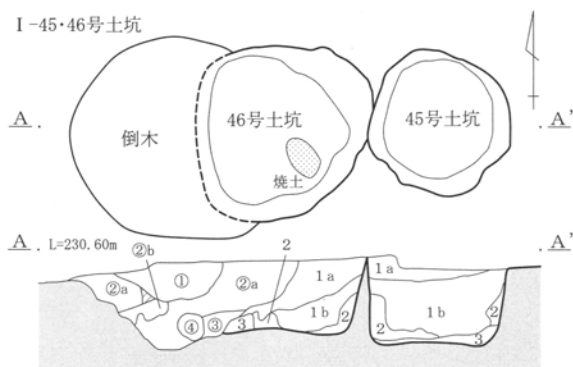
43号土坑 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	底面上 41cm	完形	長 1.8 幅 1.7 厚 0.5 重 0.8	小型の凹基無茎鏃。表裏全面に調整加え整形。やや厚手。	黒曜石
2	石鏃	覆土	ほぼ 完形	長 1.3 幅 1.7 厚 0.3 重 0.3	小型の凹基無茎鏃で、長さに対して幅が広い。脚の比率が高く、器体全長の約1/2程度に達する。	黒曜石
3	石鏃	覆土	左脚 欠損	長 1.7 幅 1.2 厚 0.3 重 0.4	小型の凹基無茎鏃。薄手の剥片を素材とし、表裏に調整加える。裏面に一部素材剥片面残す。左脚欠損。	黒曜石
4	石鏃	底面上 60cm	左側 欠損	長 3.4 幅 1.8 厚 0.5 重 2.1	大型の凹基無茎鏃。表裏に細かな調整加え整形。表面は押圧による斜行剥離が認められる。脚を含む左側を一部欠損。	黒曜石
5	敲石	底面上 41cm	1/2	長 5.6 幅 3.6 厚 2.6 重 66.0	棒状の円礫を素材とし、上端に敲打痕が認められる。下半欠損。	粗粒輝石 安山岩

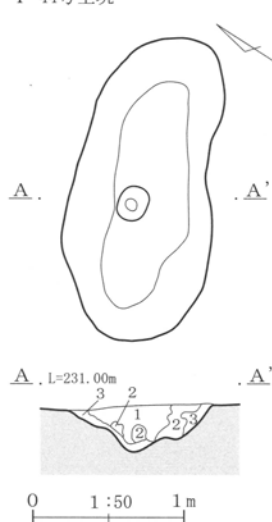
I区-44号土坑 位置 1M-19 形状・規模 楕円形。長軸・短軸・深さは、2.1×1.0×0.3m。中央付近に径20cmのピットを伴う。埋没土 締まりが強く軽石混じりの暗褐色土、にぶい黄褐色土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

I区-45号土坑 位置 1H-25 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.0×1.0×0.4mである。埋没土 軽石混じりの褐色土が主体。遺物 諸磯b式の深鉢片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。

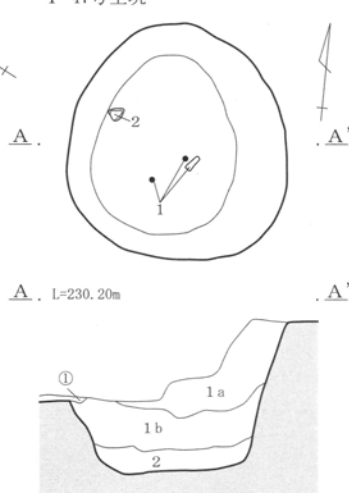
I-45・46号土坑



I-44号土坑



I-47号土坑



0 1:50 1m

I区-46号土坑 位置 1H-25 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×1.1×0.5mである。土坑の西側は倒木によって壊されている。埋没土 軽石混じりの褐色土が主体。南東部1b層中で焼土ブロック出土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

I区-47号土坑 位置 1G-20 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.6×1.5×1.1mである。埋没土 軽石混じりのにぶい黄褐色土が主体。遺物 諸磯b式の深鉢片出土。重複 5号住居。土坑埋没土の上を5号住居の貼り床が一部覆うようにあるが、これは土坑が袋状であるため、47号土坑が新しい。所見 縄文前期後半。

44号土坑

- 1 暗褐色土。軽石粒を多く含み、固く締まる。
- 2 にぶい黄褐色土。軽石粒を含み固く締まる。
- 3 黄褐色土。締まり弱い。

45号土坑・46号土坑

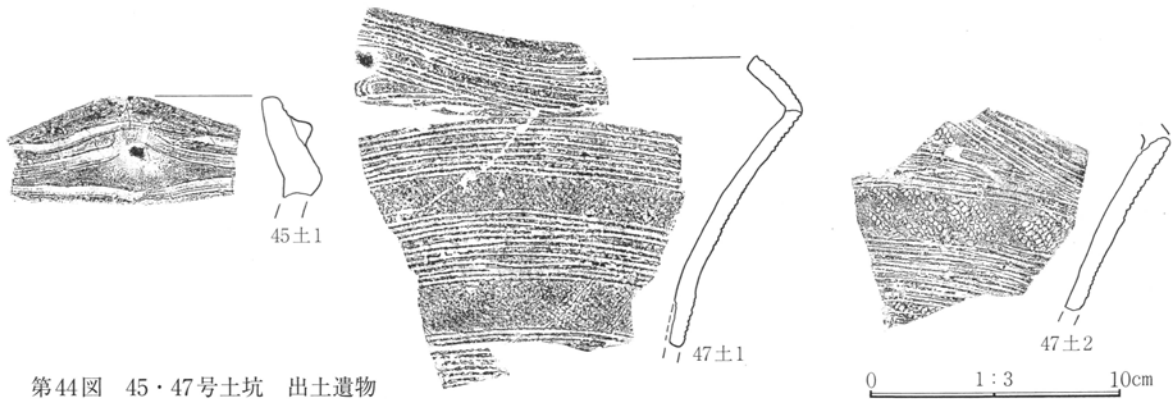
- 1a 褐色土。軽石粒含む。褐色土円形ブロック(1~3cm)を斑に含む。
- 1b 褐色土。軽石粒含む。焼土粒・炭化物粒を僅かに含む。
- 2 黄褐色土。壁崩落土。砂質。
- 3 注記なし。
- ① 黄色土。As-Srを多量に含むローム層。
- ②a 黄褐色土。軽石粒含むローム小ブロック混じる。やや砂質。
- ②b 黄褐色土。僅かに軽石を含む。
- ③ 褐色土。暗褐色土円形ブロックを斑に含む。軽石を含む。
- ④ 黄褐色土。ロームブロック。

47号土坑

- 1a にぶい黄褐色土。As-Sr、褐色土小ブロック、暗褐色土硬質ブロック混じり。
- 1b にぶい黄褐色土。As-Srを含む。褐色土小ブロックを多く含む。
- 2 黄白色土。砂質土および粘質土ブロック混土。
- ① 5号住居貼床。黄褐色土。ロームブロック混土。

第43図 44~47号土坑

第3章 4面・5面の調査



第44図 45・47号土坑 出土遺物

45号土坑 土器

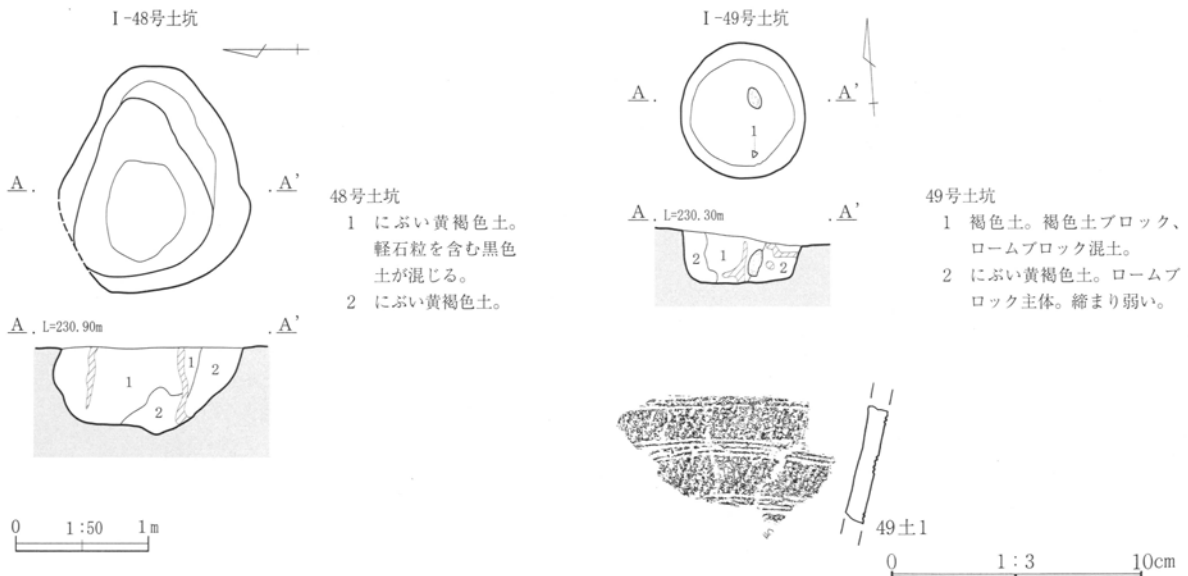
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	覆土	口縁部 破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	「く」の字状口縁の一部。半載竹管で沈線を施文。ボタン状の貼付文あり。	諸磯b(新)式

47号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 25~28cm	口縁部 破片	①普通 ②灰褐色 ③ 粗砂粒多、白色岩片多	口縁「く」の字に屈曲し、ゆるい波状。地文単節RL斜行縄文、磨減。半載竹管(巾3mm)で横位平行沈線。ボタン状貼付文あり。	諸磯b(新)式
2	深鉢	底面上 40cm	口縁部~ 胴部破片	①普通 ②褐灰色 ③粗砂粒 やや多	「く」の字状口縁の一部。地文は単節RLの斜行縄文。半載竹管(巾3mm)による集合化した横位沈線を間隔を持って施文。	諸磯b(新)式

I区-48号土坑 位置 1L-18 形状・規模 不整形円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.6×1.4×0.5mである。埋没土 におい黄褐色土に黒色土が混じる。遺物 諸磯b式の深鉢片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。

I区-49号土坑 位置 1H-18 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ0.9×0.9×0.3mである。埋没土 褐色土とロームブロックの混土。遺物 諸磯b式の深鉢片出土。重複 なし。所見 縄文前期後半。



第45図 48・49号土坑及び出土遺物

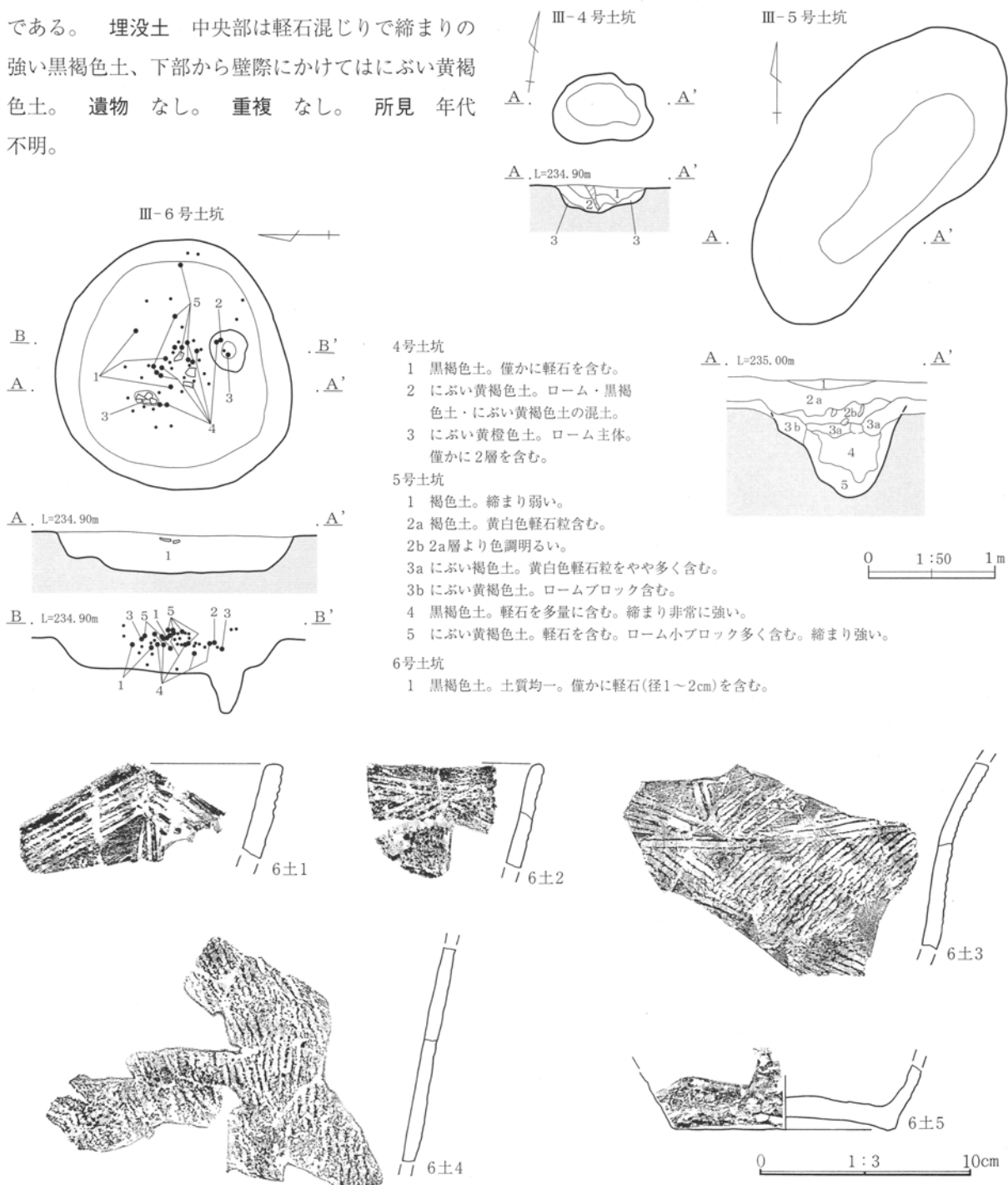
49号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面直上	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒 やや多	地文は無節Lの斜行縄文と思われるが磨減。半載竹管(巾3mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式

Ⅲ区-4号土坑 位置 2C-64 形状・規模 不整形円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ0.8×0.5×0.2mである。埋没土 上部は黒褐色土、下部は黒褐色土とロームブロックの混土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

Ⅲ区-5号土坑 位置 2E-59 形状・規模 楕円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.7×1.4×0.9mである。埋没土 中央部は軽石混じりで締まりの強い黒褐色土、下部から壁際にかけてはにぶい黄褐色土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

Ⅲ区-6号土坑 位置 1T-64 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.0×1.7×0.3mである。埋没土 均質な黒褐色土。遺物 中央部に集中して黒浜式の深鉢片出土。復元は出来なかったが口縁部から底部までの破片あり。重複 なし。所見 縄文前期中葉。



第46図 4・5・6号土坑及び6号土坑出土遺物

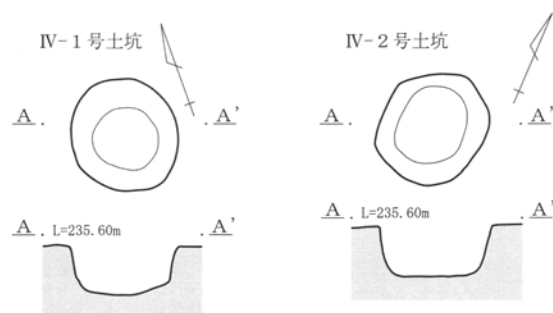
第3章 4面・5面の調査

6号土坑 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底面上 20cm	口縁部 破片	①普通②にぶい黄褐色 ③細砂粒少、繊維含む	波状口縁。半截竹管(巾5.5mm)により口縁に沿って平行沈線、波頂部から縦位に沈線を施文。	黒浜式 繊維
2	深鉢	底面上 25cm	口縁部 破片	①普通②にぶい黄褐色 ③細砂粒少、繊維含む	波状口縁か。半截竹管(巾5.5mm)により斜位の平行沈線を施文。	黒浜式 繊維
3	深鉢	底面上 49cm	胴部破片	①普通②にぶい黄褐色 ③細砂粒少、繊維含む	胴部にくびれ部を持つ。くびれ部の下位は無節R、Lの羽状縄文。上位は半截竹管で横位、縦位、斜位に施文。	黒浜式 繊維
4	深鉢	底面上 16~22cm	胴部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③細砂粒少、繊維含む	無節の原体で縄文を施す。	黒浜式 繊維
5	深鉢	底面上 24~32cm	底部	①普通 ②にぶい橙色 ③細砂粒少、繊維含む	底径10.5cm。やや上げ底になる。無文。	黒浜式 繊維

IV区-1号土坑 位置 2E-73 形状・規模 円形。

長軸・短軸・深さは、それぞれ0.8×0.7×0.3mである。埋没土 軽石混じりの暗褐色土。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。

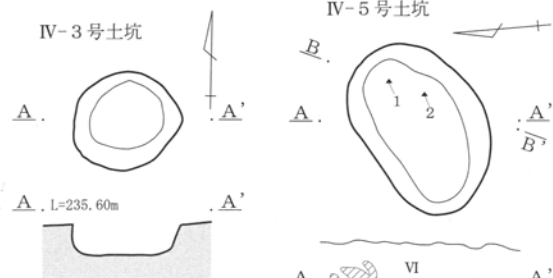


IV区-2号土坑 位置 2E-73 形状・規模 円形。

長軸・短軸・深さは、それぞれ0.8×0.7×0.3mである。埋没土 軽石混じりの暗褐色土。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。

IV区-3号土坑 位置 2E-71 形状・規模 円形。

長軸・短軸・深さは、それぞれ0.7×0.7×0.2mである。埋没土 軽石混じりの暗褐色土。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。



IV区-5号土坑 位置 2J-89 形状・規模 楕円形。

長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×0.9×0.8mである。埋没土 黒褐色土とロームブロックを含むにぶい黄褐色土。掘り込み面はVI層中と考えられるが、土坑埋没土とVIII層が近似しており、不明確。遺物 土坑北東部で耳飾りが2点、25cmの間隔を置いて出土。重複なし。所見 縄文前期。

5号土坑
1 にぶい黄褐色土。黒褐色土、硬質ローム(IX層)ブロックを含む。
2 黄褐色土。ロームブロックを含む。



第47図 1~3・5号土坑及び出土遺物

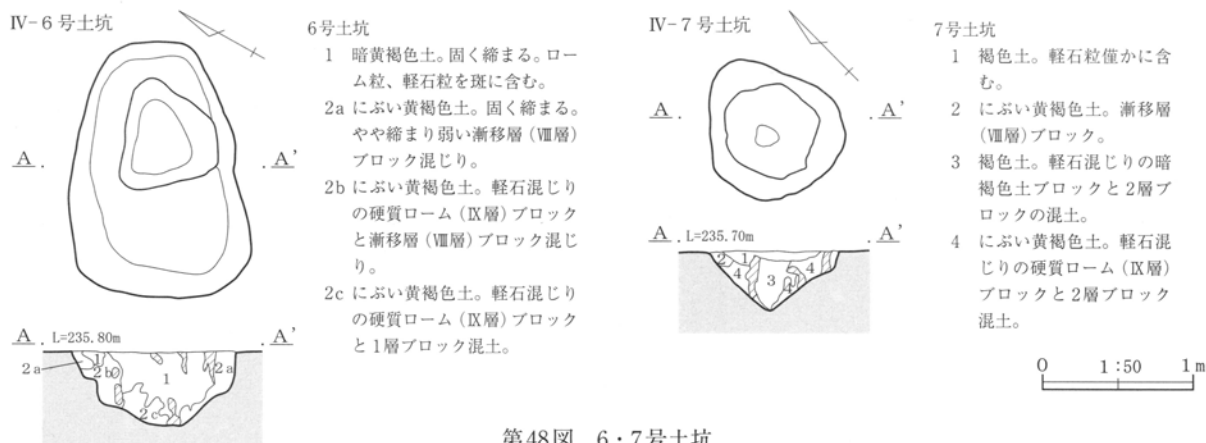
5号土坑 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	耳飾り	底面直上	完形	長 2.1 幅 2.3 厚 1.2 重 6.5	小型の珠状耳飾り。表面丁寧に研磨されており非常に滑らか。内側と切れ目部には製作時の擦り切り痕が残る。	葉ろう石 赤褐色
2	耳飾り	底面直上	完形	長 2.0 幅 2.4 厚 1.2 重 7.4	小型の珠状耳飾り。1と対になる。1同様に表面を丁寧に研磨、内側には擦り切り痕見られる。	葉ろう石 黄褐色

第3節 土坑・ピット・集石

IV区-6号土坑 位置 2K-89 形状・規模 隅丸長方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.7×1.0×0.5mである。埋没土 軽石混じりの暗黄褐色土主体。固く締まる。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

IV区-7号土坑 位置 2I-85 形状・規模 不整円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.0×0.9×0.4mである。断面は掘り鉢状。埋没土 軽石混じりの暗褐色土とロームブロックの混土。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。



第48図 6・7号土坑

4面土坑計測値一覧表

区	番号	グリッド	形状	規模(m)			重複	区	番号	グリッド	形状	規模(m)			重複
				長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ	
I	12	1I-26	円形	1.5	1.3	0.5	-	I	36	1G-21	楕円形	1.4	0.9	0.3	-
I	13	1I-26	不整円形	1.8	1.5	0.5	-	I	37	1I-18	円形	(1.1)	0.9	0.7	6号住居
I	14	1I-25	円形	1.0	0.9	0.5	-	I	38	1N-27	円形	-	-	1.2	-
I	15	1K-18	楕円形	1.2	0.8	0.1	-	I	39	1I-27	不整円形	1.7	1.3	0.4	-
I	16	1H-19	円形	1.5	1.4	0.6	-	I	40	1M-25	不整円形	2.3	1.0	0.6	-
I	17	1L-19	円形	1.4	1.3	0.7	-	I	41	1J-18	円形	1.3	1.3	0.6	-
I	18	1E-27	不整円形	1.0	0.6	0.2	-	I	42	1K-18	楕円形	1.5	1.3	0.7	-
I	19	1D-26	不整円形	1.0	0.7	0.2	-	I	43	1I-19	円形	1.2	1.1	0.6	-
I	20	1E-26	不整円形	1.1	0.9	0.4	-	I	44	1M-19	楕円形	2.1	1.0	0.3	-
I	21	1E-25	楕円形	1.4	0.7	0.3	-	I	45	1H-25	円形	1.0	1.0	0.4	-
I	22	1F-26	不整円形	1.0	0.6	0.2	-	I	46	1H-25	円形	1.3	1.1	0.5	-
I	23	1E-23	楕円形	1.0	0.7	0.5	-	I	47	1G-20	不整円形	1.6	1.5	1.1	5号住居
I	24	1F-22	不整円形	1.1	0.8	0.3	-	I	48	1L-18	楕円形	1.6	1.4	0.5	-
I	25	1F-22	楕円形	1.1	0.5	0.3	-	I	49	1H-18	円形	0.9	0.9	0.3	-
I	26	1F-22	楕円形	1.2	0.9	0.2	-	III	4	2C-64	不整円形	0.8	0.5	0.2	-
I	27	1H-19	楕円形	1.2	0.8	0.3	-	III	5	2E-59	楕円形	2.7	1.4	0.9	-
I	28	1I-18	楕円形	1.0	0.6	0.2	-	III	6	1T-64	円形	2.0	1.7	0.3	-
I	29	1J-17	楕円形	1.2	0.8	0.2	-	IV	1	2E-73	円形	0.8	0.7	0.3	-
I	30	1K-17	楕円形	0.9	0.7	0.2	-	IV	2	2E-73	円形	0.8	0.7	0.3	-
I	31	1K-17	楕円形	0.9	0.7	0.3	-	IV	3	2E-71	円形	0.7	0.7	0.2	-
I	32	1I-19	不整円形	(4.3)	1.0	0.5	23,24P	IV	5	2J-89	不整円形	1.3	0.9	0.8	-
I	33	1J-19	不整円形	1.6	1.3	0.8	25P	IV	6	2K-89	隅丸方形	1.7	1.0	0.5	-
I	34	1K-20	円形	0.8	0.8	0.2	-	IV	7	2I-85	円形	1.0	0.9	0.4	-
I	35	1J-26	不整円形	1.2	1.2	0.3	-								

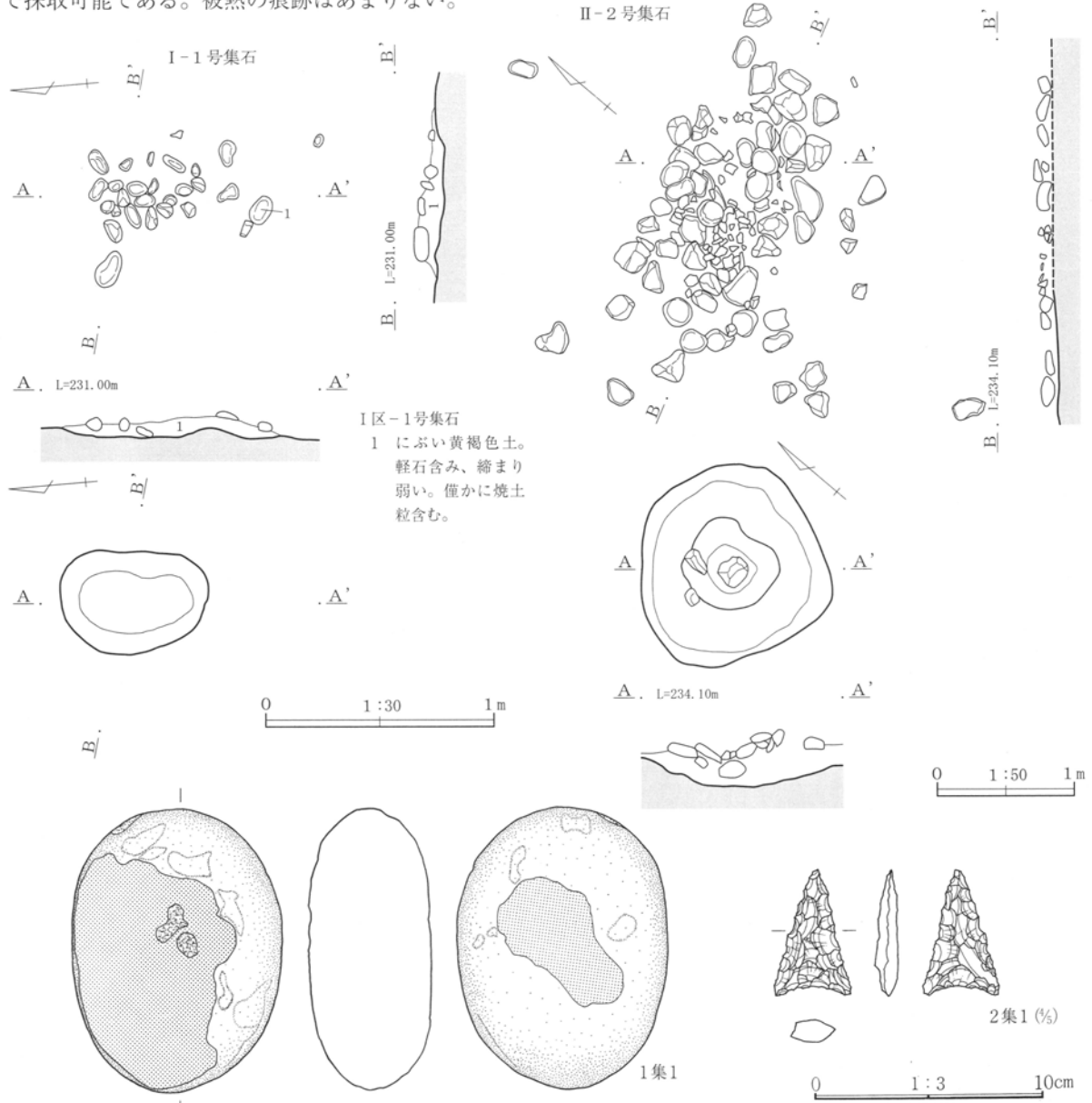
4面ピット計測値一覧表

区	番号	グリッド	規模(cm)			区	番号	グリッド	規模(cm)			区	番号	グリッド	規模(cm)		
			長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ
I	3	1G-23	58	49	17	I	19	1I-20	90	54	32	I	32	1J-18	57	46	22
I	4	1D-26	90	69	20	I	20	1H-20	73	47	24	I	33	1K-19	55	45	20
I	5	1D-26	112	59	30	I	22	1J-21	78	64	26	I	34	1J-19	(93)	(60)	58
I	7	1E-27	62	60	29	I	24	1J-19	57	50	19	I	37	1L-22	50	45	16
I	9	1D-27	88	55	36	I	25	1J-19	57	-	16	I	38	1L-24	53	52	16
I	12	1E-25	127	48	38	I	30	1J-18	76	41	23	I	39	1I-26	39	36	25
I	14	1D-26	64	50	20	I	31	1J-18	53	39	22	I	40	1I-27	50	48	35

第3章 4面・5面の調査

I区-1号集石 位置 1H-17 形状・規模 0.8×0.5mの範囲に自然石が分布。集石の下部には浅い凹みがある。主に拳大以下の礫で構成される。埋没土 におい黄褐色土で締まり弱く、僅かに焼土粒を含む。遺物 磨石が1点出土。重複 なし。所見 礫の種類は粗粒輝石安山岩などで、遺跡周辺で採取可能である。被熱の痕跡はあまりない。

II区-2号集石 位置 2B-46 形状・規模 3.8×1.8mの範囲に自然石が分布。集石の下部には深さ20cmの凹みがある。埋没土 褐色土。遺物 覆土中から石鏃が1点出土。重複 なし。所見 礫は被熱により赤味を帯びたものや、焼け跳ねて碎けているものがある。屋外炉と考えられる。



第49図 1・2号集石及び出土遺物

I区 集石 石器

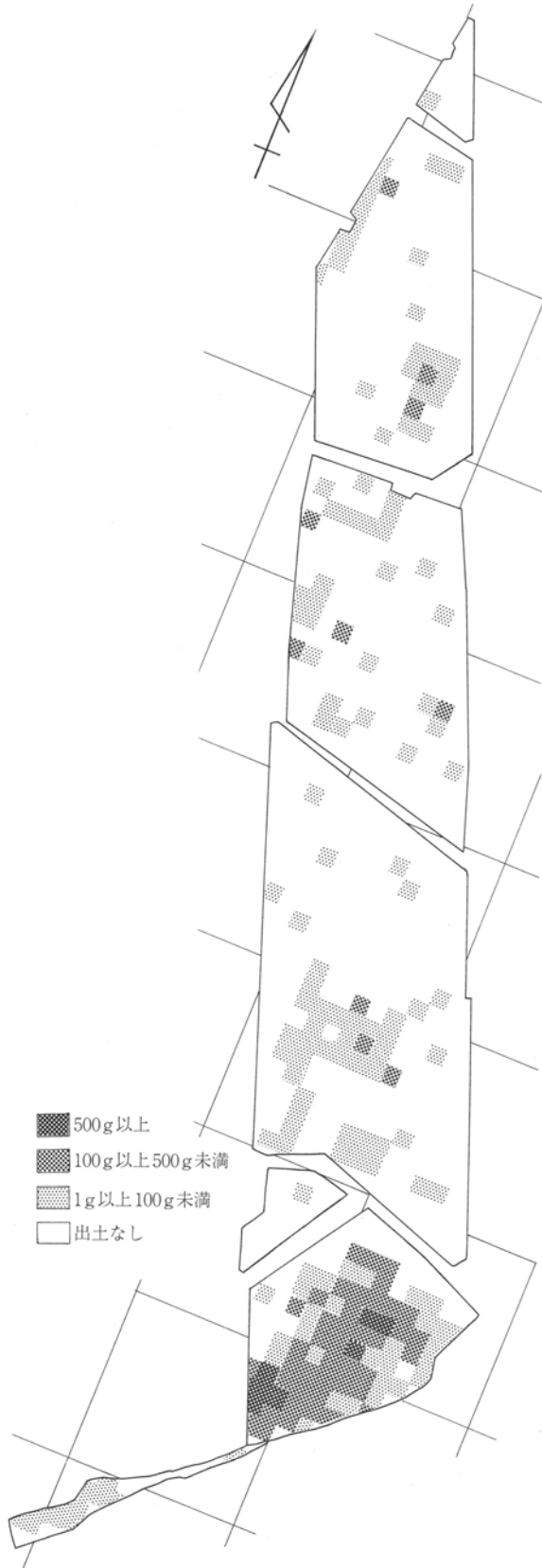
番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	磨石	1K-17	完形	長 12.2 幅 9.1 厚 5.3 重 914.7	盤状の円礫素材。表裏に磨り面、表面はより広い範囲が使用されている。上端と表面中央部に一部敲打痕。	石英閃緑岩

II区 集石 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	覆土	完形	長 2.3 幅 1.4 厚 0.4 重 1.0	やや細身の凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。	粗粒輝石安山岩

第4節 包含層

吹屋伊勢森遺跡では、基本土層のV層～VIII層が縄文遺物包含層である。遺物の密度は集落の検出され



第50図 諸磯b式土器 出土状況



第51図 縄文土器 出土状況

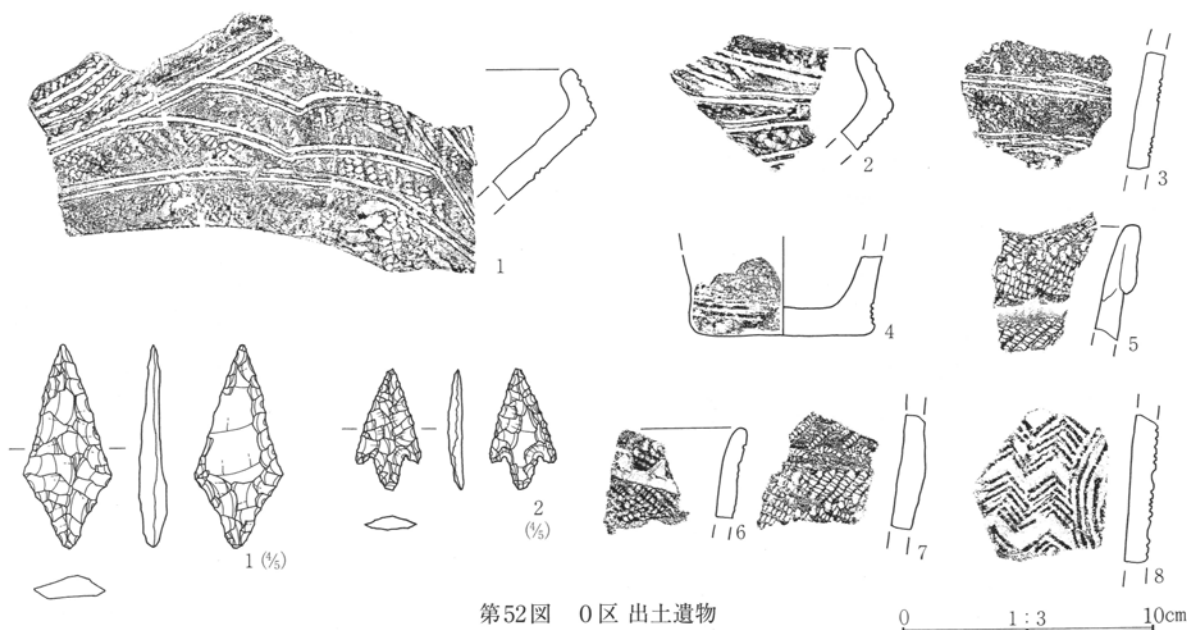
第3章 4面・5面の調査

たI区で高く、北に行くにつれて低くなる傾向が認められた。

土器は、諸磯b式が圧倒的に多く出土し、特にI区に集中している。この他にI区では、黒浜式や浮島式、諸磯c式、十三菩提式土器が少量出土している。II区では関山式、大木式、諸磯c式が少量出土し、中期の加曾利E式土器も見られた。III区では興津式土器の破片が僅かに出土した。IV区は北部で後期末の粗製土器片がまとまって出土した。同一個

体と思われる破片は多いが接合せず、器形の復元には至らなかった。段丘面の南端のI区に前期の土器の出土が多く、II区からIII区、IV区と段丘面の中央寄りに移るに従い、中期から後期へと出土する土器の分布に変化が生じている。

石器では、II区南部の1K-33グリッドで種子柴型石斧が検出された(出土地点は15頁第9図参照)。他にもIV区でスタンプ型石器が検出されるなど、数少ないが草創期の遺物が出土している。



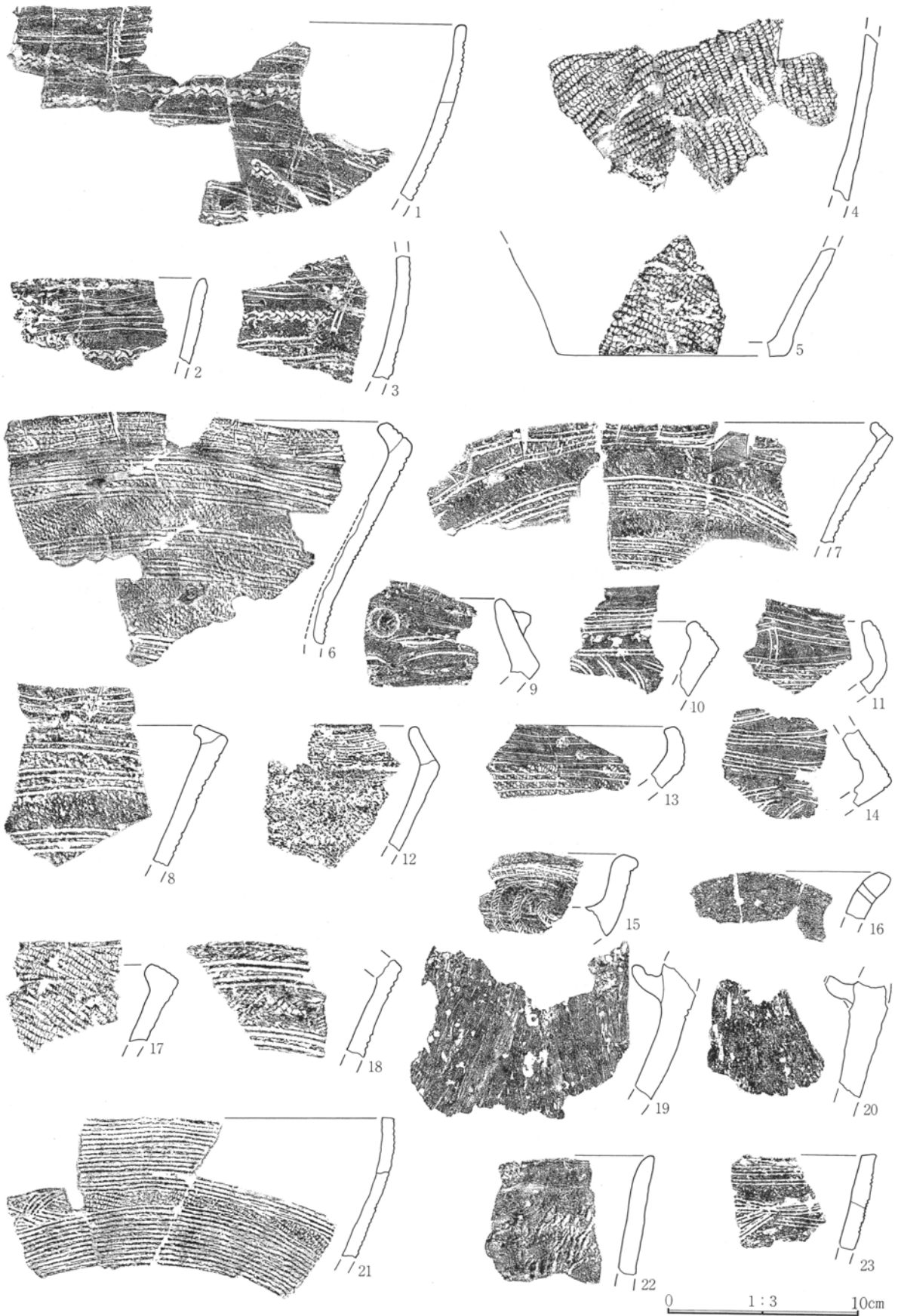
第52図 0区 出土遺物

0区 4面 土器

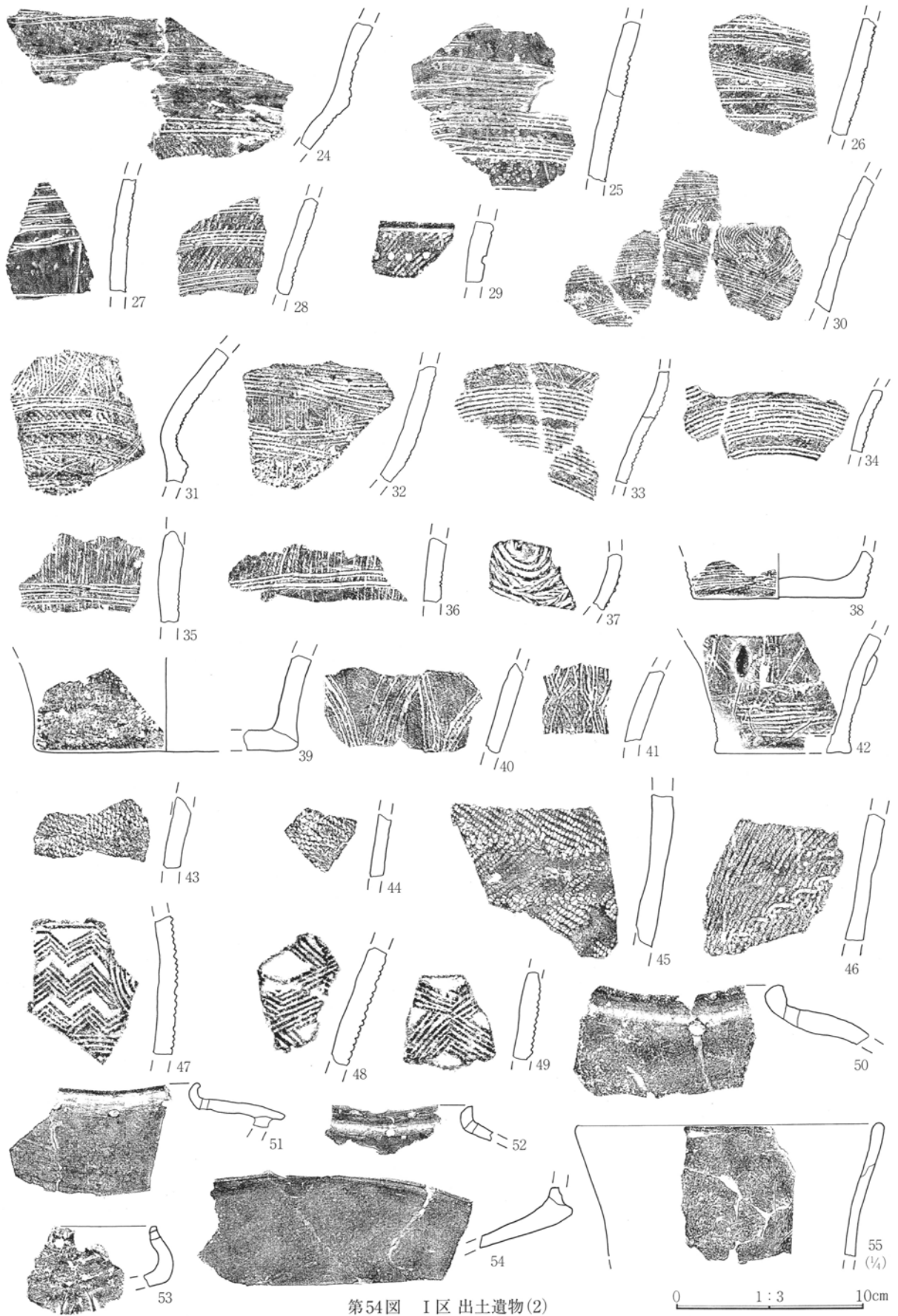
番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	1R-9	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁「く」の字状に屈曲し、波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)で弧線を施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	1R-9	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒少、細礫少	口縁「く」の字状に屈曲し、波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)で平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	1R-9	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
4	深鉢	1R-10	底部	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	底径7.0cm。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に沈線を施文。器面は荒れている。	諸磯b(新)式
5	深鉢	2B-6	口縁部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	口縁部折り返して肥厚させる。単節RL、LRの結束羽状縄文を施す。	十三菩提式
6	深鉢	1T-7	口縁部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	口縁部に単節RL、LRの結束羽状縄文を施文。三角形の陰刻を施す。	十三菩提式
7	深鉢	1R-10	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	単節RLと、LRの結束羽状縄文及び、結節部の回転を用いて施文。	十三菩提式
8	深鉢	1R-9	胴部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	集合沈線により鋸歯状、弧線状の文様を施文。鋸歯状の陰刻を施す。	十三菩提式

0区 グリッド 石器

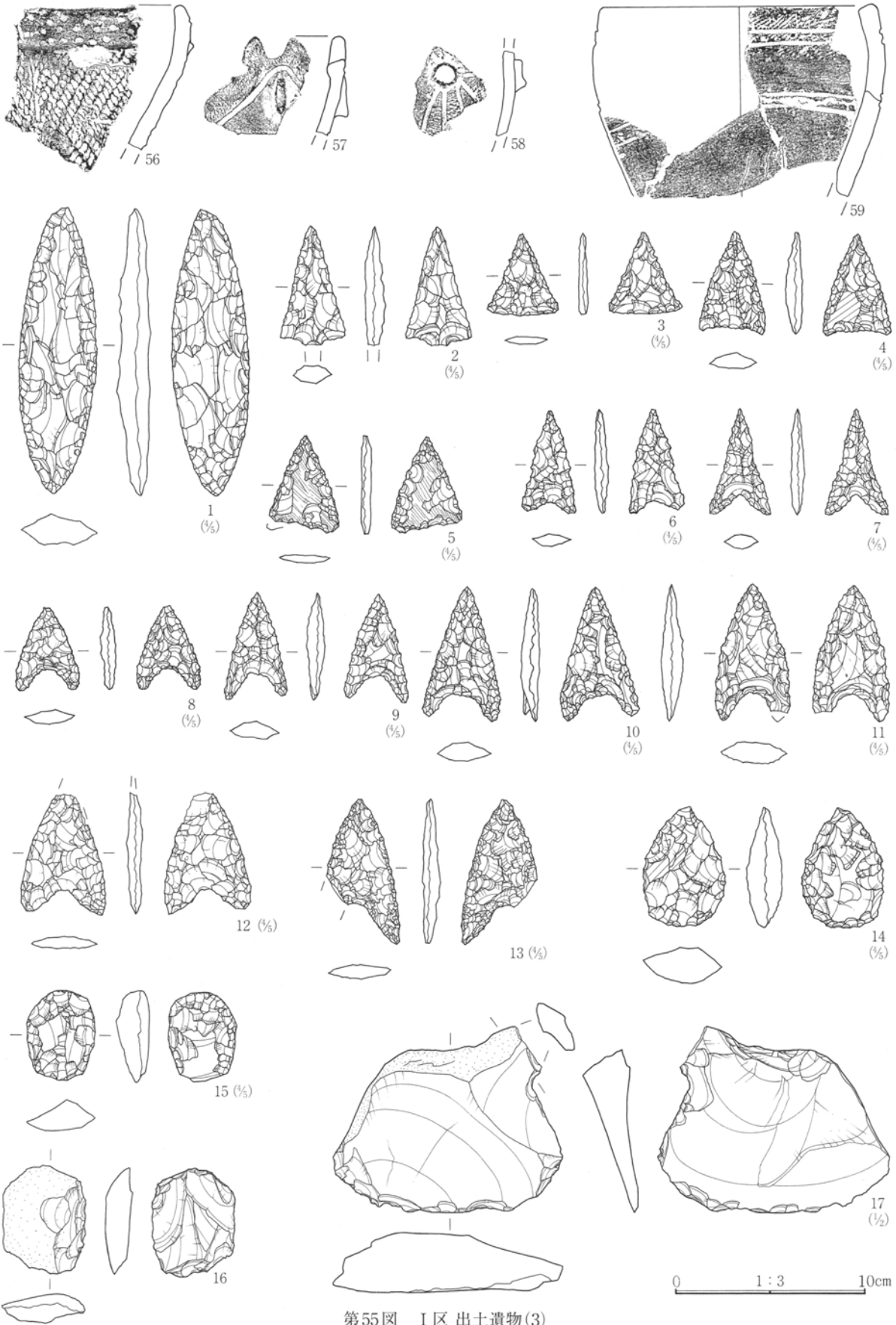
番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	石鏃	1L-14	完形	長 3.4 幅 1.5 厚 0.5 重 1.5	突基有茎鏃。剥片素材とし表面全面と裏面周辺に調整加える。押圧による斜行剥離見られる。	黒色頁岩
2	石鏃	2A-7	完形	長 2.0 幅 1.1 厚 0.3 重 0.4	小型の凹基有茎鏃。表裏ほぼ全面に調整及ぶが、裏面に一部素材剥片面残す。	黒色頁岩



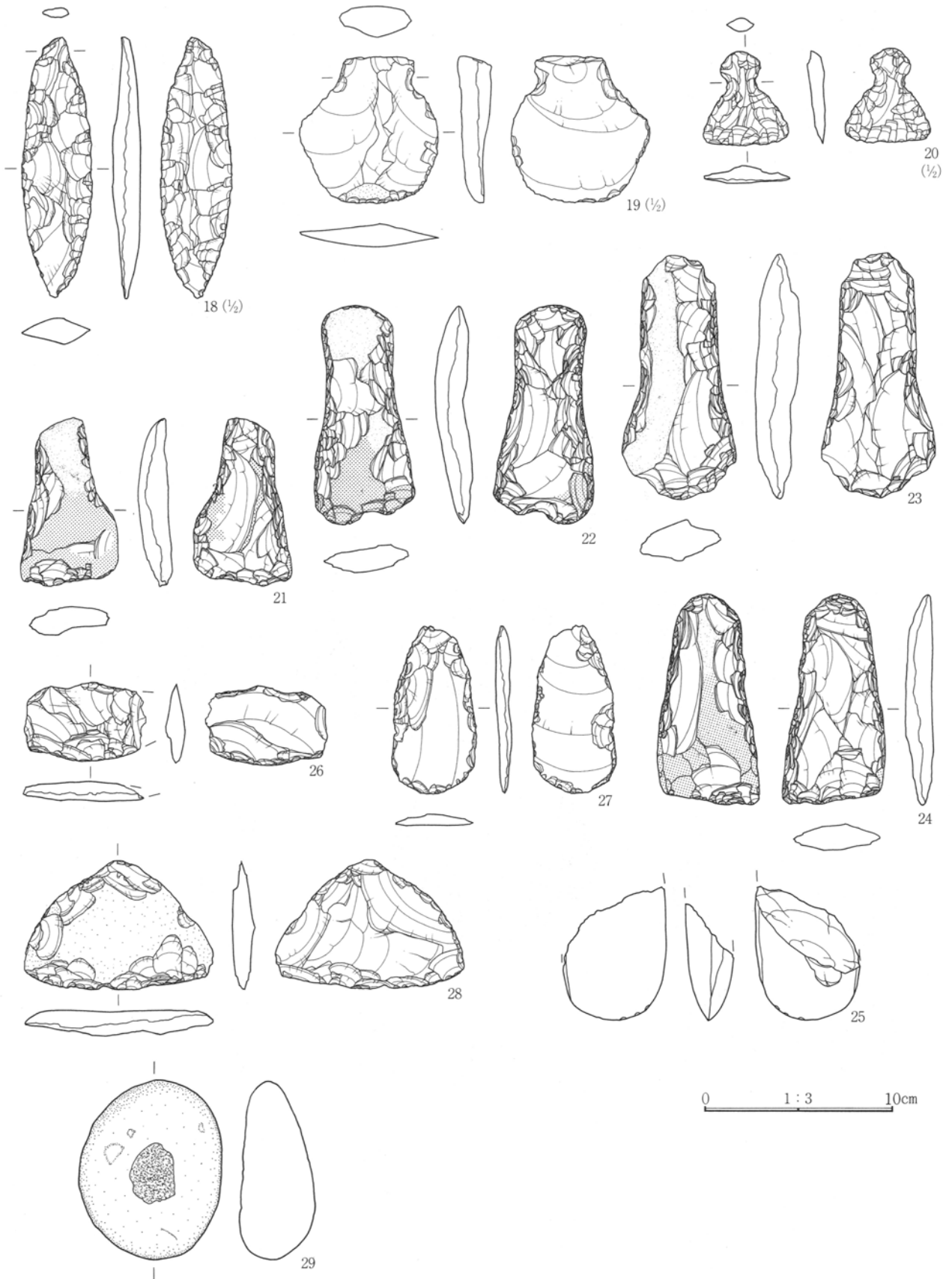
第53图 I区 出土遗物(1)



第54図 I区 出土遺物(2)



第55图 I区 出土遺物(3)



第56図 I区 出土遺物(4)

第4節 包含層

I区 4面 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	1L-18	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒少、繊維含む	平縁。半截竹管(巾3.5mm)で横位及び縦位に沈線を施文。コンパス状の文様を横位に施文。	黒浜式 繊維
2	深鉢	1L-17	口縁部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒少、繊維含む	平縁。半截竹管(巾3.5mm)で横位に沈線を施文。コンパス状の文様を横位に施文。	黒浜式 繊維
3	深鉢	1L-18	胴部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒少、繊維含む	半截竹管(巾3.5mm)で横位及び斜位に沈線を施文。コンパス状の文様を横位に施文。	黒浜式 繊維
4	深鉢	1H-22	胴部破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒少、繊維含む	単節RL、LRの羽状縄文。	黒浜式 繊維
5	深鉢	1I-22	底部破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒少、繊維含む	底径(12.0)cm。単節RL、LRの羽状縄文。	黒浜式 繊維
6	深鉢	1G-23	口縁部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁「く」の字状に屈曲。地文は単節RL斜行縄文。半截竹管(巾4mm)数本単位で横位に間隔をあげ沈線施文。内面剥離痕有。	諸磯b(新) 式
7	深鉢	1E-24	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4mm)数本単位で横位に間隔をあげ沈線施文。	諸磯b(新) 式
8	深鉢	1J-21	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口縁「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。地文は単節RL斜行縄文。半截竹管(巾4.5mm)数本単位で横位に間隔をあげ沈線施文。	諸磯b(新) 式
9	深鉢	1I-26	口縁部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂多、細礫やや多	「く」の字状口縁の一部。ボタン状貼付文あり。半截竹管(巾4mm)で沈線を施文。	諸磯b(新) 式
10	深鉢	1I-23	口縁部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒やや多	「く」の字状口縁の一部。半截竹管(巾3mm)で横位沈線及び弧線を施文。	諸磯b(新) 式
11	深鉢	1G-25	口縁部破片	①良好②にぶい橙色③粗砂多、角閃石目立つ	口縁部やや「く」の字状。半截竹管(巾4mm)で横位及び縦位の沈線を施文。	諸磯b(新) 式
12	深鉢	1H-23	口縁部破片	①普通 ②浅黄色 ③粗砂粒多	口縁「く」の字状に屈曲し、ゆるい波状。半截竹管により平行沈線を施文しているが、器面が荒れ磨滅。	諸磯b(新) 式
13	深鉢	1H-24	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部やや「く」の字状。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾4mm)により横位平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式
14	深鉢	1F-25	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	「く」の字状口縁の一部。半截竹管(巾3mm)で横位沈線及び弧線を施文。	諸磯b(新) 式
15	深鉢	1E-24	口縁部破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾4mm)で弧線を描き、その内側に細かな刻みを施す。	諸磯b(新) 式
16	深鉢	1E-23	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	無文。径3mmの円孔が6mmの間を隔てて2個並ぶ。	諸磯b(新) 式
17	深鉢	1J-22	口縁部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。地文は単節RLの斜行縄文。	諸磯b(新) 式
18	深鉢	1G-24	口縁部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	「く」の字状口縁の一部。地文は無節L?斜行縄文。半截竹管(巾5mm)により横位平行沈線を間隔をあげ施文。	諸磯b(新) 式
19	深鉢	1M-18	口縁部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	靴先状口縁の把手化したもの。無文。	諸磯b(新) 式
20	深鉢	1L-19	口縁部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多、細礫少	靴先状口縁の把手化したもの。無文。	諸磯b(新) 式
21	深鉢	1D-25	口縁部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	平縁。地文は単節RL斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により集合化した横位沈線施文。僅かに間隔をあげ弧線状の文様施文。	諸磯b(新) 式
22	深鉢	1L-17	口縁部破片	①良好②明赤褐色③粗砂粒多、角閃石目立つ	口縁部直線的に立ち、平縁。無節Lの縄文を施す。	諸磯b(新) 式
23	深鉢	一括	口縁部破片	①普通 ②黒褐色 ③粗砂粒多、細礫少	口唇部平坦面を作る。半截竹管(巾3mm)により横位及び斜位の沈線を施文。	諸磯b(新) 式
24	深鉢	1G-23	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	胴部に屈曲とくびれを持つ。地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管(巾3.5mm)により数本単位で横位に間隔をあげ沈線施文。	諸磯b(新) 式
25	深鉢	1M-19	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	半截竹管(巾3.5mm)により集合化した横位平行沈線を施文。	諸磯b(新) 式
26	深鉢	1L-18	胴部破片	①良好 ②暗褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾2.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新) 式
27	深鉢	1M-18	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	半截竹管(巾2.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新) 式
28	深鉢	1F-25	胴部破片	①普通 ②暗褐色 ③粗砂粒多、白色粒多	地文は無節Lの斜行縄文。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新) 式
29	深鉢	1G-24	胴部破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多、細礫少	地文は単節LRの斜行縄文。半截竹管で横位平行沈線を施文。径3.5mmの竹管による円形刺突文が横位に並ぶ。	諸磯b(新) 式
30	深鉢	1L-18	胴部破片	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	地文は単節RLの斜行縄文。半截竹管の集合化した沈線を横位、弧線、渦巻状に施文。	諸磯b(新) 式

第3章 4面・5面の調査

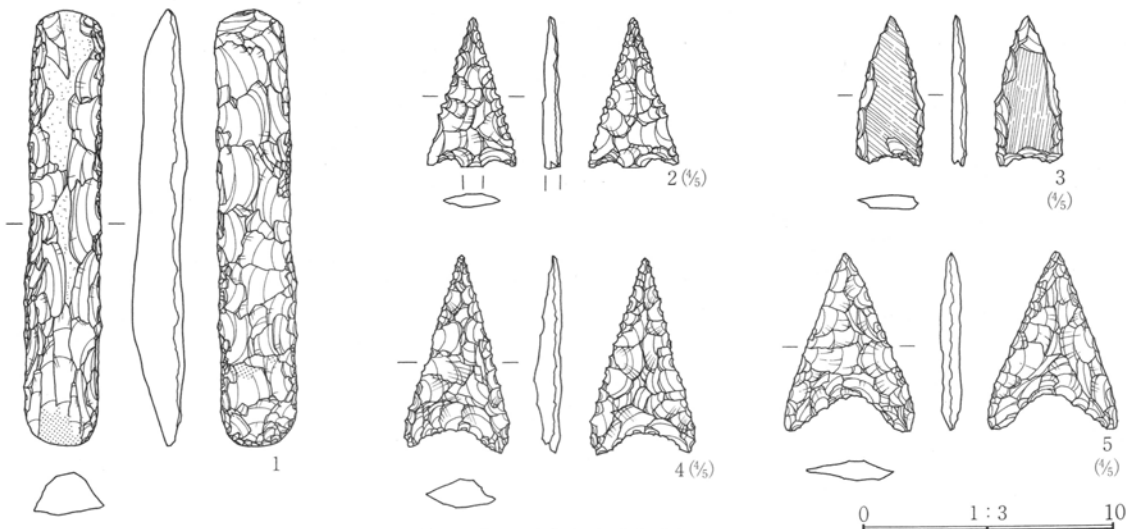
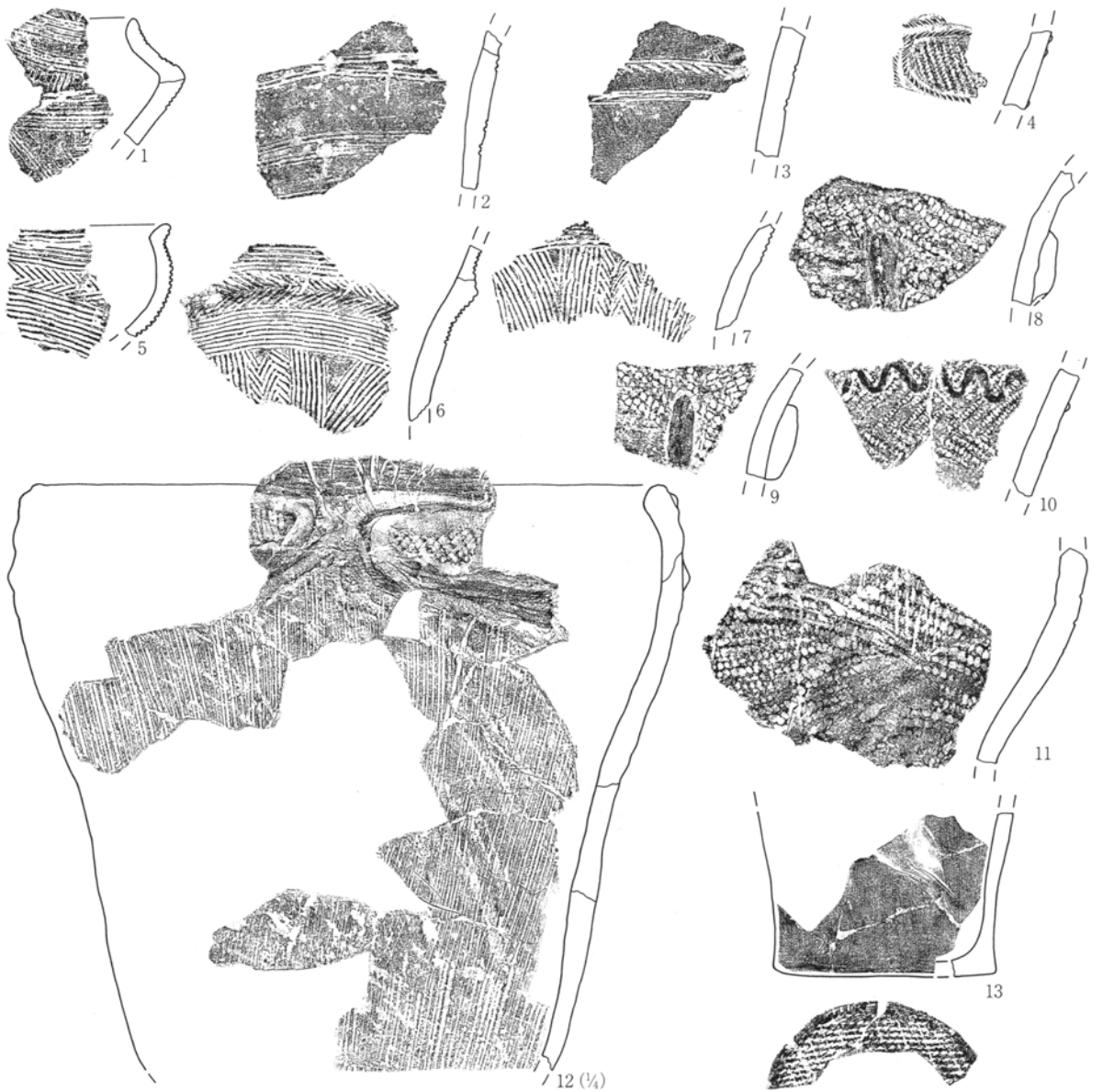
I区 4面 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
31	深鉢	1J-19	胴部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多、細礫少	胴部に屈曲とくびれ。半截竹管(巾2.5mm)の横位沈線で区画。くびれ部は縦位と「X」字の沈線、上部は縦位の弧線で施文。	諸磯b(新)式
32	深鉢	1L-17	胴部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3mm)による横位、縦位、弧線の沈線で、器面全体を埋める。	諸磯b(新)式
33	深鉢	1L-17	胴部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3.5mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。上部は斜位の沈線を施文。	諸磯b(新)式
34	深鉢	1L-19	胴部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に間隔を持って沈線施文。	諸磯b(新)式
35	深鉢	1I-19	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	撚糸文。無節L縄。半截竹管(巾3mm)により数本単位で横位に沈線を施文。	諸磯b(新)式
36	深鉢	1I-19	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	撚糸文。無節L縄。半截竹管(巾3mm)により2本単位で横位に沈線を施文。	諸磯b(新)式
37	深鉢	1L-21	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	浮線文。細い粘土紐を渦巻状に貼付し、刻み目を付ける。	諸磯b(新)式
38	深鉢	1H-19	底部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	底径(9.0)cm。半截竹管(巾3.5mm)により横位平行沈線を施文。	諸磯b(新)式
39	深鉢	1L-17	底部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多、細礫少	底径(14.0)cm。無文。	諸磯b(新)式
40	深鉢	1H-23	胴部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3mm)により2~3本単位で縦位の弧線を施文。	諸磯c式
41	深鉢	1F-24	胴部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒 やや多	地文は単節RL?の斜行縄文。半截竹管(巾2.5mm)で縦位の文様を施文。	諸磯c式
42	深鉢	1H-8	胴部~ 底部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾2.5mm)により横位、縦位、斜位の沈線を施文。棒状の貼付文あり。	諸磯c式
43	深鉢	1H-27	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。	浮島式
44	深鉢	1H-27	胴部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。	浮島式
45	深鉢	1H-26	胴部破片	①良好 ②橙色 ③粗砂粒多	上段は単節RL、LRの結束羽状縄文、下段は単節LR、RLの結束羽状縄文。結節部の回転を施文。	十三菩提式
46	深鉢	1M-18	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	無節Lの斜行縄文。結節部の回転を施文。	十三菩提式
47	深鉢	1I-24	胴部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	集合沈線を横位、弧状、鋸歯状に施す。鋸歯状の陰刻あり。	十三菩提式
48	深鉢	1J-22	胴部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3.5mm)により集合化した沈線を菱形に施文。中心に菱形の陰刻を施す。	十三菩提式
49	深鉢	1K-24	胴部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾3.5mm)により集合化した沈線を菱形に施文。中心に菱形の陰刻を施す。	十三菩提式
50	浅鉢	1H-20	口縁部 破片	①普通 ②黄褐色 ③粗砂粒多、細礫少	有孔浅鉢。無文。表面を磨く。口唇部直下に径7mmの円孔を有する。	諸磯b(新)式
51	浅鉢	1H-24	口縁部 破片	①良好②にぶい橙色③粗砂粒やや多、細礫少	有孔浅鉢。無文。表面をよく磨く。口唇部直下に長径5.5mm×短径3mmの楕円形の孔を有する。	諸磯b(新)式
52	浅鉢	1N-29	口縁部 破片	①普通 ②黄灰色 ③粗砂粒多	有孔浅鉢。無文。表面を磨く。口唇部直下に径4mmの円孔を有する。	諸磯b(新)式
53	浅鉢	1J-18	口縁部~ 胴部破片	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 やや多	有孔浅鉢。無文。口唇部直下に径4mmの円孔が1cmの間隔をあげ2個並ぶ。	諸磯b(新)式
54	浅鉢	1L-18	底部破片	①良好②にぶい赤褐色 ③粗砂粒多、白色粒多	無文。表面を磨く。	諸磯b(新)式
55	深鉢	1D-21	口縁部	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多	口径(21.8)cm。口縁部僅かに外反。平縁。無文。	前期不明
56	深鉢	一括	口縁部 破片	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒多、繊維含む	口縁上部に円形刺突文が並ぶ。隆線を横位に貼付。胴部にかけて単節RL、LRの羽状縄文を施文。	前期中頃 繊維
57	深鉢	1J-17	口縁部 破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 やや多	波状口縁で、波頂部に二山の突起を持つ。突起下に楕円形の貼付文あり。口唇部から沈線までの間を細かい刺突で充填する。	安行I式?
58	深鉢	1J-17	胴部破片	①良好②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 やや多	円形の貼付文あり。貼付文から延びる複数の沈線の間を細かい刺突で充填する。	安行I式?
59	深鉢	1L-17	口縁部 破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多	口径(14.2)cm。口縁部やや内湾する。口縁部に単節LRの斜行縄文。口縁部から胴部に2本組みの横位沈線を施文。	加曾利B1式

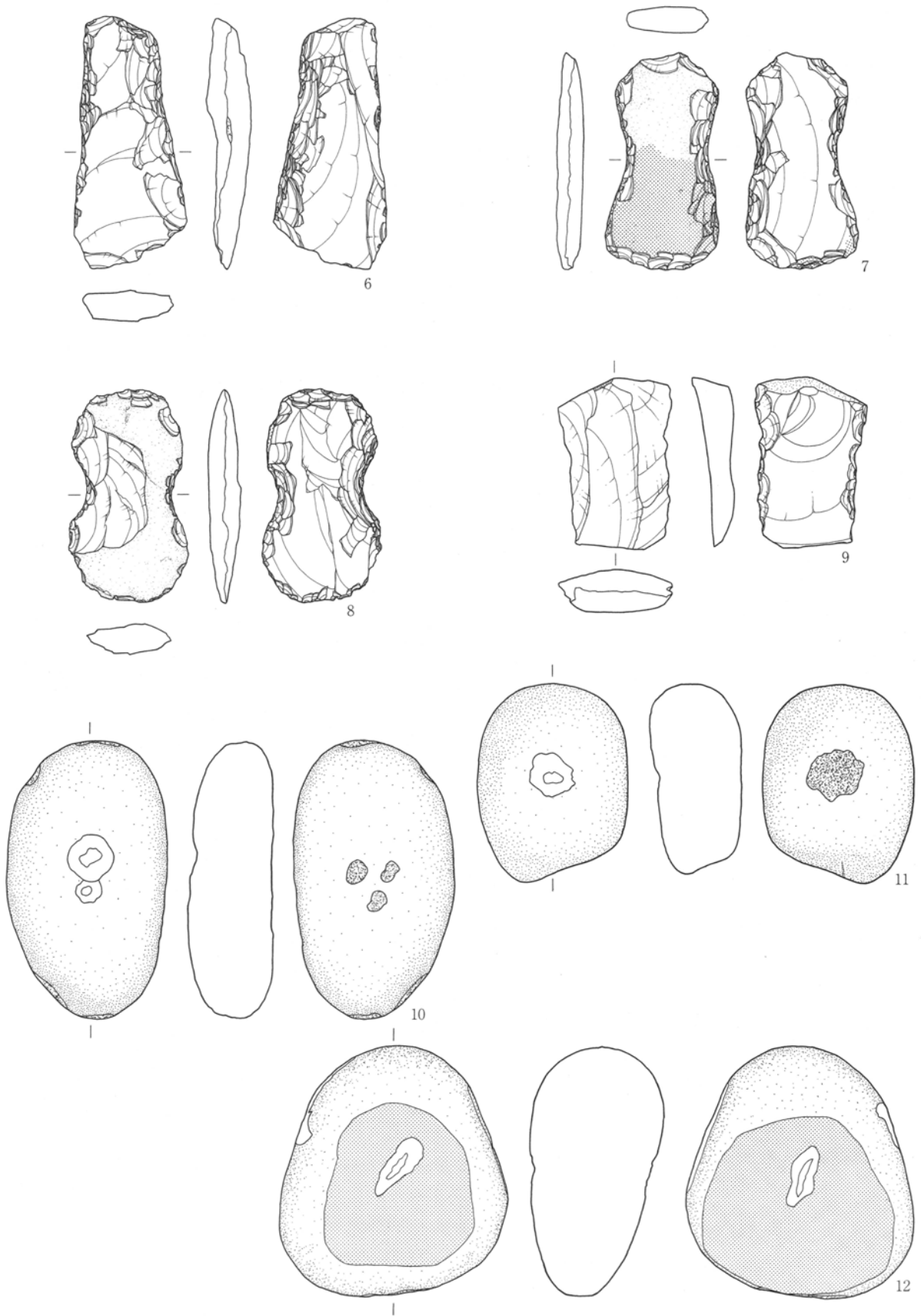
第4節 包含層

I区 グリッド 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)			特 徴	石 材
1	尖頭器	1E-23	完形	長 6.3 厚 0.7	幅 1.7 重 7.1	表裏に調整加え細身の木葉形に整形。器体中央部付近に最大幅を持つ。表面先端の小剥離は使用時の破損の可能性有り。	珪質頁岩	
2	石鏃	1G-21	茎部欠損	長 2.7 厚 0.5	幅 1.5 重 1.3	平基有茎鏃。両面全面に調整加え整形。両側辺は僅かに内湾する。茎部欠損。	黒色頁岩	
3	石鏃	1J-20	完形	長 1.8 厚 0.3	幅 1.6 重 0.5	平基無茎鏃。薄手の剥片の両面ほぼ全面に調整加え整形。両側辺は僅かに内湾。	チャート	
4	石鏃	1I-22	完形	長 2.3 厚 0.4	幅 1.5 重 0.9	凹基無茎鏃であるが、基部は僅かに内湾するのみ。表裏に細かな調整加えるが、裏面に一部素材剥片面残す。	黒曜石	
5	石鏃	1J-24	一部欠損	長 2.2 厚 0.2	幅 1.5 重 0.5	凹基無茎鏃。薄手の剥片素材とし、両面周辺に調整加え整形した後両面を研磨。斜め方向の細かな擦痕見られる。左脚欠損。	黒曜石	
6	石鏃	1I-24	完形	長 2.3 厚 0.3	幅 1.2 重 0.6	細身の凹基無茎鏃。両面全面に調整加える。調整はやや粗く、両側辺は鋸歯状を呈する。	チャート	
7	石鏃	1K-24	完形	長 2.4 厚 0.3	幅 1.4 重 0.6	細身の凹基無茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。器体中央付近で両側が内側に僅かに屈曲、先端さらに細く尖る。	チャート	
8	石鏃	1K-18	完形	長 1.8 厚 0.3	幅 1.4 重 0.5	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。やや小型。	黒曜石	
9	石鏃	1L-24	完形	長 2.4 厚 0.4	幅 1.4 重 0.8	凹基無茎鏃。両面に調整加えるが、裏面に一部素材剥片面残す。裏面は押圧による斜行剥離見られる。	赤碧玉	
10	石鏃	1K-19	完形	長 3.0 厚 0.4	幅 1.7 重 1.3	凹基無茎鏃。両面に細かな調整加え整形するが、一部に素材剥片面残す。	黒曜石	
11	石鏃	1G-23	一部欠損	長 3.0 厚 0.5	幅 1.7 重 2.0	凹基無茎鏃。両面に細かな調整加え整形するが、一部に素材剥片面残す。右脚先端部欠損。	黒色安山岩	
12	石鏃	1F-26	一部欠損	長 2.7 厚 0.4	幅 1.8 重 1.5	凹基無茎鏃。薄手の剥片素材とし、両面全面に細かな調整加え整形。先端部欠損。	黒色頁岩	
13	石鏃	1J-23	左脚欠損	長 3.2 厚 0.4	幅 1.6 重 1.2	凹基無茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。比較的脚部が長く、器体全長の1/3程度に達する。左脚部欠損。	黒曜石	
14	石鏃	1I-24	完形	長 2.7 厚 0.8	幅 1.8 重 3.5	突基無茎鏃。両面に調整加えるが、一部に素材剥片面残す。かなり厚手。	チャート	
15	楔形石器	1L-16	完形	長 2.0 厚 0.6	幅 1.5 重 1.8	剥片素材とし、表裏の周辺に調整加え楕円形状に整形。	黒曜石	
16	楔形石器	1L-21	完形	長 5.7 厚 1.6	幅 4.4 重 42.2	剥片素材とし、裏面ほぼ全面に求芯状に剥離を加える。表面右側にも裏面から調整加える。	黒色頁岩	
17	石匙	1J-20	一部欠損	長 6.6 厚 2.1	幅 8.2 重 75.7	横型の石匙。調整の頻度は低く、刃部表裏とつまみの挟り部分付近にやや不規則な調整が加えられる。つまみ端部欠損。	黒色頁岩	
18	石匙	1I-18	完形	長 9.3 厚 1.0	幅 2.5 重 22.4	縦型の石匙。剥片素材で表裏に調整施すが一部素材面残す。上部の末端には自然面を残し、僅かに挟りを入れる。	黒色頁岩	
19	石匙(?)	1I-19	完形	長 5.2 厚 1.2	幅 4.9 重 25.4	縦横の比がほぼ等しい円形状の剥片を素材。調整の頻度は低く、刃部とつまみの挟り部に調整加えるのみ。	黒色頁岩	
20	石匙	1J-20	完形	長 3.3 厚 0.6	幅 3.1 重 4.3	横型の石匙。剥片を素材とし表裏周辺に調整加える。つまみ部以外は押圧による桶状の剥離が見られる。	チャート	
21	打製石斧	1L-18	完形	長 8.9 厚 1.6	幅 5.2 重 74.6	撥形。剥片素材とし表裏周辺に調整加える。器体下半が全体に摩耗、特に表面側が強い。摩耗を切って刃部再生を行っている。	黒色頁岩	
22	打製石斧	1E-22	完形	長 11.5 厚 1.7	幅 5.3 重 113.0	撥形。剥片素材とし表裏周辺に調整加える。器体下半が全体に摩耗、刃部裏面には摩耗を切って刃部再生が行われる。	黒色頁岩	
23	打製石斧	1I-21	完形	長 12.9 厚 2.3	幅 6.0 重 178.2	撥形。横長の剥片素材とし表裏周辺に調整加える。器体下半を中心に、稜上や凸部に摩耗見られる。	細粒輝石 安山岩	
24	打製石斧	1J-22	完形	長 11.1 厚 1.4	幅 5.4 重 101.6	撥形。表面周辺と裏面全面に調整加える。器体下半が全体に摩耗、特に刃部が強い。摩耗を切って刃部を再生している。	黒色頁岩	
25	磨製石斧	1L-19	刃部破片	長 6.9 厚 2.4	幅 5.3 重 106.1	表裏丁寧な研磨によって仕上げてある。刃部に刃こぼれ状の小剥離僅かに見られる。	変玄武岩	
26	スクレイパー	1L-18	一部欠損	長 4.2 厚 1.1	幅 6.5 重 32.2	横長剥片の両端表裏に調整加える。打面部側に緩く外湾する刃部を作出。右側欠損。	黒色頁岩	
27	スクレイパー	1L-18	完形	長 8.8 厚 0.8	幅 4.5 重 35.5	縦長の剥片素材とし、表裏周辺に調整加える。器体右側に比べ左側の調整やや不均質。	黒色頁岩	
28	スクレイパー	1I-19	完形	長 6.8 厚 1.4	幅 10.0 重 91.5	横長剥片素材とし、表裏周辺に調整加える。素材端部に直線的な刃部を作出。	細粒輝石 安山岩	
29	敲石	1K-18	完形	長 9.4 厚 4.0	幅 7.5 重 381.4	盤状の円礫素材。表面中央に弱い敲打痕認められる。	粗粒輝石 安山岩	



第57図 II区 出土遺物(1)



第58図 II区 出土遺物(2)

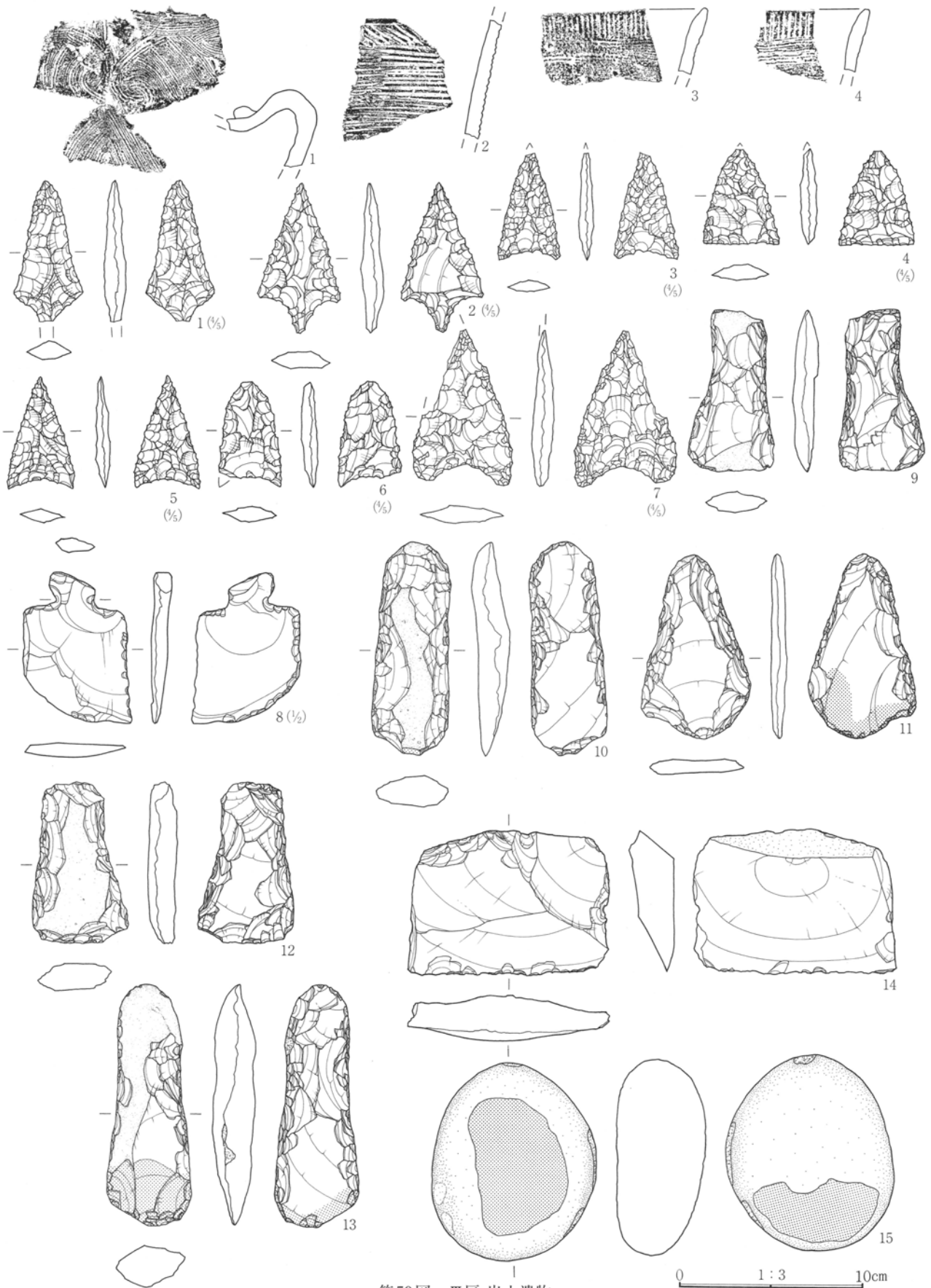
第3章 4面・5面の調査

II区 4面 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	1Q-36	口縁部破片	①良好 ②橙色 ③粗砂粒多	口縁部「く」の字状に屈曲する。半截竹管(巾2.5mm)により集合化した沈線で、横位及び斜位に施文。	諸磯b(新)式
2	深鉢	1Q-31	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫少	半截竹管(巾3mm)により2本単位で横位に間隔を持って沈線を施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	1R-36	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾4mm)により横位平行沈線を施文。その上に刻みを施す。	諸磯b(新)式
4	深鉢	1G-32	胴部破片	①良好 ②赤褐色 ③粗砂粒多	地文は単節RLの斜行縄文。細い粘土紐を貼付し、その上に細かい刻みを施す。	諸磯b(新)式
5	深鉢	1S-40	口縁部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多	口唇部外反する。半截竹管(巾3mm)により集合化した沈線を横位及び矢羽根状に施文。	諸磯c式
6	深鉢	1S-40	胴部破片	①良好 ②浅黄色 ③粗砂粒多、白色粒目立つ	胴部に屈曲を持つ。半截竹管(巾3mm)により屈曲部に矢羽根、他に横位、縦位等の沈線を器面全体に施す。	諸磯c式
7	深鉢	1P-38	胴部破片	①良好②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多、白色粒多	半截竹管(巾3mm)により横位、縦位、矢羽根状の沈線を器面全体に施す。	諸磯c式
8	深鉢	1M-38	胴部破片	①普通 ②黄褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。縦位に棒状の貼付文(長さ3cm)を有する。	諸磯c式
9	深鉢	1N-38	胴部破片	①普通 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	単節RLの斜行縄文。縦位に棒状の貼付文(長さ3.3cm)を有する。	諸磯c式
10	深鉢	1R-36	胴部破片	①良好 ②明赤褐色 ③粗砂粒多	単節RL、LRの羽状縄文。粘土紐を鋸歯状に横位に貼付。	大木式
11	深鉢	1Q-39	胴部破片	①良好 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫少	単節RLの斜行縄文。平行沈線で「V」字状の文様を施文。	前期後半
12	深鉢	1M-38	口縁部～胴部	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂粒多、細礫少	口縁部に隆帯と沈線により楕円形区画文を並べる。区画内は単節RL斜行縄文または沈線を施す。胴部は縦位の条線を施文。	加曾利E式
13	深鉢	1O-40	胴部～底部	①良好 ②暗赤褐色 ③粗砂粒 やや多	無文。外面をよく研磨する。底面に網代痕あり。	堀之内2式

II区 グリッド 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	局部磨製石斧	1K-33	完形	長 17.3 幅 3.3 厚 2.0 重 139.3	表面急角度、裏面平坦な剥離加え断面台形状に整形。刃部は下端からの縦長の調整加えた後研磨。裏面下部にも一部研磨有り。	黒色頁岩
2	石鏃	1M-39	茎部欠損	長 2.5 幅 1.5 厚 0.4 重 0.7	凹基有茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。両側縁は細かな鋸歯状を呈する。茎部欠損。	黒色頁岩
3	石鏃	1M-49	完形	長 2.5 幅 1.1 厚 0.3 重 0.7	凹基無茎鏃。薄手の剥片を素材とし、両面周辺に調整加え整形した後両面を研磨。斜め方向の擦痕が見られる。	珪質頁岩
4	石鏃	1R-37	完形	長 3.3 幅 1.8 厚 0.5 重 1.7	凹基無茎鏃。表裏両面に細かな調整加え整形。やや細身で先端尖る。	珪質頁岩
5	石鏃	2A-49	完形	長 2.9 幅 2.1 厚 0.3 重 1.6	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。	黒色安山岩
6	打製石斧	1Q-37	完形	長 12.9 幅 5.8 厚 2.8 重 160.4	撥形。横長剥片素材とし、表裏両側に調整。刃部は素材剥片の縁辺をそのまま残す。側縁は加撃によりつぶれている。	細粒輝石安山岩
7	打製石斧	1Q-37	完形	長 11.1 幅 5.8 厚 1.4 重 120.1	分銅形。横長剥片素材とし表裏周辺に調整加える。表面上半に摩擦面、裏面全面弱い摩擦。摩擦を切って刃部再生施す。	粗粒輝石安山岩
8	打製石斧	1N-48	完形	長 11.0 幅 6.0 厚 1.6 重 129.6	分銅形。横長剥片素材とし表裏周辺に調整加える。表裏全体に弱い摩擦見られるが、上下両端と挟り部分特に強い。	珪質頁岩
9	スクレパ [*]	1O-49	完形	長 8.8 幅 5.8 厚 2.2 重 108.2	縦長の剥片素材とし、裏面の両側に調整加え刃部作出。刃部は鋸歯状を呈する。	黒色頁岩
10	凹石	1N-38	完形	長 14.3 幅 8.3 厚 4.3 重 724.2	盤状の円礫素材。表面中央に大小の凹み各1個。裏面中央と上下両端、左側上位に敲打痕。左側下位には研磨面。	粗粒輝石安山岩
11	凹石	1Q-37	完形	長 9.8 幅 7.8 厚 4.7 重 567.3	盤状の円礫素材。表面中央に凹み1個。裏面中央に浅い敲打痕。	粗粒輝石安山岩
12	磨石	1N-39	完形	長 12.3 幅 11.3 厚 6.8 重 1442.1	盤状の円礫素材。表裏に細長い凹み各1個。凹みの周囲と右側面に磨り面。下端に敲打痕。	石英閃緑岩



第59圖 III区 出土遺物

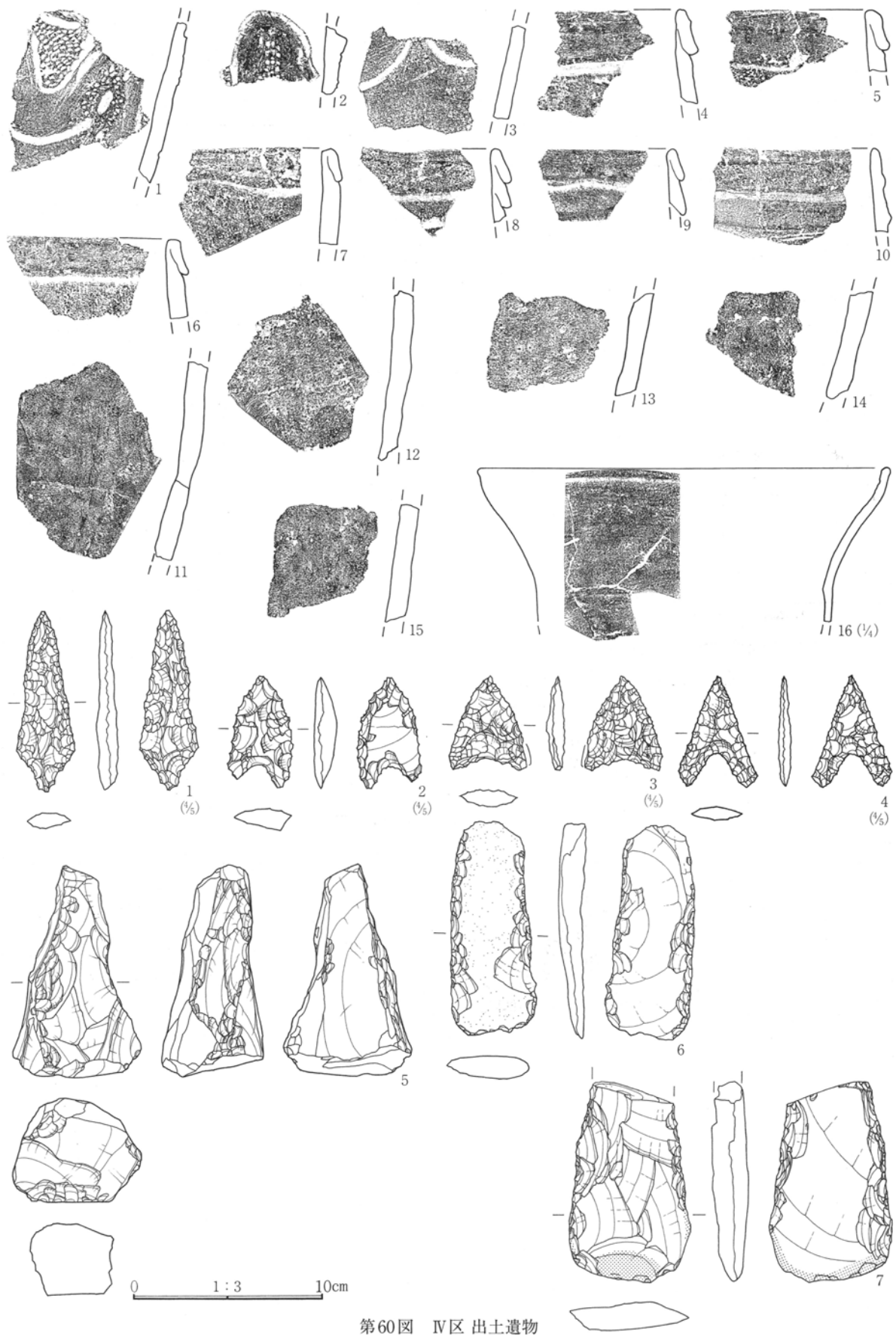
第3章 4面・5面の調査

Ⅲ区 4面 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	2H-66	口縁部破片	①良好 ②にぶい橙色 ③粗砂粒多、白色粒多	靴先状口縁の一部。半截竹管(巾3mm)による集合化した沈線で弧線、渦巻を施文。ボタン状の貼付文あり。	諸磯b(新)式
2	深鉢	2H-66	胴部破片	①良好 ②にぶい褐色 ③粗砂粒多	半截竹管(巾4mm)による集合化した沈線で横位及び斜位に施文。	諸磯b(新)式
3	深鉢	2D-60	口縁部破片	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂多、石英・長石多	平縁。口唇部から縦位に集合沈線を施文。その下位を半截竹管(巾3mm)で横位平行沈線を施文。	興津式
4	深鉢	2D-59	口縁部破片	①普通②にぶい黄橙色 ③粗砂多、石英・長石多	Ⅲ区-3と同一個体。	興津式

Ⅲ区 グリッド 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特徴	石材
1	石鏃	1R-61	茎部欠損	長 3.2 幅 1.5 厚 0.5 重 2.0	突基有茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。両側は緩やかに内湾する。茎部欠損。	黒色頁岩
2	石鏃	1T-60	完形	長 3.4 幅 1.9 厚 0.5 重 2.4	平基有茎鏃。両面に細かな調整加えるが、一部に素材剥片面残す。両側は細かな鋸歯状を呈する。	黒色頁岩
3	石鏃	1T-64	ほぼ完形	長 2.2 幅 1.7 厚 0.4 重 0.8	凹基無茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。裏面には押圧による斜行剥離が見られる。先端を僅かに欠損。	チャート
4	石鏃	1Q-57	ほぼ完形	長 2.2 幅 1.7 厚 0.4 重 1.4	平基無茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。先端を僅かに欠損。	チャート
5	石鏃	2F-58	完形	長 2.6 幅 1.5 厚 0.3 重 1.0	凹基無茎鏃。両面ほぼ全面に調整加え整形するが、表面に一部素材剥片面残す。	チャート
6	石鏃	1S-57	ほぼ完形	長 2.4 幅 1.4 厚 0.4 重 1.3	凹基無茎鏃。両面全面に調整加え整形。器体上位で両側が屈曲し、先端の角度が大きくなる。左脚欠損。	黒色安山岩
7	石鏃	2D-62	一部欠損	長 3.6 幅 2.3 厚 0.5 重 2.7	大型の凹基無茎鏃。両面全面に細かな調整加え整形。先端から左側上半にかけて槌状の剥離痕あり。使用時の欠損と思われる。	黒曜石
8	石匙	2F-56	完形	長 5.5 幅 4.0 厚 0.8 重 14.1	剥片素材。調整の頻度は低く、つまみ挟り部分の表裏、表面右側、裏面右側～下端にかけて調整加える。	黒色頁岩
9	打製石斧	2E-63	完形	長 8.8 幅 4.6 厚 1.3 重 49.3	撥形。表裏のほぼ全面に調整加えるが、一部表面に自然面残す。刃部の摩耗は見られない。	黒色頁岩
10	打製石斧	1S-56	完形	長 11.6 幅 4.2 厚 1.8 重 110.0	短冊形。横長の剥片素材とし表裏周辺に調整加える。刃部に弱い摩耗見られる。	細粒輝石安山岩
11	打製石斧	1S-54	完形	長 9.9 幅 5.9 厚 0.9 重 50.6	撥形。剥片素材とし表裏周辺に調整加える。裏面刃部にやや強い摩耗見られる。	黒色頁岩
12	打製石斧	2G-66	完形	長 8.8 幅 5.2 厚 1.5 重 82.5	撥形。剥片素材とし表裏周辺に調整加える。刃部の調整はやや急角度で、再生がなされたものと思われる。刃部に弱い摩耗。	細粒輝石安山岩
13	打製石斧	1T-56	完形	長 13.1 幅 4.6 厚 2.3 重 162.5	撥形。剥片素材とし表裏周辺に調整加える。刃部に摩耗見られる。	黒色頁岩
14	スクレイパー	2D-59	完形	長 7.9 幅 11.0 厚 2.6 重 227.3	横長の剥片素材とし、端部の主に表面側に調整加え刃部作出。刃部は細かな鋸歯状を呈する。	黒色頁岩
15	磨石	2G-65	完形	長 10.6 幅 8.9 厚 4.7 重 684.3	盤状の円礫素材。表裏に磨り面、表面はより滑らか。上端と右側面に敲打痕。	石英閃緑岩



第60圖 IV区 出土遺物

第3章 4面・5面の調査

IV区 4面 土器

番号	器種	出土位置	残存	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵	備考
1	深鉢	2D-75	胴部破片	①普通 ②にぶい橙色 ③粗砂粒 やや多	沈線と隆帯で区画。区画内及び貼付文の周辺に刺突を施す。中央に刺突を施した楕円形の貼付文を有する。	中期
2	深鉢	2E-74	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒 やや多	沈線と隆帯で区画。区画内に刺突文を施文。	中期
3	深鉢	2D-73	胴部破片	①普通 ②褐色 ③粗砂粒 やや多	弧線状の沈線を施文。表面を磨く。	中期
4	深鉢	2I-86	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒 多、中礫 少	折り返し状口縁。無文。	後期末
5	深鉢	2I-86	口縁部破片	①普通②にぶい赤褐色 ③粗砂粒 多、細礫 少	折り返し状口縁。無文。器面に細かいひび割れあり。IV区-4と同一個体。	後期末
6	深鉢	2I-86	口縁部破片	①普通 ②褐色 ③粗砂粒 多	折り返し状口縁。無文。	後期末
7	深鉢	2I-86	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒 多、細礫 少	折り返し状口縁。無文。	後期末
8	深鉢	2J-86	口縁部破片	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 やや多	2段の折り返し状口縁。無文。	後期末
9	深鉢	2J-86	口縁部破片	①普通 ②灰黄褐色 ③粗砂粒 やや多	2段の折り返し状口縁。無文。IV区-8と同一個体。	後期末
10	深鉢	2H-84	口縁部破片	①普通 ②にぶい褐色 ③粗砂粒 多	2段の折り返し状口縁。接合部をよく撫でる。無文。	後期末
11	深鉢	2I-86	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	無文。	後期末
12	深鉢	2I-86	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	無文。	後期末
13	深鉢	2I-86	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	無文。	後期末
14	深鉢	2I-86	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	無文。	後期末
15	深鉢	2I-86	胴部破片	①普通 ②明褐色 ③粗砂粒多、細礫やや多	無文。	後期末
16	深鉢	2E-72	口縁～胴部	①普通②にぶい黄褐色 ③粗砂粒 多	平縁。口縁部外反する。無文。入念に撫でを施す。	堀之内2式

IV区 グリッド 石器

番号	器種	出土位置	残存	法量(cm・g)	特 徴	石 材
1	石鏃	2I-86	完形	長 4.0 幅 1.3 厚 0.4 重 1.8	非常に細身の突基有茎鏃。器体中央付近で両側が僅かに内湾。茎部先端僅かに欠損か。	チャート
2	石鏃	2F-78	完形	長 2.4 幅 1.5 厚 0.5 重 1.8	凹基無茎鏃。両面周辺に調整加え整形、表裏に一部素材剥片面残す。	チャート
3	石鏃	2L-82	ほぼ完形	長 2.0 幅 1.7 厚 0.4 重 1.0	凹基無茎鏃。表裏全面に細かな調整加え整形。右脚部僅かに欠損。	黒曜石
4	石鏃	2M-78	完形	長 2.5 幅 1.7 厚 0.3 重 0.7	凹基無茎鏃。表裏に細かな調整加え整形。裏面に一部素材剥片面を残す。脚部が比較的長く、器体全長の1/3ほどに達する。	チャート
5	スタンプ型石器	2K-85	完形	長 11.1 幅 6.8 厚 5.5 重 381.2	厚手の剥片もしくは分割礫素材。裏面側からの加撃により側面を整形、表面は主に左側面から調整加え、断面四角形状に整形。	黒色頁岩
6	打製石斧	2C-72	完形	長 11.4 幅 4.7 厚 1.3 重 84.5	短冊形。横長剥片素材とし表裏両側に調整加える。刃部は素材の縁辺をそのまま残す。摩耗は見られない。	変質玄武岩
7	打製石斧	2K-83	基部欠損	長 10.5 幅 6.4 厚 1.9 重 144.5	撥形。剥片素材とし、表裏両側に調整加える。刃部は調整の頻度低い。刃部は表裏ともに強い摩耗見られる。	細粒輝石安山岩

第4章

3面の調査 (Hr-FA層下面)



Ⅲ区3面 調査風景 (2面の畠下を徐々に掘り下げていく。)

第1節 調査の概要

吹屋伊勢森遺跡では、FA上面の調査、FA下面の調査及び基本土層V層 (FA下黒色土層) 中の調査を3面として扱っている。ただし、このうち2面の畠や畦状遺構の下部調査のために行ったFA上面の調査については、本報告書では2面の調査 (第5章) で記載する。本章で扱う遺構はV層中に掘り込み面

を持つ、掘立柱建物、用途不明土坑等である。

FA上面の調査は、2面で遺構があった場所以外にはトレンチを設定し、約半分の面積で遺構の有無及びFAの残存状況を確認した。本遺跡ではFAの一次堆積層は全面的には残存せず、虫食い状である。層厚は最大7cm程で、南から北に行くに従い残存状況は悪くなる。これはFAの堆積量が吹屋伊勢森遺跡付近では少ないこと、FA以降の耕作等の人為的



第61図 II・III・IV区3面 遺構配置図

な影響や自然環境によるものと思われる。

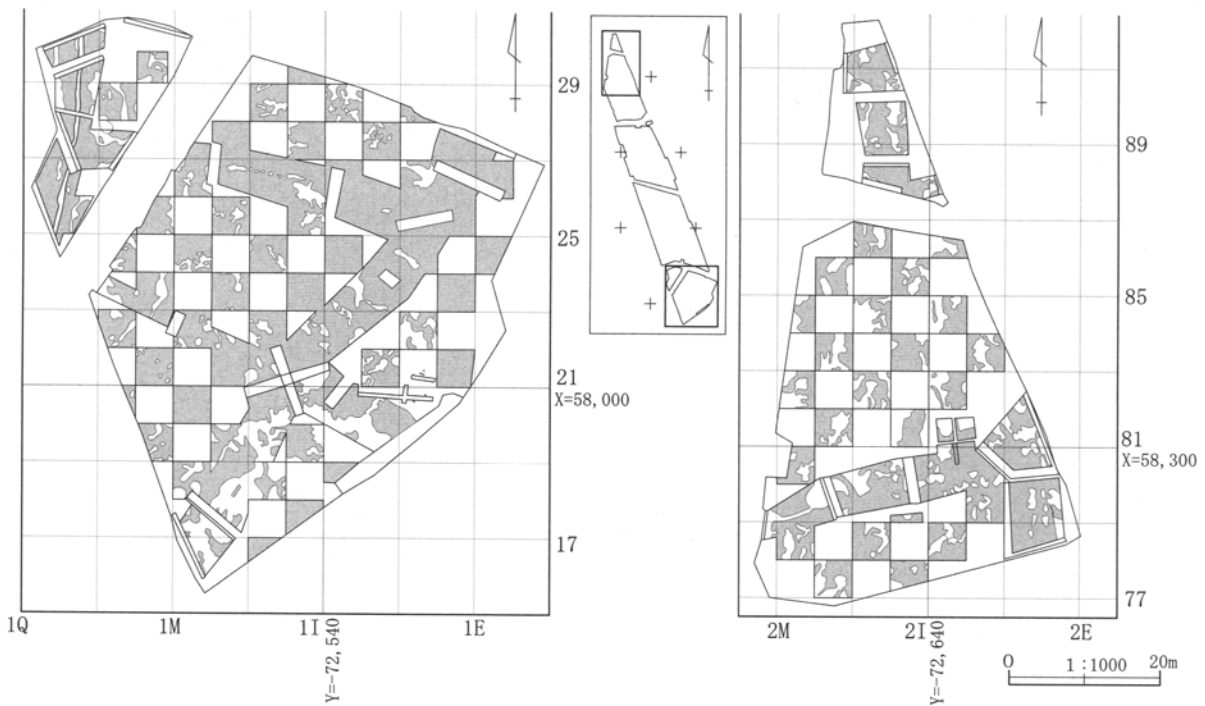
FA直下面は遺構・遺物とも検出されなかった。しかしⅢ区とⅣ区で2面調査時から地表面が僅かに凹む部分が4箇所あり、FA直下面ではその凹みが顕著になった。このことからFA降下時にはすでに埋没していた遺構の存在が考えられた。V層上面では遺構の平面形は不明であるため、補助的なトレンチを入れV層下面で形状を確認し調査を行った。この4遺構を用途不明土坑と呼称する。

「用途不明土坑」という名称を用いたのは、「井戸」か「陥し穴」か判断がつかなかったことによる。用途不明土坑の形状及び規模は、検出面では径1.8m前後の円形で底部では方形～長方形を呈し、深さは1.5～1.8mである。底面付近で水が湧くものもある。埋没土の上半部は地山V層・VI層に酷似しており、埋没土と地山の境界が不明瞭である。遺物の出土は一切ない。

「用途不明土坑」は以下の観点からそれぞれ井戸の可能性と陥し穴の可能性が考えられる。

- ・一般的な井戸の形状である。→井戸

- ・水が湧くものがある。→井戸
- ・FA降下時には凹みが残っており、縄文時代に遡る遺構とは考えにくい。→井戸？
- ・陥し穴にもこのような形状がある。→陥し穴
- ・遺物がまったく出土していない。→陥し穴？
- ・井戸ならば集落が隣接して存在する。→陥し穴

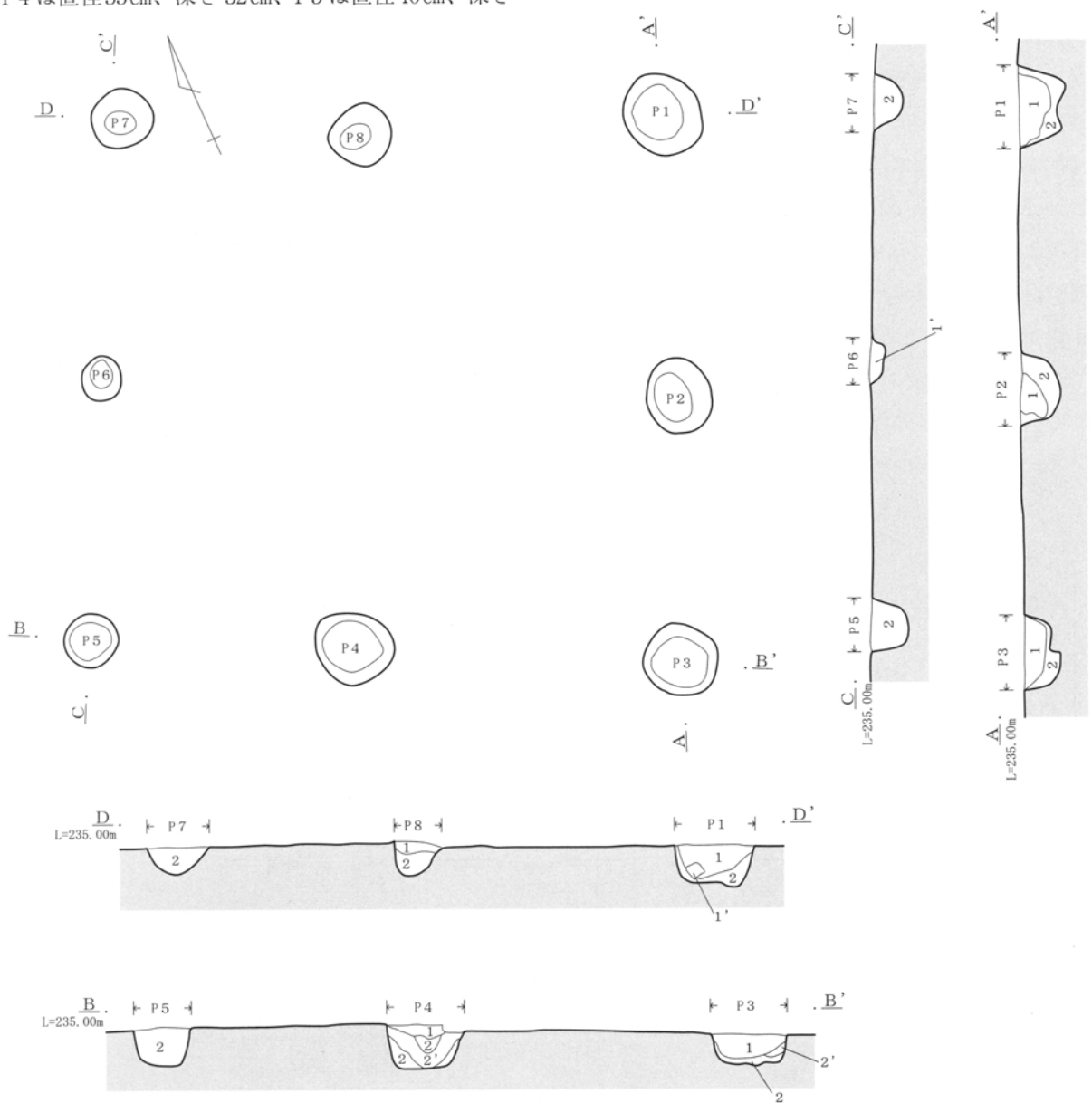


第62図 I区(左)・Ⅳ区(右) FA分布図(網掛け部分がFA)

第2節 遺構

Ⅲ区-1号掘立柱建物 位置 1T-64 形状・規模 柱穴の芯々を結ぶ四角形は、北西-南東方向に長軸をもつが、ほぼ正方形を呈す。4.1m×3.9m。柱間 2間×2間の側柱式。主軸方位 N-63°-W。柱穴 P1は直径60cm、深さ33cm、P2は直径50cm、深さ30cm、P3は直径55cm、深さ25cm、P4は直径55cm、深さ32cm、P5は直径40cm、深さ

27cm、P6は直径35cm、深さ10cm、P7は直径45cm、深さ20cm、P8は直径45cm、深さ25cmを測る。それぞれほぼ円形の掘り方を呈する。埋没土 上部に基本土層V層(FA下黒色土)が堆積し、下部は暗褐色土となる。遺物 なし。重複 なし。所見 この遺構は基本土層V層(FA下黒色土層)下面で検出したが、柱穴の掘り込み面はV層中と考えられる。時期はFA降下(6世紀初頭)以前。



- 1 黒褐色土。黄色軽石を多く含む。
- 1' 軽石の含有量が1層より少ない。
- 2 暗褐色土。黄色軽石を含む。含有量は1'層程度。
- 2' 2層よりやや色調暗い。

第63図 Ⅲ区-1号掘立柱建物

0 1:50 1m

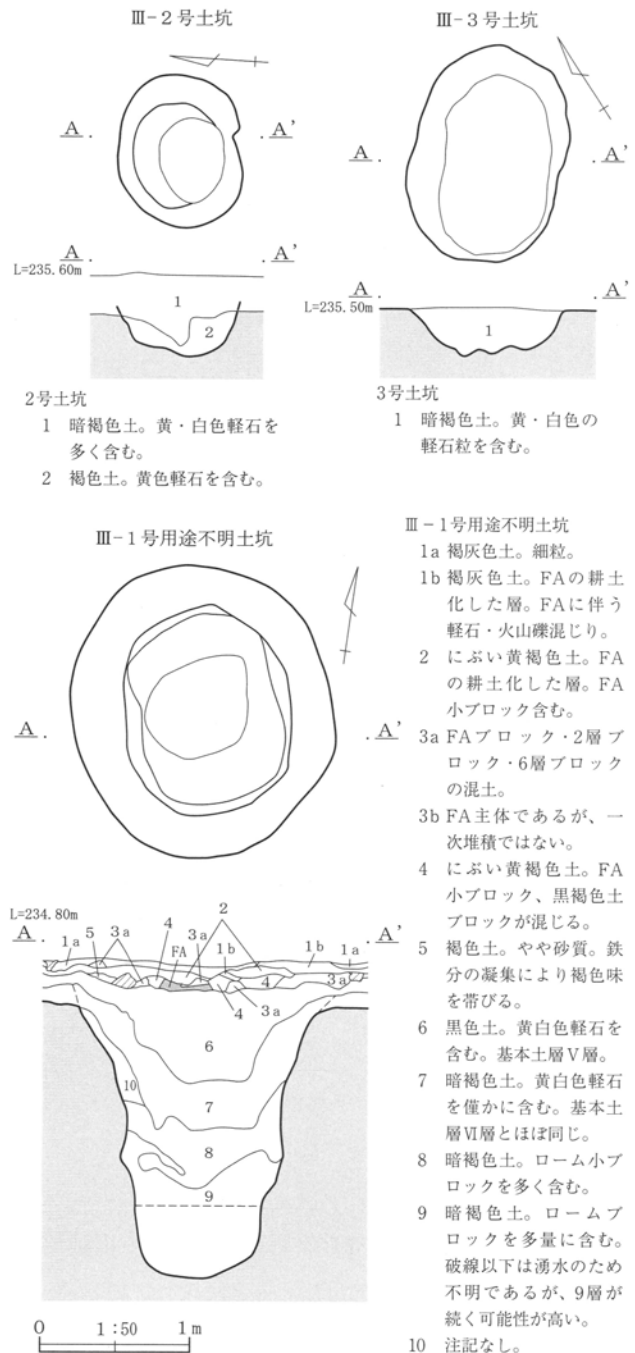
第2節 遺構

Ⅲ区-2号土坑 位置 2D-65 形状・規模 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.0×0.8×0.3mである。埋没土 黄色及び白色軽石を含む暗褐色土で埋没する。この層は基本土層V層に類似しており、地山と埋没土の境界が不明瞭。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

Ⅲ区-3号土坑 位置 2F-66 形状・規模 楕円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.4×1.0×0.3mである。埋没土 黄色及び白色軽石を含む暗褐色土で埋没する。この層は基本土層V層に類似する。遺物 なし。重複 なし。所見 年代不明。

Ⅲ区-1号用途不明土坑 位置 2A-60 形状・規模 検出面では径1.8mの円形、底部で長軸1.2m、短軸0.9mの長方形を呈し、検出面からの深さは1.8mである。壁面で地山の土層を確認したところ、浅間白糸降下軽石層よりさらに深く掘り込んでいる。埋没土 上部約1/3は基本土層V層(FA下黒色土)が落ち込む。その下位も基本土層VI層(淡色黒ボク土)に類似の層が落ち込むように堆積する。これらの土層は、地山と埋没土の境界が不明瞭。下半部は暗褐色土にロームブロックが多く混入する層で埋没する。9層の下部(断面図破線以下)は湧水で埋没土不明であるが、9層が続く可能性が高い。遺物 なし。重複 なし。所見 2面の3号畠下面で検出。FA降下時にはほとんど埋没し、ごく浅い凹みである。底面付近で湧水あり。規模や形状から井戸または陥し穴の可能性はあるが、断定するには至らなかった。また掘り込み面も不確定で、時期はFA降下(6世紀初頭)以前。

Ⅳ区-1号用途不明土坑 位置 2C-71 形状・規模 検出面では長径2.0m、短径1.7mの楕円形、底部で長軸1.3m、短軸1.0mの隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは1.5mである。埋没土 上部は基本土層V層(FA下黒色土)が落ち込む。その下位も基本土層VI層(淡色黒ボク土)に類似の層が落ち込むように堆積し、両層を合わせると土坑の深さの半分以上を占める。これらの土層は、地山と埋没土の境界が不明瞭。その下位は黒色土にロームブロッ

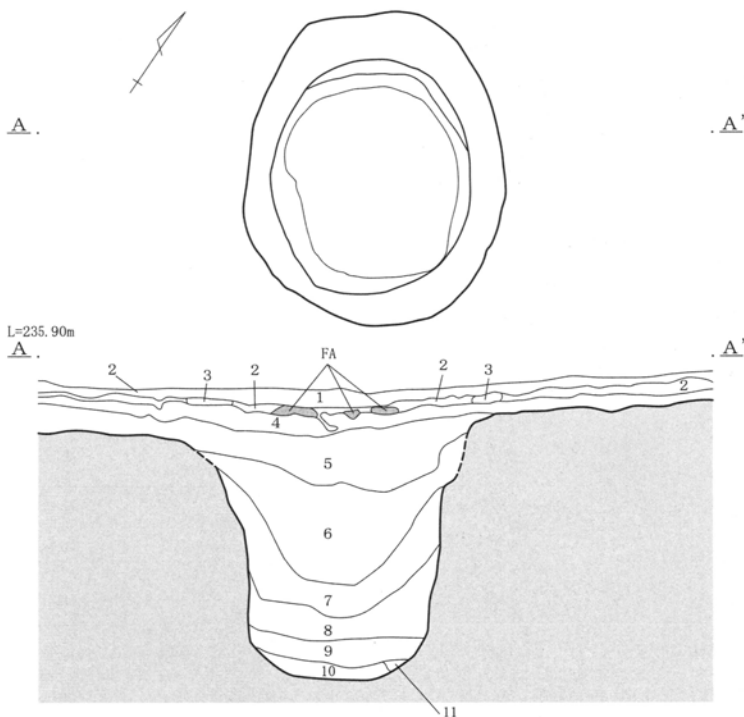


第64図 Ⅲ区-2・3号土坑・1号用途不明土坑

クが多く混入する層となり、ローム主体の層を挟んで最下位に黒色土が10cm程堆積する。遺物 なし。重複 なし。所見 2面(FP下面)でも僅かな凹みとして痕跡を残すが、FA降下時にはほとんど埋没している。規模や形状から井戸または陥し穴の可能性はあるが、断定するには至らなかった。また掘り込み面も不確定で、時期はFA降下以前。

第4章 3面の調査(Hr - FA層下面)

IV-1号用途不明土坑



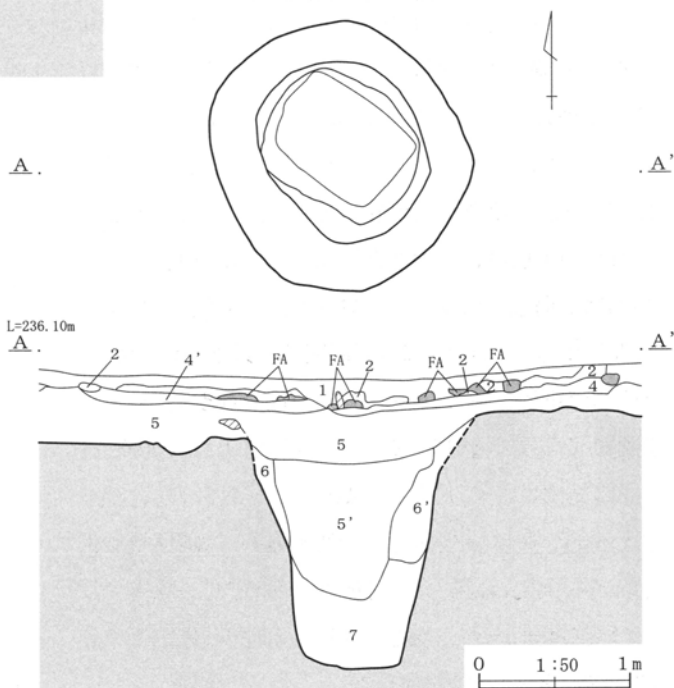
IV-1号用途不明土坑

- 1 褐灰色土。
- 2 褐灰色土。1層より明るい。
- 3 2層にFA粒を多く含む。
- 4 黒色土。FA粒を含む。
- 5 黒色土。細粒の黄色軽石を含む。基本土層V。
- 6 にぶい黄褐色土。基本土層VIとほぼ同じ。
- 7 黒色土。ロームブロックを多く含む。
- 8 明黄褐色土。地山ローム主体。
- 9 黄橙色土。地山ローム主体。
- 10 黒色土。5層を主体とする。
- 11 明黄褐色土。ロームブロック。

IV-2号用途不明土坑

- 1 褐灰色土。
- 2 褐灰色土。1層より明るい。
- 3 FA
- 4 黒色土。FA粒を含む。
- 5 黒色土。細粒黄色軽石を含む。基本土層V。
- 5' 暗褐色土。5層に似るが色調が異なる。
- 6 にぶい黄褐色土。基本土層VI。
- 6' にぶい黄褐色土。基本土層VIとほぼ同じ。
- 7 黒色土。ロームブロックを多く含む。

IV-2号用途不明土坑



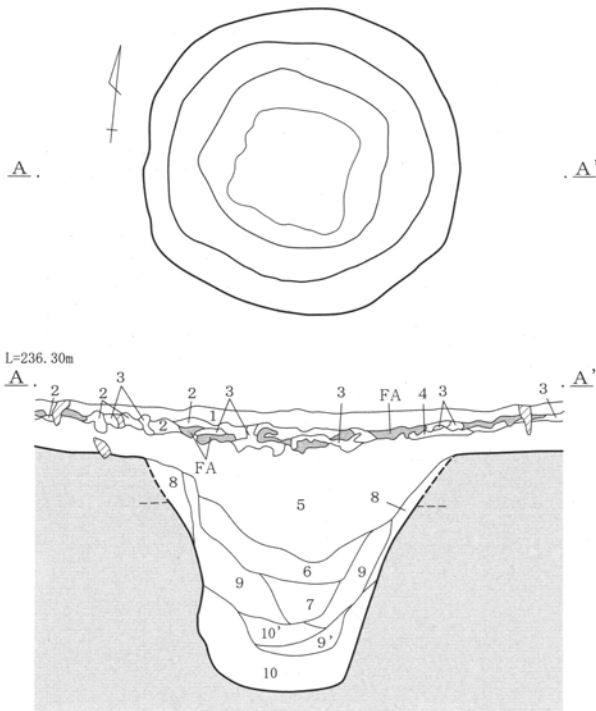
IV区-2号用途不明土坑 位置 2H-70 形状・規模 検出面では径1.7mの円形、底部で長軸0.9m、短軸0.6mの長方形を呈す。検出面からの深さは1.6mである。埋没土 上部約1/3は基本土層V層 (FA下黒色土層)が落ち込む。その下位は壁際に基本土層VI層 (淡色黒ボク土)に類似の層が落ち込むように堆積する。これらの土層に関しては、地山と埋没土の境界が不明瞭。下部は黒色土にロームブロックが多く混入する層で埋没する。遺物 なし。重複 なし。所見 2面 (FP下面)でも僅かな凹みとして痕跡を残すが、FA降下時にはほとんど埋没している。規模や形状から井戸または陥し穴の可能性があるが、断定するには至らなかった。また掘り込み面も不確定で、時期はFA降下(6世紀初頭)以前。

IV区-3号用途不明土坑 位置 2H-81 形状・規模 検出面では径2.0mの円形、底部で一辺が0.8mの方形を呈す。検出面からの深さは1.6mである。埋没土 上半部は基本土層V層 (FA下黒色土層)が落ち込む。その下位も黒色土が堆積するが、壁際は基本土層VI層 (淡色黒ボク土)に類似の層が落ち込むように堆積する。これらの土層に関

しては、地山と埋没土の境界が不明瞭。最下部は暗褐色土にロームブロックが多く混入する層で埋没する。遺物 なし。重複 なし。所見 2面 (FP下面)でも僅かな凹みとして痕跡を残すが、FA降下時にはほとんど埋没している。底面付近で湧水あり。規模や形状から井戸または陥し穴の可能性があるが、断定するには至らなかった。また掘り込み面も不確定で、時期はFA降下(6世紀初頭)以前。

第65図 IV区-1・2号用途不明土坑

IV-3号用途不明土坑



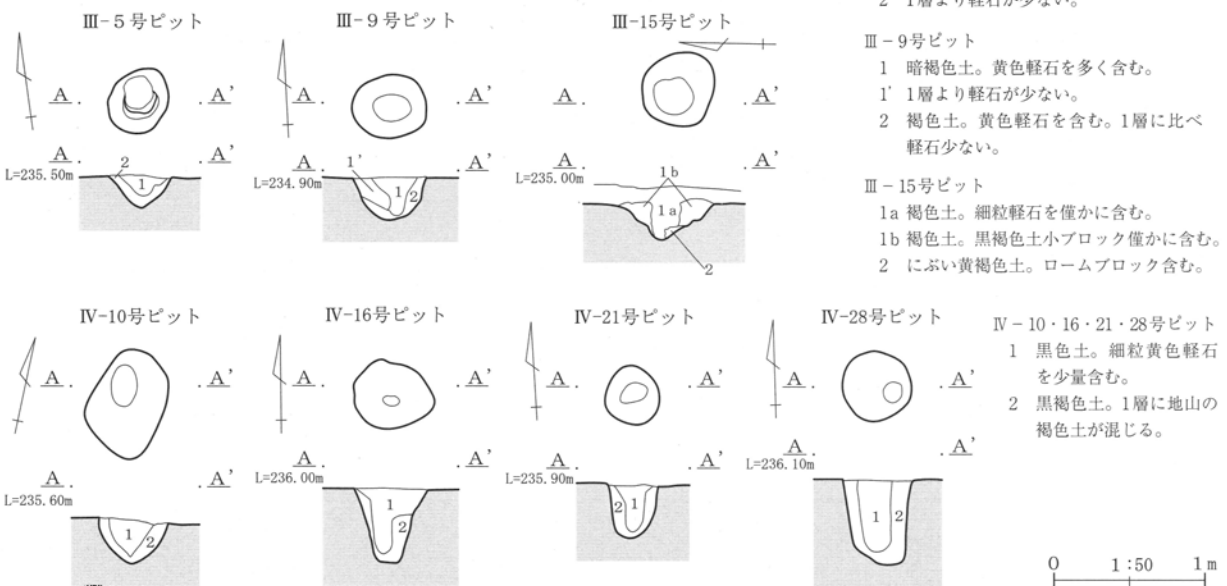
IV-3号用途不明土坑

- 1 褐灰色土。
- 2 褐灰色土。FAブロック含む。
- 3 黒色土。FA粒を含む。
- 4 黒色土。鉄分の凝集により褐色味を帯びる。
- 5 黒色土。細粒黄色軽石を含む。基本土層V。
- 6 黒色土。5層より色調明るい。
- 7 黒色土。6層より締まり強い。
- 8 にぶい黄褐色土。基本土層VIとほぼ同じ。
- 9 黒褐色土。ロームが少量混じる。
- 10 暗褐色土。ロームブロックを斑状に多く含む。
- 10' 10層よりロームブロック少ない。

II区-ピット群 位置 II区北西部で70個のピットを確認。形状・規模 最大のピットは、長軸・短軸がそれぞれ84×68cm、最小のピットは、長軸・短軸がそれぞれ30×24cmである。埋没土 基本土層V層に類似の黒色土～暗褐色土で埋没。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。

III区-ピット群 位置 III区北部で19個のピットを確認。形状・規模 最大のピットは、長軸・短軸・深さがそれぞれ65×55×27cm、最小のピットは、長軸・短軸・深さがそれぞれ26×25×29cmである。埋没土 基本土層V層に類似の黒色土～暗褐色土で埋没。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。

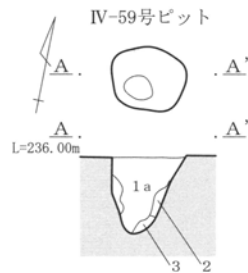
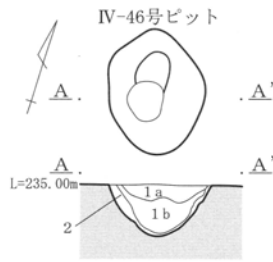
IV区-ピット群 位置 IV区の全域に渡り67個のピットを確認。中央西寄りで集中する箇所がある。形状・規模 最大のピットは、長軸・短軸・深さがそれぞれ129×69×23cm、最小のピットは、長軸・短軸・深さがそれぞれ28×24×20cmである。埋没土 基本土層V層に類似の黒色土～暗褐色土で埋没。遺物なし。重複なし。所見 年代不明。



- III-5号ピット
- 1 暗褐色土。黄・白色軽石を含む。
 - 2 1層より軽石が少ない。
- III-9号ピット
- 1 暗褐色土。黄色軽石を多く含む。
 - 1' 1層より軽石が少ない。
 - 2 褐色土。黄色軽石を含む。1層に比べ軽石少ない。
- III-15号ピット
- 1a 褐色土。細粒軽石を僅かに含む。
 - 1b 褐色土。黒褐色土小ブロック僅かに含む。
 - 2 にぶい黄褐色土。ロームブロック含む。

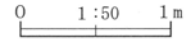
- IV-10・16・21・28号ピット
- 1 黒色土。細粒黄色軽石を少量含む。
 - 2 黒褐色土。1層に地山の褐色土が混じる。

第66図 IV区-3号用途不明土坑・III区-5・9・15号ピット・IV区-10・16・21・28号ピット



IV-46号ピット
 1a 黒色土。細粒黄色軽石を多く含む。
 1b 黒色土。褐色土ブロック含む。
 2 暗褐色土。褐色土に1a層ブロック含む。

IV-59号ピット
 1a 黒色土。細粒黄色軽石を多く含む。
 2 褐色土。
 3 明黄褐色土。硬質ロームブロック。



3面 ピット計測値一覧表

第67図 IV区-46・59号ピット

区	番号	グリッド	規模(cm)			区	番号	グリッド	規模(cm)			区	番号	グリッド	規模(cm)		
			長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ
II	1	1S-49	66	60	-	II	53	2C-51	50	36	-	IV	16	2J-75	54	43	50
II	2	1T-48	82	68	-	II	54	1T-47	38	30	-	IV	17	2J-75	47	39	31
II	3	1S-49	82	34	-	II	55	1T-47	29	28	-	IV	18	2I-75	55	37	34
II	4	1S-48	50	44	-	II	56	2A-47	46	40	-	IV	19	2I-76	39	27	33
II	5	1S-48	40	26	-	II	57	2B-47	46	36	-	IV	20	2I-76	67	53	39
II	6	1S-48	30	24	-	II	58	2B-47	38	32	-	IV	21	2I-76	40	36	35
II	7	1S-48	44	40	-	II	59	2A-46	62	52	-	IV	22	2I-76	39	39	42
II	8	1T-48	40	34	-	II	60	2A-46	72	62	-	IV	23	2J-76	33	25	30
II	9	2A-48	70	40	-	II	61	2A-45	55	28	-	IV	24	2J-76	34	30	38
II	10	2A-49	110	40	-	II	62	2A-45	44	32	-	IV	25	2J-76	32	25	29
II	11	2A-48	50	44	-	II	63	2B-45	54	38	-	IV	26	2J-76	45	37	40
II	12	2B-48	46	32	-	II	64	2B-45	80	48	-	IV	27	2J-76	72	52	39
II	13	2B-48	70	48	-	II	65	2B-45	66	46	-	IV	28	2J-75	47	42	55
II	14	2A-47	70	40	-	II	66	2A-44	66	38	-	IV	29	2J-75	45	30	51
II	15	2A-47	44	34	-	II	67	2B-44	52	40	-	IV	30	2J-75	40	26	38
II	16	1T-46	40	40	-	II	68	2B-45	60	32	-	IV	31	2J-75	84	49	58
II	17	1T-47	52	40	-	II	69	2A-45	50	38	-	IV	32	2H-70	64	54	38
II	18	1S-47	84	68	-	II	70	2A-44	68	32	-	IV	33	2K-75	54	48	60
II	19	1T-47	68	48	-	III	1	2E-65	56	50	24	IV	34	2K-75	45	40	45
II	20	1T-48	72	58	-	III	2	2H-65	55	51	15	IV	35	2K-75	71	50	39
II	21	1S-47	70	44	-	III	3	2H-66	60	50	33	IV	36	2K-75	52	50	45
II	22	1S-47	84	60	-	III	4	2I-65	50	43	16	IV	37	2K-75	56	49	49
II	23	1S-47	48	40	-	III	5	2F-66	45	39	21	IV	38	2L-75	52	34	39
II	24	1S-47	66	38	-	III	6	1T-65	60	48	25	IV	39	2K-75	50	48	38
II	25	1S-47	52	38	-	III	7	1T-65	50	45	29	IV	40	2K-74	58	55	48
II	26	2B-48	44	32	-	III	8	1T-64	61	51	31	IV	41	2K-74	53	48	40
II	27	2B-47	50	38	-	III	9	1T-64	49	42	28	IV	42	2K-74	42	40	22
II	28	2A-47	50	38	-	III	10	1T-64	51	47	24	IV	43	2K-74	32	28	34
II	29	2A-47	50	40	-	III	11	1T-64	45	42	26	IV	44	2I-75	34	28	13
II	30	2A-47	40	34	-	III	12	1S-64	59	50	28	IV	45	2I-75	28	24	20
II	31	1T-47	62	52	-	III	13	1S-64	65	55	27	IV	46	2F-78	85	61	35
II	32	2A-48	70	38	-	III	14	2C-66	50	48	51	IV	47	2F-78	54	46	25
II	33	2A-48	60	42	-	III	15	2C-63	53	48	35	IV	48	2G-78	75	69	25
II	34	2A-47	42	38	-	III	16	2C-64	26	25	29	IV	49	2E-79	42	38	23
II	35	2A-47	52	42	-	III	17	2C-64	48	30	26	IV	50	2F-79	59	54	20
II	36	2A-49	80	72	-	III	18	2D-65	44	42	30	IV	51	2G-80	38	36	17
II	37	2B-49	72	60	-	III	19	2C-64	60	45	27	IV	52	2G-80	(40)	(40)	28
II	38	2B-49	50	38	-	IV	1	2J-71	48	44	29	IV	53	2G-80	(40)	36	15
II	39	2B-49	48	46	-	IV	2	2G-70	64	58	26	IV	54	2G-80	80	70	31
II	40	2C-50	92	78	-	IV	3	2F-70	88	58	15	IV	55	2H-79	70	60	30
II	41	2B-50	48	32	-	IV	4	2F-70	58	46	26	IV	56	2H-79	72	58	20
II	42	2B-50	50	50	-	IV	5	2F-70	42	38	37	IV	57	2H-78	49	48	29
II	43	2B-51	50	44	-	IV	6	2F-70	30	28	9	IV	58	2I-77	82	59	51
II	44	2B-50	44	32	-	IV	7	2F-71	48	44	44	IV	59	2I-77	50	42	50
II	45	2A-50	70	60	-	IV	8	2H-72	80	70	35	IV	60	2J-77	59	45	45
II	46	2A-51	120	28	-	IV	9	2D-73	50	48	30	IV	61	2J-77	65	55	35
II	47	2A-51	50	38	-	IV	10	2D-75	72	52	29	IV	62	2J-85	129	69	23
II	48	2A-51	40	38	-	IV	11	2F-77	56	42	33	IV	63	2K-84	105	75	39
II	49	2B-51	54	46	-	IV	12	2F-76	56	46	29	IV	64	2H-84	49	39	27
II	50	2B-51	50	44	-	IV	13	2I-75	70	66	25	IV	65	2I-84	36	32	17
II	51	2C-52	40	28	-	IV	14	2I-75	34	30	29	IV	66	2J-86	30	28	14
II	52	2C-51	40	30	-	IV	15	2I-75	40	37	47	IV	67	2J-86	34	32	18

第5章

2面の調査 (Hr-FP層下面)



Ⅲ区 全景 (古墳時代の畠は現在の耕地と比べても遜色がない。)

第1節 調査の概要

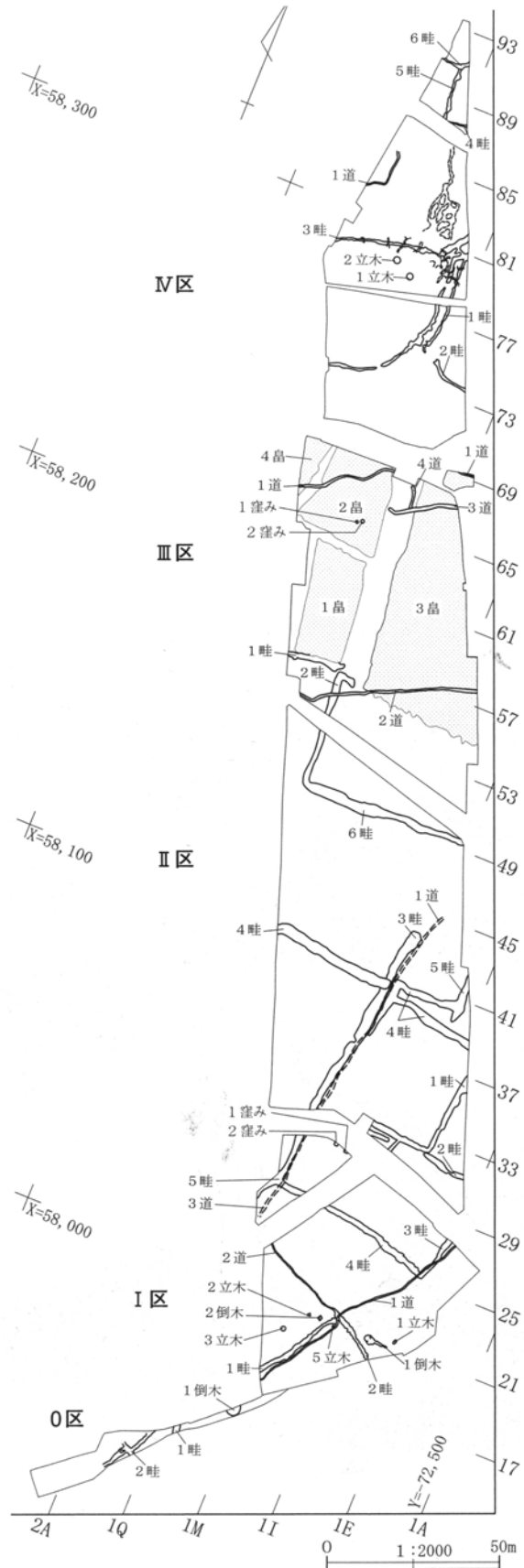
2面の調査は、FPで埋没した古墳時代の地表面の検出である。約1.5km西にある黒井峯遺跡では集落が調査され、普通の遺跡では検出できない堅穴住居の上部構造や平地式建物、芝垣、道などが確認されている。吹屋伊勢森遺跡周辺ではこれまでに、畠やウマの放牧地の調査例がある。これらは同じ時間に存在したものであり、当時の社会を解明する上で重要な資料である。

調査の手順としては、FPを5~10cm程度残して、その上部は大型掘削重機で取り除いた。その後ジョレンを用いて軽石を取り除き、最後に2~3cm残った軽石を移植ごてや刷毛を用いて除去し、地表面を検出した。

その結果、Ⅲ区で畠跡を4箇所検出した。畠の総面積は2,671㎡である。畠によって畝の高さが異なり、畠を潰すように道跡やウマの足跡が残っている。このことから、畠はすべて同時に使用されていたわけではなく時間差を持つこと、FP降下時にはすでに使用されていないことがわかる。国道17号鯉沢バイパス関連遺跡は子持村を南北に貫くように5.5kmに及ぶ調査を行っているが、FP下で畠が確認されたのは吹屋伊勢森遺跡のみであった。

I~Ⅳ区では、地表面に不規則にウマの足跡が残されており、FP降下時には放牧地が広がっていた。放牧地内では畦状遺構、道、立木痕、倒木痕などが検出された。畦状遺構は帯状の僅かな高まりで、東西方向と南北方向に伸びるものが多い。方形の区画を意識しているようであるが、途中で途切れるものや枝分かれるものがある。道は畦状遺構を乗り越えるものや、逆に畦状遺構の下で検出されるものがあり、Ⅲ区では畠を潰している。

本遺跡の畠と放牧地は、FA降下(6世紀初頭)後からFP降下(6世紀中葉)までの限られた時間内で形成されたものであり、土地利用の変遷を考える上で重要である。また畠の耕作に携わった人々の集落域は未だ不明である。



第68図 0~Ⅳ区2面(FP下面)遺構配置図

第2節 畠

畠は、大型掘削重機でFPを取り除いている際に、畝の高まり部分について地表面が筋状に現れたことで、まず確認された(写真①)。畠の存在が確認された後は重機による掘削深度は浅くし、軽石を多く残すようにした。その後FPを人手で除去し、畝立てされた地表面を検出した(写真②～④)。

畠の記載にあたっては、高まり部分を「畝」、低い部分を「畝間」とする。畝の高さは、隣り合う畝と畝間で最も高い地点と最も低い地点の差を計測し、それぞれの区画内で平均値を算出した。畝の間隔は、畝の頂上部から隣の畝の頂上部までを計測し、区画内で平均値を出した。畝間の間隔も同様に畝間の最低部間で計測した。

畝の高さは各畠によって微妙に異なり、今回検出された畠の中では1号畠が最も高く10cmで、他の畠は4～6cm程度であった。畝間の間隔は概ね95cm～105cmである。

耕作土はFAを母材とする褐灰色の土壤層で、FAの土壤化の程度により、2～4号畠では概ね2層に、1号畠では3層に分層出来る(写真⑤、⑥)。各畠とも下位にFAの一次堆積層が部分的に残り、FAを主体とし、FA下の黒色土(基本土層V層)の混じる層が面的に広がる。

畠の下部構造を確認するために、FAの一次堆積層またはFAを主体とする層の上面まで、耕作土を徐々に削り調査を行った(この調査面を便宜上FA



①重機でFPを除去



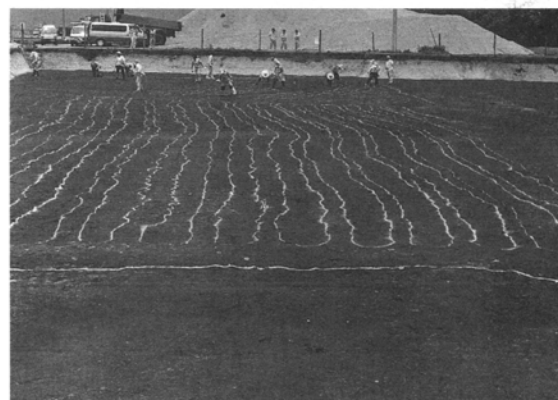
②人手でFPを除去



③1号畠 検出状況



⑤ 畠の断面



④1号畠(白線で畝間を示す)

第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

上面と呼ぶ)。FA上面では細い溝状の掘り込みが検出され、1号・2号・4号畠ではFP下面で畝間のある部分の下にあたる。3号畠では畝の下位と畝間の下位で溝が確認され、交互に覆土の色調が異なる(写真⑦、⑧)。また、放牧地のFA上面の調査では、このような溝は検出されなかった。

Ⅲ区では畠の解明のために、植物珪酸体分析、微



⑥1号畠 断面



⑦1号畠 FA上面の様子



⑧3号畠 FA上面の様子

細植物片分析、土壤微細形態分析、土壤理化学分析等を行っている。その結果、植物珪酸体分析でキビ族が検出されたが、キビ族は野生種と栽培種の区別が現状ではできないため、栽培植物を特定するには至らなかった。土壤理化学分析では施肥の可能性が指摘されている。

Ⅲ区-1号畠 位置 Ⅲ区南西部。 **検出面積** 473㎡。畠区画全面を検出した。 **形状** 断面形状は波状を呈する。畝の走向はほぼ南北で、幅14.5mの中に13条の畝を設けている。 **畠面の状況** 畝間隔は約100cm、畝間間隔は約100cm、畝の高さは約10cmである。 **耕作土** FAを母材としており、基本土層V層より上が概ね3層に分かれる。上層はより土壌化が進みこなれた状態であるが、中層は色調がFAに近くなりFAの小さな塊を含む。下層はFAブロックやFA下の黒色土ブロックを含む明黄褐色土となる。(耕作土の認定については第8章まとめ参照。) **下部構造** 畝間下にあたる箇所にはFA上面で溝を検出し、その掘り込みは基本土層V層に及ぶ。溝幅は約25cm、溝間隔は約100cm、深さは約4cmである。 **遺物** なし。 **重複** 畠の上にウマの足跡が残されている。 **所見** 1号畠は唯一区画全面を検出した。南限は1号畦状遺構で区画されているが、他は特に区画を仕切るような施設はない。調査された畠の中では最も畝の凹凸がはっきりした畠であるが、畠面の上をウマが歩いており、FPで埋没した時点ではすでに放置されていたと考えられる。

Ⅲ区-2号畠 位置 Ⅲ区北西部。 **検出面積** 525㎡。北端部は調査区外となる。 **形状** 断面形状はなだらかな波状を呈する。畝の走向は南端部では北東方向であるが、緩やかに向きを変え南北方向となる。幅20mの中に22条の畝を設けている。東端には畠境を作るように畝間状の凹みがあり、南東部では畝がそれに制限されている。 **畠面の状況** 畝間隔は約95cm、畝間間隔は約95cm、畝の高さは約4cmである。 **耕作土** FAを母材としており、基本土層V層より上が概ね上下2層に分かれる。上

層はFAの小さな塊を含むにぶい黄褐色土で、畠間には夾雑物の少ないシルト質の褐灰色土が堆積する。下層はFAブロックやFA下の黒色土ブロックを含むにぶい褐色土となる。(耕作土の認定については第8章まとめ参照。) **下部構造** 畠間下にあたる箇所にはFA上面で溝を検出し、その掘り込みは基本土層V層に及ぶ。溝幅は約25cm、溝間隔は約90cm、深さは約5cmである。 **遺物** なし。 **重複** 1号道。畠を潰すように1号道が存在する。1号道が新しい。 **所見** 2号畠の周囲には、南に約2mの間を置いて1号畠、東に約8mの間を置いて3号畠、西に約2mの間を置いて4号畠がある。2号畠上には1号道があり、FPで埋没した時点ではすでに放置されていた畠である。

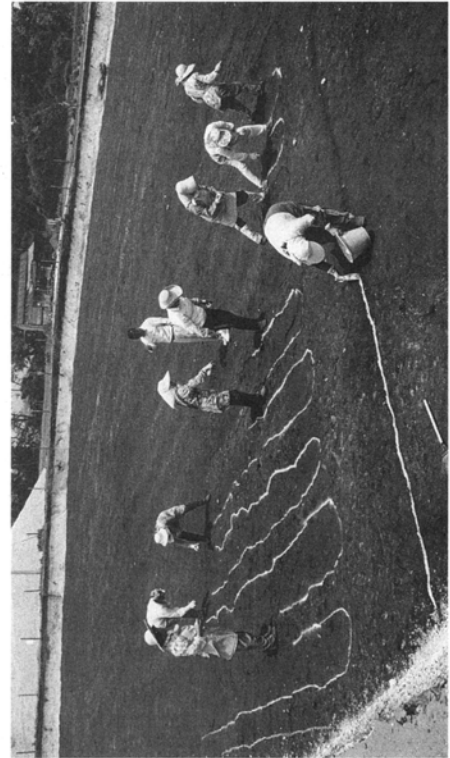
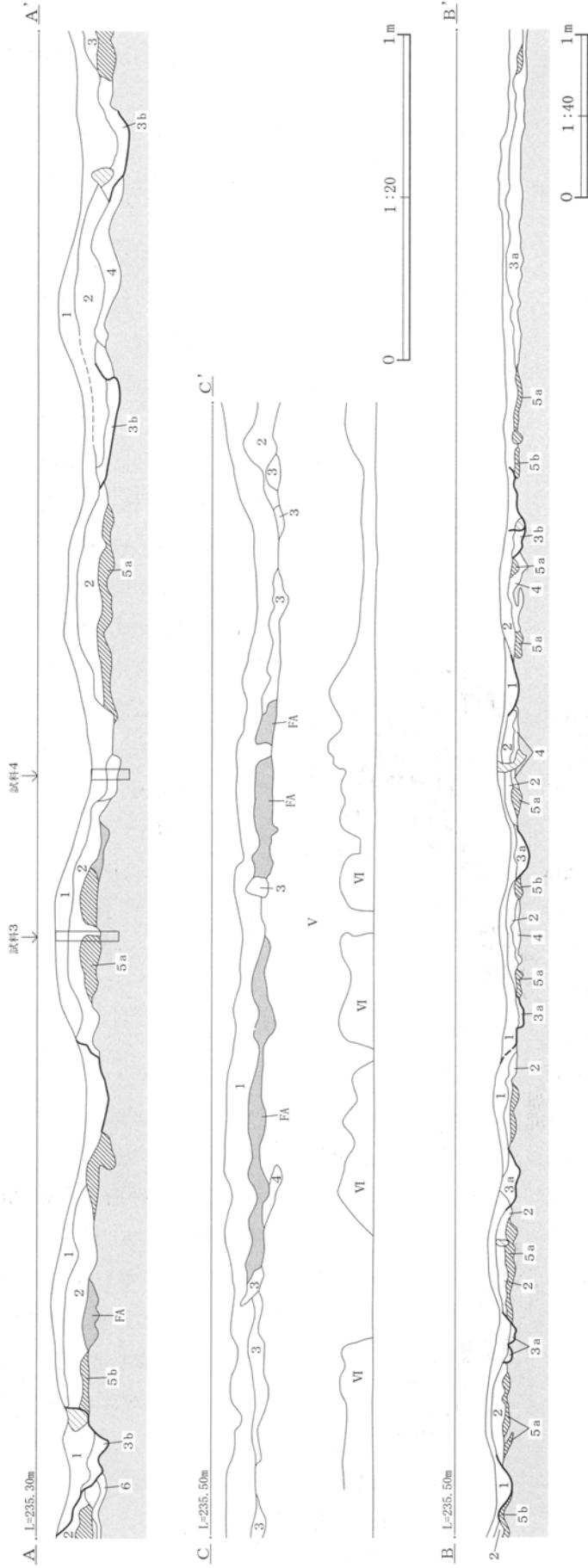
Ⅲ区-3号畠 **位置** Ⅲ区東部。 **検出面積** 1,594 m²。東側は調査区外となる。 **形状** 断面形状はなだらかな波状を呈する。畠の走向は緩やかに蛇行するもののほぼ南北である。 **畠面の状況** 畠間隔は約105cm、畠間間隔は約105cm、畠の高さは約6cmである。 **耕作土** FAを母材としており、基本土層V層より上が概ね上下2層に分かれる。上層はFAの小さな塊を含む灰黄褐色土で、畠間には夾雑物の少ない褐灰色土が堆積する。下層はFAブロックやFA下の黒色土ブロックを含むにぶい褐色土となる。(耕作土の認定については第8章まとめ参照。) **下部構造** 畠間下にあたる箇所と畠下にあたる箇所に、それぞれFA上面で溝を検出した。両者は僅かに色調が異なり、畠間下にあたる溝の方が色調暗い。そのため1条置きに色の違う縞模様を呈する。いずれも掘り込みは基本土層V層に及び、溝の規模や形状に差はない。溝幅は約22cm、深さは約5cm、溝間隔は畠間下及び畠下とも約105cm、両者の間が約50cmである。 **遺物** なし。 **重複** 1号道、2号道、3号道。道が畠よりも新しい。また畠の上にウマの足跡が残されている。 **所見** 今回の調査では検出面積が最も広い。検出できた畠で最も長いものは62mに及び、さらに調査区外に延びている。3号畠で特筆されるのは、FA上面で2種類の耕作に伴

う溝が検出されたことである。他の畠が畠間下のみであることから、3号畠は一度畠として利用した後、畠替えを行った可能性が考えられ、2種類の溝は2時期の耕作の痕跡と捉えられる。2度目の畠については畠面の上に道が形成されていることから、FPで埋没した時点ではすでに放置されていた。

Ⅲ区-4号畠 **位置** Ⅲ区北西隅。 **検出面積** 79 m²。ほとんどが調査区外となり検出は一部のみである。 **形状** 断面形状はなだらかな波状を呈する。畠の走向は北からやや東よりを向く。 **畠面の状況** 畠間隔は約100cm、畠間間隔は約95cm、畠の高さは約6cmである。 **耕作土** FAを母材としており、基本土層V層より上が概ね上下2層に分かれる。上層は灰褐色土で、畠間には暗褐色土が堆積する。下層はFAブロックやFA下の黒色土ブロックを含む層となる。(耕作土の認定については第8章まとめ参照。) **下部構造** 畠間下にあたる箇所にFA上面で溝を検出し、その掘り込みは基本土層V層に及ぶ。溝幅は約36cm、溝間隔は約95cm、深さは約6cmである。 **遺物** なし。 **重複** 1号道。畠を潰すように1号道が存在する。1号道が新しい。また畠の上にウマの足跡が残されている。 **所見** 畠上に1号道やウマの足跡があり、FPで埋没した時点ではすでに放置されていた。

Ⅲ区-Aブロック

1号畠 1号畠は1号畦状遺構を南限としている。畠と畠間の起伏が明瞭で、畠はほぼ南北に直線的に延びている。畠の下部にはFA主体の層があり、この上面で平面精査をしたところ、畠間下には溝を検出した。畠面にはウマの足跡が残されている。畠と畠間の2箇所で植物珪酸体分析を行った。(第7章自然科学分析参照。) **その他** 1号畠の東端の途中から発生する凹みは、下部構造の溝がなく畠の平面的なまとまりからも外れるため、畠の畠間には含めないこととした。また、1号畠の西外側ではFAの一次堆積層がよく残っている(断面C)が、東外側ではFAは攪拌され、一次堆積層は残っていない(断面B)ことが確認された。



1号畠 A-A' B-B'

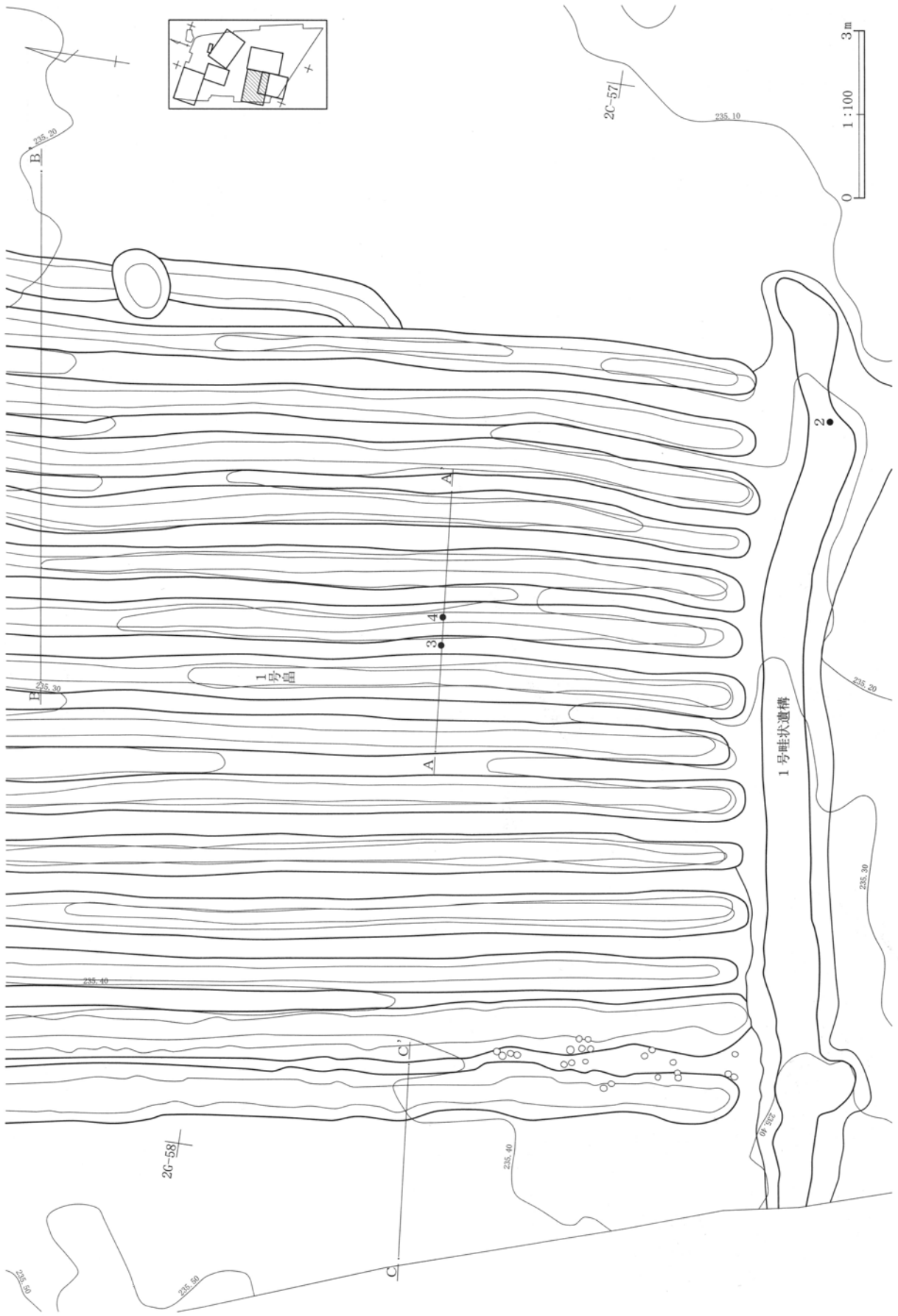
- 1 褐灰色土。粒子細かくシルト質。夾雜物少ない。
- 2 にぶい黄褐色土。FAの土壌化した層。FA小ブロック含む。
- 3a にぶい褐色土。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。
- 3b にぶい褐色土。やや橙色味を帯びる。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。締まり弱い。
- 4 黄褐色土。砂質。FAに鉄分が凝集している。
- 5a 明黄褐色土。FA主体、黒色土ブロック含む。
- 5b 明黄褐色土。FA主体、黒色土ブロック僅かに含む。
- 6 明黄褐色土。やや砂質。鉄分が凝集している。

1号畠 C-C'

- 1 褐灰色土。FAが粒状に混じる。
- 2 にぶい黄褐色土。FAの土壌化した層。FA小ブロック含む。
- 3 黒色土。FAが斑点状に混じる。
- 4 黒色土。鉄分が凝集し褐色味を帯びる。

III区-Aブロック 調査風景

第69図 III区-Aブロック(1)

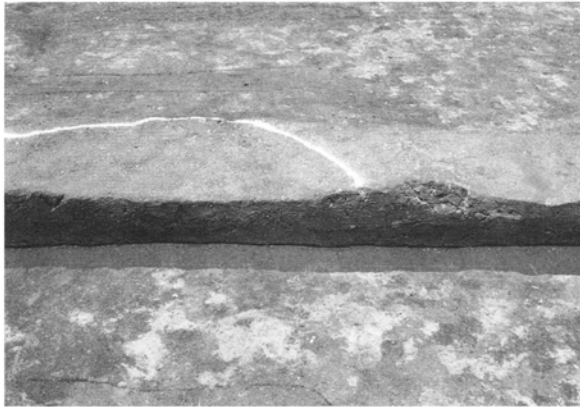


第70図 Ⅲ区-Aブロック(2) (黒丸は分析試料採取地点)

Ⅲ区-Bブロック

1号畠 1号畠の北限は特に境界を示すもの(畦状遺構や柵列など)はない。**2号畠** 畝の走向は北東方向を向くが、東端に畠の境界を示すように畝間があり、それに規制されて畝は止まる。また1号畠、2号畠ともFA上面で畝間下に溝が確認された。

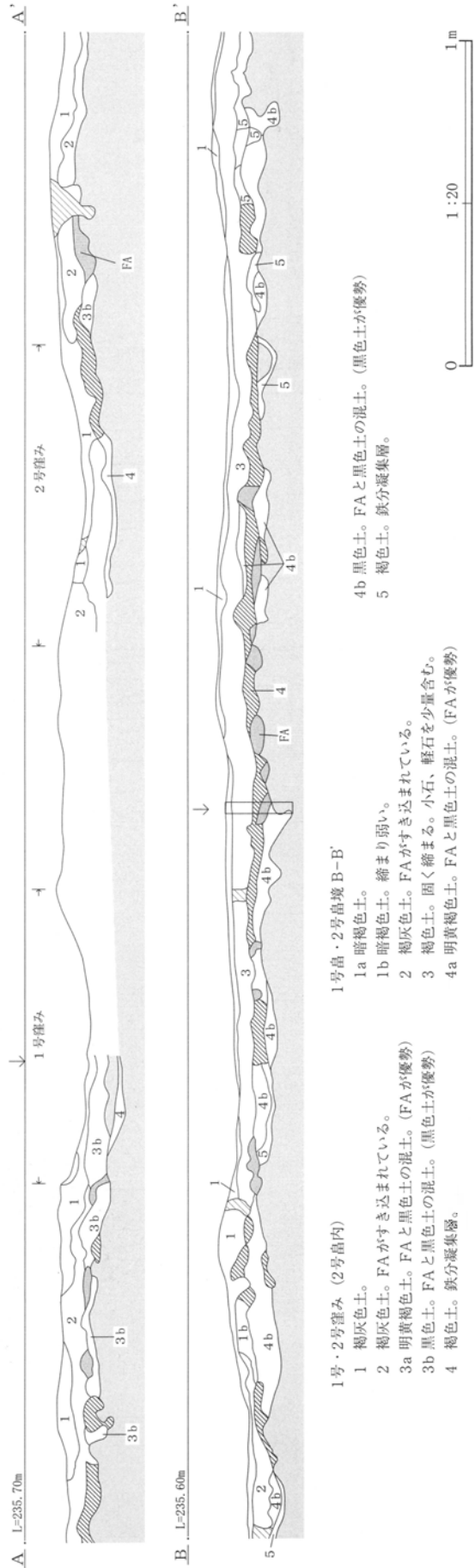
その他 1号畠と2号畠の間は約2mの間隔を置いている。その平坦部の土壤は、畠内部の土に比べ固く締まっている。2号畠内には径1m程の円形の窪みが確認された。これらは当初立木の跡の可能性が考えられたが、断面観察を行ったところ、根跡を示すような土壤の攪乱がなかった。下層に影響を及ぼすような掘り込みもなく、「窪み」という名称で記載した。同様の窪みは遺跡内の数箇所で確認されている。



1号畠・2号畠境界部分断面B



Ⅲ区-Bブロック(北から)



第71図 Ⅲ区-Bブロック(1)



Ⅲ区-Cブロック

2号畠 1号畠に比べ畝と畝間の起伏に乏しい。畠区画の平面形態を整えるように、途中から畝が追加されている。2号畠では畝と畝間の2箇所で植物珪酸体分析を行っているが、栽培植物に関係するものは僅かにキビ族が検出されたのみで、特定には至らなかった。(第7章自然科学分析参照。) 4号畠 畝の起伏は2号畠と同程度である。畠面にはウマの足跡が残されている。その他 2号畠と4号畠は1号道に畝を潰されている。1号道は蛇行しながら畠を横切っており、道部分は土壤が固く締まっている。



2号畠 断面 A

2号畠 A-A'

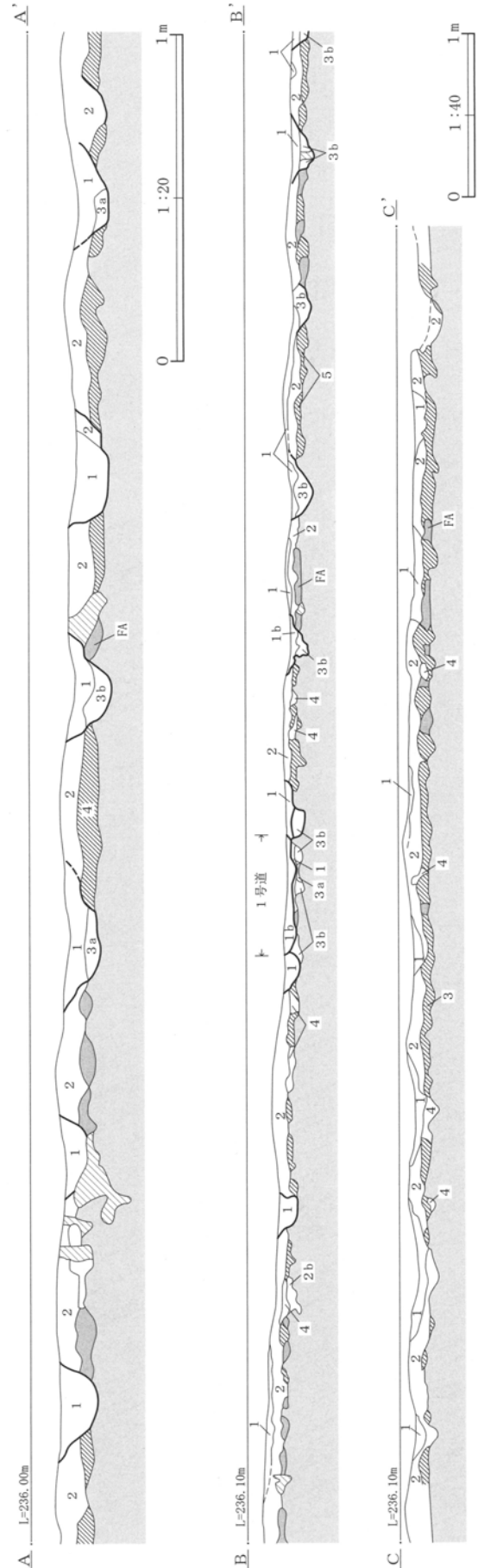
- 1 褐灰色土。シルト質。土質均一で締まり弱い。
- 2 にぶい黄褐色土。FAの土壤化した層。FA小ブロック含む。
- 3a にぶい褐色土。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。
- 3b にぶい褐色土。やや橙色味を帯びる。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。
- 4 明黄褐色土。FA主体、黒色土ブロック含む。黒色土ブロック混土。

2号畠 B-B'

- 1 褐灰色土。シルト質。
- 1b 褐灰色土。やや黒色味を帯びる。
- 2 にぶい黄褐色土。FAの土壤化した層。FA小ブロック含む。
- 3a にぶい褐色土。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。
- 3b にぶい褐色土。やや橙色味を帯びる。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。
- 4 黒色土。FAブロック混土。
- 5 にぶい褐色土。FA小ブロック、黒色土ブロック混土。

4号畠 C-C'

- 1 暗褐色土。
- 2 灰褐色土。FAが土壤化。
- 3 2層にFAが多く混じる。
- 4 黒色土。FAが斑点状に混じる。



第73図 Ⅲ区-Cブロック(1)



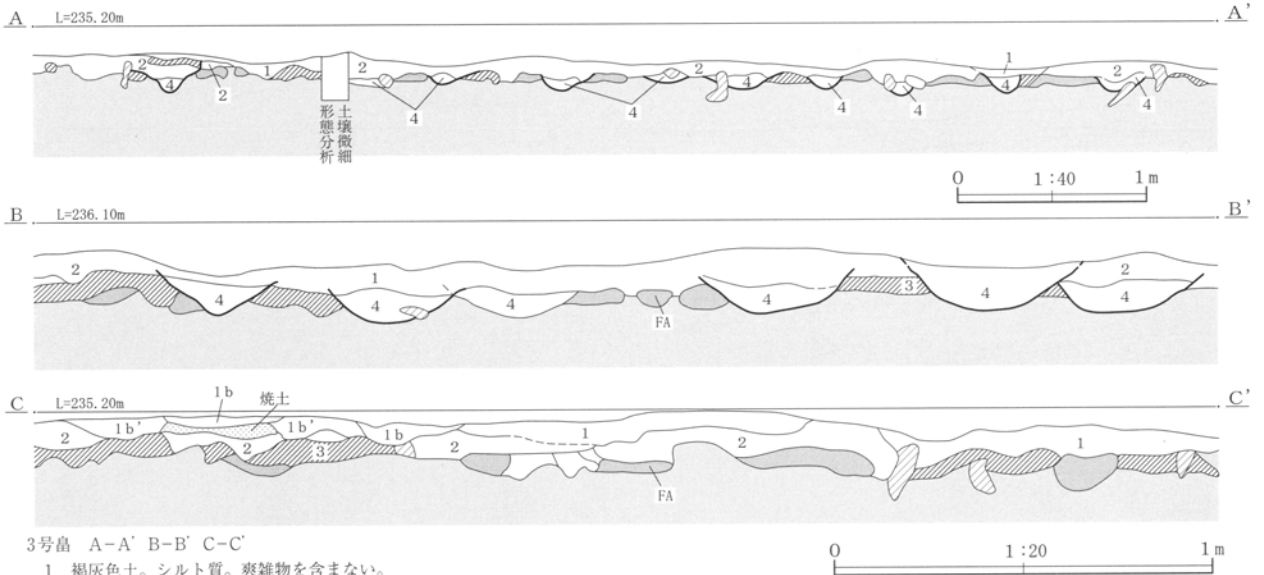
第74図 Ⅲ区-Cブロック(2) (黒丸は分析試料採取地点)

Ⅲ区-Dブロック

3号畠 1号畠に比べ畝と畝間の起伏に乏しい。畠の南側、西側とも特に畠を区画する構造物はないが、西側は耕作土を少し削ると焼土ブロックが断続的に検出される。焼土ブロックの列は畦状遺構下で検出される例(Ⅱ区6号畦状遺構等)があり、過去に3号畠の西境界に畦状遺構が存在していた可能性がある。FA上面では二種類の溝が交互に検出され、時期の異なるものである。その南端はほぼ揃っており、二時期とも同じ範囲を畠としている。3号畠では畝と畝間の2箇所植物珪酸体分析を、1箇所土壌微細形態分析を行っている。(第7章自然科学分析参照。) その他 3号畠は2号道に畝を潰されている。道の部分は土壌が固く締まっている。



Ⅲ区-Dブロック 全景



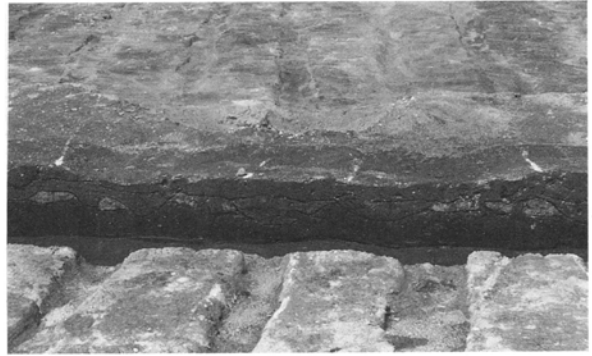
3号畠 A-A' B-B' C-C'

- 1 褐灰色土。シルト質。夾雑物を含まない。
- 1b 褐灰色土。僅かに小石を含む。FAの土壌化した層。
- 1b' 1b層に焼土粒を含む。
- 2 灰黄褐色土。FA小ブロックを含む。
- 3 にぶい褐色土。FA小ブロック、黒褐色土ブロック混土。
- 4 にぶい黄褐色。FA小ブロック、黒褐色土小ブロックを含む。細かく攪拌された土。

第75図 Ⅲ区-Dブロック(1)



3号畠 断面A



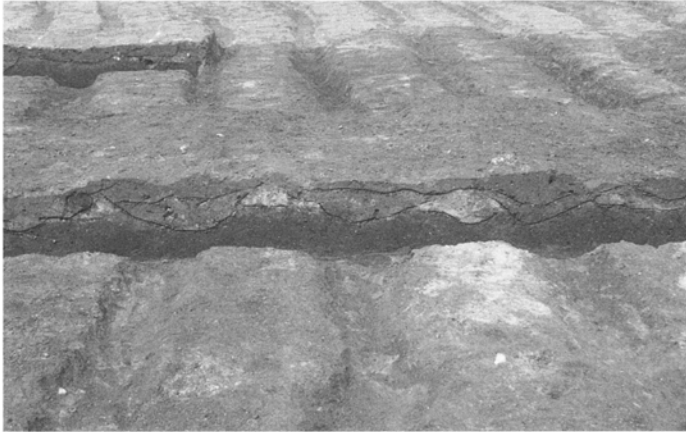
3号畠 断面B



第76図 Ⅲ区 - Dブロック(2) (黒丸は分析試料採取地点)

Ⅲ区-Eブロック

3号畝 畝は緩やかに蛇行しながら、ほぼ南北に延びるが、途中で枝分かれする箇所がある。この場所では畝間下の溝も枝分かれている。また、畝がとぎれている部分や、円形の窪み、ウマの足跡が畝面に残されている。その他 畝の外側の方がFA及びFA主体の層の残存状況が良い。



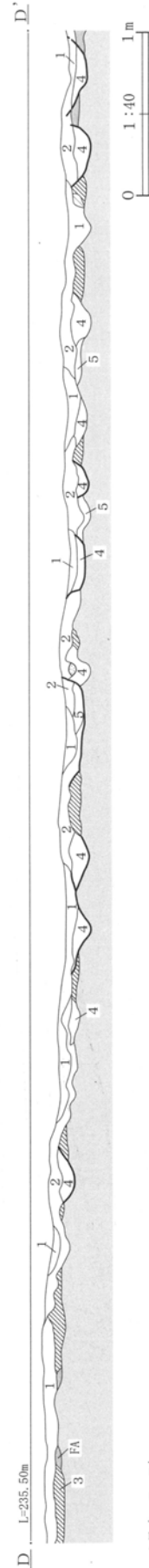
3号畝 断面D



3号畝 調査風景(北から)



3号畝上のウマの足跡



3号畝 D-D'

- 1 褐灰色土。FAの土壌化した層。
- 2 灰黄褐色土。FA小ブロックを含む。
- 3 にぶい褐色土。FA小ブロック、黒褐色土小ブロック混土。
- 4 にぶい黄褐色。FA小ブロック、黒褐色土小ブロックを含む。細かく攪拌された土。
- 5 褐色土。鉄分凝集層。

第77図 Ⅲ区-Eブロック(1)

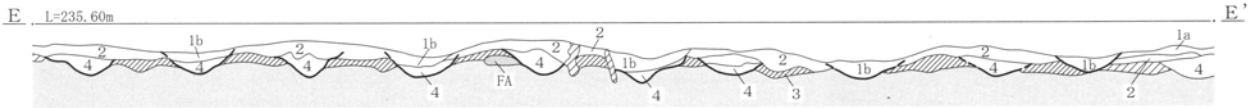
第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

Ⅲ区-Fブロック

3号畝 3号畝ではFA及びFA主体層上面で畝の下部構造となる二時期の溝を検出した。FP降下時に畝を残す畝では畝間に溝が形成され、褐灰色土及びにぶい黄褐色土が埋没し、古い段階の畝ではFP降下時の畝下に溝が形成され、にぶい黄褐色土が埋没している。両者は形状・規模とも類似し、平行して存在する。

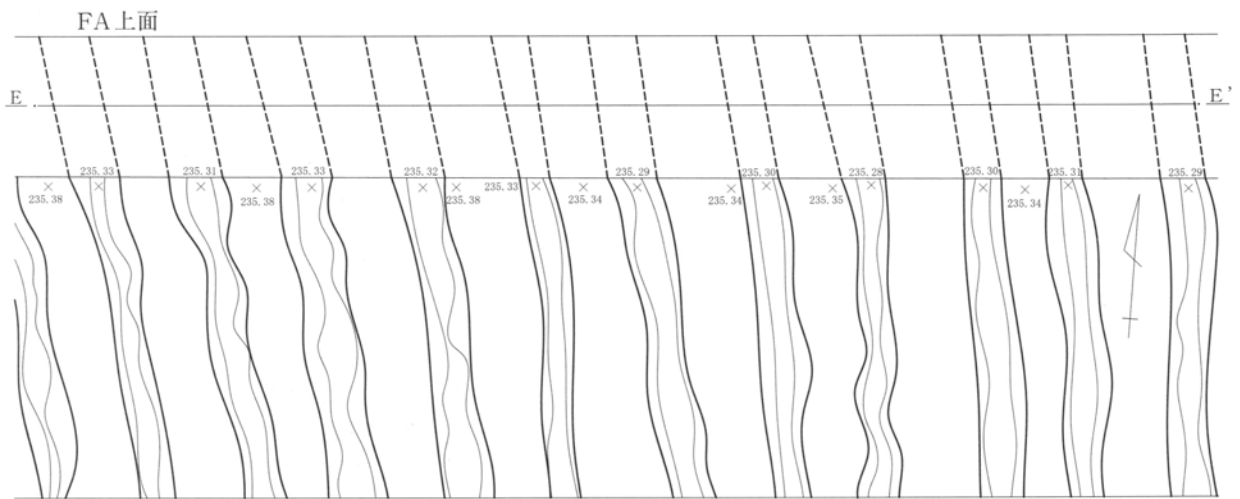
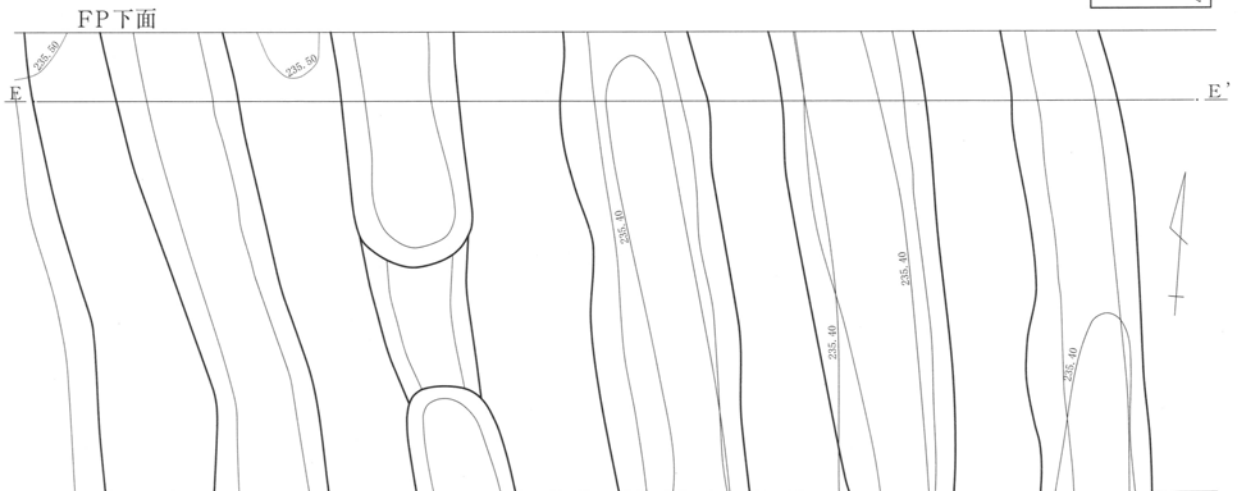


3号畝 断面 E

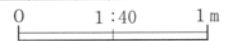


3号畝 E-E'

- 1a 褐灰色土。シルト質。夾雑物を含まない。
- 1b 褐灰色土。僅かに小石を含む。FAの土壌化した層。
- 2 灰黄褐色土。FA小ブロックを含む。
- 3 にぶい褐色土。FA小ブロック、黒褐色土ブロック混入。
- 4 にぶい黄褐色。FA小ブロック、黒褐色土小ブロックを含む。細かく攪拌された土。



第79図 Ⅲ区-Fブロック



第3節 放牧地

国道17号鯉沢バイパス関連で過去に発掘した白井遺跡群で、ウマの放牧地が調査された。FPを取り除いた古墳時代の地表面には広範囲にわたって、無数のウマの足跡が残されていた。足跡に規則性がないこと、古墳時代に野生のウマはいなかったことから、この地域がウマの放牧地であったと判断された。吹屋伊勢森遺跡の調査でも全域に渡って、白井遺跡群と同様に、ウマの足跡が検出されたことから、FP降下時にはウマの放牧地が広がっていたと考えられる。

放牧地の調査では以下のような項目の調査を行った。各項目の定義や詳細については、既刊の報告書『白井遺跡群－古墳時代編－』（群馬県埋蔵文化財調査事業団1997）を参照されたい。

ウマの足跡 大きさが10cm前後の円形で、深さが5mm程度の浅い窪みとして確認できる。前足と後足の区別ができる足跡もあり、その大きさから中形馬であると推定されている。吹屋伊勢森遺跡の調査では足跡の計測は行わなかったが、概ね同様の大きさである。足跡はⅢ区の畠面にも残されている。

畦状遺構 FP下面で帯状の僅かな高まりが確認できる。それらは整った区画を作り出すわけでもなく、断面の形状が人為的と判断できるほど明瞭に盛土がなされることもない。杭穴など構造物の痕跡も認められない。しかし、2条の畦状遺構が直角に交わる、東西方向及び南北方向に延びるものが多い、畦状遺構を境に両側に地表面に差が認められる場合があることなどから、耕作に関連した人為的なものであると考えられる。また畦状遺構の表面を削ると、焼土や炭化物が、高まりに沿って点々と分布する場合がある。

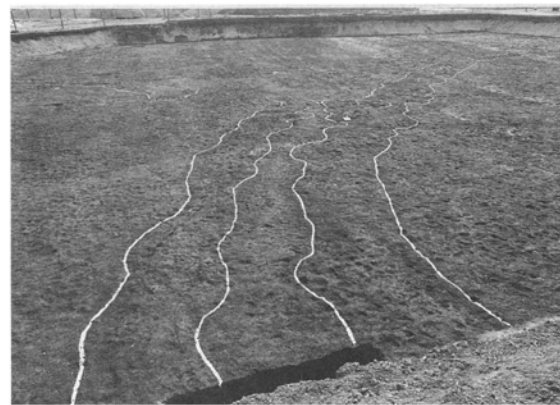
道 周囲より僅かに凹んで硬化している、幅30cm程の帯状の遺構である。本遺跡では畠や畦状遺構を踏む道と、Ⅰ区からⅡ区にかけて、畦状遺構の下に埋もれた道が検出された。これらは土地利用の変遷を考える上で重要である。目的地となるような場所



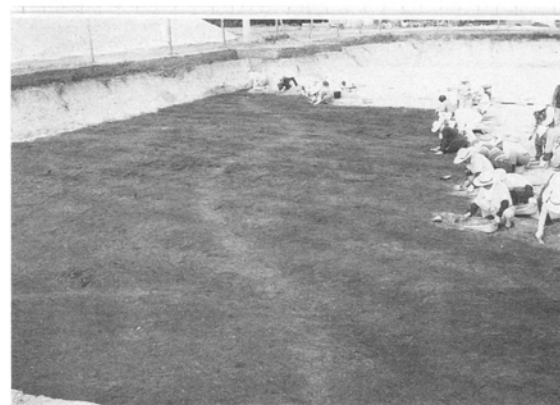
FP除去作業



ウマの足跡(調査者の手前にある丸い凹み)



畦状遺構



道

第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

は調査区内では検出できなかった。道については白井遺跡群の報告で、「当初は人間の使う踏み分け道と考えたが、ウマの蹄跡が道に残されていること、現生のウマが放牧地内に、踏み分け道と同規模の道を作ることから、現段階ではヒトの作った道かウマの作った道かの判断がついていない。」とあるが、本遺跡の道跡では道を歩くようなウマの足跡は確認していない。

倒木痕 樹木の倒れた痕跡であるが、吹屋伊勢森遺跡で調査したものは、一般的な倒木と異なり根鉢の回転を伴わず、根元から幹が折れた状態のものである。FP下面検出時には不整形の凹みと、そこから伸びる僅かな溝状の凹みとして確認できる。I区2号倒木では溝状の部分で炭化材が出土している。根元にあたる凹み部分を半裁し断面観察すると、立木痕と同様の形状を呈する。

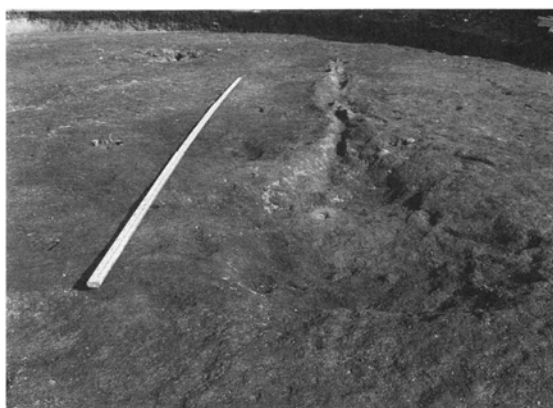
立木痕 FPを取り除いた時点で、不定形の落ち込みや播り鉢状の落ち込みを確認した。それらはさら

にFP混じりの土が埋まっており、断面を確認したところ、樹木の根跡状になっていた。FP混じりの土を全て取り除いたところ、パイプ状の空洞が数多く入り乱れていた。このことから樹木の根跡と判断し、倒木と区別するために立木痕と呼称した。

窪み I区の平坦面とⅢ区畠内で円形の浅い窪みが検出された。Ⅲ区の窪みの方がやや深い。これらは断面観察を行ったが、立木痕のように根の痕跡はなく、FP下の土壌層が薄くなっているのみで、何に由来するものなのか判断がつかなかった。

上記の項目以外に、地表面には植物の痕跡と考えられる細長い筋や細かい炭化物、モグラなどの動物の生痕の可能性のある、直径5cmほどの、水平方向に広がる溝などが認められた。

本遺跡内では、ウマの飼育に係わる牧柵や厩舎、水飲み場などの施設は検出できなかった。またI区～IV区までがすべて放牧地であり、放牧地の範囲を限定できるような資料は得られなかった。



倒木



立木(中央左の落ち込み)



窪み



畦状遺構中の焼土

0区-1ブロック

畦状遺構 0区は狭小で畦状遺構の検出は部分的である。0-1号畦状遺構：幅1.8m、高さ10cm、走向N-13°-W。畦状遺構下部分はFAの残存状況が良く、周囲に比べ攪拌の度合いが少ない。0-2号畦状遺構：調査区中央部で検出し、十字に畦状遺構が交わる。検出が部分的であるため、1条として扱った。幅1.0m、高さ5cm、走向N-26°-E及びN-58°-W。 **その他** 調査区の全面に渡ってウマの足跡が確認された。足跡は畦状遺構の上にも残る。



0区-1号畦状遺構上のウマの足跡



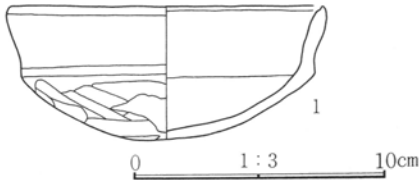
0区-1ブロック



第80図 0区-1ブロック

I区-1ブロック

畦状遺構 I-1号畦状遺構：幅1.1m、高さ7cm、走向N-33°-E。I-2号畦状遺構：幅1.2m、高さ7cm、走向N-57°-W。1号畦状遺構と2号畦状遺構は直角に交わるようにL字に位置する。ただし二つの畦状遺構は結合せず0.7mの間を置く。 **道** I-1号道：幅0.4m。走向N-40°-E。1号畦状遺構と並行するように位置し、1号畦状遺構と2号畦状遺構の間を抜けてさらに東に延びる。I-2号道：幅0.3m。走向N-67°-W。1号畦状遺構と2号畦状遺構の交点付近で1号道から分岐する。2号畦状遺構を延長するように延びている。 **倒木** I-1号倒木、I-2号倒木は共に根本は転倒しておらず、幹部分が倒れている。2号倒木は倒れた幹の一部が炭化して点々と残っており、樹種同定の結果コナラであることが判明した。(第7章自然科学分析参照。) **立木** I-2号立木は2号倒木の西側で、I-5号立木は1号畦状遺構と1号道の交点付近で検出した。 **その他** 畦状遺構と道の交点に近い1J-20グリッド周辺の、FP下面からFA上面にかけて土師器模倣坏の破片が散らばって出土し、それらは1個体に接合した。



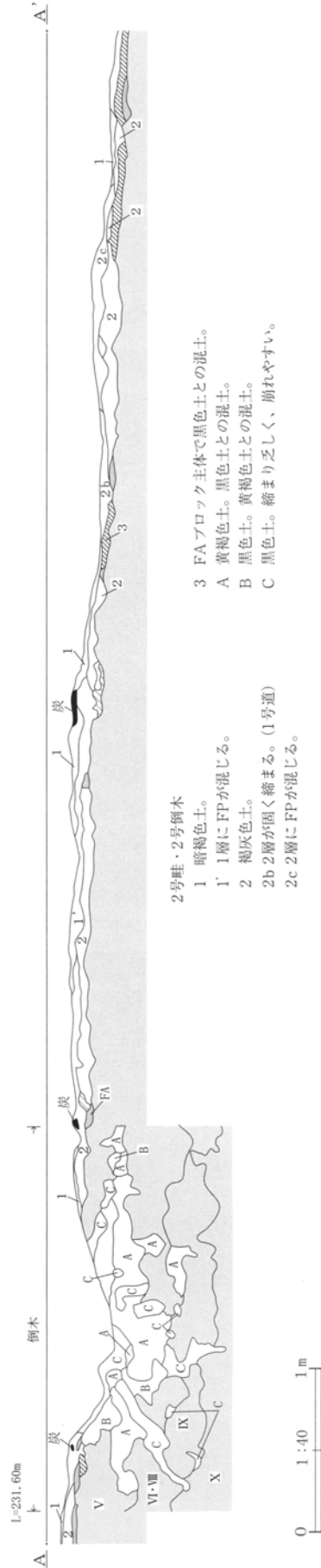
番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成	②色調	③胎土
1	土師器 坏	1J-20 他	口 12.3 高 5.3	①良好	②橙色	③粗砂粒少

器形・文様の特徴

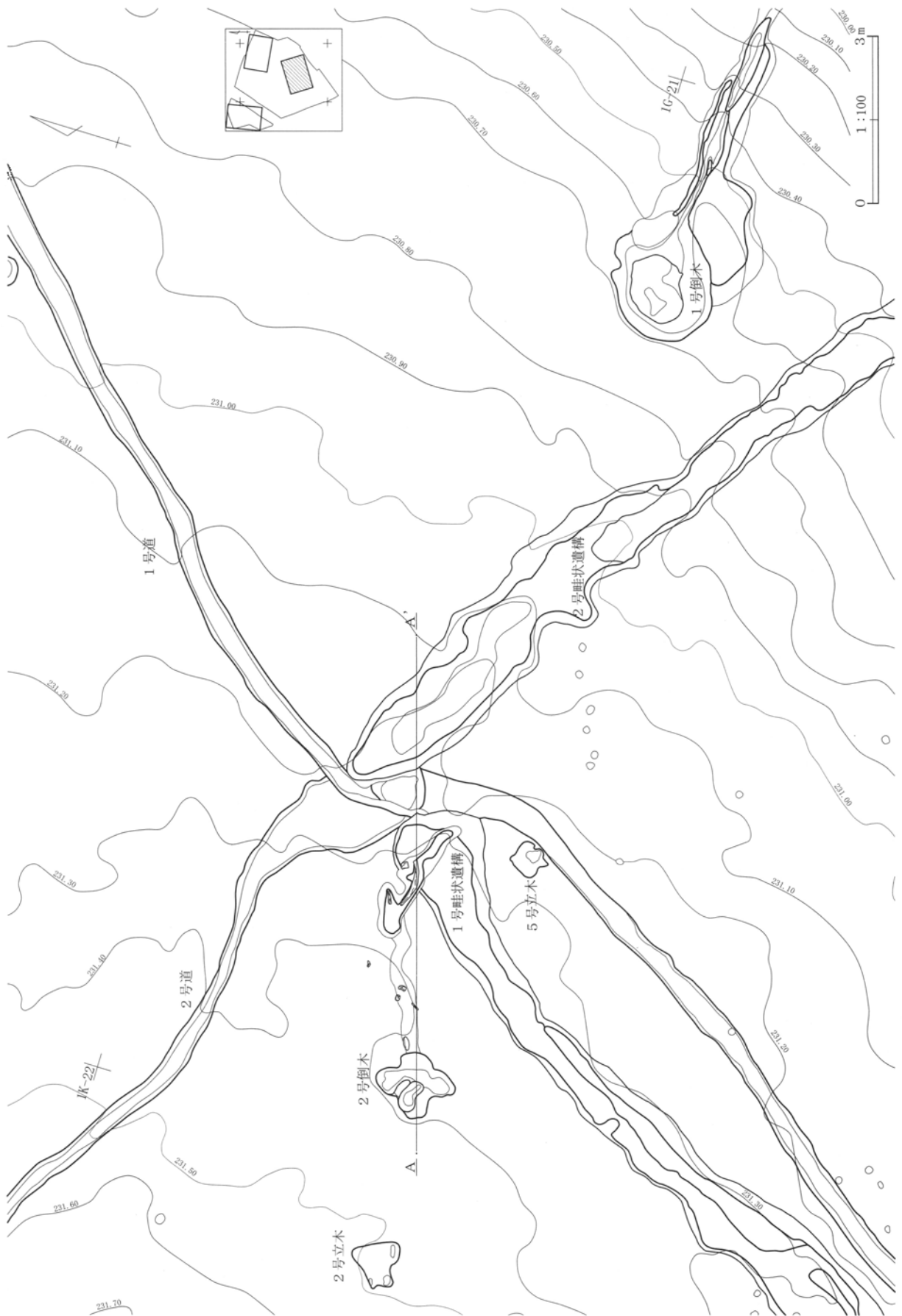
外面 口縁部横撫で、体部～底部鈍削り。
内面 口縁部～体部横撫で、底部撫で。



第81図 I区-1ブロック 出土遺物



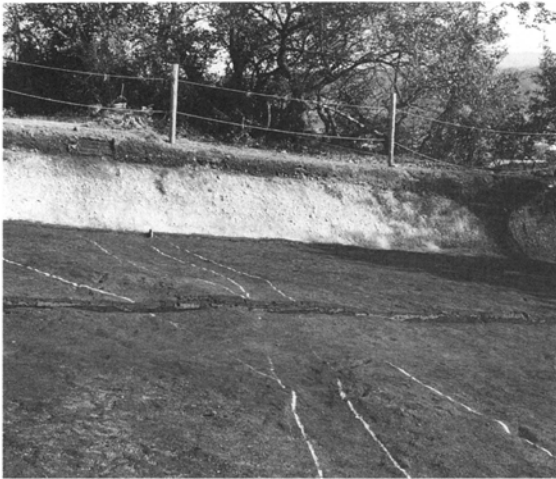
第82図 I区-1ブロック(1)



第83図 I区-1ブロック(2)

I区-2ブロック

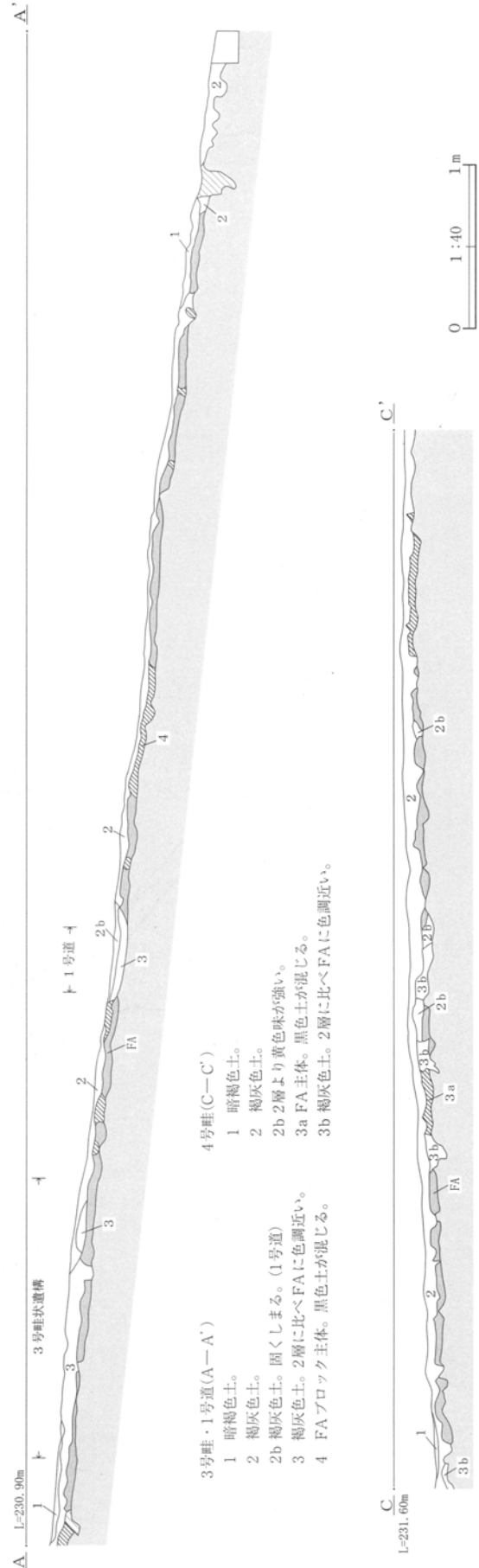
畦状遺構 I-3号畦状遺構：幅1.7m、高さ5cm、走向N-17°-E。I-4号畦状遺構：幅2.0m、高さ5cm、走向N-73°-W。3号畦状遺構と4号畦状遺構はL字に結合する。1号道がこれらの畦状遺構の上を横切っていること、ウマの足跡が畦状遺構上に残ることから、FP降下時に畦状遺構は機能していなかったと考えられる。 **道** I-1号道：幅0.4m。走向N-47°-E。I区-1ブロックからの続き。そのまま直進するとあと20mで段丘崖となる。 **その他** 3号畦状遺構と1号道の南東側は急斜面となり、高さ20mの段丘崖に続く。また、この2ブロック付近はFAの一次堆積層が良く残っている。



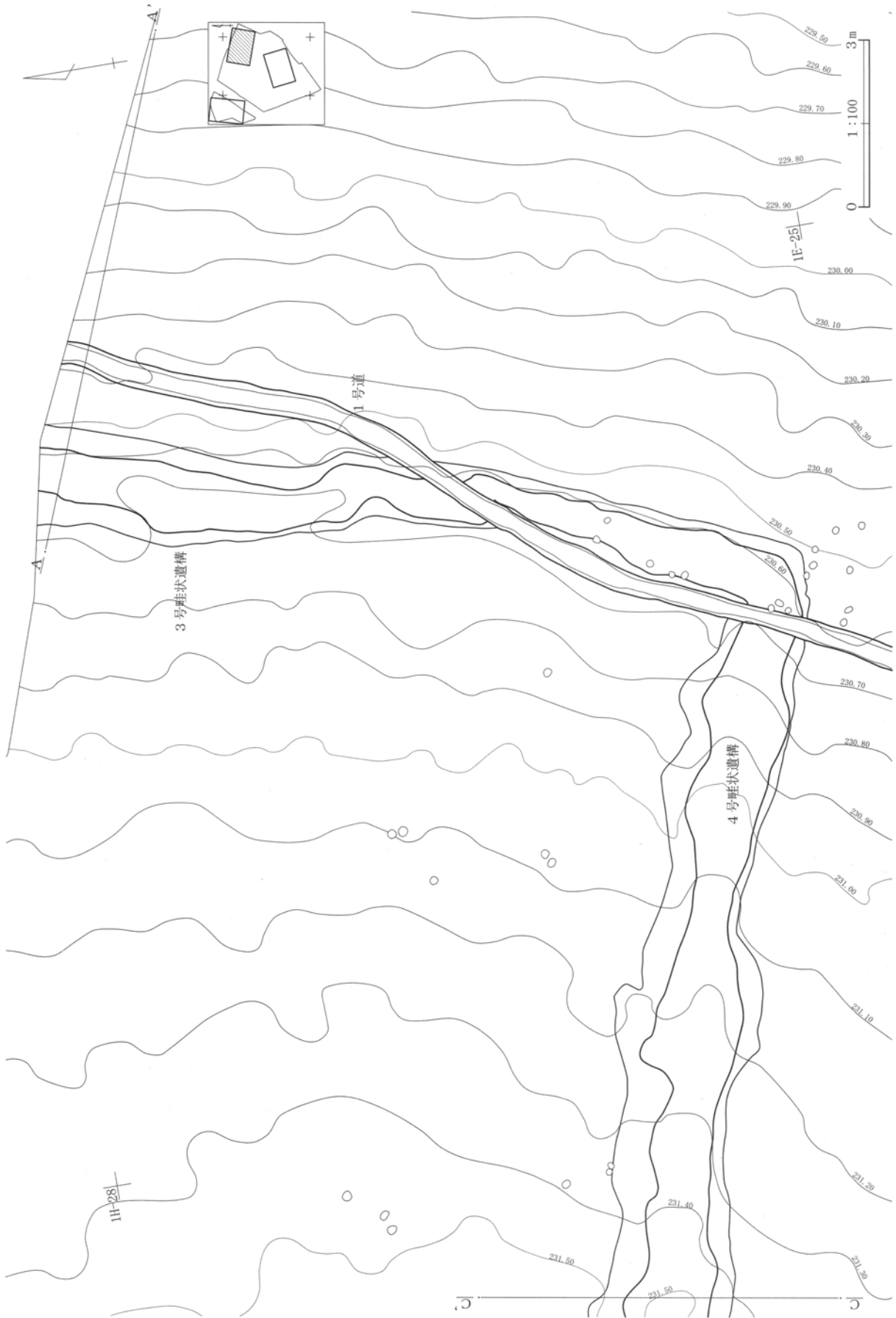
I区-3号畦状遺構・1号道(西から)



I区 全景(奥に見えるのが榛名山)



第84図 I区-2ブロック(1)



第85図 I区-2ブロック(2)

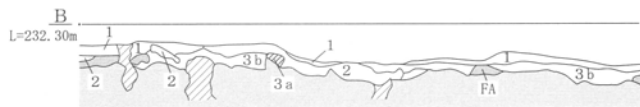
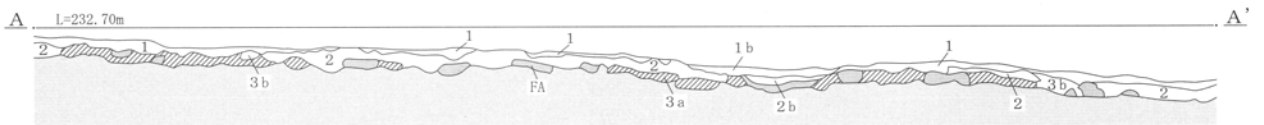
第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

I区-3ブロック

畦状遺構 I-4号畦状遺構：幅1.7m、高さ5cm、走向N-84°-W。I区-2ブロックからの続き。5号畦状遺構とT字に交わる。I-5号畦状遺構：幅1.6m、高さ4cm、走向N-2°-E。調査区北部では高まりが二列になる。道 I-3号道：幅0.5m。走向N-5°-E。この道はFA上面で検出した。FP下面で道の痕跡はなく、一部は畦状遺構と重複する。4号畦状遺構、5号畦状遺構が作られる前に存在した道である。その他 調査区の北端部で2箇所窪みを検出した。浅い皿状の窪みで、下層に土壤攪乱は認められない。



I区-3号道(南西から)

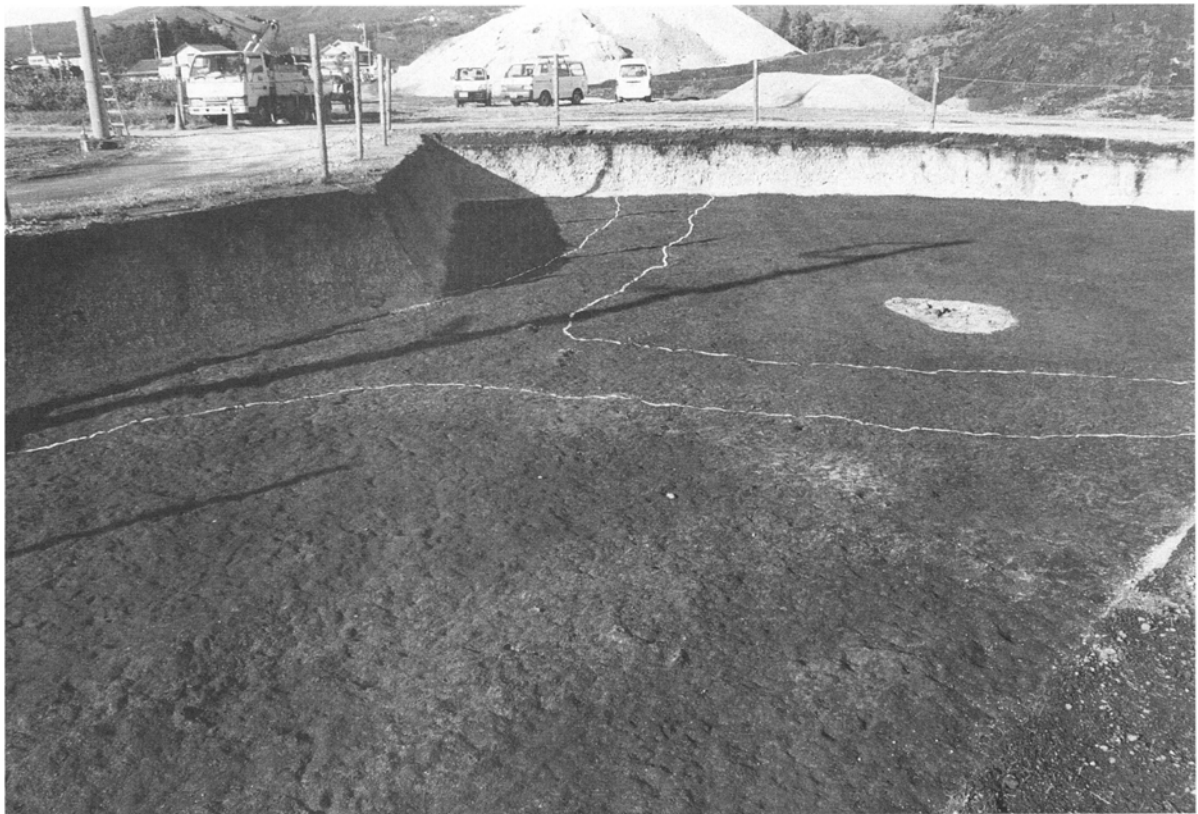


0 1:40 1m

第86図 I区-3ブロック(1)

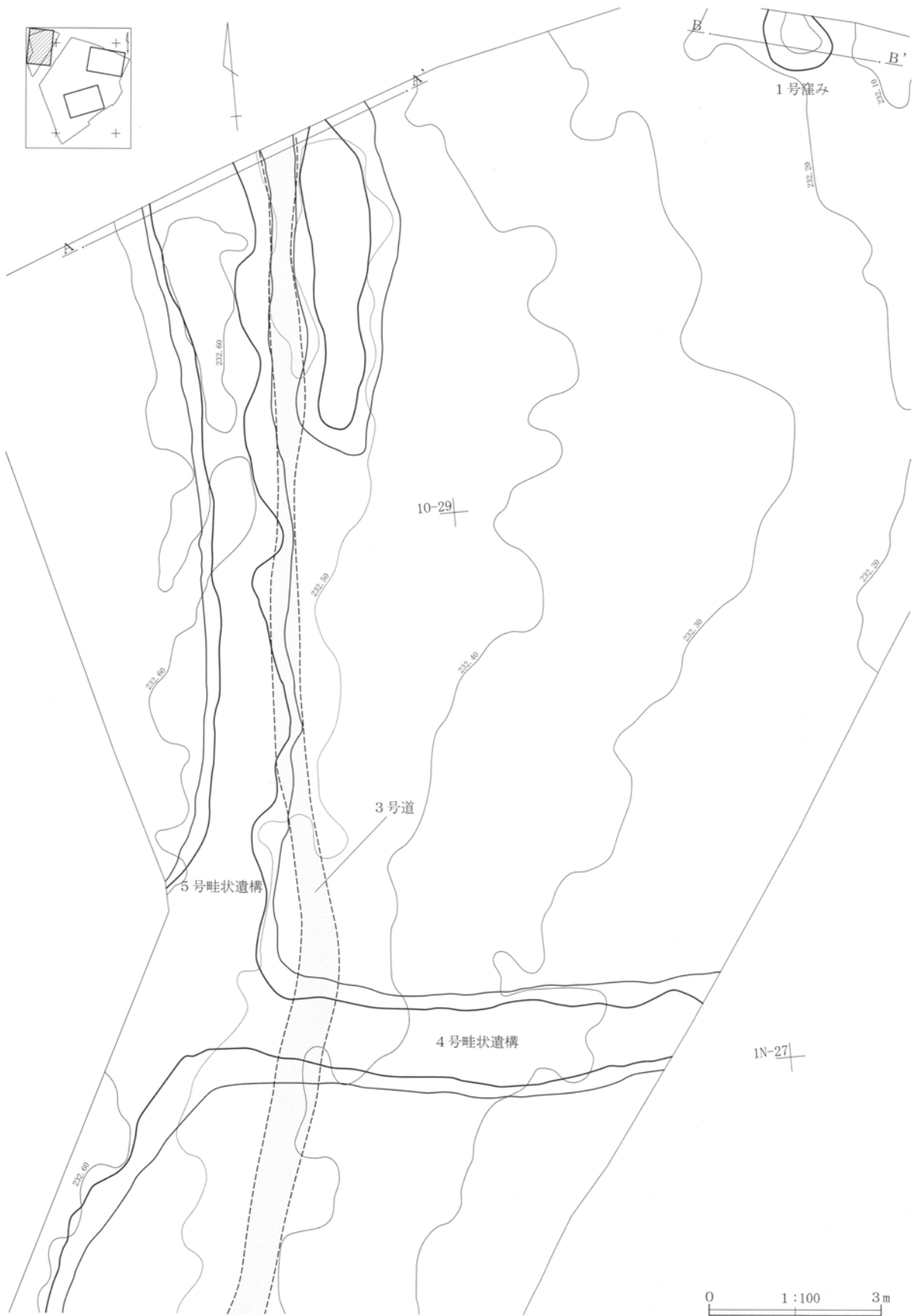
5号畦・3号道 A-A'、1号窪み(共通)

- 1 暗褐色土。
- 1b 1層が固く締まる。
- 2 褐灰色土。
- 2b 2層が固く締まる。
- 3a FAブロック主体。黒色土が混じる。
- 3b 褐灰色土。2層に比べFAに色調近い。



I区-4号・5号畦状遺構(南から)

第3節 放牧地

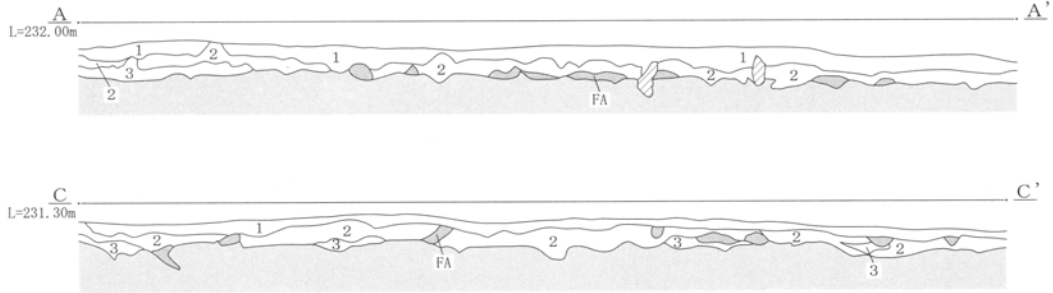


第87図 I区-3ブロック(2)

Ⅱ区-1 ブロック

畦状遺構 Ⅱ-1号畦状遺構：幅1.6m、高さ6cm、走向N-7°-E及びN-81°-W。Ⅱ区南東部で検出されたL字に曲がる畦状遺構である。東西方向に延びる部分から南に高まりが分岐しているが、僅かな高まりであるため畦状遺構としての番号は付けな

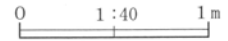
かった。断面Aでは1号畦状遺構下はFAの残存が良い。Ⅱ-2号畦状遺構：幅1.6m、高さ5cm、走向N-80°-W。1号畦状遺構のL字部分に接続するように延びるが、僅かに間隙があり接点はない。断面Cでは畦状遺構下部分でもFAの残存が悪い。その他 この付近は地表面の凹凸が顕著である。



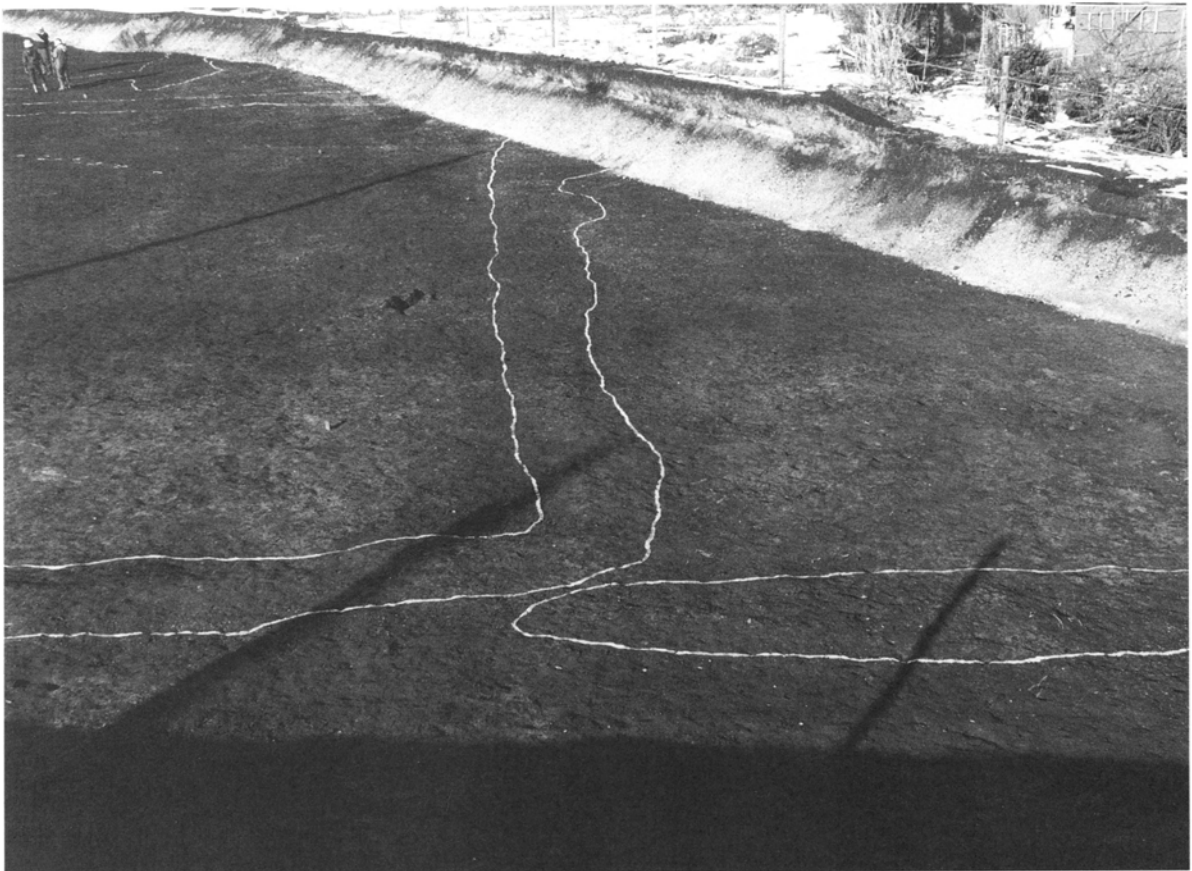
Ⅱ-1 ブロック

1号畦・2号畦

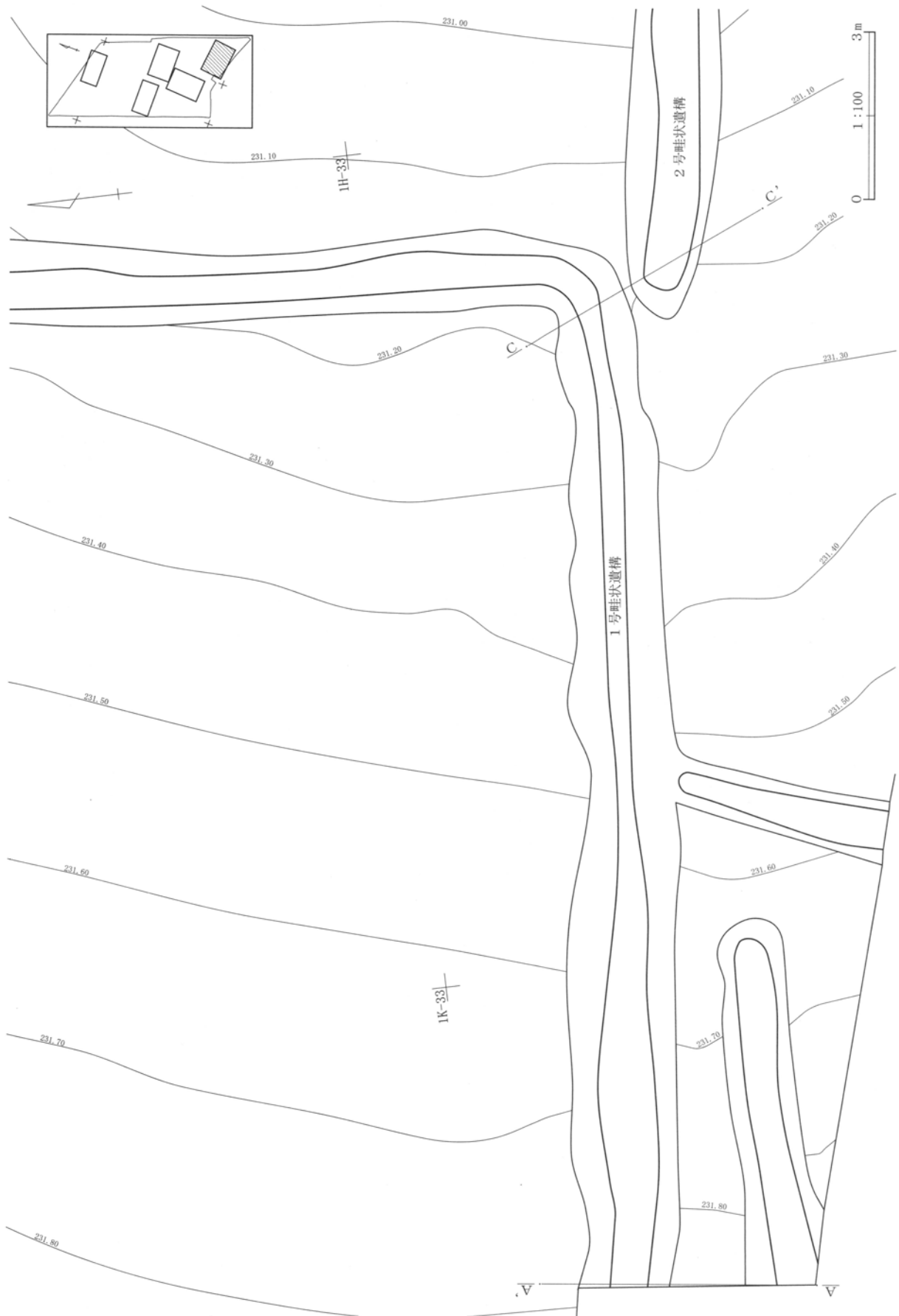
- 1 褐灰色土。FAが攪拌され土壌化。
- 2 褐灰色土。1層より色調がFAに近い。
- 3 黒色土。粒状のFAが混じる。



第88図 Ⅱ区-1ブロック(1)



Ⅱ区-1号・2号畦状遺構(南から)



第89図 II区-1ブロック(2)

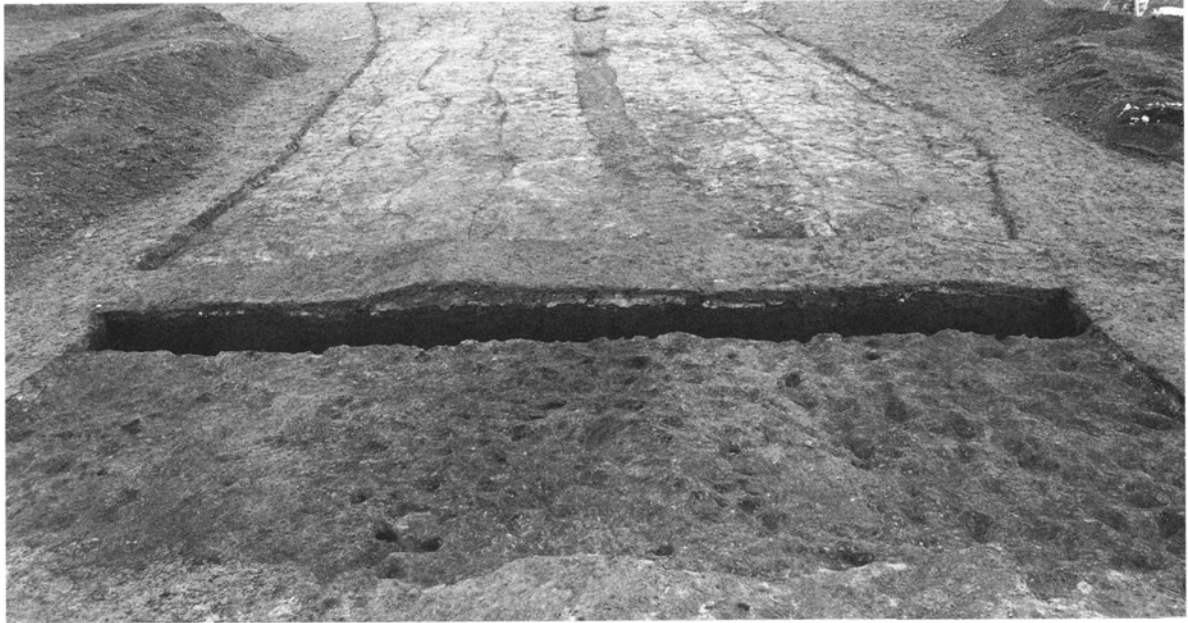
第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

Ⅱ区-2ブロック

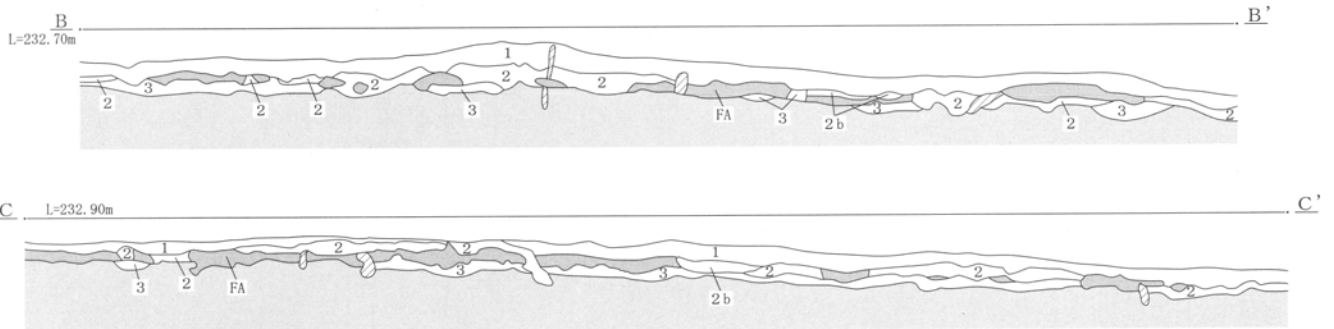
畦状遺構 Ⅱ-3号畦状遺構：幅2.4m、高さ10cm、走向N-11°-E。Ⅰ区の5号畦状遺構から連続するものである。畦状遺構の幅は一定していない。道Ⅱ-1号道：幅0.5m。走向N-12°-E。Ⅰ区の3号道から連続するものである。この道もⅠ-3号道と同様にFA上面で検出した。FP下面で道の痕跡はなく、道として硬化した層が3号畦状遺構の盛土で覆われている。1号道と3号畦状遺構の走向は一致しており、3号畦状遺構の東側裾部に1号道が位置する。



調査風景(FP除去の様子)

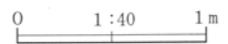


Ⅱ区-3号畦状遺構 断面B

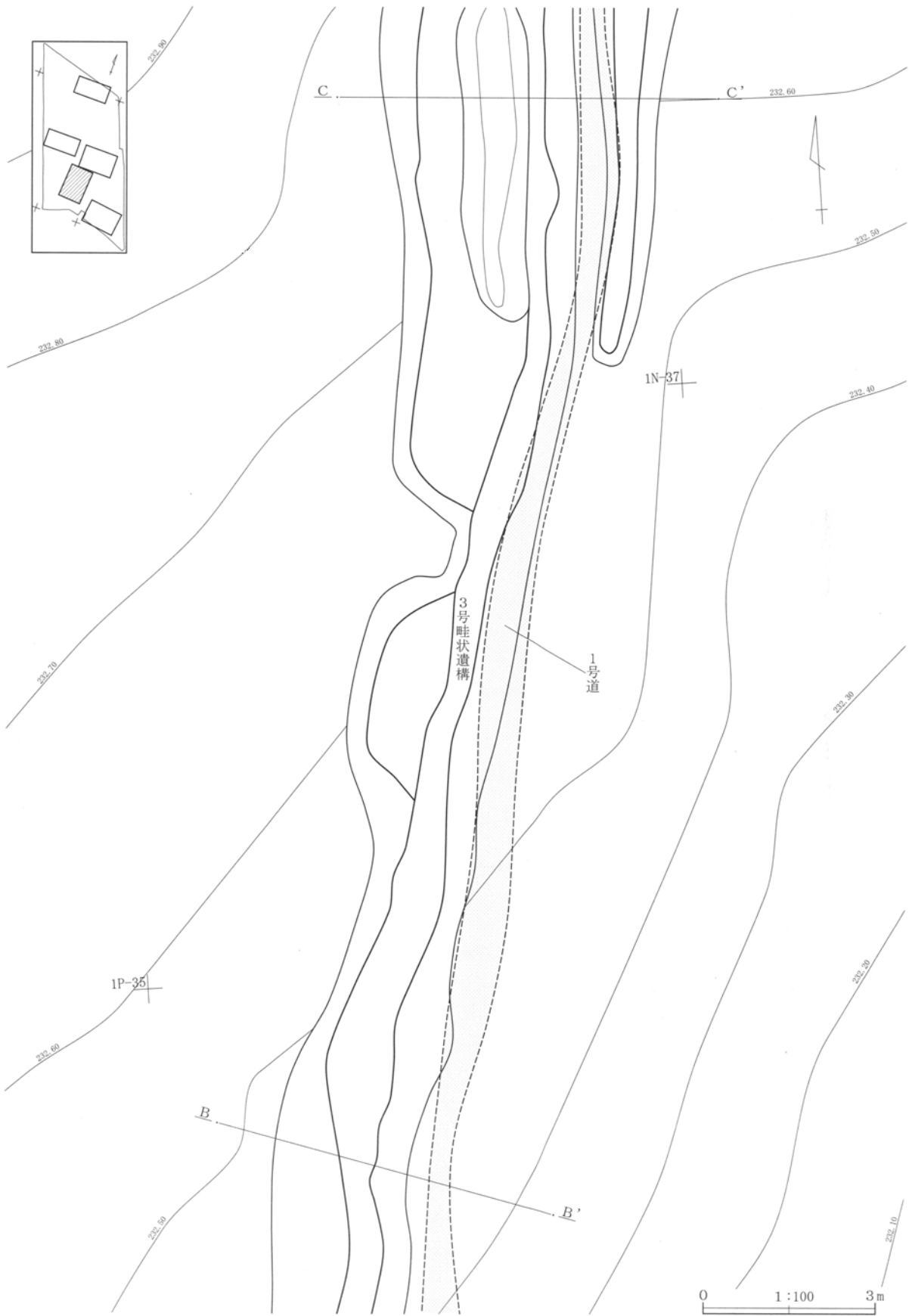


3号畦 B-B'、C-C'

- 1 褐灰色土。FAが攪拌され土壌化。
- 2 褐灰色土。1層より色調がFAに近い。
- 2b 2層が固く締まる。褐色味を帯びる。
- 3 黒色土。粒状のFAが混じる。



第90図 Ⅱ区-2ブロック(1)

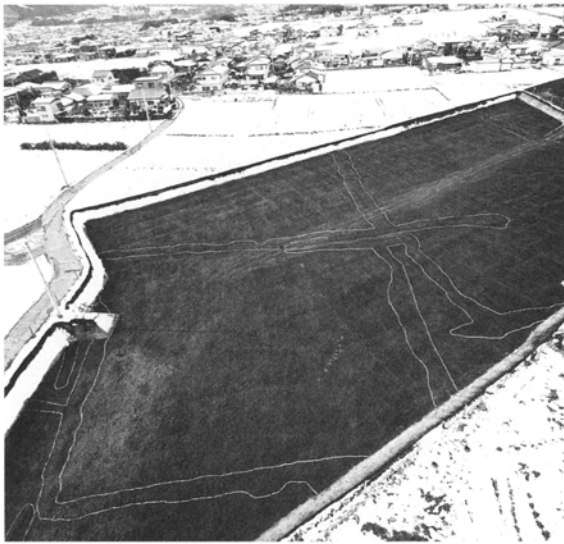


第91図 II区-2ブロック(2)

Ⅱ区-3ブロック

畦状遺構 Ⅱ-3号畦状遺構：幅2.4m、高さ6cm、走向N-6°-E。Ⅱ-3ブロックの北側10mのところ
で、3号畦状遺構は収束する。Ⅱ-4号畦状遺構：幅
2.9m (3号畦状遺構西側)、幅2.1m (3号畦状遺構
東側)、高さ8cm、走向N-88°-W。3号畦状遺構
の西側では1条であるが、西側は2条に分かれる。
走向が同じことから一連の畦状遺構とみなした。

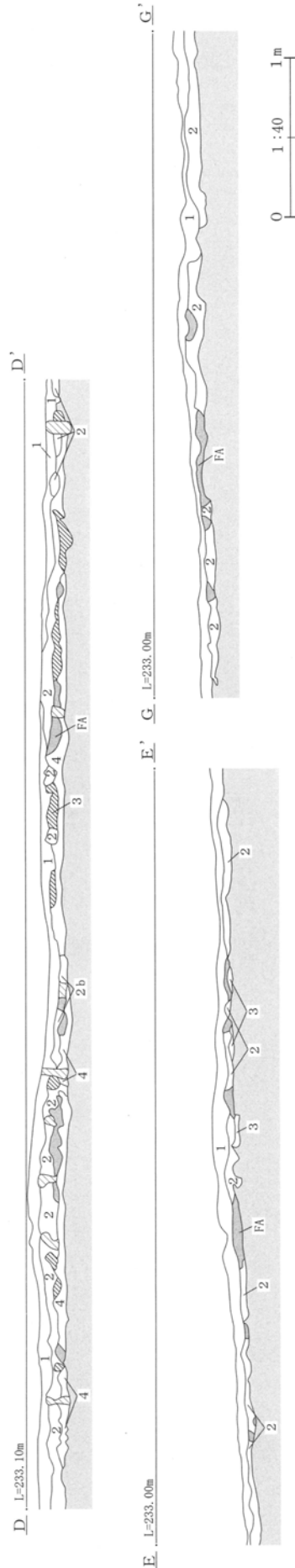
道 Ⅱ-1号道：幅0.6m。走向N-8°-E。3号畦状
遺構が収束した先も1号道は延びている。 その他
Ⅱ-1・2・3・4号畦状遺構に囲まれる方形区画内は
ウマの足跡が数多く良好に残存していた。



Ⅱ区 全景



ウマの足跡



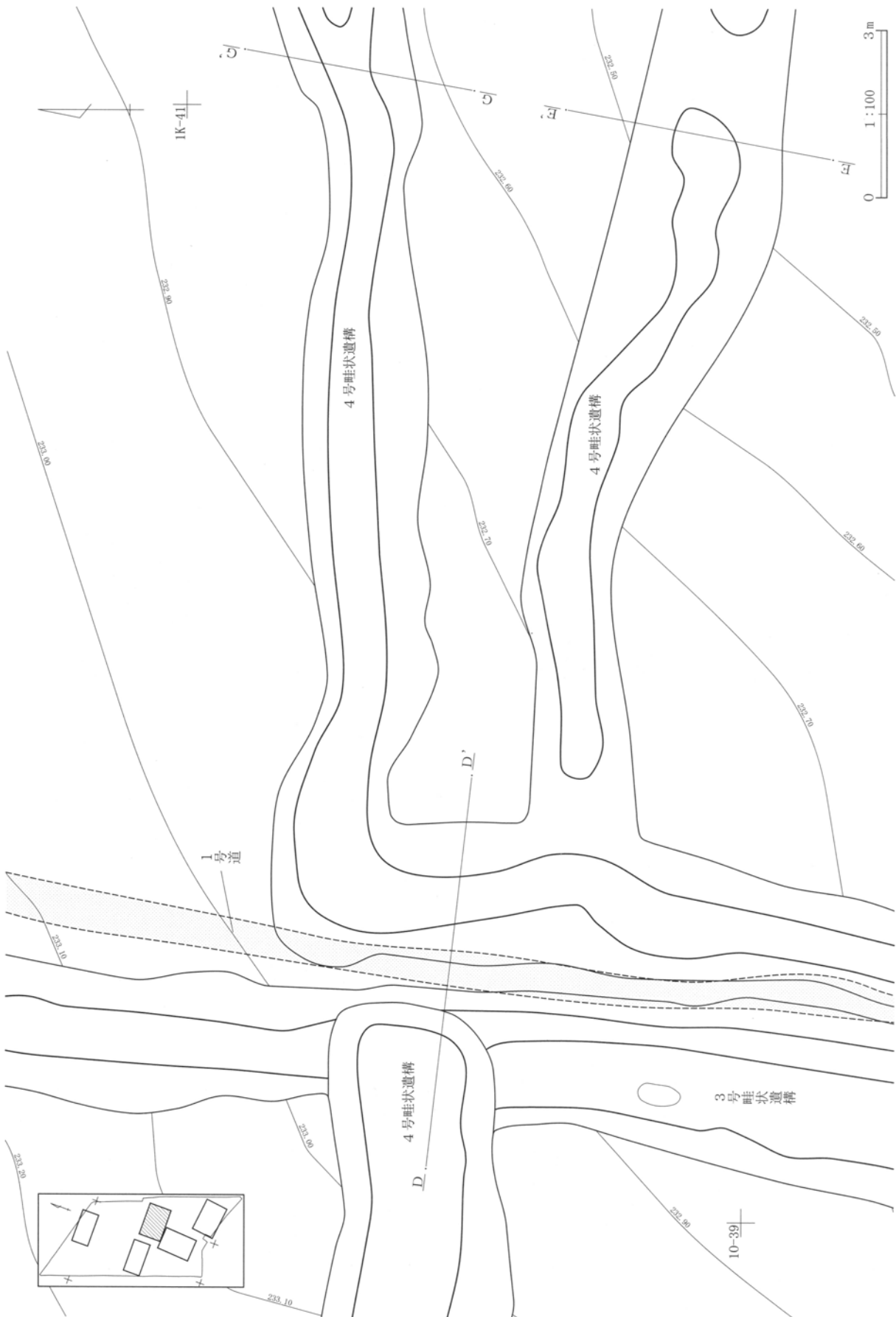
4号畦 E-E'、G-G'

- 1 褐灰色土。FAが攪拌され土壌化。
- 2 褐灰色土。1層より色調がFAに近い。
- 3 黒色土。粒状のFAが混じる。

3号畦・4号畦 D-D'

- 1 褐灰色土。FAが攪拌され土壌化。
- 2 褐灰色土。1層より色調がFAに近い。
2b 2層が固く締まる。褐色味を帯びる。
- 3 FAブロック主体。黒色土が混じる。
- 4 黒色土。粒状のFAが混じる。

第92図 Ⅱ区-3ブロック(Ⅰ)



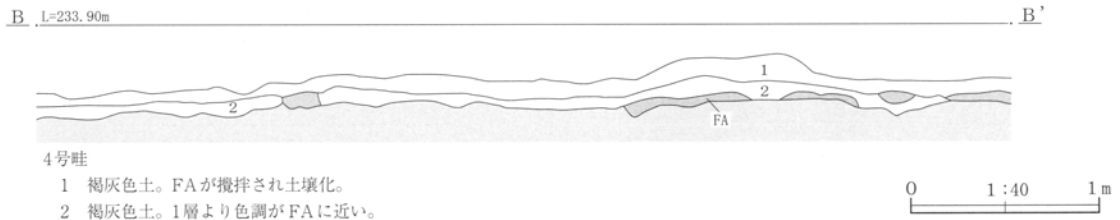
第93図 II区-3ブロック(2)

第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

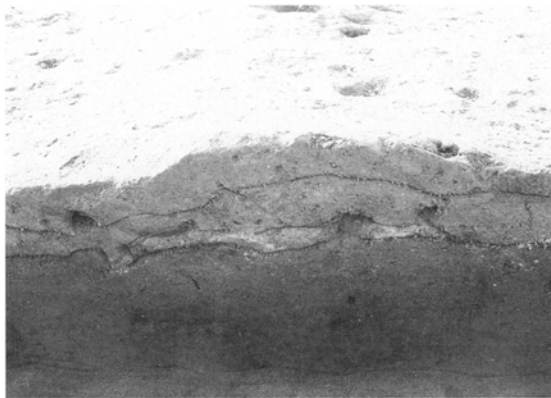
Ⅱ区-4ブロック

畦状遺構 Ⅱ-4号畦状遺構：幅2.8m、高さ13cm、
 走向N-82°-W。畦状遺構の上面の凹凸が激しい。
 断面観察で畦状遺構は概ね2層に分かれ、上層が褐

灰色土、下層は同じ褐灰色土でもFAに色調が近く
 なり、その下にFAの一次堆積層が見られる。畦状
 遺構を徐々に削っていくと褐灰色土中で、焼土や炭
 化物が点々と検出される。



第94図 Ⅱ区-4ブロック(1)



Ⅱ区-4号畦状遺構 断面B



Ⅱ区-4号畦状遺構 焼土検出状況



Ⅱ区-4号畦状遺構(西から)



Ⅱ区-4号畦状遺構 焼土検出状況

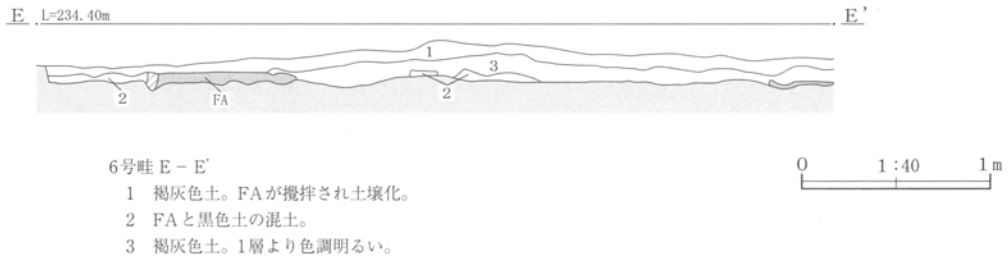


第95図 II区-4ブロック(2)

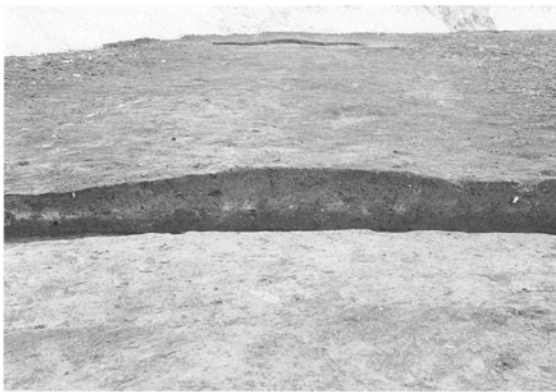
Ⅱ区-5ブロック

畦状遺構 Ⅱ-6号畦状遺構：幅2.4m、高さ9cm、走向N-93°-W及びN-4°-W。L字型に曲がる畦状遺構で、断面観察で土層は概ね2層に分かれ、上層が褐灰色土、下層は褐灰色土だが色調がFAに近

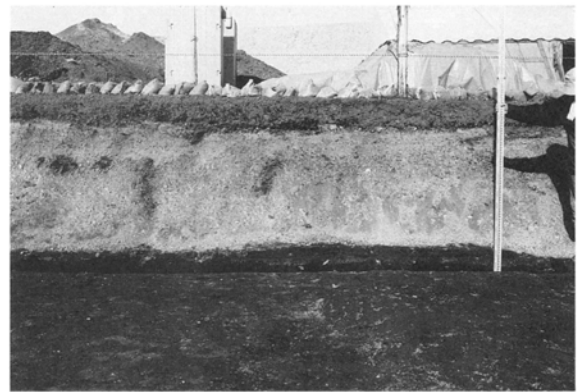
くなる。畦状遺構下にFAの一次堆積層は残っていない。東西方向に延びる部分では、畦状遺構を徐々に削っていくと褐灰色土中で、焼土や炭化物が点々と検出される。その他 6号畦状遺構と3号畦状遺構の間は地表面の凹凸が顕著であった。



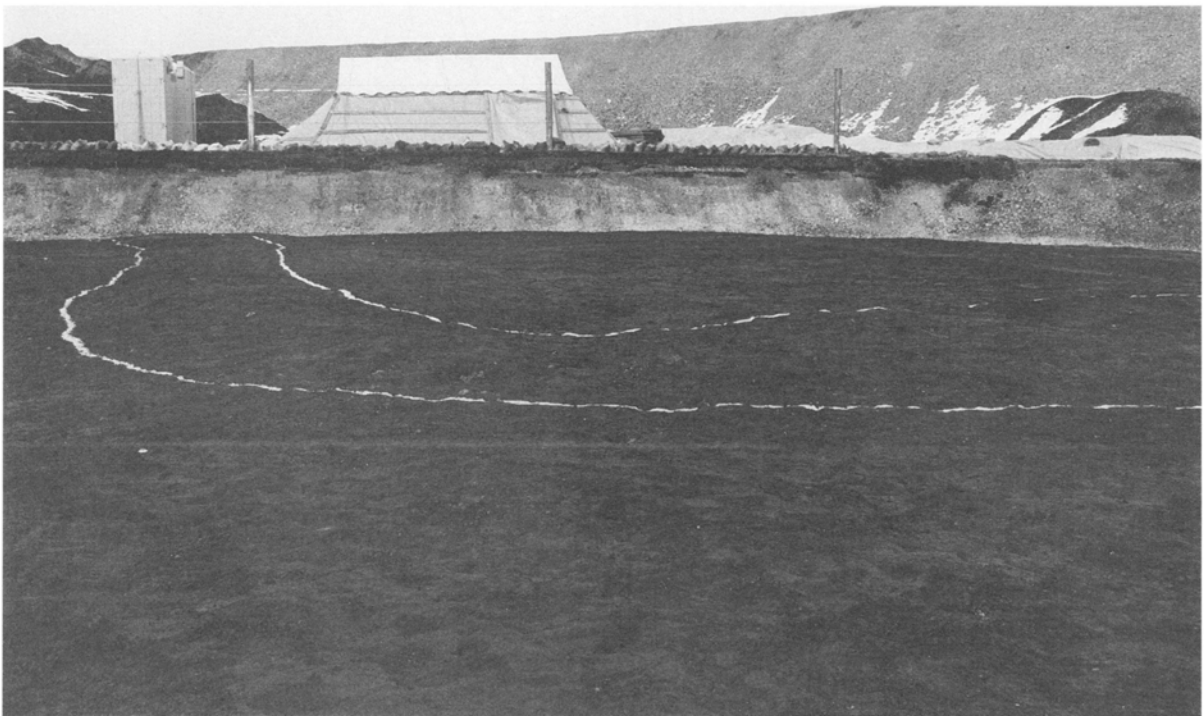
第96図 Ⅱ区-5ブロック(1)



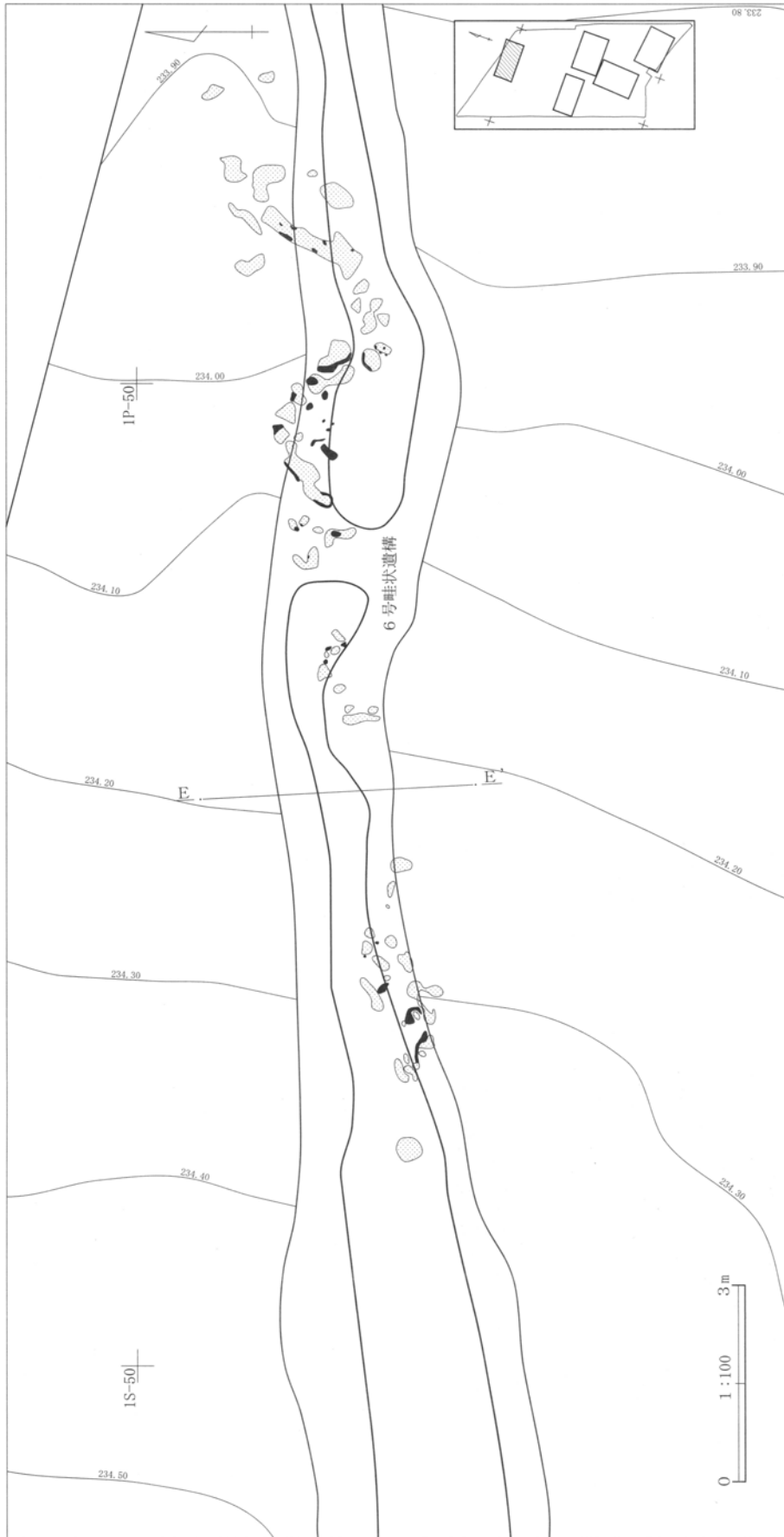
Ⅱ区-6号畦状遺構 断面 E



Ⅱ区-6号畦状遺構 断面 A



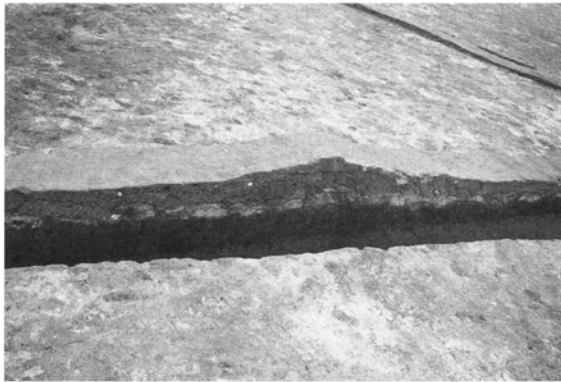
Ⅱ区-6号畦状遺構(南から)



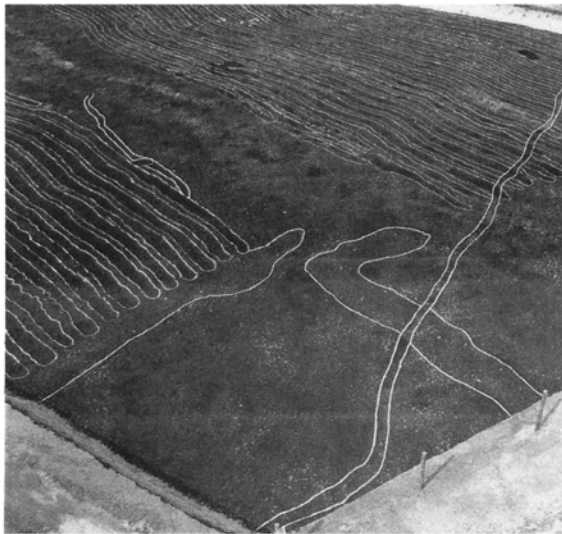
第97図 Ⅱ区-5ブロック(2)

Ⅲ区-1 ブロック

畦状遺構 Ⅲ-1号畦状遺構：幅1.6m、高さ13cm、走向N-96°-W。1号島の南限に沿って延び、1号島の東端の畝より約2m東まで延びた所で収束する。Ⅲ-2号畦状遺構：幅2.1m、高さ6cm、走向N-2°-W。Ⅱ区の6号畦状遺構から連続するものである。調査区南端から1号畦状遺構に向かって延びるが、1号畦状遺構の手前で向きを変え4.5m程で収束する。畦状遺構上に炭化物が散っており、分析を行ったところイネ科と同定された。(第7章自然科学分析参照) **道** 2号道：幅0.7m。走向N-81°-W～N-62°-E。2号道は2号畦状遺構・3号島を横切っており、それらよりも新しい。硬度計で道部分とそれ以外を計測した結果、道部分が硬化していることが数値の上からも認められた。また、Ⅲ区では他にも1号・3号・4号道が検出されている。

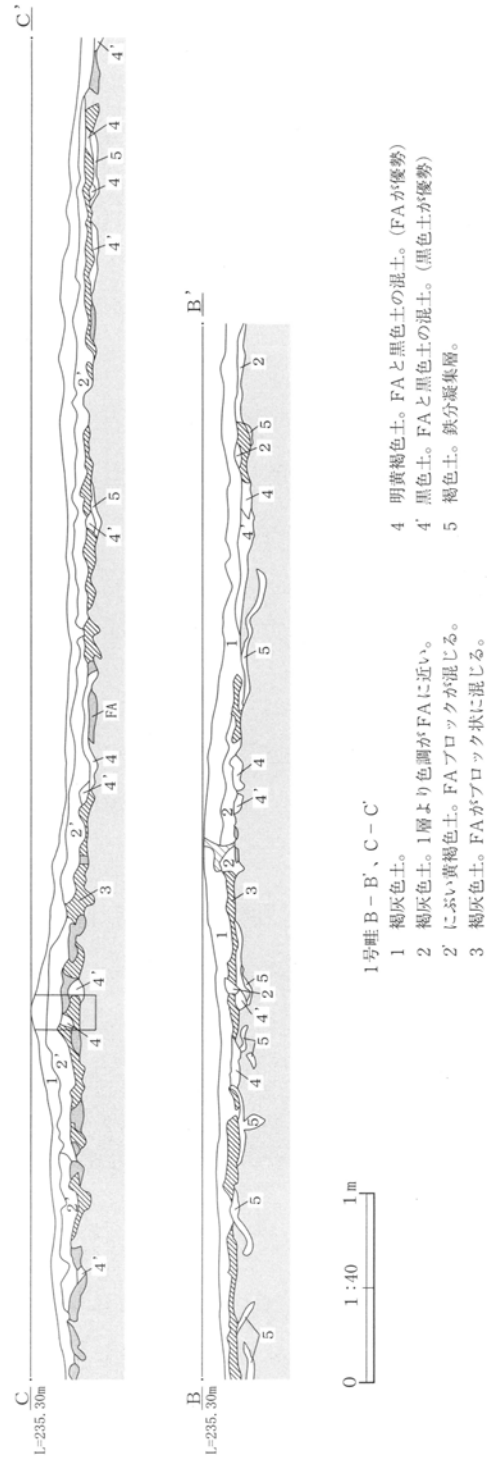


1号畦状遺構 断面C



Ⅲ区-1ブロック (南西から)

1号道は幅0.6m。走向N-59°-Eで、2号・3号・4号島を横切っている。3号・4号道は3号島北部にあり、1号・2号道に比べ道としての形状が明瞭でなく、あまり踏まれていないものと思われる。



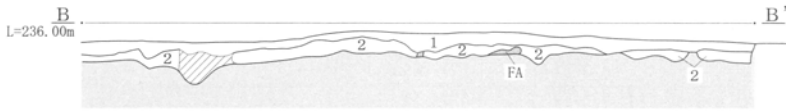
第98図 Ⅲ区-1ブロック(1)

第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

IV区-1 ブロック

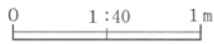
畦状遺構 IV-2号畦状遺構：幅1.6m、高さ5cm、
 走向N-83°-W～N-46°-W。調査区東壁から僅
 かに弧を描きながらIV-1号畦状遺構の手前まで延

びる。1号畦状遺構とは3mの間を置く。 その他
 IV区の南東隅は浅い円形の窪地があり、その周辺で
 はウマの足跡が多数認められた。この部分は3面で
 調査した1号用途不明土坑の真上にあたる。

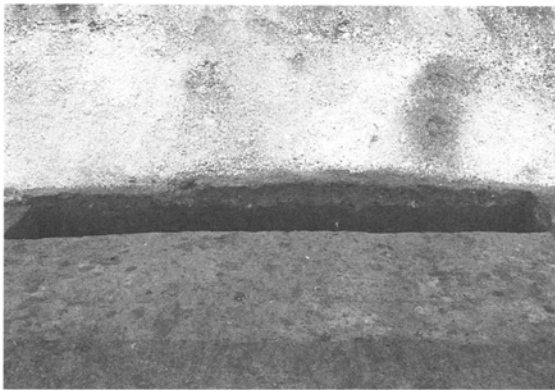


2号畦

- 1 褐灰色土。
 - 2 褐灰色土。1層より色調明るい。
- FA小ブロックが混じる。



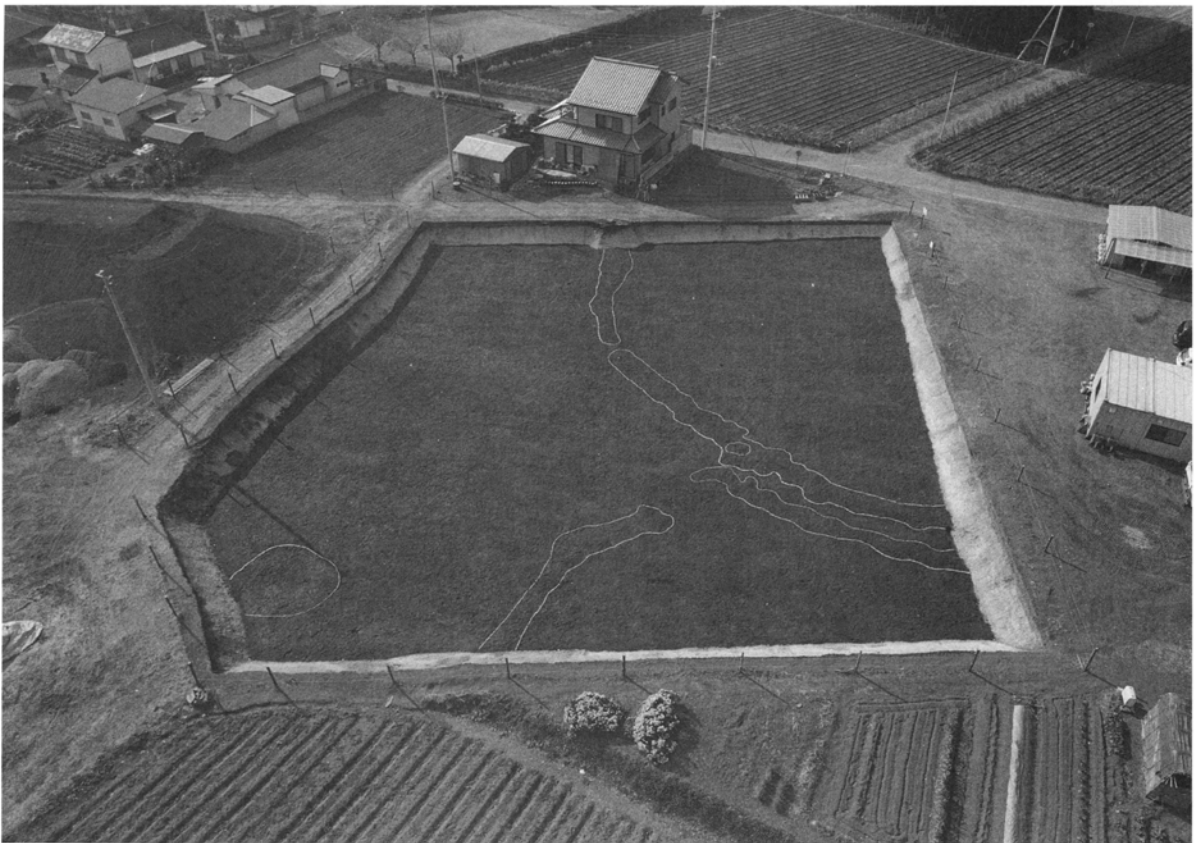
第100図 IV区-1ブロック(1)



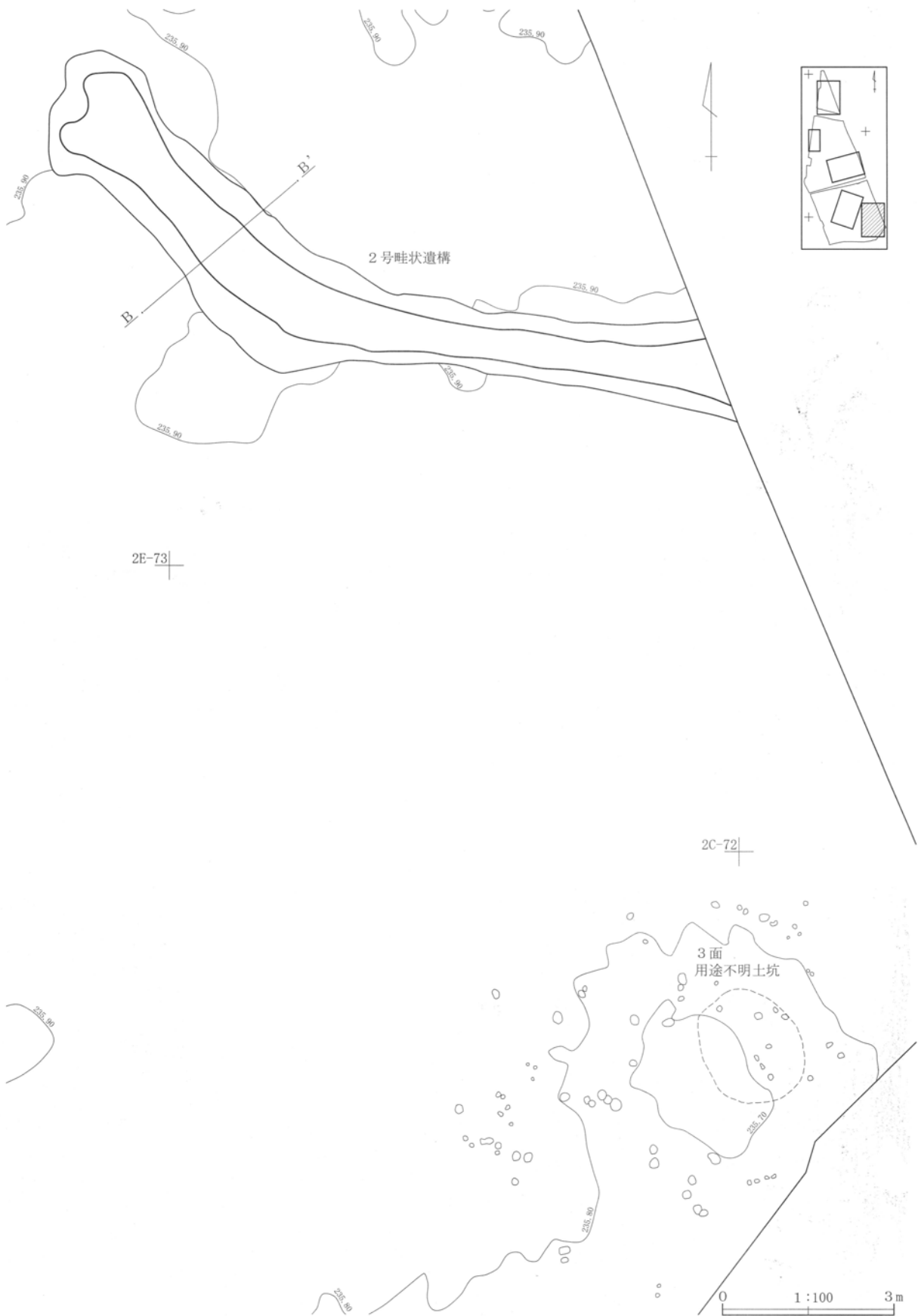
IV区-2号畦状遺構 断面 A



IV区-1ブロック南東部 ウマの足跡



IV区(南半分)全景(東から)



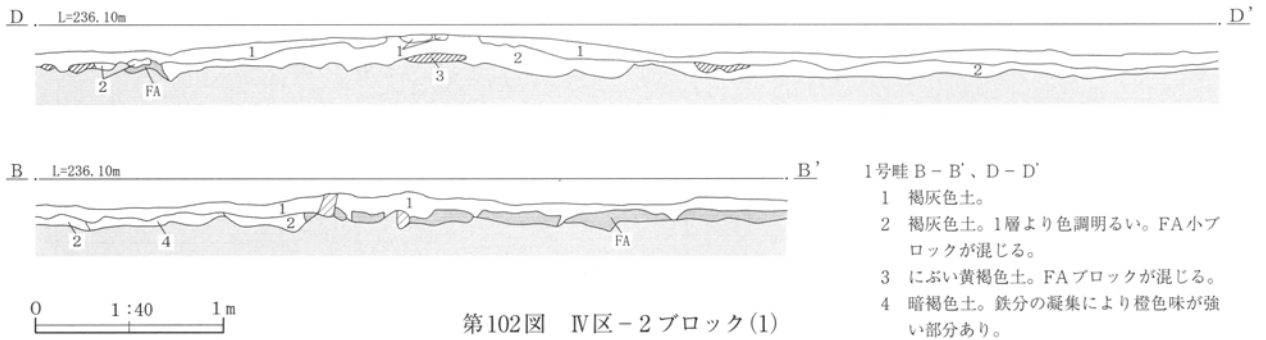
第101図 IV区-1ブロック(2)

第5章 2面の調査(Hr - FP層下面)

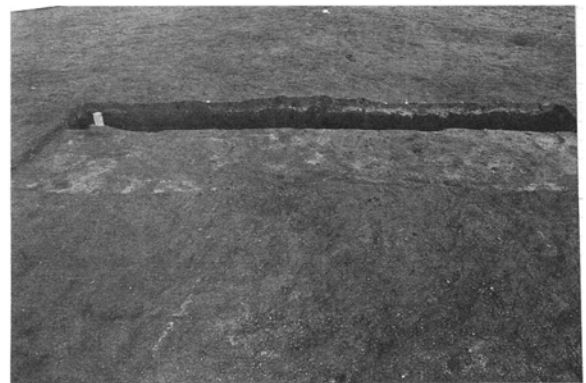
IV区-2ブロック

畦状遺構 IV-1号畦状遺構：幅2.1m、高さ9cm、
 走向N-68°-E～N-31°-E。弧を描くように延び
 る。調査区西寄りでは1条だった高まりが、途中か
 ら2条になるが、これは2号畦状遺構との関わりが

考えられる。断面Bの東側では一度、畦状遺構が
 途切れる。断面B付近ではFAの残存が良いが、断
 面D付近ではFAの一次堆積層はほとんど見られな
 ない。その他 この付近ではウマの足跡が多数残さ
 れており、畦状遺構の上もウマが踏んでいる。



IV区-1号畦状遺構の途切れた部分(北から)



IV区-1号畦状遺構 断面B(西から)



IV区-1号畦状遺構

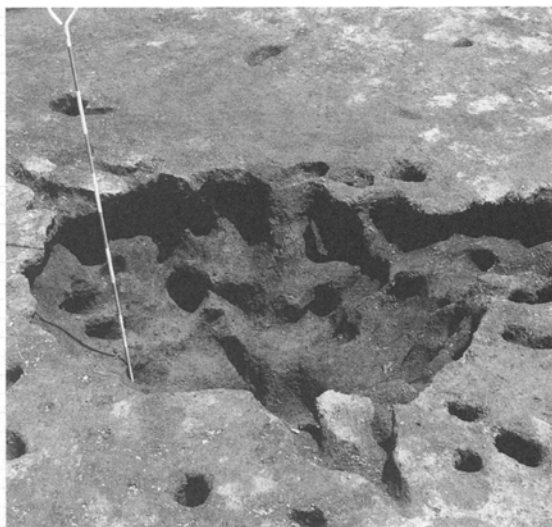
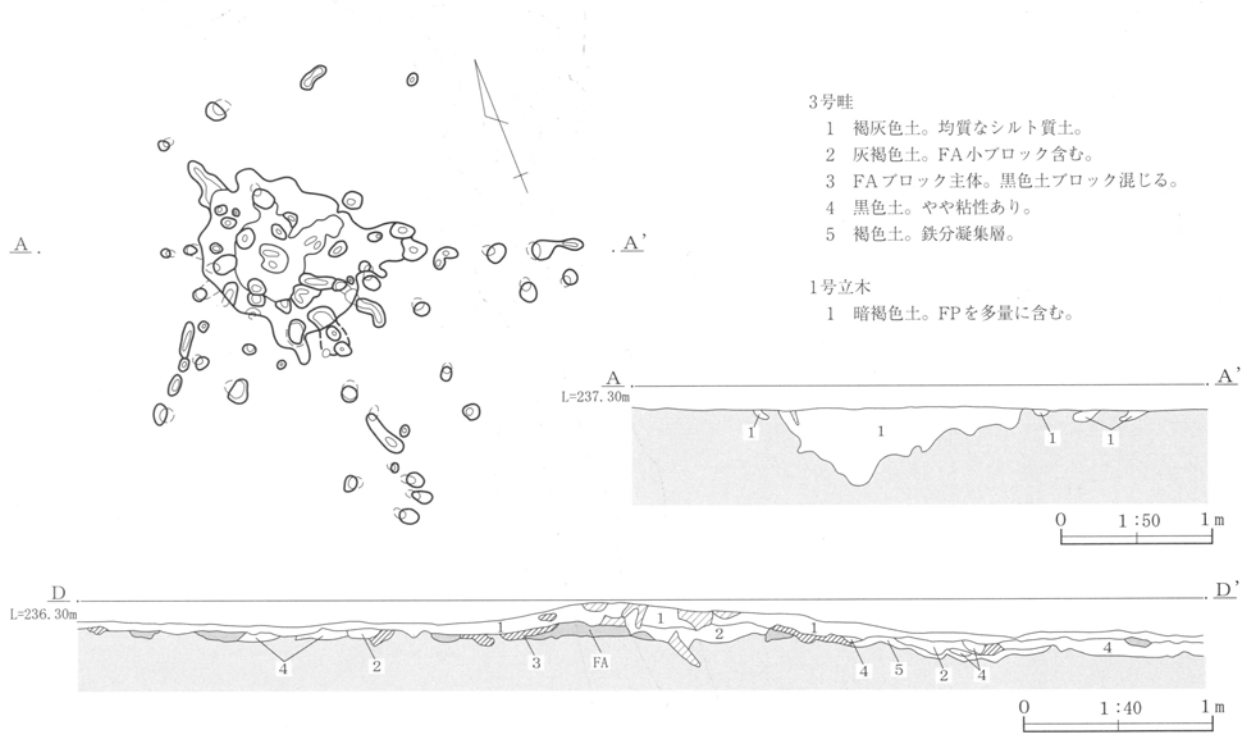


第103図 IV区-2ブロック(2)

IV区-3ブロック

畦状遺構 IV-1号畦状遺構：2条の高まりとして延びる。幅1.6m及び1.7m、高さ7cm、走向N-2°-W。IV-3号畦状遺構：幅2.2m、高さ11cm、走向N-81°-E及びN-38°-E。途中で向きを変える。畦状遺構の盛土中から焼土や炭化物が点々と検出される。道 道として明瞭に認識は出来ないが、畦状遺構を横切るように幅0.4m前後の凹みが数箇所

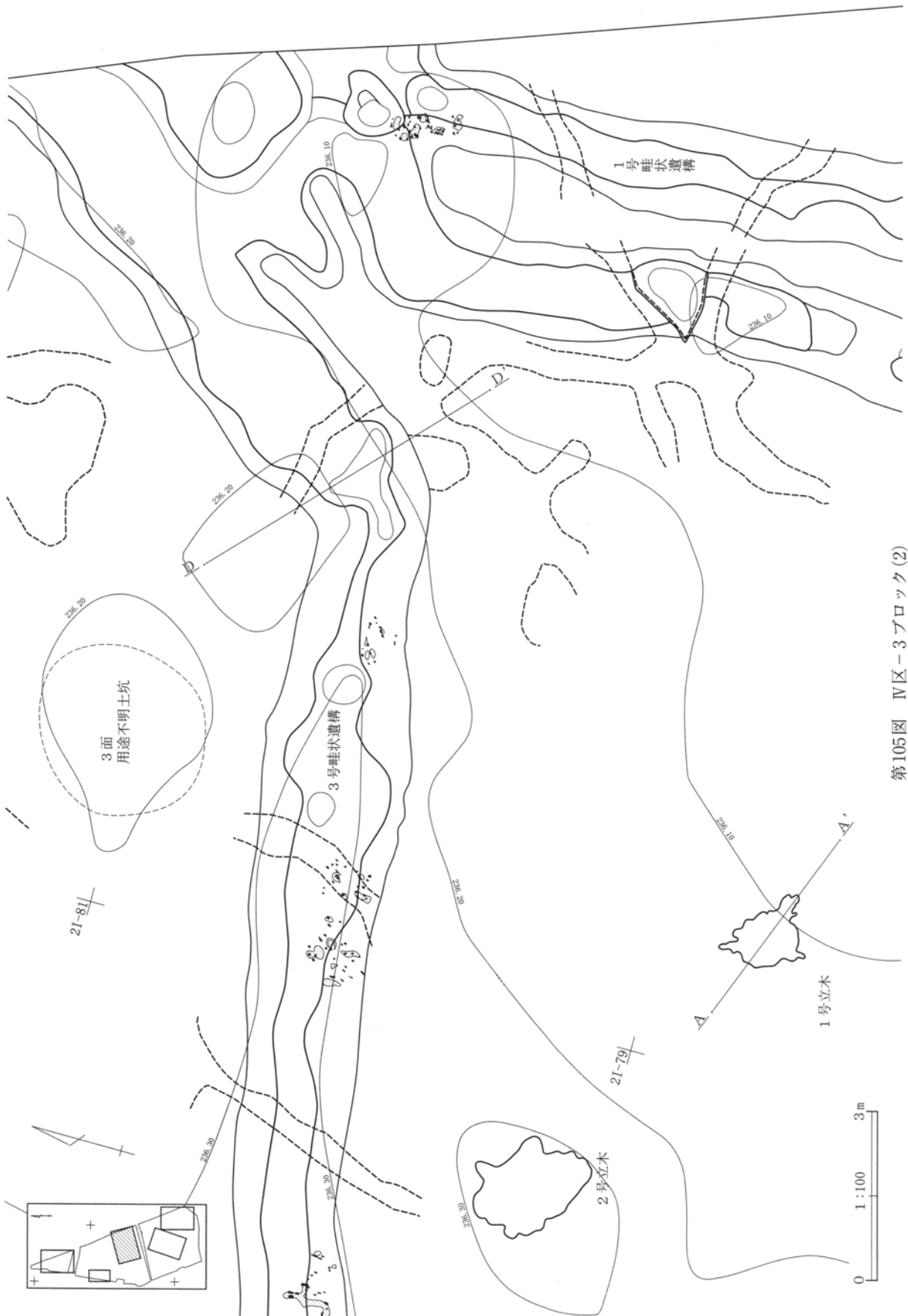
で認められる。僅かに硬化しており、人が行き来した可能性が考えられる。立木 IV-1号立木・IV-2号立木：2面(FP下面)調査時に不定形の窪みを検出した。それらについて締まりの乏しい土層を取り除いたところ、放射状に筒状の空隙が広がり、樹木の根跡と判断した。その他 3号畦状遺構の北側で僅かに凹む部分があるが、これは3面で調査したIV-3号用途不明土坑の痕跡である。



IV区-1号立木



IV区-3ブロック 全景

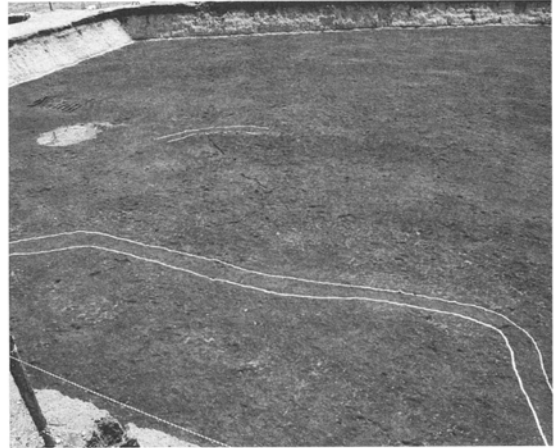
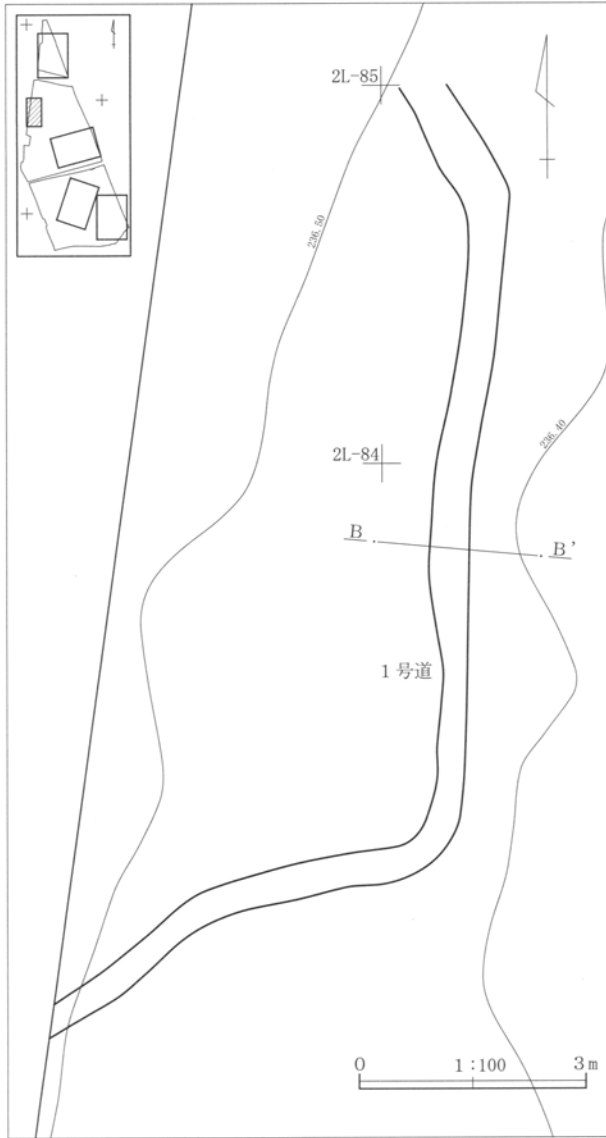


第105図 IV区-3ブロック(2)

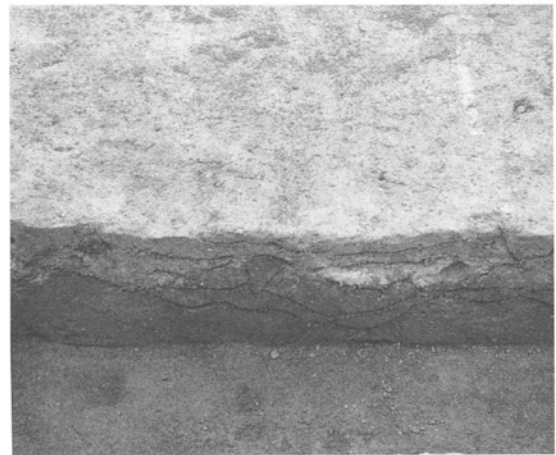
IV区-4 ブロック

道 IV-1号道：幅0.5m。走向N-60°-E及びN-5°-E。IV区北西部で検出した。途中で大きく向きを変え、北端部は不明瞭となる。 その他 1号道

の東側でやや硬化した面が網状に広がる。これは人かウマにより踏みしめられたものと考えられるが、遺構として扱った道跡程は硬化しておらず、凹みも不明瞭である。



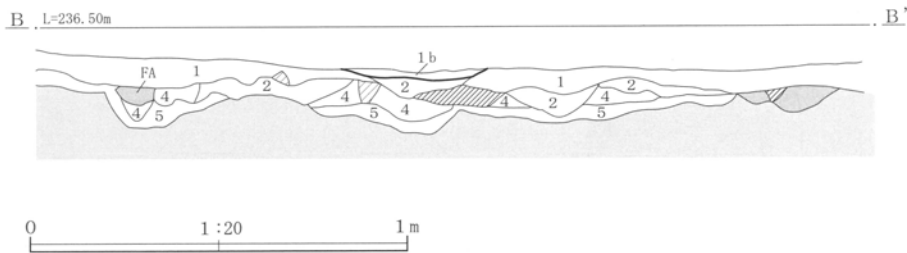
IV区-1号道(西から)



IV区-1号道 断面B

1号 踏み分け道

- 1 褐灰色土。
- 1b 褐灰色土。固く締まる。
- 2 褐灰色土。FA小ブロック含む
- 3 にぶい黄褐色土。FAブロック主体。黒色土小ブロック含む。
- 4 黒色土。粘性強い。
- 5 褐色土。鉄分凝集層。

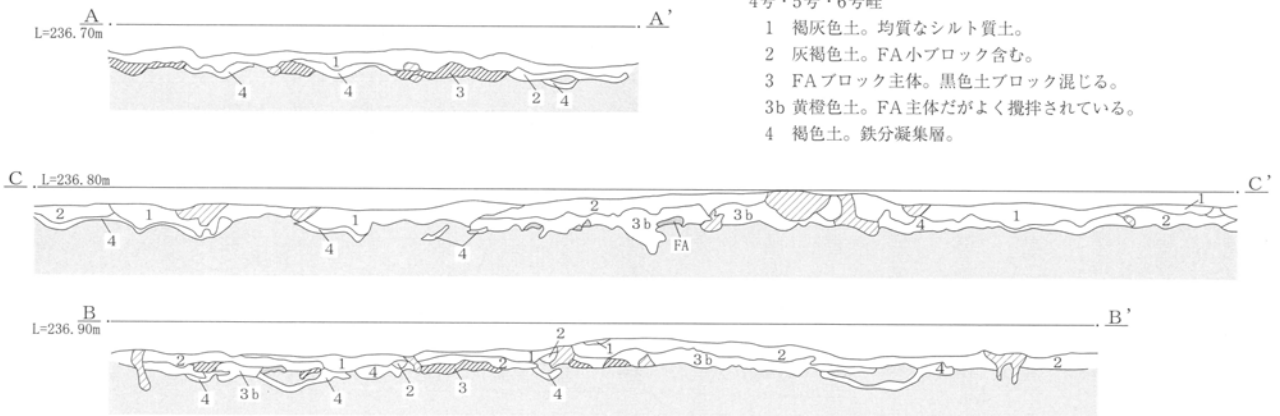


第106図 IV区-4 ブロック

IV区-5ブロック

畦状遺構 IV-4号畦状遺構：幅1.2m、高さ5cm、走向N-81°-E。畦状遺構の一部の検出であるが、調査区外で5号畦状遺構と直角に交わると考えられる。IV-5号畦状遺構：幅2.0m、高さ8cm、走向

N-4°-W。ほぼ南北に延び、6号畦状遺構とT字に交わる。畦状遺構の幅は一定していない。IV-6号畦状遺構：幅1.6m、高さ7cm、走向N-84°-E。緩やかな弧を描いている。畦状遺構の上にウマの足跡がつく。その他 調査区北端部ではウマの足跡が多く残されている。



第107図 IV区-5ブロック(1)



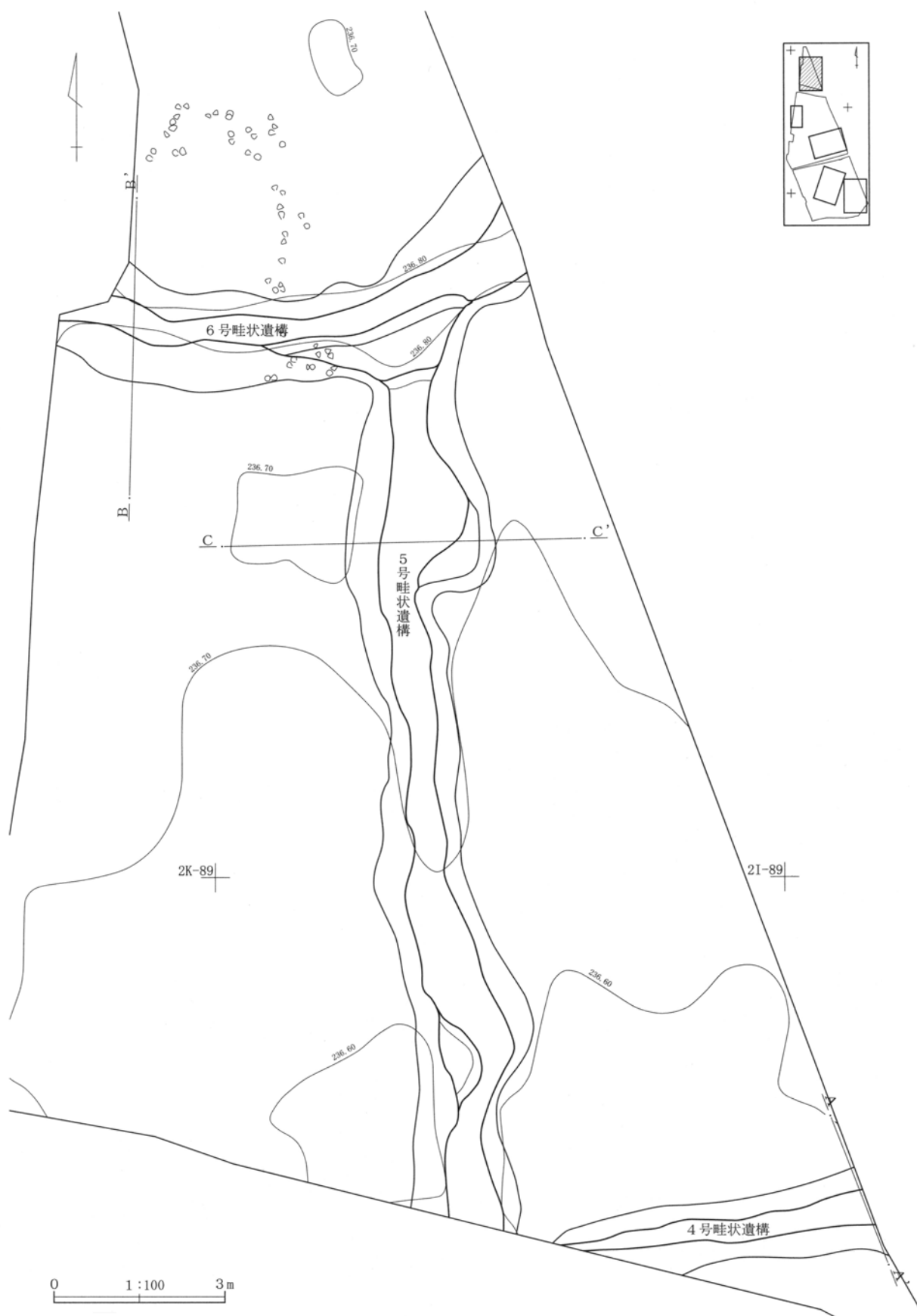
IV区-5ブロック 全景



IV区-5号畦状遺構 断面C



IV区-6号畦状遺構(西から)



第108図 IV区-5ブロック(2)

第6章

1面の調査 (Hr-FP層上面)



Ⅲ区1面 調査風景

第1節 調査の概要

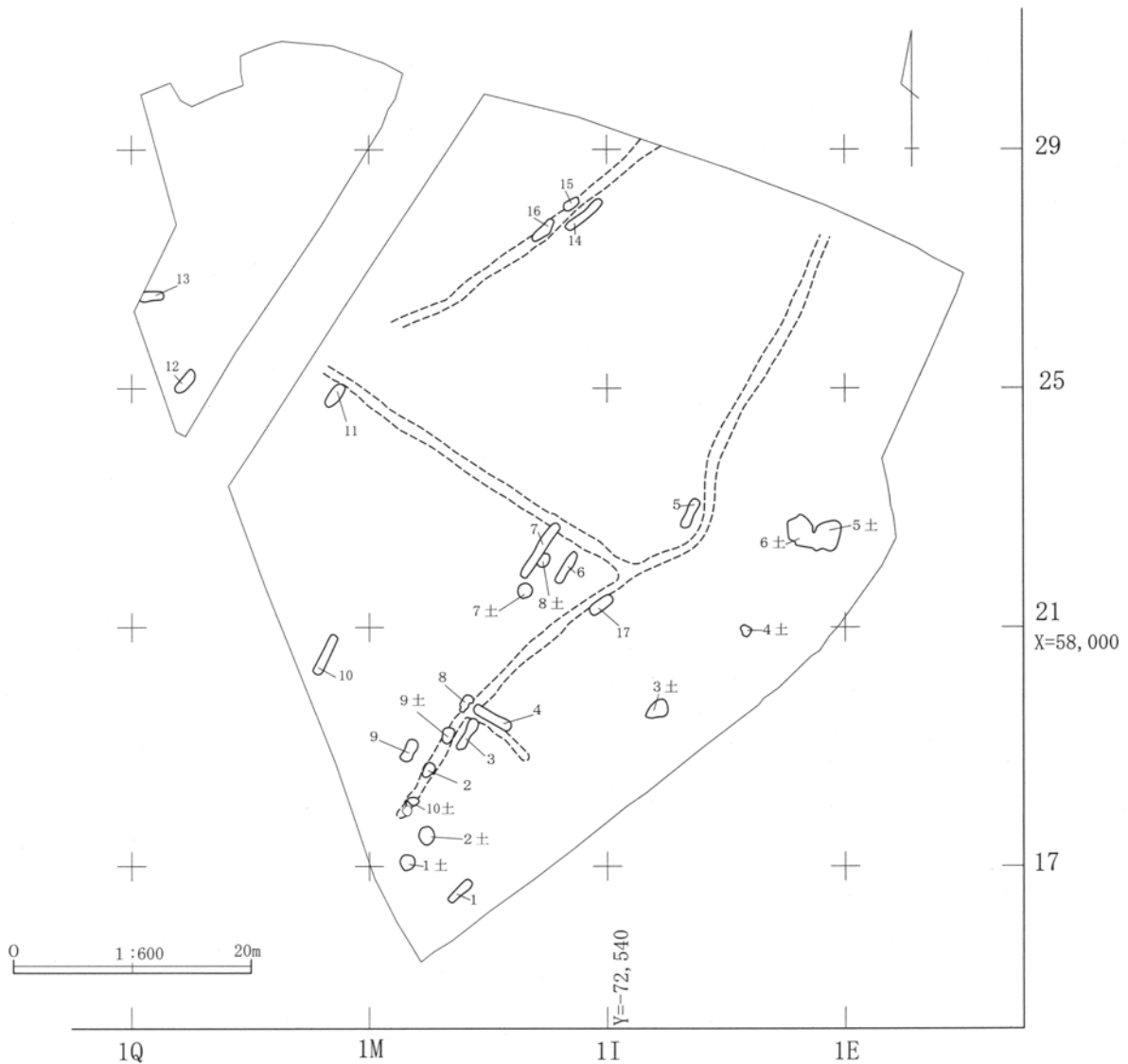
吹屋伊勢森遺跡の1面(FP上面)の調査では、溝2条、井戸1基、土坑11基、耕作坑203基及び道跡を検出した。

「耕作坑」とは、土坑の中で特定の要件を満たすものについてこの名称を用いた。それは溝状もしくは細長い長方形の土坑で、長さはまちまちであるが、幅は概ね0.5~0.8m程度で、断面形はU字状を呈するものである。このような土坑について、鯉沢バイパス白井遺跡群の発掘調査時に、遺跡周辺に在住の方々に聞き取り調査を行ったところ、近年に至るまで畑の境界に沿って土坑を掘り、冬季に芋類やご

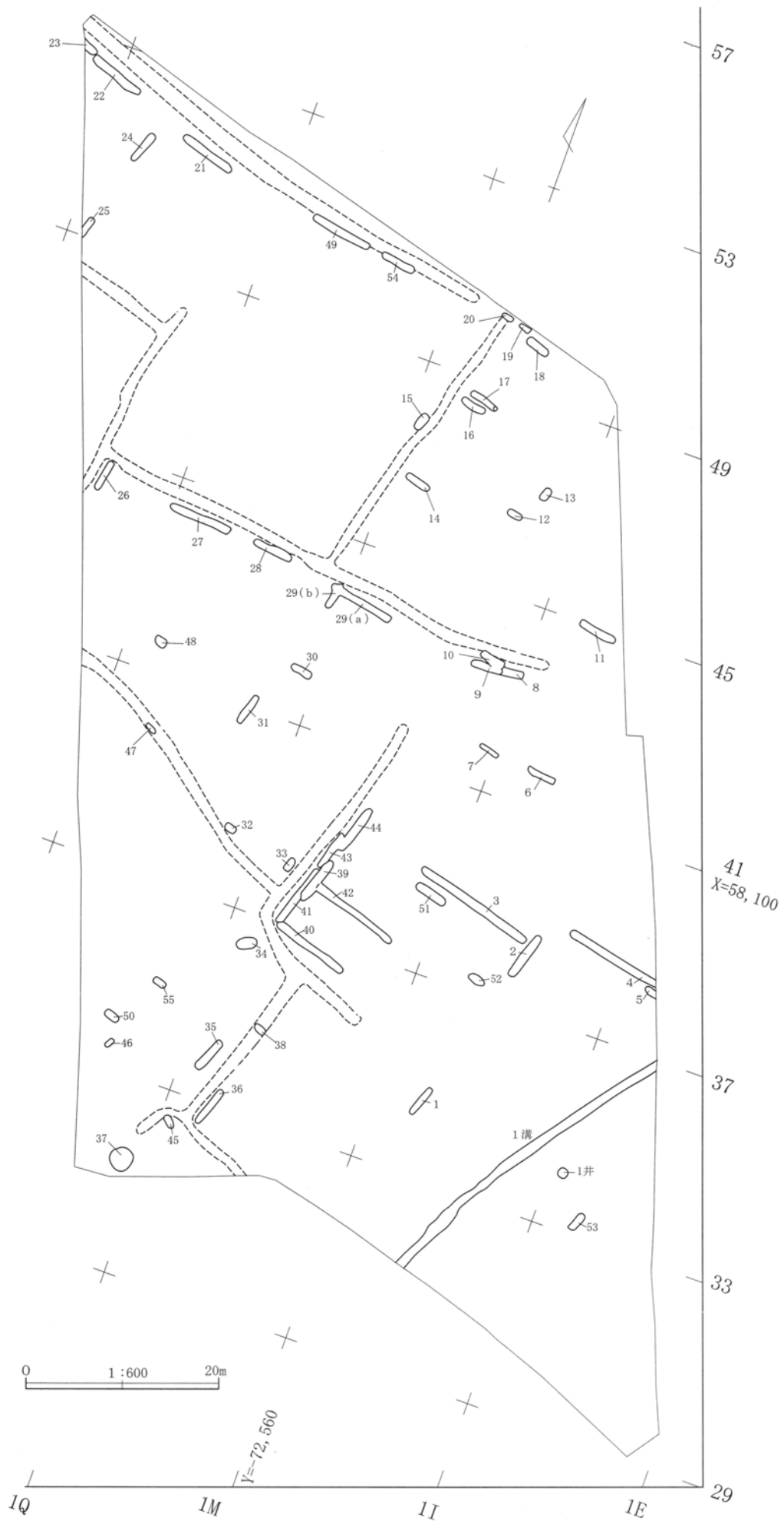
ぼうなどの根菜類を貯蔵していた例があることが確認できた。また白井遺跡群の調査では、これらの土坑の一部から出土する遺物が江戸時代後期のものであり、遺構の上限をこの時期と捉えている。

これらのことから、吹屋伊勢森遺跡の調査にあたって、畑に作られた作物貯蔵用の土坑と考えられるものを、他の土坑と区別するために、「耕作坑」と呼称することとした。

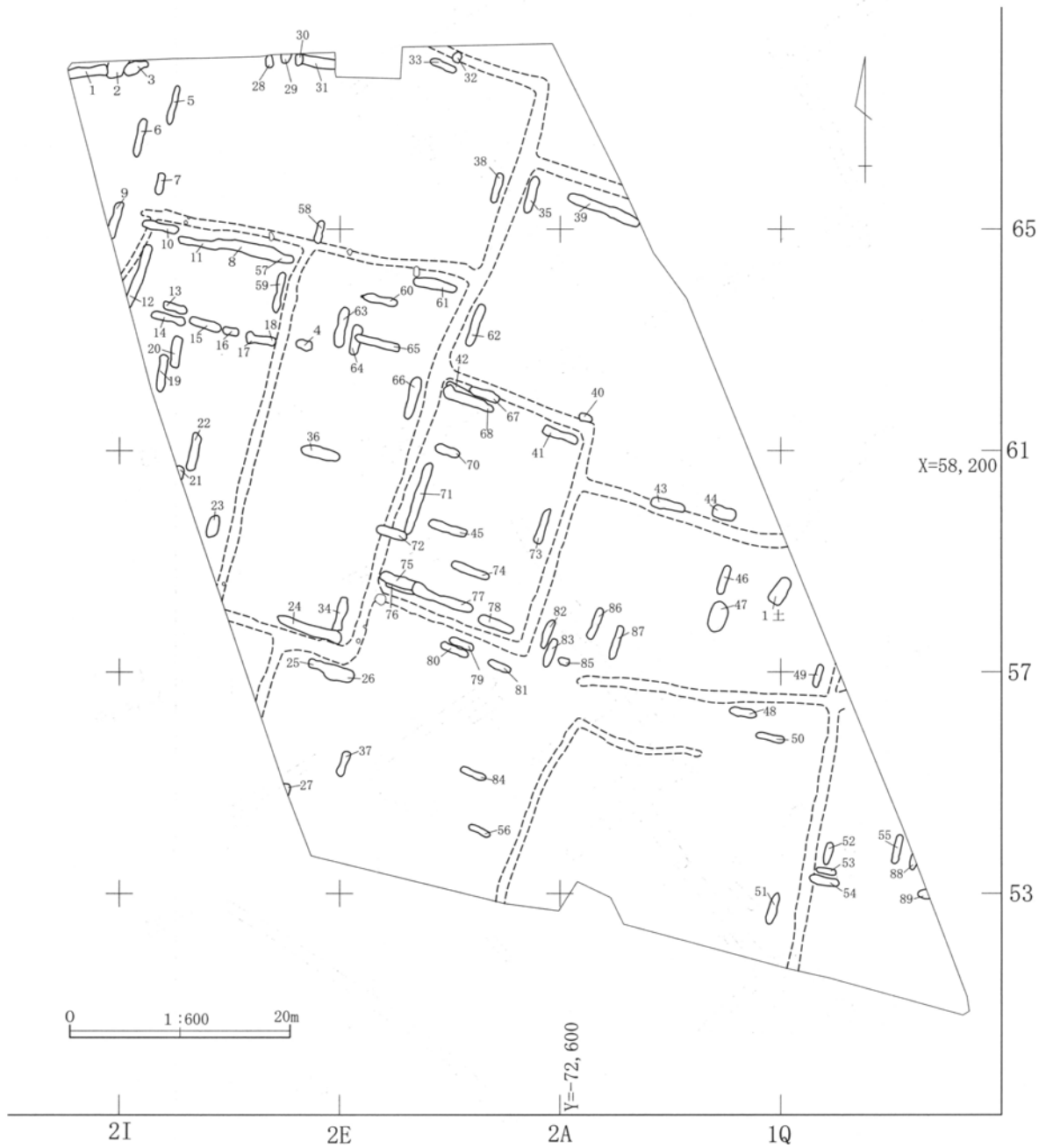
「道跡」は、軽石の変色域として確認したもの(遺構配置図中に破線で示す)である。本遺跡では「耕作坑」も「道跡」も、昭和21~23年にかけて米軍が撮影した写真から復元した地割に、沿うように配列されている。



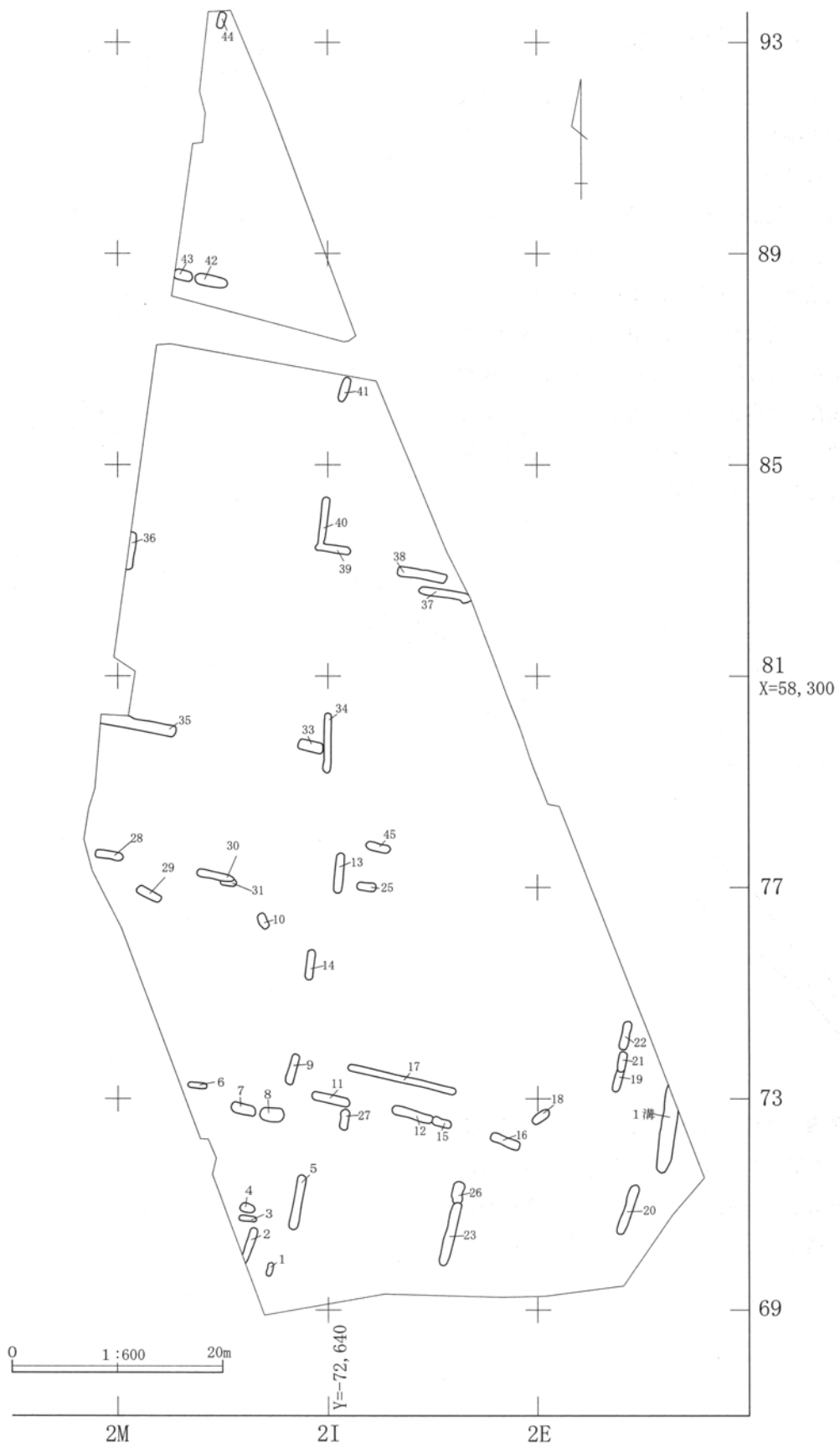
第109図 I区1面 遺構配置図(数字のみは耕作坑)



第110図 II区1面 遺構配置図(数字のみは耕作坑)



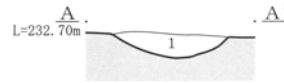
第111図 Ⅲ区1面 遺構配置図(数字のみは耕作坑)



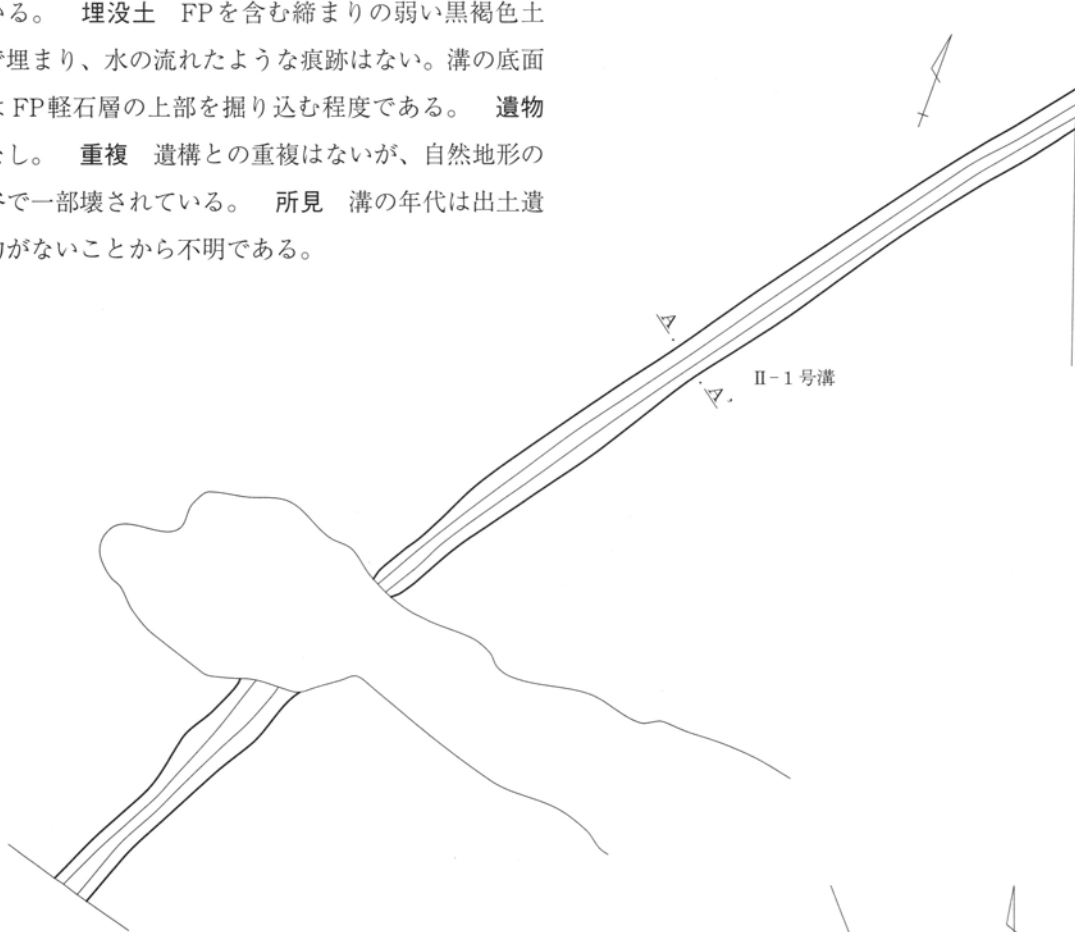
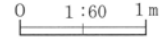
第112図 IV区1面 遺構配置図(数字のみは耕作坑)

第2節 溝・井戸・土坑

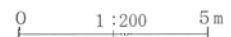
Ⅱ区-1号溝 位置 Ⅱ区南東部。形状・規模 検出面での上幅が0.9~1.3m、深さが21cmの溝を34mにわたって検出した。走向はN-32°-Eで、南東に落ち込む谷地形の谷頭付近を直線的に横切っている。また、溝の一部が自然の浸食谷で分断されている。埋没土 FPを含む締まりの弱い黒褐色土で埋まり、水の流れたような痕跡はない。溝の底面はFP軽石層の上部を掘り込む程度である。遺物なし。重複 遺構との重複はないが、自然地形の谷で一部壊されている。所見 溝の年代は出土遺物がないことから不明である。



Ⅱ-1号溝
1 黒褐色土。FPを含み、締まり弱い。

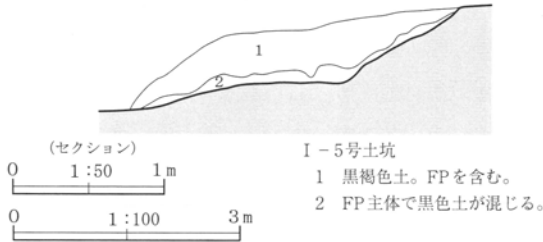
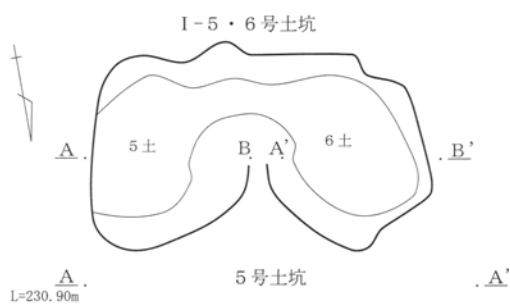
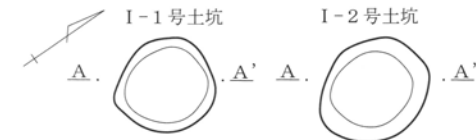
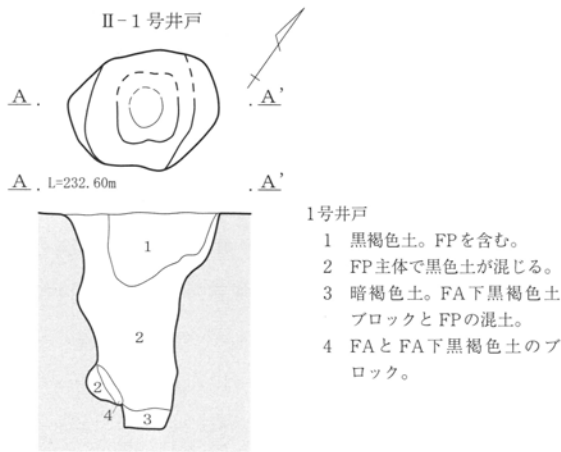


Ⅳ区-1号溝 位置 Ⅳ区南東部。形状・規模 検出面での上幅が1.4m、深さが56cmの溝を8mにわたって検出した。走向はN-10°-Eで、直線的に延びる。埋没土 FPを含む黒褐色土。遺物なし。重複 なし。所見 溝の年代は出土遺物がないことから不明。



第113図 Ⅱ区-1号溝・Ⅳ区-1号溝

II区-1号井戸 位置 1H-34、II区南東部。
 形状・規模 検出面では長径1.0m・短径0.8mの
 不整形円形、底部で径0.2mの円形を呈す。深さは1.4
 mで、FP・FA層を貫き、FA下黒色土を僅かに掘
 り込む。埋没土 最下部はFA下黒色土のブロッ
 クとFPの混じる層が12cm堆積し、その上部はFP
 主体の層で埋没している。遺物 なし。重複
 なし。所見 地表面から浸透した雨水を集め井戸
 として利用した可能性があるが、断定するには至ら
 なかった。年代不明。

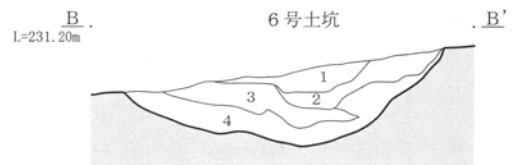
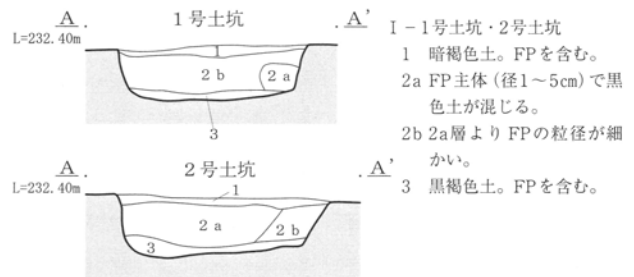


I区-1号土坑 位置 1L-17 形状・規模 円形。
 長軸・短軸・深さは、それぞれ1.4×1.2×0.3m
 である。埋没土 FPが主体で底部に厚さ5cmの
 黒褐色土層が広がる。遺物 なし。重複 なし。
 所見 年代不明。

I区-2号土坑 位置 1L-17 形状・規模 円形。
 長軸・短軸・深さは、それぞれ1.5×1.3×0.4m
 である。埋没土 FPが主体で底部に厚さ5~10
 cmの黒褐色土層が広がる。遺物 なし。重複
 なし。所見 年代不明。

I区-5号土坑 位置 1E-22 形状・規模 不整
 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ(3.1)×(2.3)
 ×0.4mである。埋没土 FPを含む黒褐色土。
 下層はFP主体となる。遺物 なし。重複 6
 号土坑。新旧関係は不明。所見 段丘崖に近い斜
 面部に位置するため、東側は一部削られて失われて
 いる。年代不明。

I区-6号土坑 位置 1E-22 形状・規模 不整
 円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ(2.7)×(2.1)
 ×0.5mである。埋没土 上部はFPを含む黒褐
 色土で、下部はFP主体となる。遺物 なし。
 重複 5号土坑。新旧関係は不明。所見 5号土
 坑と僅かに重複するが境界が不明瞭で、二つの土坑
 が連結したような形状となっている。年代不明。

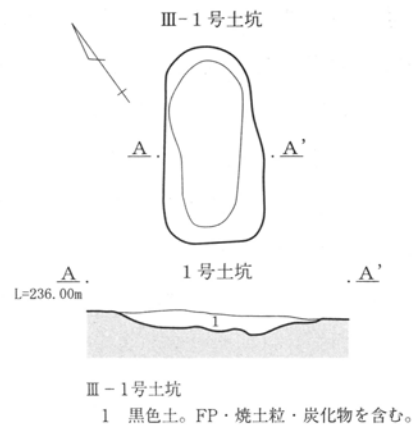


第114図 II区-1号井戸・I区-1・2・5・6号土坑

第6章 1面の調査(Hr - FP層上面)

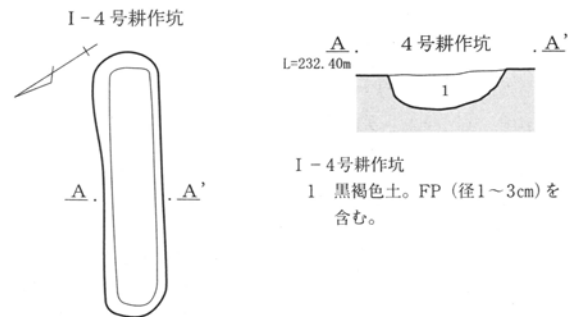
I区-8号土坑 位置 1J-22 形状・規模 楕円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×1.0×0.2mである。埋没土 上部はFPを含む暗褐色土。遺物 なし。重複 7号耕作坑。8号土坑の方が新しい。所見 耕作坑は近世以降であるため、この土坑も近世以降のものである。

Ⅲ区-1号土坑 位置 1Q-58 形状・規模 隅丸方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×0.7×0.1mである。埋没土 FPを含む黒色土で、焼土粒・炭化物粒を含む。遺物 陶器片が2点出土。重複 なし。所見 年代は近世以降。

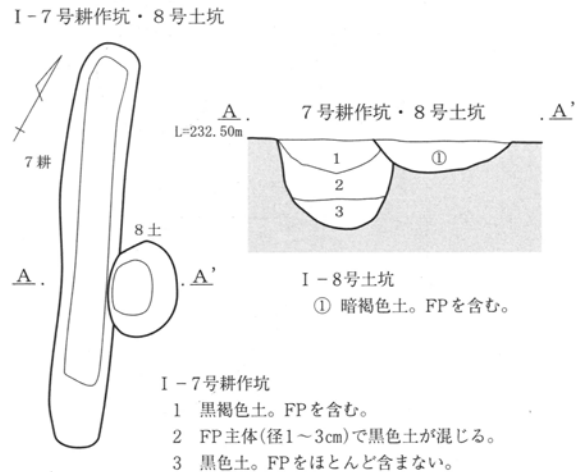


第3節 耕作坑

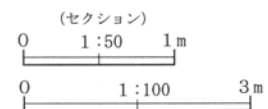
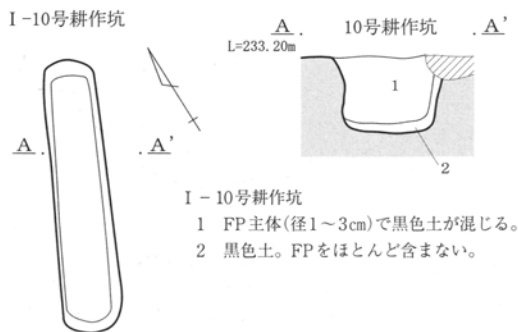
I区-4号耕作坑 位置 1K-19 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.4×0.8×0.3mである。埋没土 FPを含む黒褐色土。遺物 なし。重複 なし。分類 B。



I区-7号耕作坑 位置 1J-22 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ5.4×0.8×0.7mである。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上位はFPが主体となる。遺物 なし。重複 8号土坑。8号土坑が新しい。分類 B。



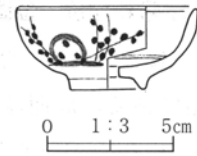
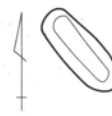
I区-10号耕作坑 位置 1M-20 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.6×0.7×0.5mである。埋没土 底部から側面にかけて厚さ5cmの黒色土が堆積し、その上位はFPが主体となる。遺物 なし。重複 なし。分類 B。



第115図 I区-8号土坑・Ⅲ区-1号土坑・I区-4・7・10号耕作坑

Ⅱ区-47号耕作坑 位置 1S-39 形状・規模
溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.3×0.5×0.4m
である。埋没土 不明。遺物 染付碗、磁器片、
陶器片が各1点出土。重複 なし。分類 D。

Ⅱ-47号耕作坑

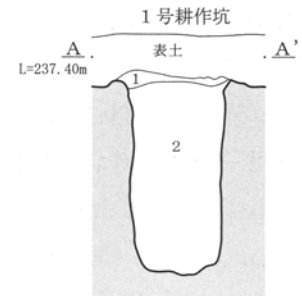


第116図 Ⅱ区-47号耕作坑及び出土遺物

Ⅱ区-47号耕作坑

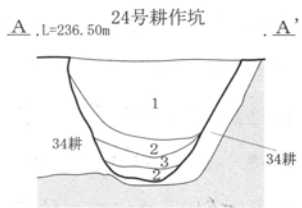
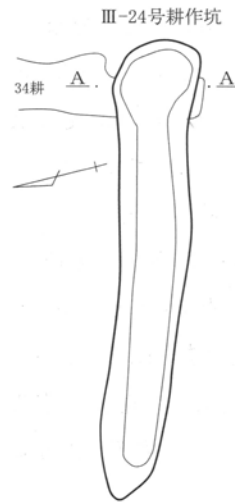
番号	器種	出土位置	法量(cm)	成・整形技法の特徴	釉薬	備考
1	磁器碗	覆土	口 (7.2) 底 (3.0) 高 3.2	外面 簡略化した雪輪梅樹文。 内面 見込み不明文様。	染付	残存1/3 18c後～ 19c前

Ⅲ区-1号耕作坑 位置 2I-67 形状・規模 溝
状。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.6以上×1.0
×1.3mである。埋没土 上層に黒褐色土が見ら
れるが、大部分はFP主体である。遺物 播り鉢
の破片1点出土。重複 2号耕作坑。新旧関係不明。
分類 分類不能。



Ⅲ-1号耕作坑
1 黒褐色土。FPを含む。
2 FP主体。黒色土が混じる。

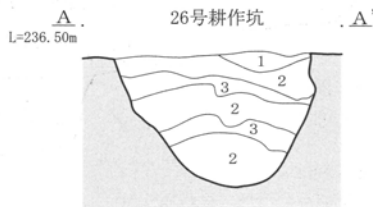
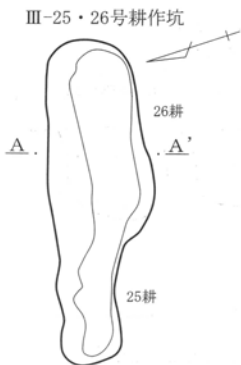
Ⅲ区-24号耕作坑 位置 2E-57 形状・規模 溝
状。長軸・短軸・深さは、それぞれ6.2×1.0×1.0m
である。埋没土 下半部は黒色土とFPが交互に
堆積し、上半部はFP主体となる。遺物 なし。
重複 34号耕作坑。24号が新しい。分類 A。



Ⅲ-24号耕作坑
1 黒褐色土。FPを多量に含む。
2 黒色土。FPを含む。
3 FP。二次堆積。

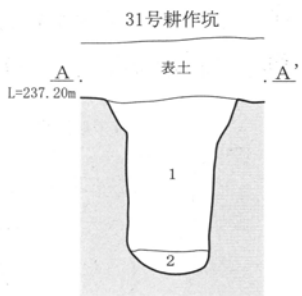
Ⅲ区-26号耕作坑 位置 2E-56 形状・規模 隅
丸長方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ(2.7)×
1.4×0.8mである。埋没土 黒色土とFPが交互
に堆積。遺物 明治以降の染付磁器片出土。重複
25号耕作坑。新旧関係不明。分類 C。

Ⅲ区-31号耕作坑 位置 2E-68 形状・規模
溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.0以上×1.0
×1.0m。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その
上位はFPが主体となる。遺物 なし。重複
30号耕作坑。新旧関係不明。分類 分類不能。

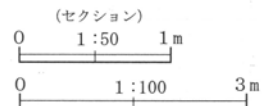


Ⅲ-26号耕作坑
1 黒色土。FPを多く含む。
2 FP主体。黒色土が混じる。
3 黒色土。FPを含む。

Ⅲ-30・31号耕作坑



Ⅲ-31号耕作坑
1 FP。中央部は細粒で壁際は粒径
が大きい。
2 黒色土。FPを僅かに含む。



第117図 Ⅲ区-1・24～26・30・31・34号耕作坑

Ⅲ区-47号耕作坑 位置 1R-57 形状・規模
 楕円形。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.8×1.6
 ×1.3mである。底面はFA層下位にまで達する。
 埋没土 黒色土が混じり汚れたFPを主体とする
 が、中間に黒色土の薄層を複数挟む。遺物 なし。
 重複 なし。分類 D。

Ⅲ区-64号耕作坑 位置 2D-63 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ3.3×0.9×0.4m
 である。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上
 位はFPが主体となる。遺物 なし。重複 65
 号耕作坑。65号耕作坑が新しい。分類 B。

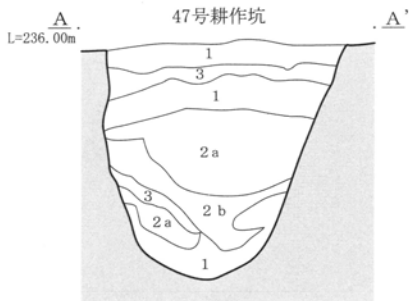
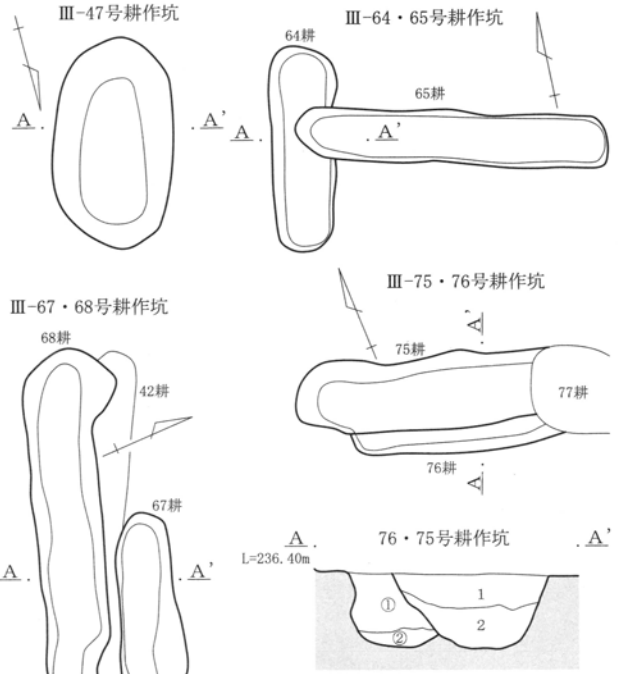
Ⅲ区-65号耕作坑 位置 2D-62 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ4.2×0.7×
 0.5mである。埋没土 底部から側面に沿って厚
 さ10cm程のFPを含む黒褐色土が堆積し、その上
 位はFP主体となる。遺物 なし。重複 64号
 耕作坑。65号耕作坑が新しい。分類 B。

Ⅲ区-67号耕作坑 位置 2B-62 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.9×0.9×0.7m
 である。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上
 位はFPを多量に含む黒色土となる。遺物 なし。
 重複 42号耕作坑。新旧関係不明。分類 D。

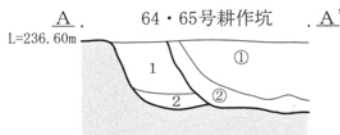
Ⅲ区-68号耕作坑 位置 2B-61 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ4.9×0.9×0.6m
 である。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上
 位はFPを多量に含む黒色土となる。遺物 陶器
 片、土師器片、鉄滓が各1点出土。重複 42号耕
 作坑。新旧関係不明。分類 B。

Ⅲ区-75号耕作坑 位置 2C-58 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ(3.0)×1.3
 ×0.5mである。埋没土 底部に黒色土が堆積し、
 その上位はFPを多量に含む黒色土となる。遺物
 なし。重複 76・77号耕作坑。75号耕作坑が新し
 い。77号耕作坑との関係は不明。分類 B。

Ⅲ区-76号耕作坑 位置 2D-58 形状・規模
 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ1.0以上×0.3
 以上×0.5mである。埋没土 底部に黒色土が堆
 積し、その上位はFPが主体となる。遺物 なし。
 重複 75・77号耕作坑。75号耕作坑が新しい。77
 号耕作坑との関係は不明。分類 D。



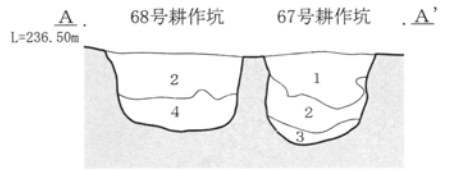
- Ⅲ-47号耕作坑
- 1 黒色土。FPを多く含む。
 - 2a FP (径1cm以下)主体。黒色土が混じる。
 - 2b FP (径1~5cm)主体。黒色土が混じる。
 - 3 黒色土。FPを含む。



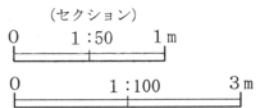
- Ⅲ-64号耕作坑・65号耕作坑
- 1 FP主体。黒色土が混じる。
 - 2 黒色土。
 - ① FP主体。黒色土が混じる。
 - ② 黒褐色土。FPを含む。

- Ⅲ-75号耕作坑
- 1 黒色土。FPを多量に含む。
 - 2 黒色土。FPを含む。

- Ⅲ-76号耕作坑
- ① FP主体。黒色土が混じる。
 - ② 黒色土。FPを含む。



- Ⅲ-67号・68号耕作坑(共通)
- 1 黒色土。FP (径1cm以下)を多量に含む。
 - 2 黒色土。FPを多量に含む。
 - 3 黒色土。FPを少量含む。
 - 4 黒色土。FPを含む。

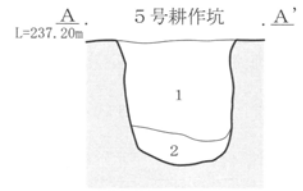
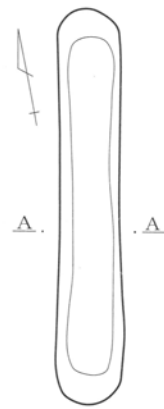


第118図 Ⅲ区-47・64・65・67・68・75~77号耕作坑

第3節 耕作坑

IV区-5号耕作坑 位置 2I-71 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ5.3×0.8×0.8mである。埋没土 底部に黒褐色土が堆積し、その上位はFPが主体となる。遺物 なし。重複なし。分類 A。

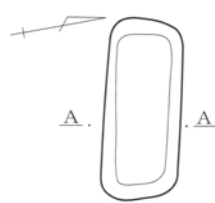
IV-5号耕作坑



- IV-5号耕作坑
- 1 FP主体。黒色土が混じる。
 - 2 黒褐色土。FPを含む。

IV区-33号耕作坑 位置 2I-79 形状・規模 長方形。長軸・短軸・深さは、それぞれ2.4×1.0×0.6mである。埋没土 底部に黒色土が薄く堆積し、その上位はFP主体の層とFPを含む黒色土が交互に堆積する。遺物 なし。重複なし。分類 D。

IV-33号耕作坑

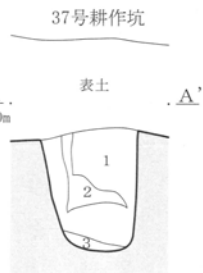
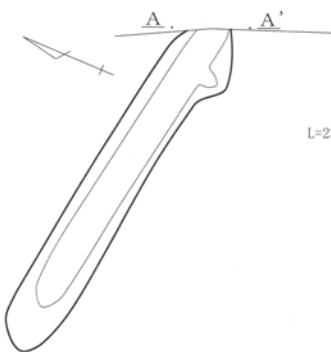


- IV-33号耕作坑
- 1 FP主体。黒色土が混じる。
 - 2 黒色土。FP（細粒）を含む。
 - 3 FP主体（1層より粒径大）。黒色土が混じる。
 - 4 黒色土。

IV区-37号耕作坑 位置 2F-82 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ(5.1)×0.8×0.7mである。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上位はFPが主体となるが、木の根跡のような状態で黒色土が入り込む。遺物 なし。重複なし。分類 B。

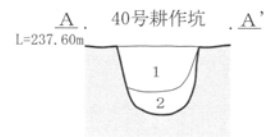
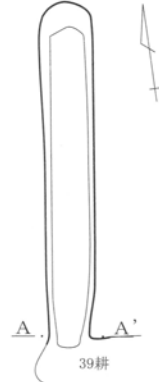
IV区-40号耕作坑 位置 2I-83 形状・規模 溝状。長軸・短軸・深さは、それぞれ4.5×0.7×0.6mである。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上位はFPが主体となる。遺物 なし。重複 39号耕作坑。新旧関係不明。分類 B。

IV-37号耕作坑

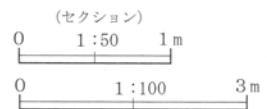


- IV-37号耕作坑
- 1 FP主体。黒色土が混じる。
 - 2 黒色土。FP（細粒）を含む。
 - 3 黒色土。

IV-40号耕作坑



- IV-40号耕作坑
- 1 FP主体。黒色土が混じる。
 - 2 黒色土。



第119図 IV区-5・33・37・39・40号耕作坑

第6章 1面の調査(Hr - FP層上面)

1面 土坑計測値一覧表

区	番号	グリッド	形状	規模(m)			重複	区	番号	グリッド	形状	規模(m)			重複
				長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ	
I	1	1L-17	円形	1.4	1.2	0.3	-	I	7	1J-21	円形	1.3	1.2	0.3	-
I	2	1L-17	円形	1.5	1.3	0.4	-	I	8	1J-22	円形	1.3	(1.0)	0.2	7耕作坑
I	3	1H-19	不整形円形	2.1	1.4	0.3	-	I	9	1K-19	楕円形	1.4	0.9	0.4	-
I	4	1F-20	不整形円形	1.0	0.8	0.2	-	I	10	1L-18	不整形円形	1.0	0.7	0.3	-
I	5	1E-22	不整形円形	(3.1)	(2.3)	0.4	6土坑	III	1	1Q-58	楕円形	1.3	0.7	0.1	-
I	6	1E-22	不整形円形	(2.7)	(2.1)	0.5	5土坑								

1面 耕作坑計測値一覧表

区	番号	グリッド	規模(m)			分類	重複	区	番号	グリッド	規模(m)			分類	重複
			長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ		
I	1	1K-16	2.5	0.7	0.4	D	-	II	32	1Q-38	1.2	0.8	0.2	D	-
I	2	1L-18	1.3	0.9	0.3	D	-	II	33	1P-38	1.5	0.8	0.3	D	-
I	3	1K-19	3.0	0.6	0.2	B	-	II	34	1P-36	2.2	1.2	0.6	D	-
I	4	1K-19	3.4	0.8	0.3	B	-	II	35	1P-33	3.8	0.9	0.9	A	-
I	5	1G-23	2.7	0.8	0.5	D	-	II	36	1P-34	4.3	0.8	0.4	B	-
I	6	1I-22	3.0	0.7	0.1	B	-	II	37	1Q-31	2.4	2.5	0.5	D	-
I	7	1J-22	5.4	0.8	0.7	B	8土坑	II	38	1O-34	1.3	0.7	0.7	D	-
I	8	1K-19	1.6	0.7	0.3	D	-	II	39	1O-38	5.1	1.1	0.9	A	41,42,43耕作坑
I	9	1L-19	2.0	0.8	0.2	D	-	II	40	1O-36	8.4	0.9	0.8	B	41耕作坑
I	10	1M-20	3.6	0.7	0.5	B	-	II	41	1O-37	6.8	0.8	0.4	B	39耕作坑
I	11	1M-24	2.3	1.0	0.8	D	-	II	42	1N-37	10.5	0.7	0.6	B	39耕作坑
I	12	1P-25	2.3	0.9	0.4	D	-	II	43	1O-38	4.4	0.8	0.7	B	39,44耕作坑
I	13	1P-26	2.0	0.8	0.8	C	-	II	44	1O-39	5.3	0.9	0.9	A	43耕作坑
I	14	1I-28	4.8	0.7	0.7	B	-	II	45	1P-32	1.5	0.8	0.2	D	-
I	15	1I-28	1.4	0.8	-	-	-	II	46	1R-33	1.1	0.5	0.4	D	-
I	16	1J-27	2.4	0.9	0.1	D	-	II	47	1S-39	1.3	0.5	0.4	D	-
I	17	1I-21	2.3	0.9	0.9	C	-	II	48	1T-41	1.3	1.0	0.3	D	-
II	1	1L-34	3.4	0.7	0.3	B	-	II	49	1S-50	6.6	0.9	0.7	B	-
II	2	1K-38	5.2	1.0	0.7	B	-	II	50	1R-34	1.6	0.8	0.4	D	-
II	3	1L-38	13.2	0.9	0.7	B	-	II	51	1M-38	3.5	0.9	0.4	B	-
II	4	1I-38	-	0.9	0.6	-	-	II	52	1K-37	1.8	0.9	0.8	D	-
II	5	1H-38	-	0.8	0.5	-	-	II	53	1H-33	2.1	0.8	0.4	D	-
II	6	1K-41	3.1	0.7	0.6	B	-	II	54	1R-50	3.8	0.8	0.8	C	-
II	7	1M-41	2.3	0.5	0.2	D	-	II	55	1Q-35	1.4	0.7	0.1	D	-
II	8	1M-43	(3.5)	0.8	0.5	B	9,10耕作坑	III	1	2I-67	3.6+	1.0	1.3	-	2耕作坑
II	9	1M-43	5.4	0.8	0.5	B	8,10耕作坑	III	2	2I-67	-	1.8	0.7	-	1,3耕作坑
II	10	1M-43	2.8	0.9	1.3	C	8,9耕作坑	III	3	2H-67	2.3	1.1	0.4	D	2耕作坑
II	11	1K-44	4.1	0.8	0.4	B	-	III	4	2E-62	1.5	1.0	0.4	D	-
II	12	1N-46	1.6	0.7	0.6	D	-	III	5	2H-67	3.6	0.7	0.4	B	-
II	13	1M-47	1.5	0.8	0.5	D	-	III	6	2H-66	3.6	0.8	0.4	B	-
II	14	1P-46	2.8	0.8	0.4	D	-	III	7	2H-65	2.0	0.8	0.3	D	-
II	15	1P-47	1.9	0.9	0.4	D	-	III	8	2G-64	(5.4)	1.2	0.9	-	11,57耕作坑
II	16	1O-48	2.7	0.8	0.5	D	-	III	9	2I-65	(3.4)	0.8	0.4	B	-
II	17	1O-48	3.3	0.7	0.5	B	-	III	10	2H-65	3.3	0.8	0.6	B	-
II	18	1O-50	2.7	0.9	0.8	D	-	III	11	2G-64	(3.8)	0.7	0.7	B	8,57耕作坑
II	19	1O-50	1.3	0.6	0.3	D	-	III	12	2H-64	-	0.9	0.9	-	-
II	20	1O-50	1.3	0.5	0.4	D	-	III	13	2H-63	2.3	0.7	0.3	D	-
II	21	2B-51	6.1	0.8	0.8	A	-	III	14	2H-63	3.2	0.7	0.3	B	-
II	22	2E-52	6.0	1.0	0.7	B	-	III	15	2G-63	3.0	0.8	0.5	B	-
II	23	2E-52	-	0.8	0.8	-	-	III	16	2G-63	1.5	0.7	0.4	D	-
II	24	2D-51	3.5	0.8	0.6	B	-	III	17	2F-63	1.1	0.7	0.5	D	18耕作坑
II	25	2D-49	-	0.7	0.7	-	-	III	18	2F-62	(2.0)	0.7	0.3	D	17耕作坑
II	26	2B-44	3.3	0.7	0.3	D	-	III	19	2H-62	3.4	0.8	0.4	B	-
II	27	1T-44	6.7	0.8	0.7	B	-	III	20	2G-62	2.9	0.9	0.6	D	-
II	28	1R-44	4.3	0.9	0.6	B	-	III	21	2G-60	-	-	0.5	-	-
II	29a	1Q-43	(7.1)	0.7	0.5	B	-	III	22	2H-61	3.5	0.9	0.5	B	-
II	29b	1Q-43	(2.9)	0.7	0.5	D	-	III	23	2G-59	2.2	1.1	0.5	D	-
II	30	1Q-42	2.3	0.8	0.5	D	-	III	24	2E-57	6.2	1.0	1.0	A	34耕作坑
II	31	1R-40	3.4	0.8	0.7	D	-	III	25	2E-57	(2.3)	0.9	0.4	D	26耕作坑

第3節 耕作坑

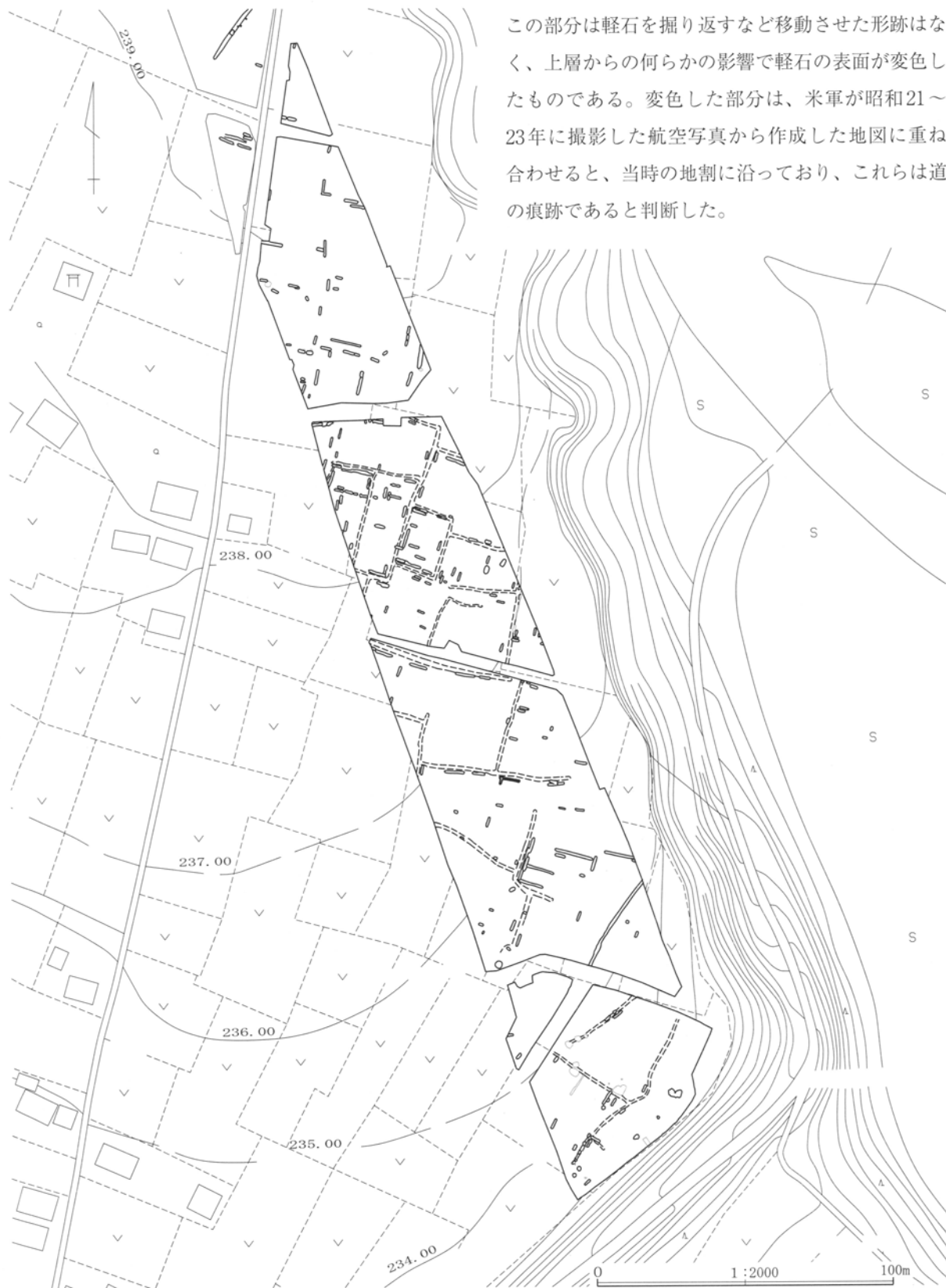
区	番号	グリッド	規模(m)			分類	重複	区	番号	グリッド	規模(m)			分類	重複
			長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ		
Ⅲ	26	2E-56	(2.7)	1.4	0.8	C	25耕作坑	Ⅲ	80	2B-57	2.7	0.7	0.4	D	-
Ⅲ	27	2E-54	-	-	0.1	-	-	Ⅲ	81	2B-57	2.2	0.7	0.3	D	-
Ⅲ	28	2F-68	(1.1)	0.7	0.3	D	-	Ⅲ	82	2A-57	2.7	0.8	0.4	D	-
Ⅲ	29	2E-68	-	0.9	0.3	-	-	Ⅲ	83	2A-57	2.7	0.8	0.5	D	-
Ⅲ	30	2F-68	-	-	-	-	31耕作坑	Ⅲ	84	2B-55	2.5	0.7	0.4	D	-
Ⅲ	31	2E-68	3.0+	1.0	1.0	-	30耕作坑	Ⅲ	85	1T-57	1.1	0.7	0.3	D	-
Ⅲ	32	2B-68	1.0	0.8	1.1	C	-	Ⅲ	86	1T-57	3.0	0.7	0.5	B	-
Ⅲ	33	2C-67	2.5	0.7	0.6	D	-	Ⅲ	87	1S-57	3.2	0.7	0.4	B	-
Ⅲ	34	2E-58	(3.3)	0.9	0.8	B	24耕作坑	Ⅲ	88	1N-53	-	0.7	0.5	-	-
Ⅲ	35	2A-65	3.4	0.9	0.5	B	-	Ⅲ	89	1N-53	-	0.9	0.4	-	-
Ⅲ	36	2E-60	3.7	1.0	0.5	B	-	Ⅳ	1	2J-69	1.4	0.6	0.2	D	-
Ⅲ	37	2D-55	2.4	0.8	0.5	D	-	Ⅳ	2	2J-70	(3.5)	0.8	0.5	B	-
Ⅲ	38	2B-65	2.8	0.8	0.2	D	-	Ⅳ	3	2J-70	1.7	0.6	0.1	D	-
Ⅲ	39	1T-65	6.9	1.0	0.9	A	-	Ⅳ	4	2J-70	1.5	0.9	0.2	D	-
Ⅲ	40	1T-61	1.3	0.7	0.2	D	-	Ⅳ	5	2I-71	5.3	0.8	0.8	A	-
Ⅲ	41	1T-61	3.3	0.9	0.5	B	-	Ⅳ	6	2K-73	1.9	0.6	0.3	D	-
Ⅲ	42	2B-62	-	(0.5)	-	-	67,68耕作坑	Ⅳ	7	2J-72	2.5	1.0	0.3	D	-
Ⅲ	43	1S-60	3.2	1.0	0.6	B	-	Ⅳ	8	2J-72	2.3	1.3	0.4	D	-
Ⅲ	44	1Q-59	2.2	1.1	0.8	C	-	Ⅳ	9	2I-73	3.0	0.8	0.6	B	-
Ⅲ	45	2C-59	3.6	0.9	0.5	B	-	Ⅳ	10	2J-76	1.6	0.9	0.3	D	-
Ⅲ	46	1R-58	2.7	0.7	0.6	D	-	Ⅳ	11	2I-73	3.7	0.9	0.7	B	-
Ⅲ	47	1R-57	2.8	1.6	1.3	D	-	Ⅳ	12	2G-72	4.0	0.9	0.7	D	15耕作坑
Ⅲ	48	1Q-56	2.5	0.8	0.6	D	-	Ⅳ	13	2H-77	3.8	0.9	0.2	B	-
Ⅲ	49	1P-56	2.1	0.7	0.2	D	-	Ⅳ	14	2I-75	2.9	0.7	0.5	D	-
Ⅲ	50	1Q-55	2.7	0.6	0.5	D	-	Ⅳ	15	2F-72	(2.0)	0.8	0.6	D	12耕作坑
Ⅲ	51	1Q-52	3.0	0.9	0.7	B	-	Ⅳ	16	2E-72	2.9	0.8	0.7	D	-
Ⅲ	52	1P-54	2.6	1.1	0.3	D	-	Ⅳ	17	2H-74	10.6	0.7	0.5	B	-
Ⅲ	53	1P-53	1.9	0.5	0.4	D	-	Ⅳ	18	2D-72	1.9	0.9	0.4	D	-
Ⅲ	54	1P-53	2.8	0.7	0.6	D	-	Ⅳ	19	2C-73	(2.2)	0.8	0.7	D	21耕作坑
Ⅲ	55	1N-53	2.6	0.7	0.4	D	-	Ⅳ	20	2C-70	5.0	0.8	0.8	A	-
Ⅲ	56	2B-54	2.2	0.6	0.4	D	-	Ⅳ	21	2C-73	2.0	0.8	0.7	D	19耕作坑
Ⅲ	57	2F-64	(1.5)	0.9	0.6	D	8,11耕作坑	Ⅳ	22	2C-74	2.8	0.8	0.7	D	-
Ⅲ	58	2E-64	2.1	0.8	0.4	D	-	Ⅳ	23	2F-70	6.2	0.9	1.1	A	26耕作坑
Ⅲ	59	2F-63	3.7	0.7	0.7	B	-	Ⅳ	25	2H-77	1.8	0.8	0.2	D	-
Ⅲ	60	2D-63	3.4	0.9	0.8	A	-	Ⅳ	26	2F-71	(2.3)	1.0	0.3	D	23耕作坑
Ⅲ	61	2C-63	4.0	1.0	0.5	B	-	Ⅳ	27	2H-72	2.0	0.7	0.3	D	-
Ⅲ	62	2B-63	4.0	0.8	0.7	B	-	Ⅳ	28	2M-77	2.7	0.8	0.3	D	-
Ⅲ	63	2D-63	3.6	0.9	0.5	B	-	Ⅳ	29	2L-76	2.5	0.9	0.5	D	-
Ⅲ	64	2D-63	3.3	0.9	0.4	B	65耕作坑	Ⅳ	30	2K-77	3.7	0.7	0.3	B	31耕作坑
Ⅲ	65	2D-62	4.2	0.7	0.5	B	64耕作坑	Ⅳ	31	2J-77	1.6	(0.7)	0.2	D	30耕作坑
Ⅲ	66	2C-61	3.9	1.0	0.8	A	-	Ⅳ	33	2I-79	2.4	1.0	0.6	D	-
Ⅲ	67	2B-62	2.9	0.9	0.7	D	42耕作坑	Ⅳ	34	2H-79	5.7	0.7	0.3	B	-
Ⅲ	68	2B-61	4.9	0.9	0.6	B	42耕作坑	Ⅳ	35	2L-80	(7.3)	1.0	0.3	B	-
Ⅲ	70	2C-61	2.3	0.9	0.5	D	-	Ⅳ	36	2L-83	3.6	(0.7)	0.7	B	-
Ⅲ	71	2C-59	6.8	1.0	0.7	B	-	Ⅳ	37	2F-82	(5.1)	0.8	0.7	B	-
Ⅲ	72	2D-59	2.9	0.9	0.5	D	-	Ⅳ	38	2G-82	4.8	0.9	0.3	B	-
Ⅲ	73	2A-59	3.4	0.7	0.6	B	-	Ⅳ	39	2H-83	3.4	0.8	0.5	B	40耕作坑
Ⅲ	74	2B-58	3.7	0.8	0.5	B	-	Ⅳ	40	2I-83	4.5	0.7	0.6	B	39耕作坑
Ⅲ	75	2C-58	(3.0)	0.9	0.5	B	76,77耕作坑	Ⅳ	41	2H-86	2.4	0.8	0.6	D	-
Ⅲ	76	2D-58	1.0+	0.3+	0.5	D	75,77耕作坑	Ⅳ	42	2K-88	3.2	1.1	0.4	B	-
Ⅲ	77	2C-58	5.9	1.2	1.0	A	75,76耕作坑	Ⅳ	43	2K-88	1.8	1.0	0.4	D	-
Ⅲ	78	2B-57	3.4	0.9	0.5	B	-	Ⅳ	44	2K-93	1.5	0.7	0.3	D	-
Ⅲ	79	2B-57	2.4	0.7	0.6	D	-	Ⅳ	45	2H-77	2.4	0.8	0.6	D	-

タイプ分類基準

- A：長径3m以上、深さ80cm以上
- B：長径3m以上、深さ80cm未満
- C：長径3m未満、深さ80cm以上
- D：長径3m未満、深さ80cm未満

第4節 道跡

FP上面で遺構確認を行った際に、軽石が変色している部分が幅1～1.5m前後の帯状に検出された。この部分は軽石を掘り返すなど移動させた形跡はなく、上層からの何らかの影響で軽石の表面が変色したものである。変色した部分は、米軍が昭和21～23年に撮影した航空写真から作成した地図に重ね合わせると、当時の地割に沿っており、これらは道の痕跡であると判断した。



第120図 I～IV区1面 道跡(破線部分が道跡)

第7章

自然科学分析



Ⅲ区 全景（南から。調査区右手は高さ40mの崖となり、利根川の河原へと落ちる。左手の林は稲荷神社で、上毛古墳総覧では長尾村14号墳とされFP上面の古墳の可能性がある。）

吹屋伊勢森遺跡5号住居内2号ピット出土黒曜石の原産地推定

菅頭明日香(東京学芸大学)

建石 徹 (文化庁)

二宮修治 (東京学芸大学)

1 はじめに

群馬県北群馬郡子持村吹屋伊勢森遺跡5号住居内2号ピット出土の黒曜石について、エネルギー分散型蛍光X線分析を用いた非破壊法による原産地推定を行った。

黒曜石の原産地推定は、1970年代から理化学的手法が応用されていき、現在まで膨大なデータが蓄積されてきている。群馬県内の黒曜石の産地推定は、鈴木正男、筆者らによって徐々に事例が蓄積された(Suzuki 1973他、建石・二宮2003他)。これらの結果の一部は大工原豊(大工原2002他)らによりまとめられ、興味深い研究が進展しつつある。

2 分析資料(試料)

分析に供した資料は、伊勢森遺跡5号住居内2号ピットより出土した黒曜石8点である(資料の記載は、分析結果と共に表1に示してある)。整理担当者である桜井美枝氏によれば、これらの資料は、石核、原石、「分割礫」に分類される。なお、本遺構の帰属時期は、諸磯b式新段階とされる。

3 分析方法

黒曜石の主成分元素であるケイ素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、ナトリウム(Na)、カリウム(K)の8元素のうち、鉄、カルシウム、カリウムの3元素は、黒曜石の原産地間の識別・分類に特に有効であり、その結果として原産地推定の指標元素となる。筆者らはこれら3元素と、これらと挙動に相関性のある微量成分元素、マンガン(Mn)、ストロンチウム(Sr)、ルビジウム(Rb)を加えた6元素での検討が有用であることを示してきた。(網干・二宮 1996 建石・二宮 2000 他)

本研究では、これら6元素をエネルギー分散型蛍光X線分析により測定し、それぞれの濃度比を算出した。測定装置はセイコー電子工業製卓上型エレメントモニターSEA-2001を使用し、試料室大気雰囲気下、加速電圧50kV、計測時間120秒での測定を3回ずつ行った。標準試料を用いないファンダメンタルパラメーター法により、それぞれの元素を

表1 吹屋伊勢森遺跡 I区5号住居内2号ピット出土黒曜石産地推定結果(wt%)

分析No.	器種等	時期	重量(g)	長径(cm)	MnO	Fe ₂ O ₃	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O	原産地
1	石核	諸磯b新	39	4.8	3.4	32.4	0.3	8.2	1.4	54.3	星ヶ塔
2	原石	諸磯b新	47	4.6	3.6	34.8	0.3	7.6	1.2	52.5	星ヶ塔
3	石核	諸磯b新	18	5.4	3.3	32.1	0.4	8.6	1.2	54.4	星ヶ塔
4	石核	諸磯b新	27	5.7	3.4	33.0	0.4	9.8	1.3	52.0	星ヶ塔
5	石核	諸磯b新	93	6.0	3.2	35.0	0.2	6.5	1.3	53.8	星ヶ塔
6	石核	諸磯b新	70	5.7	3.4	34.9	0.4	8.8	1.3	51.3	星ヶ塔
7	分割礫	諸磯b新	52	5.2	3.5	33.2	0.3	7.1	1.3	54.6	星ヶ塔
8	原石	諸磯b新	49	4.0	3.4	36.0	0.4	10.1	1.3	48.8	星ヶ塔

酸化物(岩石学の慣例による)の総和を100とする重量濃度比として求め、その平均値を各試料の分析値とした。

関東周辺の黒曜石原産地である栃木県高原山、長野県星ヶ塔、同小深沢、同麦草峠、同男女倉、東京都神津島、神奈川県畑宿、静岡県柏峠、同上多賀、新潟県板山、山形県月山より原石を採取して、得られた分析値を原産地データとした。関東周辺の原産地黒曜石の6元素組成を表2に示す。

遺跡出土黒曜石の原産地推定は、MnO、Fe₂O₃、SrO、CaO、Rb₂O、K₂Oの6元素組成を変量とするクラスター分析[多変量解析ソフト SPSS (SPSS社製 SPSS13.0J)]により行い、最遠距離法を用いて、原産地データとの類似度を検証した。

4 分析結果および考察

蛍光 X線分析による8点の分析資料の6元素組成および推定された原産地を、資料の記載と共に、一覧表として表2に示した。また、分析された6元素によるクラスター分析の結果を樹形図として、図1に示した。

図1によれば、原産地の一つである長野県星ヶ塔から採取した原石の分析値と今回分析を行った8点

の資料の分析値が、同一のクラスター内にまとまるため、これらの資料は全て、星ヶ塔産黒曜石である可能性が高いと言える。

群馬県では、旧石器時代から黒曜石の使用が始まり、草創期から早期前半に至って減少傾向を示し、早期後半から前、中期で石器における使用割合が増加し、前期末葉、諸磯式期に黒曜石流通が最も盛んとなることが知られている(群馬県史編纂委員会1988他)。大工原豊によれば、諸磯式期の中の変遷をみると、諸磯a式～b式中段階には、和田峠(小深沢)を主体とし、男女倉、霧が峰(星ヶ塔)の信州系各原産地の黒曜石が使用され、諸磯b式新段階～c式段階には、主体がほぼ星ヶ塔だけになり他の原産地のものは激減するという(大工原2002他)。筆者らによる近年の研究でも、大工原の見解とほぼ同様の傾向が認められた。(建石・二宮 2003)。今回の分析結果は、これらの事例とよく調和するものと言える。

今後、本遺跡および周辺地域において同様の視点に立った分析事例を蓄積し、当該地域における黒曜石利用の変遷の実態を、より具体的に復原していきたい。

表2 関東周辺原産地黒曜石の6元素組成(wt%)

	MnO	Fe ₂ O ₃	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O
高原山(栃木県)	1.3	56.6	0.8	16.5	0.8	24.0
星ヶ塔(長野県)	3.4	32.1	0.3	9.9	1.1	54.2
小深沢(長野県)	4.2	32.8	0.0	10.2	2.4	50.4
麦草峠(長野県)	1.6	40.4	1.1	12.7	0.8	43.5
男女倉(長野県)	2.2	38.5	0.7	11.1	1.2	46.3
神津島(東京都)	3.3	39.8	0.8	13.6	0.7	42.0
畑宿(神奈川県)	2.2	69.1	1.3	17.9	0.1	9.5
柏峠(静岡県)	1.1	58.0	0.9	25.0	0.2	15.5
上多賀(静岡県)	1.7	61.0	1.2	20.0	0.3	16.0
板山(新潟県)	3.5	33.6	0.6	12.9	1.5	48.0
月山(山形県)	5.0	35.0	0.7	13.0	1.0	45.0

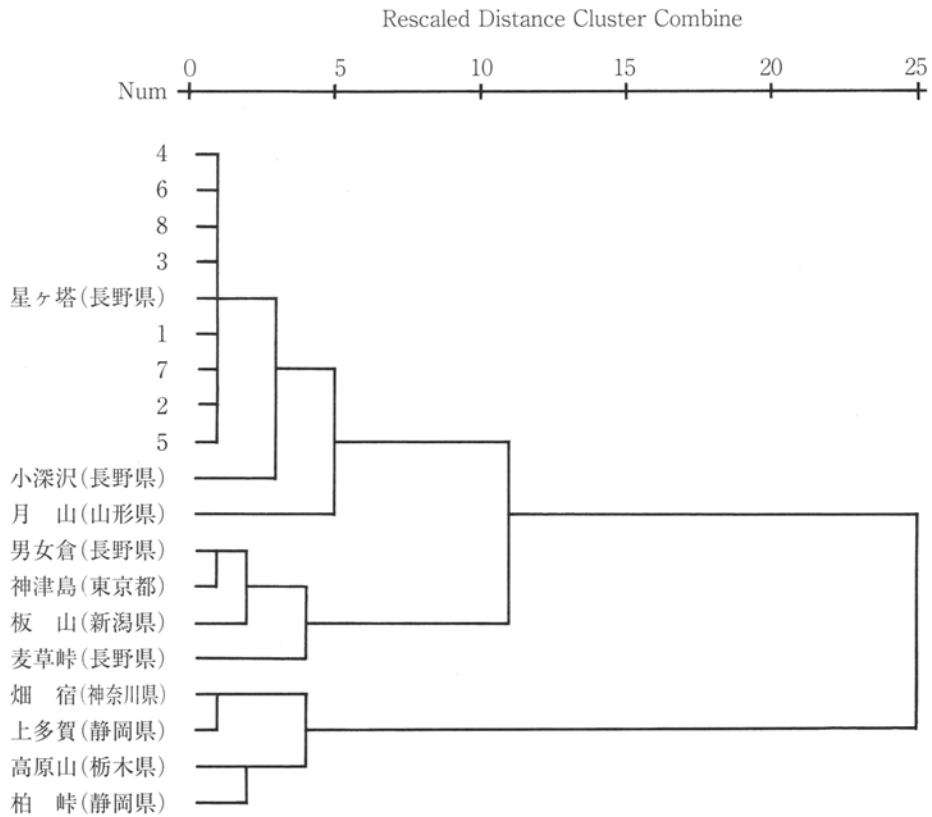


図1 クラスタ分析の結果

謝辞

本研究を行うにあたり、麻生敏隆氏、井上昌美氏には研究の機会を与えていただいただけでなく、分析資料の出土状況等についても多くのご教示をいただきました。また、大工原豊氏には当該地域の石器研究全般について常にご教示をいただいております。記して感謝申し上げます。

引用参考文献

Suzuki,M., 1973 Chronology of Prehistoric human activity in Kanto,Japan - Part I J.Fac.Sci.,Univ.Tokyo,Sec.V (Anthropology) ,Vol.IV
 二宮修治・網干守 1996「黒曜石の成分分析(黒曜石片の原産地推定)」『羽根沢台遺跡Ⅱ』三鷹市教育委員会 三鷹市遺跡調査会
 建石徹・二宮修治 2000「蛍光X線分析による粟島台遺跡出土黒曜石の原産地推定」『粟島台遺跡』千葉県銚子市教育委員会
 群馬県史編さん委員会 1988『群馬県史 通史編1 原始古代1 旧石器・縄文』
 大工原豊 2002「黒曜石の流通をめぐる社会」『縄文社会論』(上) 同成社
 鈴木正男 1989「糸井宮前遺跡の黒曜石分析」『糸井宮前遺跡 Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 建石徹・二宮修治 2003「黒曜石の産地推定」『ストーンロード』安中市ふるさと学習館

吹屋伊勢森遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

吹屋伊勢森遺跡が所在する子持村には、子持山山麓斜面と吾妻川・利根川が形成した河岸段丘といった地形が認められ、本遺跡は約6-7万年前に形成されたとされる河岸段丘である長坂面上及び段丘縁辺付近に立地している。

本遺跡では発掘調査の結果、調査区Ⅲ区から6世紀中葉以降に降灰したとされるHr-FP（以下、FP）により良好に保存された畝跡が検出されており、これらの遺構における栽培植物の検証が課題とされた。また、発掘調査時には6世紀初頭に降灰したとされるHr-FA（以下、FA）も確認されているが、その下位からは畝跡等の遺構は検出されず、当時の土地利用や本遺跡及び周辺古植生とその変遷も課題とされた。

本報告では、1)畝跡における栽培植物、2)古植生変遷、の2点を明らかとするため、自然科学的分析手法を用いて検討を行う。また、本遺跡では、調査区Ⅰ区より倒木痕や土坑が検出され、炭化材や炭化種実遺体が出土していることから、これらも対象として分析を行う。

1. 試料

(1) 栽培植物の検討

試料は、調査区Ⅲ区のFP直下から検出された1～4号畝のうち、1～3号畝の任意の畝・畝間(3・4・10・11・12・13地点)より採取した柱状の土壌ブロック6点、炭化物集中(1・5地点)より採取した炭化物7点と土壌及び柱状の土壌ブロック2点、さらに、畝が検出されない地点(16地点)より採取した土壌4点である。

以下に試料の概要を記す。また、試料採取位置(平面図)を図1、各地点の模式柱状図及び試料採取位置(断面図)を図2、各試料の詳細及び分析項目を表1に示す。

表1. 分析試料

調査区	試料名			試料の質	分析項目*			
	遺構名	位置・地点	層名・名称		Po	灰	微S	CW
Ⅰ区	倒木痕	2面 1I-1	炭	炭化材				●
	42号土坑	4面	種1 種3	炭化種実 炭化種実			●	
Ⅲ区	炭化物集中	1地点	上層 褐色土 炭化物	土壌 土壌 炭化物		●		●
	1号畝 畝	3地点	I層 II層	土壌 土壌	●			
	1号畝 畝間	4地点	I層	土壌	●			
	炭化物集中	5地点	炭化物 1 2	炭化物混土壌 土壌 土壌			●	●
	2号畝 畝	10地点	I層 II層	土壌 土壌	●			
	2号畝 畝間	11地点	I層	土壌	●			
	3号畝 畝	12地点	I層 II層	土壌 土壌	●			
	3号畝 畝間	13地点	I層 II層	土壌 土壌	●			
	南壁	16地点	I層 IV層	土壌 土壌	●			

*... Po: 植物珪酸体分析、灰: 灰像分析、微: 微細物分析、S: 種実同定、CW: 炭化材同定



図1 分析試料採取位置

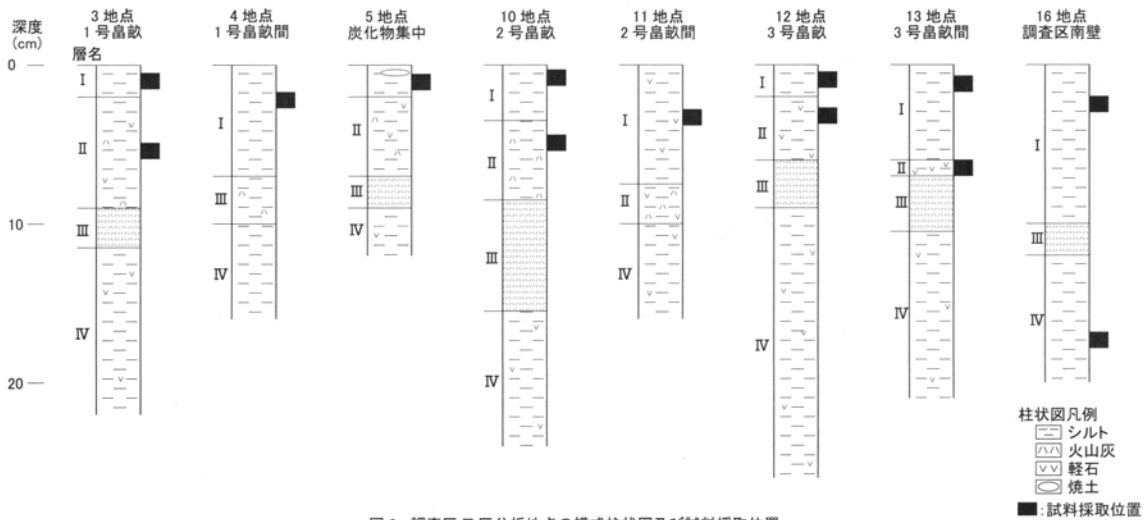


図2. 調査区Ⅲ区分析地点の模式柱状図及び試料採取位置

1) 畝跡

1～4号畝は、畝・畝間跡が検出されない区域(以下、非耕作域)によって区分され、畝跡の畝は1～4号畝のいずれも南北方向に伸びる。3号畝では、畝下部に小溝が検出されており、発掘調査所見によれば、時期差を示す畝間、あるいは、種蒔きの痕跡の可能性が指摘されている。

これらの畝跡の土層は、現地や室内における試料の土層観察の結果、大きくI～IV層(仮称)の4層に分層される。以下に各土層の所見を記す。

IV層：黒褐色土。土層観察範囲の最下位に相当し、FA降灰以前の土層である。本層中にはφ1cm前後の赤褐色の軽石片が散在する。なお、16地点や1号畝南側では、IV層下位の観察が可能であり、暗褐色土が確認されている。

Ⅲ層：FAあるいは偽礫状のFAを含む灰褐色土。下位のIV層を不整合で覆う。層厚は側方で減少する、レンズ状となるなど一定ではない。

Ⅱ層：偽礫状のFAを含む暗褐色土。当土層は畝部分で厚く堆積し、畝間で(Ⅱ層)は薄く、上位のI層と比較するとやや粘質な土壌であり、軽石片や炭化物を含む。

I層：暗灰褐色土。当土層は、畝跡で明瞭に観察され、畝部分で薄く堆積し、畝間で厚くなる傾向が認められる。また、地点によっては上部がやや細粒化する。

なお、16地点の土層は、I・Ⅱ層の特徴が観察されたが、明瞭に区分できなかったことから、ここではI層に含め表記している。

これらの土層のうち、IV～Ⅱ層は調査区Ⅲ区全体で認められたが、I層は主として畝・畝間で明瞭に認められている。Ⅱ・I層では、偽礫状のFAや粒団等が認められることから擾乱を受けていることが示唆され、特に、畝跡におけるこれらの土層については、耕作の痕跡を残している可能性がある。

分析試料は、各畝・畝間から採取した柱状ブロックより、上記した土層観察結果を基に、各土層より土壌を採取している。

2) 炭化物集中

1地点は畦状遺構上、5地点は1・3号畝跡間の非耕作域に位置する。1・5地点ともに、炭化物及び焼土と考えられる橙褐色～赤褐色土が認められた箇所を対象として、柱状の土壌ブロックで採取を行っている。このうち、上述したIV層までの土層を採取した5地点試料の土層観察では、下位より黒褐色土(IV層)、FAあるいは偽礫状のFAを含む灰褐色土(Ⅲ層)、暗褐色土(Ⅱ層)、暗褐色土中に炭化物と褐色～橙褐色土が混じる土層が認められた。なお、炭化物集中の主体と考えられるⅡ層上位の土層には、灰や灰状物質は認められず、また、焼成・被熱等に伴う硬化は認められなかった。

分析試料は、各地点の炭化物集中に認められた炭化物と、柱状の土壌ブロックより採取した土壌である。土壌試料は、1地点の柱状の土壌ブロックから採取した褐色-橙褐色土が混じる暗褐色土(1地点 上層)と褐色土(1地点 褐色土)、5地点の柱状の土壌ブロックから採取した褐色-橙褐色土(サンプル1・2)の4点と、5地点の炭化物が集中して認められた地点の炭化物混じり土壌(5地点 炭化物)の計5点である。

3)非耕作域

16地点は、調査区Ⅲ区南壁の非耕作域に相当する。当地点では、1~4号畠との比較対照試料として、FP直下から深さ約20cmまで厚さ5cm連続で土壌4点を採取している。

(2)炭化材・炭化種実

試料は、調査区Ⅰ区の出土した炭化材1点(炭 倒木痕)と炭化種実2点(42号土坑 種1、種3)である。炭化材は、出土状況からFP降灰以前にすでに倒木の状態であった可能性が指摘されている。一方、炭化種実遺体は、縄文時代の土坑から出土しており、分析対象とした試料の他に細片化した炭化種実も多数存在したが、これらの炭化種実中より同定可能と判断される遺存状況の良好なものを選択し、分析対象としている。

これらの試料について、調査担当者との協議結果を基に、分析対象試料を設定し、植物珪酸体分析・灰像分析・微細物分析・種実遺体同定・炭化材同定を行うこととした(表1)。

2.分析方法

(1)植物珪酸体分析

試料より採取した土壌を過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉

部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づき同定・計数する。

なお、分析時に分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。また、本遺跡の周辺の遺跡では立木跡などから樹木の葉部に由来した植物珪酸体も認められている(株式会社古環境研究所,1997a・bなど)ことや、本報告では古植生が課題とされていることから、樹木起源珪酸体の産出にも注目した。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から栽培や古植生を検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(2)灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1993)。したがって、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。1・5地点の試料中には灰が観察されなかったことから、上記の手法により珪化組織片の濃集と分離を試みた。結果は、検出された種類とその産状を示す一覧表で示す。

(3)微細植物片分析・種実同定

炭化物集中より採取した炭化物の混じる土壌試料を秤量後30-40℃で3昼夜乾燥させ、目に付いた炭化物を拾い出す。水を満たした容器に乾燥後の試料を投入し、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mm

の篩に回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。容器内の残土を0.5mmの篩を通して水洗し、回収した炭化物と分析後の残渣を、4mm,2mm,1mm,0.5mmの粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や1mm角以上の炭化材などを抽出する。

炭化種実遺体は、双眼実体顕微鏡下で観察し、その特徴から同定する。種実遺体は、種実の形態的特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)などと比較し、種類を同定し個数を求める。炭化材や炭化物は乾燥後の重量を求め、同定可能な部分が残っている場合には樹種同定により種類を明らかにする。分析後の種実遺体や残渣は、30-40°で3昼夜乾燥後、種類毎に容器または袋に入れて保存する。

(3)炭化材同定

試料の木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3.結果

(1)植物珪酸体分析

結果を表2、図3・4に示す。各試料からはイネ科起源の植物珪酸体が検出されるが、いずれも保存状

態は悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。なお、樹木起源の植物珪酸体の検出を試みたが、いずれの試料からも全く検出されない。以下に、各地点の産状を述べる。

1) 3地点(1号畝 畝)

植物珪酸体含量は、II層は約4万個/g、I層は約6.7万個/gである。栽培植物を含む分類群では、I層でキビ属の短細胞珪酸体(約1,900個/g)とキビ族の機動細胞珪酸体(約600個/g)が検出される。ただし、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種(キビ)に由来するものであるか、野生種(クサキビ等の雑草)に由来するものであるか、判別は困難である。II層からは、栽培植物に由来する植物珪酸体は認められない。

植物珪酸体の産状は、I・II層ともに同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立ち、種類の特定が困難である不明珪酸体も検出される。

2) 4地点(1号畝 畝間)

I層の植物珪酸体含量は、約4.6万個/gである。栽培植物を含む分類群は、3地点I層と同様に、栽培種の特定が困難なキビ属の短細胞珪酸体(約1,100個/g)とキビ族の機動細胞珪酸体(約700個/g)が見られる。植物珪酸体の産状は、3地点I層と同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

表2. 植物珪酸体分析結果

(個/g)

種 類	調査区		Ⅲ区													
	地点		3地点		4地点		10地点		11地点		12地点		13地点		16地点	
	層名		I	II	I	I	II	I	I	II	I	II	I	II	I	IV
イネ科葉部短細胞珪酸体																
キビ族キビ属	1,925	0	1,073	0	0	0	230	451	0	0	0	0	0	0	0	0
タケ亜科ネザサ節	5,198	2,287	6,977	2,985	1,489	3,777	3,683	8,803	2,078	1,986	1,725	12,843				
タケ亜科	2,695	1,271	3,757	314	165	1,298	2,762	1,580	346	709	345	2,733				
ウシクサ族ススキ属	10,396	8,302	7,692	12,569	5,955	13,336	14,501	14,445	7,793	6,524	4,140	7,651				
イチゴツナギ亜科	385	0	0	157	0	0	0	0	0	0	0	0				
不明キビ型	20,984	8,132	14,132	14,454	5,293	10,858	16,573	15,799	9,872	8,368	7,359	16,669				
不明ヒゲシバ型	4,620	4,151	3,578	5,499	2,812	6,373	3,223	3,837	1,732	1,418	1,955	9,838				
不明ダンチク型	9,433	3,812	9,123	7,070	2,729	7,907	7,366	7,900	4,330	4,255	2,990	10,111				
イネ科葉身機動細胞珪酸体																
キビ族	578	0	716	157	0	0	0	0	0	0	0	0				
タケ亜科ネザサ節	3,850	3,558	6,798	2,828	2,812	1,888	7,596	3,386	2,251	2,978	3,565	28,693				
タケ亜科	963	847	3,041	1,571	248	944	2,072	903	693	709	345	3,279				
ウシクサ族	3,080	6,353	14,490	5,027	7,112	2,596	6,905	4,740	7,967	4,680	4,484	22,408				
不明	2,888	1,440	3,041	2,828	1,654	2,950	5,294	2,483	3,464	3,120	1,610	4,099				
合 計																
イネ科葉部短細胞珪酸体	55,636	27,954	46,333	43,048	18,442	43,548	48,338	52,815	26,151	23,260	18,513	59,845				
イネ科葉身機動細胞珪酸体	11,358	12,198	28,086	12,412	11,826	8,379	21,867	11,511	14,374	11,488	10,004	58,479				
総 計	66,994	40,152	74,419	55,460	30,268	51,927	70,205	64,326	40,525	34,748	28,517	118,324				

の葉部に形成される短細胞列と機動細胞列、およびススキ属の葉部に形成される短細胞列とウシクサ族機動細胞列が認められ、ネザサ節短細胞列とススキ属短細胞列の産出が目立つ。一方、5地点のサンプル1・2では、ネザサ節短細胞列とススキ属短細胞列が認められるが、機動細胞列はわずかに認められる、あるいは全く認められない。

(3) 微細植物片分析・種実同定

結果を表4に示す。1・5地点の土壌からは、木材に似た組織を持つ炭化物が検出される。このうち、各試料より大きさ・遺存状況から選択・抽出した炭化物は、全てイネ科に同定される。また、木材組織が認められない種類・部位共に不明の炭化物等も検出される。この他に、1地点 上層からは草本のタケニグサの種子4個も検出されたが、その保存状態は良好であり炭化の痕跡は認められない。

42号土坑から出土した種実遺体2点は、いずれも落葉広葉樹のクリの子葉に同定される。クリの子葉は炭化しており、保存状態は不良である。以下に、本分析によって得られた分類群の形態的特徴を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科
 クリ属子葉が検出された。炭化しており、黒色を呈す。三角状凹卵体、一側面は偏平で、反対面はわずかに丸みがある。径1.5cm, 厚さ8mm程度。子葉は

硬く緻密で、表面には内果皮(渋皮)の圧痕の縦筋が走る。種1は、2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れている。子葉の合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。

・タケニグサ (*Macleaya coedata* (Willd.) R. Br.)
 ケシ科タケニグサ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒卵形体で基部は尖る。長さ2mm、径1mm程度。種子表面は、横長楕円形の深い凹みが縦列し、網目模様をなす。

(4) 炭化材同定

結果を表5に示す。1・5地点の炭化物集中から単体で採取した炭化物6点は、全てイネ科に同定される。上記した同地点の微細物分析により得られた炭化物20点(1・5地点各10点)も全てイネ科に同定される。一方、倒木痕から採取された炭化材は落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定される。以下に、各種類の解剖学的特徴などを記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織のものがある。

表4. 種実遺体同定結果および微細物分析結果

種類名	部位	1地点	5地点	I区4面42号土坑		備考
		上層	炭化物	種1	種3	
クリ	子葉	-	-	1個	1個	炭化
タケニグサ	種子	4個	-	-	-	未炭化
炭化材		1.1g	1.1g	-	-	乾燥重量(1地点:イネ科(10)、5地点:イネ科(10))
不明炭化物		<0.1g	0.2g	-	-	乾燥重量
土壌分析量		902g	418.2g	-	-	
分析後残渣		64.7g	27g	-	-	乾燥重量

表5. 炭化材同定結果

調査区	地点	遺構名	層位	樹種
I区		倒木痕(1I-1)	2面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
III区	1地点	炭化物集中	FP直下	イネ科(3)
	5地点	炭化物集中	FP直下	イネ科(3)

・イネ科(Gramineae)

保存状態が悪いが、6点のうち1点は比較的状态が良い。外径約7-10mmの円柱状で、中央部は空洞となる。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められるが、放射組織は認められない。

4. 考察

(1) 栽培植物

各畠跡の植物珪酸体分析結果の特徴をみると、1号畠畝(3地点)・畝間(4地点)の1層からは、いずれもキビ属の短細胞珪酸体やキビ族の機動細胞珪酸体が検出され、これらの植物珪酸体含量は600-2,000個/gの範囲であった。この他の植物珪酸体では含量に差異が認められるが、いずれもネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つことが特徴として挙げられる。2号畠畝(10地点)・畝間(11地点)では、畝のI層でキビ族の機動細胞珪酸体が約160個/g程度含まれるのみであった。この他の植物珪酸体で、いずれもネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立った。3号畠では、畝(12地点)のI・II層でキビ属の短細胞珪酸体が認められたが、その植物珪酸体含量は500個/g未満と少なく、畝間(13地点)ではキビ属・キビ族はいずれも検出されない。この他の植物珪酸体は、畝・畝間とも同様の産状を示し、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ傾向にあった。また、比較対照試料とした16地点では、I・IV層からはイネ科の栽培種、あるいは、栽培種を含む分類群を含む植物珪酸体は全く認められなかった。

以上の結果、畠跡からはキビ属の短細胞珪酸体(1・3号畠)やキビ族の機動細胞珪酸体(1~3号畠)が検出されるのに対し、比較対照とした非耕作域(16地点)では全く検出されないことが特徴として指摘される。また、この他の植物珪酸体では含量に差異はあるものの、いずれもネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つことが特徴

として挙げられる。なお、上述したように1・3号畠から検出されたキビ属は栽培種に由来するものであればキビ栽培の可能性はあるが、現時点では野生種と栽培種との識別は不可能である。また、2号畠ではキビ族の機動細胞珪酸体が認められ、キビ族作物が栽培された可能性もあるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培植物の種類の特定には至らない。

ところで、本遺跡周辺では、これまでの発掘調査に伴いFPやFA下位に検出された畠跡や水田跡等の遺構やこれらの遺構が検出されない放牧跡とされる区域を対象とした分析調査により栽培植物や古植生の検証が行われている。特に、FP直下から検出された遺構の分析事例では、吹屋中原遺跡I区では陸苗代とされる遺構から苗段階を含むイネ属(1,000個/g前後)が検出され、その産出状況からFP降灰時には植物体が抜かれていたと推定されている事例(株式会社古環境研究所,1997b)や、白井北中道II・白井大宮遺跡のイネ属やキビ族の植物珪酸体が検出されたが、その密度(含量)が低く、稲作やキビ族栽培の可能性を積極的に支持することは難しいといった事例(株式会社古環境研究所,1993・1997b・2000)がある。また、吾妻川左岸に位置する北牧大境遺跡や吹屋瓜田遺跡の水田跡の分析調査では、ヨシ属が生育するような湿地を利用した稲作が行われていた可能性(株式会社古環境研究所,1996;2004)が指摘されている。さらに、白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)における放牧跡とされる区域を対象とした分析調査では、イネ属やムギ類の植物珪酸体が検出されたことから、周辺の低地において稲作やムギ栽培の可能性(株式会社古環境研究所,1997a・2000)や、吹屋犬子塚遺跡ではヒエを含むキビ族作物の栽培の可能性(株式会社古環境研究所,1997b)が示唆されている。

当該期の集落跡では黒井峯遺跡や西組遺跡の発掘調査の結果、イネ科のイネやムギの種実遺体?、さらに、イネ科作物ではないアズキやヒョウタン等の

種実遺体?等が検出され(石井,1994)、白井遺跡群のFAとFPに挟まれる土層中からはイネ科のアワや、ソバ、シソ科(シソまたはエゴマ)、ササゲ属(アズキまたはリョクトウ)等が検出されている(洞口,1997)。

以上の点から、本遺跡では、特定には至らないもののキビ属・キビ族に含まれる栽培種とされる作物が栽培されていた可能性があり、さらに、周辺遺跡の調査事例から、イネ科作物ではないソバやシソ科、マメ類等の栽培の可能性も考慮する必要がある。

(2)古植生

1~3号畝の畝・畝間における植物珪酸体含量は数千-1万個/gと試料間で差異が認められたが、その産状は上述のように、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出するといった共通した特徴を示した。また、非耕作域(16地点)のI・IV層も植物珪酸体含量は異なるが、1~3号畝跡と同様にネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出する傾向が認められた。このことから、本地点ではFA降灰直前頃からFP降灰頃はススキ属やネザサ節が生育した環境が窺われる。

なお、本遺跡と同じ段丘面上に立地する吹屋遺跡群や、長坂面よりも低位の段丘である白井面に立地する白井遺跡群の分析調査結果によれば、ススキ属の産出が目立つことや、その機動細胞珪酸体含量が数千-数万個/gの範囲にあったことから、ススキ属等の生育するイネ科植生が広がっていた可能性が示唆されて(株式会社古環境研究所,1997a・b;2000)おり、本分析結果はこれらの調査事例と調和的と言える。また、白井遺跡群におけるススキ属の単位面積当たりの植物体量(試料の仮比重(1.0と仮定)とススキ属の換算係数(機動細胞珪酸体1個当たりの植物体乾重: $1.24 \times 10^{-5} \text{g}$)を掛け、単位面積(1㎡)、層厚1cmとして計算)は、FP直下におけるススキ属(ウシクサ族)機動細胞珪酸体の検出密度(含量)の平均1.28万個/gという値から平均 $1.5 \text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$ と試算されている(株式会社古環境研究所,1997a)。同様な計算を本遺跡で行うと、検出

されたウシクサ族の機動細胞珪酸体を全てススキ属と仮定した場合、FP直下のI層では約 $0.75 \text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$ となり、白井遺跡群におけるススキ属の植物体量よりも少ない。また、非耕作域(16地点)のIV層のネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の含量は、I層と比較して極めて高く、同様の試算では約 $2.63 \text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$ となり、畝跡における植物体量と異なることが指摘される。ただし、本遺跡では分析点数が少なく、上記した試算結果を遺跡全体の平均とするには課題が残る。仮に、これらの値を参考とすると、植物体量の差異は、白井遺跡群は放牧地として利用されたと推定される(井上,1997)地点と畝跡等の検出から耕作が行われていたと推定される地点の土地利用のあり方や、本遺跡におけるFA降灰前後の土地利用の変化を示している可能性などが考えられる。

また、調査区I区のFP直下の倒木痕から出土した炭化材は落葉広葉樹のコナラ節であった。現在、群馬県内に生育するコナラ節には、ナラガシワ、カシワ、モンゴリナラ、ミズナラ、コナラと変種、亜種、雑種など合計10種類があるとされ(戸部ほか,1987)、このうち、モンゴリナラは、かつては日本に生育するとされていたが、ミズナラとカシワの雑種であるカシワモドキの誤認であり、真のモンゴリナラは日本に自生しないと指摘がある(大場,1989)。また、亜種、変種、雑種は自生地が限られ、子持村周辺には生育していない。ナラガシワも自生地が限られており本遺跡周辺には生育しておらず、カシワやミズナラも子持山・赤城山等には生育するが、本遺跡周辺の段丘上には生育していない。一方、コナラは本遺跡周辺の丘陵から山地の二次林などに普通にみられ、現在の植生を参考とした場合、倒木痕から出土したコナラ節の炭化材はコナラに由来する可能性がある。

本遺跡周辺では、白井遺跡群や白井大宮遺跡のFP下からは、倒木痕やその可能性のある炭化材が出土している。これらの分析調査結果によれば、コナラ節が多くみられ、この他に、クスギ節やム

クノキ、アサダが認められている(藤根,1997;植田,2002)。本分析結果は、これらの調査成果と調和的であり、本遺跡周辺においてもコナラ節が生育していたと考えられる。

(3)炭化物集中

1・5地点の炭化物集中における珪化組織片の産状をみると、ネザサ節やススキ属が燃えた際に灰が残留した状況が窺われる。また、同地点の炭化物は、いずれもイネ科の稈であり、遺存状況の良好な炭化物の観察では、径は約7-10mmを測ることや、灰とならずに炭化・残存したこと等を考慮すると、タケ亜科(タケ・ササ類)や稈が木質化するヨシ、比較的大型で基部が硬くなるススキ属等に由来する可能性がある。

なお、白井遺跡群でも畦状遺構に認められた炭化物集中や炭化物層を対象とした調査でも、上記と同様の種類が認められている(藤根,1997;株式会社古環境研究所,1997a・2000)。

(4)種実遺体

I区の4面42号土坑から出土した炭化種実遺体は、いずれもクリに同定された。クリは山野に自生する二次林要素で、現在の本遺跡周辺の山野にも普通にみられる。クリは子葉が生食でき、長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護、採取されてきた有用植物である。その可食部である子葉が炭化し出土していることから、食糧とするため周囲から持ち込まれたものと推測される。

一方、炭化物集中(1地点)の上層から検出されたタケニグサの種子には炭化の痕跡が認められなかった。タケニグサは、崩壊地や伐採跡地など明るく開けた場所に先駆的に生育する多年草であり、本遺跡の周辺においても生育可能な種類と考えられる。なお、未炭化の種実遺体の評価については、急激に多量の降下物や堆積物で、無酸素状態でバックされた場合、種実が冬眠状態となり、長期間生命を保つことが出来る、あるいは風化されない場合がある(吉川,1996)とされる一方で、発掘面の掃除をしないで試料採取を行うと風雨によりもたらされた種実が

一緒に採取されてしまう、低湿地遺跡など特別な場合を除くと、炭化していない限り、種実が残らない場合がほとんどであり、解析に関しては炭化種実以外を除外して考えた方が妥当(吉崎,1992・1996)とする評価もある。そのため、本報告では炭化種実と同様の評価することは困難と判断し、結果報告に留めている。

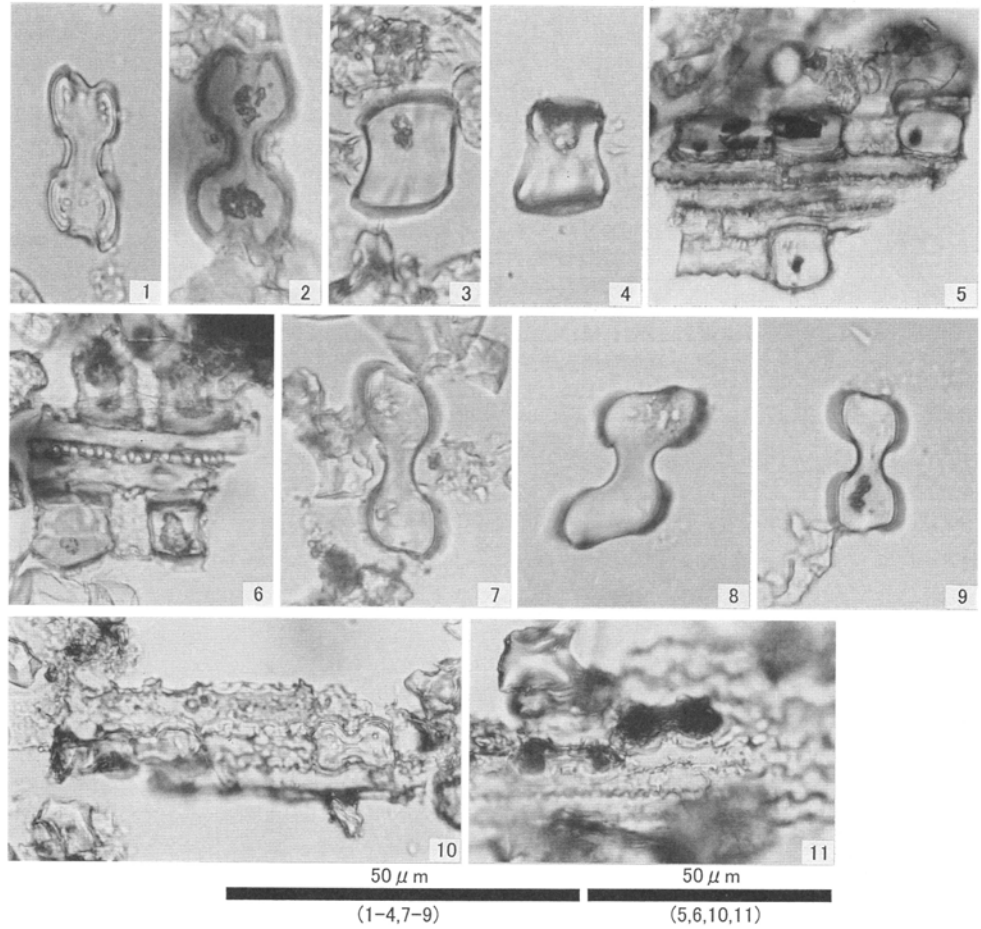
引用文献

- 藤根 久,1997,白井遺跡群出土炭化材の樹種同定。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第219集 白井遺跡群 -古墳時代編- 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集」,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,420-429。
- 洞口 正史,1997,耕作遺跡としての白井遺跡群。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第219集 白井遺跡群 -古墳時代編- 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集」,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,456-457。
- 井上 昌美,1997,FP下面調査の成果と課題。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第219集 白井遺跡群 -古墳時代編- 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集」,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,444-452。
- 石井 克己,1994,第一部 軽石噴火で埋まったムラを掘る。大塚初重(監修),日本の古代遺跡を掘る 第4巻,石井 克己・梅沢 重昭(著),黒井峯遺跡-日本のポンペイ,読売新聞社,15-122。
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑。石川茂雄図鑑刊行委員会,328p。
- 株式会社古環境研究所,1996,吹屋瓜田遺跡の自然科学分析。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第212集 吹屋瓜田遺跡 一級河川鯉沢川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,131-139。
- 株式会社古環境研究所,1997a,白井遺跡群における植物珪酸体分析。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第219集 白井遺跡群 -古墳時代編- 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集」,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,381-419。
- 株式会社古環境研究所,1997b,吹屋遺跡群(北中道II・犬子塚・中原遺跡)における植物珪酸体分析。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第207集 白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 国道353号道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,268-308。
- 株式会社古環境研究所,2000,群馬県、白井北中道遺跡(道の駅地点)における植物珪酸体分析。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第269集 白井北中道遺跡(道の駅地点)一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集」,建設省・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,63-74。
- 株式会社古環境研究所,2004,北牧大境遺跡における植物珪酸体分析。「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第339集 北牧大境遺跡 国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築(改良)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,200-207。
- 近藤 錬三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64。
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p。
- 大場 秀章,1989,ブナ科,佐竹義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編)「日本の野生植物 木本I」,平凡社,66-78。
- バリオ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析からみた人々の生活(1),慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」,慶應義塾,347-370。
- 戸部 正久・里見 哲夫・島野 好次・松沢 篤郎・須藤 志成幸,1987,

群馬県自生高等植物目録,「群馬県植物誌 改訂版」,群馬県・群馬県高等学校教育研究会生物部会,153-393.
 植田 弥生,2002,白井大宮Ⅱ遺跡の炭化材樹種同定,「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第301集 白井大宮Ⅱ遺跡 渋川工業用水道天日乾燥床増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,98-102.
 吉川 純子,1996,吹屋犬子塚・吹屋中原・白井北中道Ⅱより出土

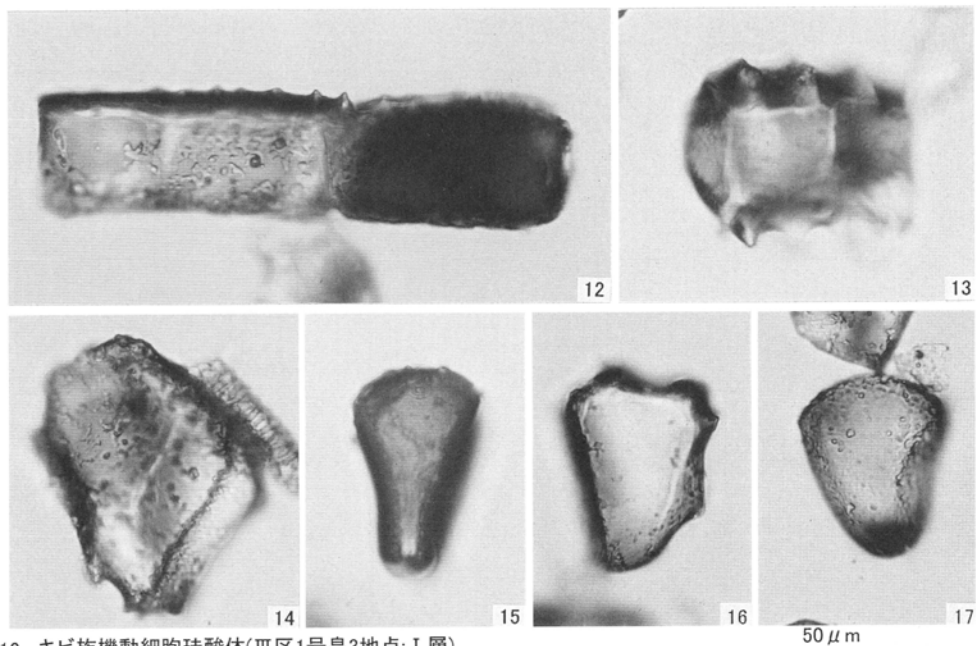
した炭化種実等について,「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第207集 白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 国道353号道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,317-329.
 吉崎 昌一,1992,古代雑穀の検出,考古学ジャーナル,355,ニューサイエンス社,2-14.

図版1
植物珪酸体(1)



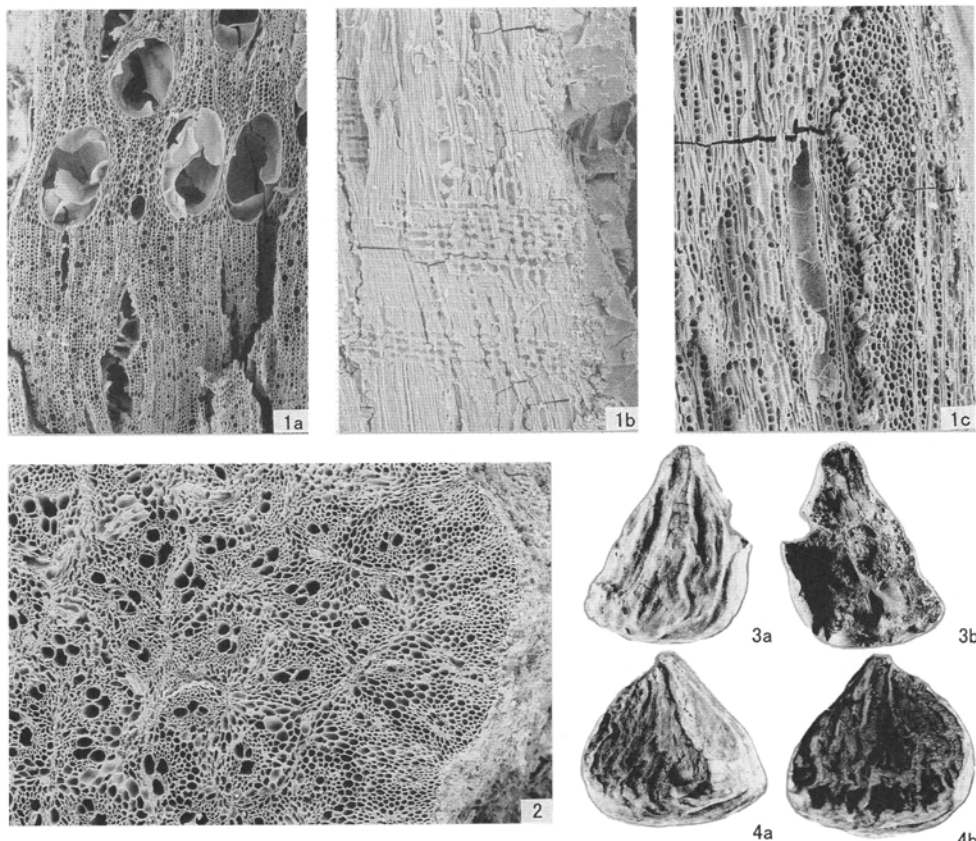
1. キビ属短細胞珪酸体(Ⅲ区1号畠3地点; I層)
2. キビ属短細胞珪酸体(Ⅲ区3号畠12地点; II層)
3. ネザサ節短細胞珪酸体(Ⅲ区3号畠12地点; II層)
4. ネザサ節短細胞珪酸体(Ⅲ区16地点; IV層)
5. ネザサ節短細胞列(Ⅲ区1地点; 上層の褐色土)
6. ネザサ節短細胞列(Ⅲ区5地点炭化物集中2;2)
7. ススキ属短細胞珪酸体(Ⅲ区2号畠10地点; I層)
8. ススキ属短細胞珪酸体(Ⅲ区3号畠13地点; I層)
9. ススキ属短細胞珪酸体(Ⅲ区16地点; IV層)
10. ススキ属短細胞列(Ⅲ区1地点; 上層の褐色土)
11. ススキ属短細胞列(Ⅲ区5地点炭化物集中2;2)

図版2
植物珪酸体(2)



12. キビ族機動細胞珪酸体(Ⅲ区1号畠3地点; I層)
 13. ネザサ節機動細胞珪酸体(Ⅲ区3号畠12地点; I層)
 14. ネザサ節機動細胞珪酸体(Ⅲ区16地点; IV層)
 15. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅲ区2号畠10地点; I層)
 16. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅲ区3号畠13地点; I層)
 17. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅲ区16地点; IV層)

図版3
炭化材・種実遺体



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (I区倒木痕;炭) a: 木口, b: 柂目, c: 板目
 2. イネ科(Ⅲ区5地点炭化物集中2;2) 横断面
 3. クリ子葉(I区42号土坑;種1)
 4. クリ子葉(I区42号土坑;種3)

200 μm: 1a・2
 200 μm: 1b,c
 1cm: 3,4

吹屋伊勢森遺跡から検出された古耕作土の土壌微細形態について

宮路淳子(奈良女子大学大学院人間文化研究科)

1 はじめに

吹屋伊勢森遺跡は、群馬県北群馬郡子持村に所在する。遺跡のある一帯は、約9km離れる榛名山二ツ岳の噴火によって降下したFP（6世紀中葉）とFA（6世紀初頭）の遺存状態が極めて良好なことで知られる。場所によっては、数mにも及ぶ厚いFP層によって当時の旧地表面がそのまま覆われている。古墳時代後期の集落遺跡である黒井峯遺跡は、大量の降下軽石によって瞬時に埋没した集落として有名である。

今回の分析対象とした吹屋伊勢森遺跡Ⅲ区では、最深約2mを測るFP純層下面から、畝立てされた畝跡、畝内を蛇行する踏み分け道、馬蹄痕などが検出された。試料は、FP純層下面畝跡の畦と畦間から試料を採取した。

2 分析の方法

土壌の微細形態学的分析とは、土壌構造を崩すことなく、遺跡に残された過去の履歴を現地のままの状態で見極めることができる分析法である。方法としては、専用の金杵(クビエナ・ボックス)を用いて遺跡から土壌を切り取り、樹脂によって固化し大型の薄片試料(8×15あるいは8×20cm)を作成し土壌構造を形態的に分析する。観察には実体顕微鏡・岩石顕微鏡を用い、画像をコンピューターに取り込んで画像解析を行う。

3 土壌の微細形態

試料1は、吹屋伊勢森遺跡のFP純層下面畝跡から採取した土壌断面である(写真3)。上部3分の1の

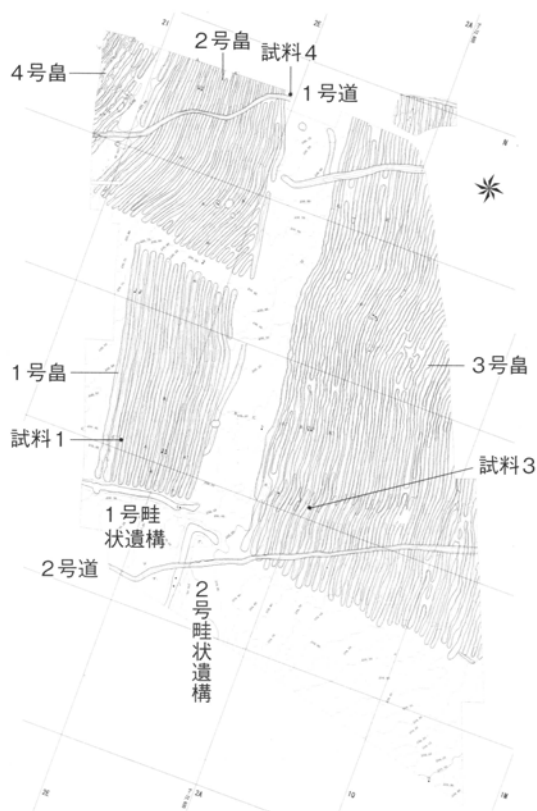


図1 試料採取地点



写真1 吹屋伊勢森遺跡Ⅲ区 FP下面全景

グランドマスは、褐色～茶褐色 (PPL) の細砂～中砂と鉱物片、炭化物粒から構成される。炭化物粒は径1～3mm前後のものが多く、集中部も見られる。マトリックスの粒径は小さく全体にほぼ揃っている。また中には火山ガラス、長石などの鉱物が非常に細かく砕かれた状態で含まれている。火山灰も下部からかきあげられている。直線状、ジグザク状の孔隙が多い。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは10mm～30mm前後である。中間部にFA火山灰層を挟む。下部3分の1は茶褐色～黒褐色 (PPL) の細砂～中砂と鉱物片から構成される。試料1上部はマトリックスの粒径が特に細かいために、現地でも「土壌がフカフカしている地点」として認識されていた。

試料2は、FP純層下2号畦から採取した土壌断面である(写真4)。グランドマスは、試料1と同様に、褐色～茶褐色 (PPL) の細砂～中砂と鉱物粒子、炭化物粒子から構成される。粒径は小さく全体にほぼ揃っている。細かな炭化物粒子を多く含む。また火

山ガラス、長石などの鉱物が非常に細かく砕かれた状態で含まれている。円・楕円状、直線状、ジグザク状など多様な形状を呈する孔隙が非常に多い。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは2～3mmから10mm前後である。元来ペッドを構成する粒土は密であり発達は弱い。未攪乱土壌に特徴的な亜角塊状構造をなす様子から、試料1・3ほど土壌が人為的に攪乱を受けていないことがわかる。

試料3は、FP純層下面晶跡から採取した土壌断面である(写真5)。グランドマスは、褐色～茶褐色 (PPL) の細砂～中砂と鉱物片、炭化物粒から構成される。炭化物粒は径1～3mm前後のものが多く、集中部も見られる。マトリックスの粒径は小さく全体にほぼ揃っている。また中には火山ガラス、長石などの鉱物が非常に細かく砕かれた状態で含まれている。直線状、ジグザク状の孔隙が多い。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは10mm～30mm前後である。試料1の上部と非常によく似た構造をもつが、やや粒土の密度が高い。



写真2 試料3 採取状況